

# ハイスクールD×D 第0宇宙の破壊神

オラオラドララ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

宇宙は1つではない。地球に様々な国があるように様々な宇宙がこの世の中には広がっている。現在、宇宙の数はなんと『13個』。各宇宙には足して13の数になるように『第1宇宙と第12宇宙』、『第6宇宙と第7宇宙』のような対になる関係となっている。ではその宇宙の中にどこの宇宙とも対にならない宇宙・・・『第0宇宙』があったとしたら？そしてその宇宙の破壊神というのは・・・

ある人物に滅ぼされた『戦闘民族サイヤ人』の唯一の生き残りだった。

## 目次

プロローグ	1
第1話 降臨する破壊神	5
第2話 不愉快	10
第3話 雑魚ほど洒落たセリフを吐くつてのはあながち間違いでもない	16
第4話 破壊神 v s グレモリー眷属	24
第5話 破☆壊	30
第6話 無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）	38
第7話 思わぬ収穫	44
第8話 オフィス 初めての○○	53
第9話 オフィスちゃんのお勉強	61
第10話 オフィスちゃん、頑張ります	69
第11話 弟子二号Ⅱパシリ一号	78
第12話 新生活スタート	86
第13話 ちよつとだけ深まる師弟関係	97
第14話 食べ物とお婆さんの想いを込めて	107
第15話 事件の終幕	122
第16話 第7宇宙へお邪魔します	136
第17話 持ちかけられたチャンス	152
第18話 決別	163
第19話 先代様に会いに行きます	171
第20話 破壊神、会談に参加する	185
第21話 破壊神、会談を続行	201
第22話 襲撃	215

第23話	神の遊び	229
第24話	銀河パトロール	243
第25話	地球でのそれぞれ	255
第26話	黒猫の来訪	271
第27話	冥界にて	291
第28話	運命のゲーム	306
第29話	第0宇宙の界王神	325
第30話	相反する二神の実力	343
第31話	滅亡へのカウントダウン	358
第32話	決着	371
第33話	道化の末路	381
第34話	ダブルドラゴンのリベンジ	400

## プロローグ

宇宙。それはこの世に存在するすべての天体を包み込む、はてしなく広がる闇の広大な空間。あの世に住む『界王』たちによって管理されており、宇宙全体は不思議な文様の刻まれた壁により密閉されている。そしてこの宇宙は『界王神』と呼ばれるものたちによる創造と、『破壊神』と呼ばれるものたちによる破壊を繰り返しながら全体の均衡が保たれているのである。



とある星の宮殿にて

「おーい、レム〜！腹減ったぞ〜！！飯食わせてくれ〜！！」

「はーい♪今いきまーす!!」

男に『レム』と呼ばれる小柄な少女が元気良く返事をする。彼女の名前は『レムギット』。今のレムというのは恐らく愛称であるが、その男にとっては只呼びにくいという理由でそう呼んでいるだけである。すると彼女は男のいる部屋へと突然現れた。そう、何の前触れもなく急に男の目の前にパツと現れた。そして彼女の持っている杖を振りかざすと魔法かとも言うかのようにポンツと大量のピザを出現させた。

「ブラン様ブラン様！今日は『地球』の食べ物である『ピザ』を持ってきましたよー！」

「本当か!？」

『ブラン』と呼ばれる男はピザという単語を聞いた途端ぐったりとした姿勢から飛び跳ねて食卓のテーブルの前に座った。

「ピヤツホウ！これだよ!!これを待っていたんだ!!いったきまーす

!!

ブランはLサイズのピザの約10人前を1分もかからずに平らげてしまった。その食べっぷりを見てレムギットは楽しいのか微笑んでいる。そして僅か3分で山のように積み重ねられたピザを完食したブラン。彼の顔は満足で満ちている。

「ふう、食った食った！あつ、そういうえば今日の仕事はないのか？」

『仕事』。彼にとつての仕事とは『破壊』である。界王神が創造をする中、破壊神が宇宙の均衡を保つためにどこかを破壊しなければ宇宙そのものが危険に晒される・・・故にそれが『破壊神』である彼の仕事なのだ。

「はい、今日どころかしばらくはありませんよ。今のところ界王神は創造をしていませんからね」

「ふーん。まっ、仕事が休みつてのは楽でいいけどよ。それにしても地球の食べ物はやっぱ美味しいな・・・『師匠』が悪魔やら天使やらが戦争しててバカみたいだとか言ってたけど飯の美味さだけは評価できるぜ。とつとと破壊したいところだけどこんなに美味しい飯があるからな・・・消すにはもつたないぜ」

「ホントですよ！戦争なんて得るものがない無駄な事をして結局仕えていた聖書の神を死なすなんて・・・はあ・・・何をやってるのやら・・・同じ天使として情けないです」

頬を膨らませた後、溜息を吐いてそう言うレムギット。ブランの言う師匠・・・それは先代の破壊神を指している。今は破壊神を引退してブランの名前を明け渡して隠居しているようだ。レムギットの言葉にブランは鼻を鳴らす。

「まあ同じように神に仕えるものとしては一緒だがお前とあいつらじゃ天使としての格も違うから俺は同等の存在とは思わねえな」

「それに今の悪魔は転生悪魔というのもあるらしいですよ。どうやら先の戦争で純血悪魔が圧倒的に少なくなつて他の種族に頼らざるを得ない状況になつてゐるらしいですね」

レムギットは持っている杖の水晶の部分を眺めながらそう言う。杖の水晶からは今の地球の情報が並べられておりそれを一瞬で理解

したのだ。

「それに悪魔にも主人から離反したはぐれ悪魔つてのもいるらしくて人間の世界で人間を襲つては食べたりしてるんですって。おお、怖い怖い」

するとその言葉にブランはしかめっ面になる。

「何？勝手に他の種族巻き込んで拳句の果てに犠牲者を出すだと？おいおい、そんなの本末転倒じゃねえか。人間に頼つては頼つてその悪魔自身が人間を襲うつてのは結局悪魔増やして人間減らしてる害悪つてことだろ。これでどんどん人間が減っていつて『人間レベル』下げられたらたまつたもんじゃねえよ。んじゃ、早速破壊しに行くか？」

散歩に行くという感じと同じくらい軽く言い放つたブラン。それとは裏腹にレムギツトは顎に手を当てて唸っている。

「うーん、それもアリだとは思いますがそれだとこの宇宙の数少ない強者も消してしまわれるということなので結局は人間レベルが下がってしまう一方ですよ？」

2人の口から出た単語、『人間レベル』・・・これは宇宙に存在している神々以外全ての者の強さ、文明、治安、知能などのステータスを表しそれを平均で出したものである。宇宙のレベルが圧倒的に低すぎると破壊神であるブラン、その付き人である天使のレムギツトよりも地位が遥かに上の存在、『全王』と呼ばれるものに宇宙ごと消されてしまう。なのでそれを危惧して人間を減らさまいと思うブランは原因である悪魔を消し去ろうと考えたのだ。しかし人間の強さも人間レベルには関係するのでそれなりの力を持つてる悪魔を絶滅させてしまうとそれこそ人間レベルが下がってしまう恐れがあるのでブランは下手には破壊することが出来ない。

「・・・チツ、確かにな。・・・よし、この仕事休みという機会を利用して今の地球にお邪魔してみよう。もしこれ以上人間を減らされる可能性があつて改善の余地もなかったら破壊するってことで。強さも大事だがやっぱり文明や治安を守る方を優先するべきだと俺は思うしな・・・これでどうだ？」

ブランは破壊神として宇宙を保つ責任がある以上、この言葉に偽りはない。その言葉にレムギットは反対はせず、只にこやかに微笑みながら口を開く。

「あなたがそういうのなら私は従うまでです。それにちようど良かったです。普段から仕事をキチンとこなしているブラン様にもたまにはこのような旅行もさせてあげたいと思っていたので」

「・・・そりゃ、師匠が真面目に仕事してたのに俺がサボるとあの人の顔に泥を塗ることになるし他の破壊神にナメられちまうからな。・・・それに俺が破壊神の仕事をするのはあんたらへの恩返しの為でもある」

少し照れながら言うブランにレムギットは笑みを崩さずに、地球への出発の準備を始めた。

「できれば俺と最高の戦いができる奴に会ってみたいぜ・・・『サイヤ人』に生まれたものとして戦いを怠るのは無理ってもんだ」

「いると良いですね。ブラン様の相手になる強者は貴方が破壊神になった時にはもういないと思われましたが今の地球に期待してみましよう」

「そうだな・・・」

そう言い、レムギットは杖を地面に突く。すると光に包まれると同時にブランと共に地球へと移動を開始した。果たしてこの2人が地球にもたらすのは何なのか・・・それはまだ誰にも分からない。



## 第1話 降臨する破壊神

### 地球

「とうちやーく！着きましたよブラン様！」

「おう、サンキューな。降臨！満を持して……つてところか」

遠く離れた星から僅か40分で地球に到着した破壊神ブラン、その付き人天使であるレムギット。ブランは周りを見渡して自分がどこにいるかを確かめる。

「ここが地球か……食べ物調達はレムに任せてるから初めて来たが……なかなか良い星だな。空気が澄んでて心が安らぐ……技術も発展してるし文化も進んでる……やはり破壊するには惜しいな」

建造物や空を飛んでいる飛行機、町にいる人々を見てそう言う。一方、レムギットはブランの服装を見て首を傾げている。

「ブラン様、破壊神の正装だどこの地球の人物に不審な目で見られる可能性があります。直ぐにちよいどいいお召し物を。ホイ！」

レムギットが杖を掲げると一瞬でブランの服装が黒いジーンズと白いジャケットに変わり、レムギットも天使の正装ではなく短いスカートとワンピースの姿に変わった。

「よし、これなら変な目で見られないだろ。てかお前はそれでいいのか？」

「結構自信作なんですよ！えへん！」

無い胸を張らせて誇らしげになるレムギット。ブランはそんなレムギットを一瞥してから町を歩き出した。

「そういえばここはなんて名前の町なんだ？」

「あつ、今のはスルーなんですわ。コホン、えーつと……ここは『駒王町』という所ですね」

レムギットは杖の水晶に映し出されている情報から抜き出して説明をする。一方、ブランは何かを考える様子で歩きながら口を開く。

「なあレム。ひよつとしてこの町に『人間じゃない奴が複数』いるのか？」

「おお、流石ブラン様。気付くのがお早いんですね！そうです。『4つ』

ほど感じられる気が『墮天使』のもですね」

『気』とは生きているものに備わっている体内エネルギーの比喻である。戦闘に用いる場合、気功波として放つ以外にも、体の一部分に込めることで攻撃力や防御力を上げたりすることができる。訓練すれば相手の気の強さや位置を感じる事が可能で、数億キロ離れた相手の場所さえ分かってしまう。また、気の強さをコントロールすることで気配を隠したり、強さをカモフラージュすることができる。訓練次第では気を完全に消すことができ、その場合肉眼で探すしかなくなる。今、ブランは多くの一般人とは別の異様な気を察知しているのだ。

「4つか・・・よし、覚えたぞ。これが墮天使の気だな・・・てか俺達からみれば墮天使も人間として区別するがな・・・まあややこしくなるからここでは墮天使は人間じゃなく人外として区別しよう」

「そしてそれよりも多く存在するのが『悪魔』ですね」

「ふむふむ・・・1人でいるものや同じ場所に複数人いるのが悪魔だな・・・よし、これも覚えた・・・チツ、ゴミ屑のように小さい気で分かり辛いぜ。それよりも何でこの町にそいつらがいる？なんかよからぬことでも企んでいやがるのか？」

「・・・どうやらこの町を管理しているという悪魔がいるようです。はぐれ悪魔を狩って人々を守ってるとか」

水晶を眺め怪訝な顔でそう言うレムギットにブランは眉を潜める。

「ふーん、一応そんな奴もいるんだな。じゃあまずは気付かれずにしっかりと管理ができてるか監視してみるか」

因みにブランとレムギットは『神の気』という特殊な気を纏っており普通に訓練をしても神の気を感じ取ることは出来ず、それが可能なのは神の気を得る為の訓練をする、同じ神として存在している者などが例として挙げられる。

「よし、早速しゅっぱー」

そこまで言いかけると

グウウ

意気込むブランを遮るように鳴った腹の音。2人の間になんとも

言えない空気が漂ったがだがブランは「フツ」と笑って体の向きをく  
るりと180度変えた。

「早速、腹ごしらえだ！レム！俺は前にお前が言っていた『天ぷら』と  
いうものを食べてみたいぞ！」

この微妙な空間を乗り切ったと思ってるブランを見てレムギット  
は「はいはい」と少し呆れながらもブランを天ぷら屋に案内した。

「な、なんだこの美味さは!!?この『天つゆ』とやらの組み合わせがベス  
トマッチじゃないか・・・!!レ、レム・・・お前は俺に内緒でこんな  
美味しいもの食ってたってののか!？」

「フフーン♪ブラン様にもこの美味しさが分かったようですね!!」

レムギットオオスメと思われる天ぷら屋の中でブランは初めて食  
べる海老の天ぷらを食べて感動している。その顔は珍しい物を発見  
しワクワクしている子供を彷彿させる。

「この衣と中のプリップリした海老が何とも言えない絶妙なハーモ  
ニーを醸し出してる・・・地球とは素晴らしいな!!」

「フフフ・・・お金はあります！どんどん食べましょう！」

「レム・・・!!」

ブランは今までお世話になってきたレムギットがこれ以上ないく  
らいに輝いていると感じ、心の中でサムズアップする。側からみれば  
子供にお金を払わせているニート野郎、ロリコン野郎などと思われる  
かもしれない。しかし今のブランはそんな事は関係無く、ただひたす  
らに天ぷらを味わい尽くす。

「地球に来て・・・良かった・・・!!」

この幸せな時間を死ぬまで大事にしようと思ったブラン・・・し  
かしこの2人が今日味わった幸せを忘れさせる悲劇が今日、この日に  
訪れる事を・・・2人は知らなかった。

「おい、レム」

「・・・はい」

「この町の悪魔は町を管理してるんだよな・・・人間を守るために」

「・・・はい」

「管理してるとか断言するんなら死者なんて出すべきじゃないよな？  
てか出さないよな普通」

「・・・はい」

「墮天使に侵入されてることに気づいてて・・・このザマ？」

「・・・はい」

何故このような応答をしているのかというと、2人は天ぷらを食べた後、予定通りにこの町の管理者がしつかりと管理しているか確かめ  
にきた。すると2人は『1人の男』に1人の墮天使の女がすぐ近くに  
いる事を察知した。いや、正確には墮天使が人間のフリをして男に近  
づいてきたと言う方が正しいだろう。ブランとレムギットはその2  
人の様子を杖の水晶から見ていた。レムギットが言うには『男の中に  
宿っている力』が気になり、それを危険視した墮天使が彼を始末しよ  
うとしているのではないかと予想し、ブランは彼を助ける為に管理者  
が現れるだろうと思っていた。しかし現実にはブランの予想を上回る  
事態が起きた。何故なら

管理者は現れず、『男は殺されてしまったのだから』。

「……人間、殺されたな」

「……はい」

ブランは表面には出てないものの、彼の表情には確かな怒りが感じられた。

## 第2話 不愉快

一誠 side

『兵藤 一誠』・・・それが俺の名前だ。両親や学校のみんなからは『イツセー』と呼ばれている。青春を謳歌している高校二年生だ。見知らぬ生徒に「あいつ、イツセーじゃね?」と言われたことがあるが人気者というわけではない。寧ろ、女子の着替えの覗きやエロ本を堂々と学校へと持ってくるほどエロいと言われてる嫌われ者だ。勿論、彼女なんていないし童貞である。

ある日、そんな俺には突然春が訪れた。

「付き合ってください」

突然の見知らぬ女の子からの告白。彼女がいない俺にとっては、あれは一陣の風だった・・・青春は甘酸っぱいというやつだろう。勿論こんな機会は二度と訪れないんじゃないかと思ひ、俺は即オーケーで恋人になりました。女の子の名前は『天野 夕麻』ちゃん。黒髪ツヤツヤでスレンダーな女の子!グフフ・・・夢かと思つて頬をつねつても痛いと感じた、そう!これは現実なのだ俺は心の中で飛び跳ねた!

そして付き合つてからの初めてのデート。前々から練つていたプランをようやく実行する時がきた!歯垢を一切残さない思ひで歯を磨き、おニューのパンツを買うというチェリー根性MAXでデートに臨んだ。

デートの途中、訳の分からないチラシ配りに怪しげなチラシを手渡された・・・『貴方の願いを叶えます?』・・・随分とオカルトなものだ。捨てたい気持ちがあつたが、ポイ捨てはいけないし捨てたいにも捨てることのできなかつたのでズボンのポケットにしまつておいた。

デートは絶好調だと俺は思った。何故なら夕麻ちゃんの顔がとても楽しそうだったからだ!ふふふ、俺のプランは大成功だったということかな?そんなこんなでもう、夕暮れ。クライマックスは近い!?別れ際にキス!?なんて興奮しながら数分後・・・

夕暮れの公園にて

町外れにある公園で、人気はなく、俺ら以外は誰もいなかった。このシチュエーションに俺は次々と妄想を膨らませながら表情のニヤニヤをなんとか隠す。すると夕麻ちゃんは咄嗟に俺の手を離し噴水の前へ。

「今日は楽しかったね」

噴水をバツクに微笑む夕麻ちゃん。くーっ！なんて可愛いんだちくしょう！

「ねえ、イツセーくん」

「なんだい、夕麻ちゃん」

「私達の記念すべき初デートってことで、1つお願いを聞いてくれる？」

「な、なになかな？」

ふおおおおお!!こ、これはついにキス!?心臓がバクバクいつてる……。そんな事を思っていると夕麻ちゃんは俺に微笑みながらはつきりと俺に向かってその言葉を言い放った。

「死んでくれないかな？」

「……え?ご、ごめん、何言ったか全然分からなかった……。もつかい言ってくれる?」

聞き間違いだ。そう、聞き間違いだと自分の心に何度も言い聞かせ、夕麻ちゃんに訊き返した。しかし

「死んでくれないかな」

すると次の瞬間、夕麻ちゃんの背中から黒い翼が生え、バサバサツと羽ばたきすると黒い翼が宙を舞い、俺の前に落ちてきた。え、なにこれ……。わけがわからないよ。た、確かに夕麻ちゃんは天使のように可愛いけど……。演出?ドツキリ?俺は頭が混乱して思考を一度止

めてしまった。

「楽しかったわ。貴方との初デート。初々しい子供とのままごと(ママゴト)に付き合えたって感じだったわ」

視線も冷たいもの(モノ)に変わり、妖艶な声音。口元は冷笑を浮かべていた。すると夕麻ちゃんの手から光る槍のようなものが現れた。いや、槍そのものだ。

ヒュッ!

風を切る音と共に俺の腹に何かが触れた。．．．そう思った時、俺の腹は夕麻ちゃんの槍によって貫かれていた。そして俺はその場に前のめりになって倒れた。

「ごめんなさいね。貴方に宿っている神セイクリッド・ギア器は私達にとって危険な物だから早めに始末させてもらったわ」

セイ．．．何だつて? ああ．．．意識が．．．遠のいて．．．。このまま意識が途絶えたらさぞ気持ちが悪くなるのだろう。しかしそれでは俺が死ぬという事．．．。いや、俺人生のまだ半分も到達してねーんだぞ!? 家にあるエロ本が死後に見つかるとかシヤレにならないって!!

俺は手を何とか動かし、腹の辺りをさすり、顔の近くまで動かす。紅い．．．ただそれだけだった。その時、俺は思い出した．．．1人の紅い髪の女の子を。

その時、俺の意識はさらに薄れていった。すると

「貴方ね、私を呼んだのは」

誰かが声をかける。しかし最早誰かすら分からないほど視界はぼやけていた。

「死にそうね。傷は．．．へえ．．．面白い事になってるじゃないの。そう、貴方がねえ．．．本当に面白いわ」

興味ありげにクスクスと笑う声。なにが面白いんだろうか．．．? 「どうせ死ぬのなら、私が拾ってあげるわ。貴方の命、私の為に生きなさい」

そこで俺の意識は完全に途絶えた。



ブランス i d e

「いや、ふざけてんのかこいつ」

俺はレムの杖の水晶でその現場を眺めた後、第一声はその言葉を放った。

「おいレム、今の一連の流れ・・・ちゃんと録画したか？」

「ええ、バツチリと」

破壊神と天使の正装に着替え直した俺とレムギットは無表情のまま応答する。

「町を管理しているとかほざいてるくせに簡単に他種族に侵入させられている・・・さらには一般人の死者を出す。そもそもこの時点で無能なのは分かった」

「しかし問題なのはその後・・・」

「ああ、この紅髪のバカは挙げ句の果てに自分が管理(笑)している町の住民が死んで『面白い』なんて戯言を言い放った。そしてその後何か値打ちを計るかのように倒れてる奴を眺め、悪魔に転生させた」

「たとえば今、転生させられた方が何も力がない一般人だとしたら・・・恐らく放っておいたのでしょうかね。この地球のニュースや新聞を先程ずらっと見ましたが、はぐれ悪魔、そして今のような神器狩りの墮天使による不可思議な事件などの記事は一切ありませんでした・・・恐らく、悪魔や墮天使という存在がバレないように記憶を操作して隠蔽している可能性が大でしょう」

「全く・・・やっぱり破壊するべきかもな・・・いざとなったら地球ごと破壊する・・・いや、それはまずいな。この宇宙の人間レベルの高さの特徴はこの地球にもある・・・クソッ、めんどくさいぜ」

「管理・・・まあおそろく自分の領地とかでもおもってるのでしょいうけどここはそもそも日本神話の神が有している土地です。それを許可を貰ってこの町にいる可能性もありますが、未だに神側と悪魔側は睨み合いをきかせている筈・・・ならばそんな相手に管理する許可をあげるとは考えにくいので恐らく悪魔側が勝手に管理していると言ってるのでしょいうね。まあ、これを放っておく日本神話勢もどうかと思えますが」

「はあ・・・」

2人揃って溜息を吐く俺とレム。

「今日のはぐれ悪魔つてのをひたすら見つけて破壊していくか。なんかスツキリしねえからな・・・地球なんて本気出せば3秒で7周は出来るし。本来、悪魔がやるべき事を俺がするのもおかしいが・・・ゴミはちゃんと掃除しなきゃいけないだろ？」

はぐれ悪魔をゴミ扱いする俺。そりやそうだ、人間に害しか及ばさない奴らを対等に扱うとでも思ってるのか？界王神は人間を見守るのが仕事だが、俺は別だ。干渉しようと放置しておこうと俺の判断次第・・・しかし今、はぐれ悪魔どもを殲滅させたからといって今後はまた更にはぐれ悪魔がこの人間界に現れるからあくまで一時的な処置にしか過ぎないがな。さて、駄弁ってるのもここらへんにしておいて

掃除の時間だ・・・10分で片付けてやる。

次の日、世界中に蔓延る大半のはぐれ悪魔達が何者かによって跡形

も無く消滅させられたことが悪魔達が住む冥界、さらには魔王の耳にも届いた。これにより駒王町を管理（笑）しているグレモリー家の次期当主、『リアス・グレモリー』にもその情報が届いた。しかし「私の領地だけでなく、他の地域でもはぐれ悪魔が……どこの誰か知らないけど……これ以上好き勝手はさせないわ!!」

なんて事を言っているが、彼女は気づいていない。今、自分が消し飛ばそうとしている人物がこの世で1番敵にしてはいけない存在、『破壊神』であるということ。

一方、その頃

「お好み焼きうめくく!!」

日本のグルメを満喫しているブランはそんなリアス・グレモリーなど今は眼中など無かった。

### 第3話 雑魚ほど洒落たセリフを吐くつてのはあなたがち間違いでもない

ブランス side  
ー ブランスの星

世界中のはぐれ悪魔を粗方ぶっ殺した後、地球の食べ物素晴らしさを満喫した俺は一度自分の住む星に帰還していた。今は先代ブランチである師匠とは別の『もう一人の師匠』であるレムに修行をつけてもらっている。

「フツッ！だりゃっ！」  
「おっと」

超サイヤ人禁止、気弾禁止というルールに沿い、次々と連続の拳と蹴りを放っていく俺だが、レムは軽々とそれを避けていく。フェイントを入れてもそれを容易く躲されていくが俺やレムは息を切らしてはいない。

「そこまで」  
「！」

修行の最中に「待った」とかけられたように手のひらを前方に突き出された俺は一度攻撃を止めた。レムは顎に手を当てて何か考えるそぶりを見せてから口を開いた。

「やはり攻撃の時は何かしら考えてしまっていますね。これは貴方も他の破壊神にも言えることで頭で考えずに体が勝手に動くような戦いが出来ればいいのですが・・・うーん・・・」

「レム・・・前にも思ったんだが本当にそれは可能なことなのか？生きる者は誰も『考える』という概念など捨てる事が出来ねえ。それが出来るのはただの何も考えていないバカなんじゃないのか？」

「ふふっ、いいですねその考え。ブランチ様もバカになってみては？」  
「バカになってみては？じゃねえよ。そんな事したらそこら辺の星が全部無くなりそうじゃねえか」

「オホホホ♪」

優雅に笑うレムだが本当にシャレにならないことになるから。

「ブラン様、次は懐かしい修行をしてみませんか？」

「俺が破壊神見習いの時にやっていた修行・・・か？」

「はい、初心に帰るといいうのも・・・また1つ修行だとは思いませんか？」

「分かった、それで頼む」

「かしこまりました・・・ほい！」

レムは杖を振りかざすと、ブランの目の前に硬い素材で作られた重りのようなものが出現した。その重りの上面部には両腕を通す穴のようなものが存在し、ブランは早速その穴に両腕を通してそれを持ち上げようとする。しかし

「・・・!?な、なんだこの重さ・・・!!あ、上がらねえ・・・!!」

「簡単には上がせないように見習いだった頃の50倍重いものになりました。どうしました?超サイヤ人になりますか?」

挑発するようにパワーアップするかを促せるレムだが・・・俺はそんな挑発には乗らねえ。超サイヤ人になったらそれこそ負けだ。

「・・・ハッ!わざわざ超サイヤ人になる必要はねえ・・・やってやるよ・・・!!ぎぎぎぎぎつ・・・あ、上がったぞ・・・!!」

ほんの数センチ、その重りと地面に僅かな隙間ができた。しかし今のところそこまで持ち上げるのがやっとで額からは汗が流れる。しかしそんな俺に対し更なる絶望感がのしかかる一言をレムが放つ。

「はい、じゃあそのまま『この星を2周』してください」

「なに!?2周だと!?見習いだったところは1周だったはずだ!」

「何言ってるんですか?破壊神にもなれば2周など楽勝でしょう?」

「さあ、頑張ってください!」

和やかに笑うレムだが、どこか黒いものを感じさせる笑みで俺はそれ以上何も言えなかった。クソツ・・・や、やばい・・・この重さは異常だ・・・トン単位とかそういう次元の話じゃない・・・!!

「ハア・・・ハア・・・!!」

俺は重い足取りで一步一步を確実に進めながら重りを運んでいく。地面にはポタポタと体中から溢れ出る汗が落ちていき染み込んでいく。

「ほら、早くしないと落っこちてしまいますよー」

「分かつ・・・てる・・・!!」

俺の背後は歩いてきたところから一定時間毎に徐々に地面が消滅していく。つまり遅すぎるとやがて俺の足元の地面も消滅し転落という名のゲームオーバーと化す。

「スピードを・・・上げないと・・・し、死ぬ・・・!!」

俺は思い出した・・・見習いだったころの地獄の日々を・・・この修行をしている途中、予言魚さんがレムに何かを伝えるといつのまにか先代ブラン師匠の部屋へと転送され寝ぼけた師匠の『口から破壊光線』を受けボロボロになったり、更には部屋に多数ある砂時計型爆弾に巻き込まれ、挙げ句の果てに睡眠を邪魔されたと誤解した師匠に正固めをやられるという俺にとって最も悲惨な修行の一環を思い出した。あれは理不尽すぎる。

そして丸一日かかって、やっと修行が終わった。修行を終えて重りを置いた俺の元にレムが一瞬で現れた。

「お疲れ様でした・・・大丈夫ですか？」

「ゼエ・・・ゼエ・・・!!これが大丈夫に見えるならお前の頭は重症だ・・・」

「あら失礼♪オホホホホホ♪」

こうして今日の修行はひと段落つき、自分の部屋へと戻っていった。今日は地球で買ってみた『ゲーム』とやらを楽しもうと思い、早速やってみようと思う。名前は『○ケツトモンスター』という部下を従えてトレーナーの頂点に立つのが目的という実に俺にとっては分かりやすいゲームだ。やってみるとなかなか面白い・・・特にこの『ジ

ムリーダー』という中ボス的な感じの敵を倒した時の爽快感がたまらない。しかし、俺の真の目的はそんな雑魚どもを倒すことじゃない。俺はチャンピオンとやらの座を奪うために戦うのだ。ククク、少し進めただけだが今日はここら辺で終わることにしよう。

俺はゲームを閉じ、安らかな眠りについた。・・・周りに砂時計型時限爆弾を設置したまま。

### 次の日の朝

ドガアアアアアアン!!

「zzzz・・・」

### 昼

ドガアアアアアアン!!

「zzzz・・・」

### 夜

ドガアアアアアアン!!

「・・・ん・・・ふわあ・・・もう朝か「夜です!!とおっ!!」ぐへええええっ!!」

朝に起きたかと思つてたら実は夜で、しかもレムにドロップピツクを受けて外へとふつとばされた。な、なにを言ってるのかわからねーと思うが俺も分からん・・・もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・

外へと放り出された俺は真つ逆さまに地面へと落下していきそのまま地面に落ちた。

「もう、今日は地球の美味しいものを食べるって言っていたじゃないですか」

「わりいわりい!・・・よつと!」

俺は仰向けに倒れた状態のまま、ハンドスプリングの応用で勢い良く跳ね起きた。そしてレムの肩を掴んで地球へと移動を開始した。

### 三人称 side

「着きましたよ」

「空は暗いな。この地球も今は夜つてわけか」

「まあ、私達のいる星は太陽からかなり遠くに離れている星ですからあまり空の色に変化はないのですがね」

地球についたブラン達は早速、何処かの飲食店にでも入ろうかと考えていた。しかし

「あー、駒王町だったか?ここの町の名前・・・また、悪魔が現れたか?なんか気が増えてるし」

「単独でいるものが・・・もしかしたらはぐれ悪魔かもしれませんね、どうします?」

「そうだな・・・この前は有無を言わずに殺していったが今日は少し聞きたいことがある・・・行くか」

シン!

2人はその場から一瞬で消えた。

とある廃屋の中、その隅っこでは禍々しい異形の姿の人物が1人の少女を覗き込むように見つめてケタケタと笑っていた。

「ゲゲゲゲ・・・美味そうな匂いだ・・・今日はご馳走だな・・・!!」

「ひ、ひい!!や、やだ・・・来ないで・・・!」

女の子は今にも泣きそう・・・いや、すでに涙が恐怖のせいで溢れ、更には体が震えて逃げ出そうにも足が動かない。しかし逃げようと



足を動かしても、目の前にいる異形の怪物はその少女を逃がしはしないだろう。その怪物の名前は『バイサー』。はぐれ悪魔に認定された者の1人である。彼女は目の前にいる少女を喰らおうと考えており今にも飛びかかろうと目をギラギラと輝かせている。そして遂に

「いただきまー」「はい到着」ぐぼおっ!?!」

今にも食べられそうだった少女は何がなんだか分からないという表情をしている。それはそうだ、今いかにも自分は死ぬんだと思ったのに目の前に現れた男が怪物の頭の上に着地してきたのだから。少女は口をパクパクさせた後、なんとか振り絞ってその人物に声をかけた。

「あ……あ、あの……」

「ん?……ああ、この下にいるやつに襲われそうだった人間か……ほれ、さっさと帰れ。死にたくなければな」

「で、でも……」

足がすくんで動こうにも動けない状態の彼女を見て、彼は軽く溜息を吐いた。

「はあ……仕方ねえ。おいレム、コイツを家まで送ってやれ」

「はいはいいただきます」

レムギットはブランの背後からニユツと飛び出すように現れ、尻餅をついて目を丸くしている少女に手を差し伸べる。

「この手を取れば一瞬でお家に帰れますよ。さあ」

「あ、ありがとうございます……ごさいます……」

シユン!

その少女はレムギットの手を取ると、彼女はレムギットと共に自分の家まで一瞬で転送された。残されたブランとバイサーは互いに沈黙が続いたままである。ブランは未だにバイサーの後頭部に両足を乗せており、バイサーは地面とキスをしている状態……そしてその沈黙がバイサーによって壊された。

「貴様アアアアアアアアアアア!!」

「……」

ブランは無言のままバイサーの頭からゆっくりと足を退け、起き上がった彼女と向き合った。怒りで歪んだバイサーとは裏腹にブランは余裕の態度で笑みをこぼしながら口を開く。

「さて、お前がはぐれ悪魔だな？ 1つだけ質問する……俺の事を知ってるか？」

「知るかああああ!! よくもこの私の顔をおおおおおおおおお!! 絶対に許るさんぞおおおおおお!!」

「なるほどな、世界中のはぐれ悪魔を粗方ぶつ殺したから悪魔側には顔バレしてるかと思つたが……どうやらそうでもないらしい。それと……破壊神には多少の敬意を払った方がいいぞ？」

「ほぎけええええ!!」

バイサーは両手に持っている槍を交互に連続でブランに向けて突き出していく。しかしそれをブランは足を一步も動かず、体を逸らす程度でそれを全て避ける。

「な、なんで当たらない!？」

「逆になんで当たると思つた? ふわあ……欠伸がでるくらいトロいぜ」「ナメるなあああああ!!」

そう言い、バイサーは渾身の一撃を放つ為に全力でブランに襲いかかる。しかし

「うるせえ、消えろ」

「!？」

冷たく放たれた一言。その刹那……バイサーは死んだ。

たった一発。そのたった1発のかるーいパンチ。ブラン本人にとってはマシユマロのように……いや、それ以上に柔らかいパンチがバイサーにとっては『身体が霧散』する程の威力であり、バイサーは断末魔を上げる事なくこの世から消滅した。

「あー……やっぱり脆すぎる……まあはぐれっつてのは大体こんなもんか……いや、下手したら悪魔全員がこれくらい脆いかもな……はあ……シラけるぜ」

ブランははぐれ悪魔に聞きたいことを聞き、そのついでにバイサーを殺したがやはり自分の相手にはならないことに落胆した後、本来の目的である『食べ物満喫』を果たそうと思い、その廃屋から立ち去ろうとする。しかし

「はぐれ悪魔バイサー！主人の元を逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れ回るのは万死に値するわ!!グレモリー公爵の名において貴方を消し飛ば……ってあれ？」

「……」

長い紅髪をなびかせ、優雅？に現れたその女性を見て、ブランは目を細め溜息を吐く。そしてふと思った事を口にした。

「雑魚ほど洒落たセリフを吐くっつてのはこのことか？」

## 第4話 破壊神 VS グレモリー眷属

三人称 side

はぐれ悪魔を難なく殴り消したブランの目の前に現れた長髪の女性、リアス・グレモリーは辺りをキョロキョロと見回し、目的であるはぐれ悪魔がいるか確かめるが、その存在は確認できずただ目の前の男、ブランに視線が移り警戒を強めた。

「貴方・・・何者かしら？ここには、はぐれ悪魔がいた筈・・・もしかして貴方が何かしたの？」

それに対し、ブランは自信満々に現れた割にはあまりの登場のカッコ悪さに笑いがこみ上げそうになったが、なんとか抑えて口を開く。「あ、ああ・・・あのゴミなら俺が片付けておいた。んじゃ、俺はこれから用があるから立ち去るわ。フハッ」

ブランは早くグルメを堪能したいのか、それともこの笑いをさつきと忘れたいのか、目の前にいるグレモリー眷属など無視して立ち去ると背中を向ける。しかし

「待ちなさい」

「あ？」

「もしかして貴方・・・今冥界で騒がれている『約10分で世界中のはぐれ悪魔』が消し飛ばされた事と関係があるのかしら？」

質問くらいには答えてあげてもいいと思ったのか、ブランは再度リアスに振り向いて腕を組む。

「ああ、この前ぶつ殺した奴らか。そうそう、俺がやったわ。けど全然手応えないし、退屈だったがな。さっ、もういいだろ、俺忙しいから今度こそ帰ろうと思ったブラン。しかし

「悪いけど、この町は私の領地・・・他の地域もそうだけどここでも勝手な事してもらおうと困るの。こちら側に来てくれればて手荒な真似はしないわ」

「・・・領地・・・ねえ・・・。おい、さつきここで一般人が襲われそうになったのを偶然助けてしまったんだが・・・俺が来なかつたらそいつは死んでたぞ。そしたらどうするつもりだったんだ？」

「ッ！そ、それは・・・」

ブランの問いに対し言葉が詰まるリアス。しかしブランはその答えを待つよりも先に続けた。

「俺が当ててやるよ。記憶を消すんだろ、関係のある人々を含めて。いやー、見事なマッチポンプだ、証拠隠滅はお手の物だー。とりあえずはぐれ悪魔を仕留めておけばいいという安直な考えから頭の中がからつきしなのが容易に理解できるし『魔王の妹』がこーんな無能なのに『町を管理』とかほざいてると思うと片腹痛いわ」

「何ですって・・・!?!」

「いや、もしかして自分は間違ってる、失敗してないとか思ってるのか？あーそうか!!悪魔の間では絶賛活躍中のスーパールーキーということだもん!!アツハツハ！これは失礼、悪魔の間だけで力が強いとか言われて舞い上がってる脳筋さんがそこまで頭回るわけないよな！わりいわりい！」

心底バカにするように煽る口調で言い放ったブランは手を合わせて謝るポーズで更にリアスを煽る。そしてその態度がリアスの心に火をつけ、体に魔力のオーラを纏い威圧感を出す。まあ、ブランにとっては何も感じない弱々しいオーラなのだが。

「随分と言ってくれるわね・・・！みんな、あの者に自らとの格の差を教えてあげなさい！裕斗!!」

「はいー」

リアスに裕斗と呼ばれた金髪の少年が手元に西洋剣らしきものを出現させ、ブランに向かって走りこんで来た。するとリアスは近くにいた茶髪の少年に『悪魔の駒』イェザイル・ピリスで得られる恩恵について説明する。

「イツセー、さっきの続きをレクチャーするわ。裕斗の役割は『騎士』、特性はスピード。『騎士』となったものは速度がー」

しかし、そこまで言いかけると

ドガアアアアン!!

「・・・えっ?」

イツセーとリアスの間に何かか勢いよく通り過ぎた。リアスは後ろを振り向いてみると、先程向かっていった自分の眷属が廃屋の壁を

突き破り、全身傷だらけで倒れ伏し気絶していた。勿論、彼を一瞬のうちにはポロポロにしたのはブランだ。彼は手をブラブラさせてつまらなそうな感じで欠伸をかいている。

「うーん、起きたばかりだから眠気やけだるさくらいは覚めるかと思っただがやっぱりこんなもんか。おい、今の俺はこの先に待っているグルメへの期待感に胸を膨らませてるところで、そこそこ機嫌が良い。大人しく帰れば無傷で帰れるぞ」

「ナメないでちょうだい!!朱乃!小猫!同時にかかりなさい!」

「はい!」

「そもそもチュートリアル気分で戦いに挑むのが馬鹿らしい・・・」

溜息を吐くブランに対し、小猫と呼ばれた白髪の少女が拳を放つ。

「ぶつとべ」

するとその拳がブランの眉間辺りに直撃する。が、しかしブランの体は微動だにしないどころか痛みにも苦しむ様子すらない。

「そ、そんな・・・効かない!?!」

「もうちよい本気出してくれよ。眠気覚ますくらいの威力はもう期待してないからとりあえず全力でやれ」

「くっ!」

小猫は今さつきよりも力を込め、連続で何度も拳と蹴りを放つがそれすらも無傷であり、足を一步も動かさずにジツとして体で受け止めるブラン。そして小猫が連続攻撃を放つ最中、彼は動いた。

「いや、もうお前がぶつとべ」

「ガハッ!」

ブランが軽く蹴り上げた足が小猫の顎に直撃し、天井を突き破って空の彼方へと飛ばされた。

「小猫!」

すると小猫を追いかけるようにリアスは悪魔の翼を用いて飛翔した。上を見上げるブランに対し次は朱乃と呼ばれたポニーテールの女性がブランの背後に回り

「雷よ!」

ブランの頭上に魔法陣を形成し雷撃を放とうとした。しかし

「遠距離攻撃したいならもつと離れろ」

「嘘?!いつのまに・・・きやあつ!」

ドカアアアアン!!

朱乃は気付いた時にはブランに背後を回られており、肩に手を置かれると重りがのしかかったように体が地面に突っ伏しクレーターが出来上がりその場で意識を失った。その様子にブランは少々の感嘆の声を上げた。

「へえ、さっきのゴミを消しとばす時よりもかなり力を抑えてみたけどそこそこ頑丈だなあ。まあ、お前らは俺が破壊神と知らないわけだから多少の無礼は許すけどさ・・・あんま調子乗ると今度は破壊するぞ」

ブランは空へ飛ばされた小猫を抱えて戻ってきたリアスに向けてそう言う。するとリアスは驚愕の表情を浮かべる。

「破壊神!?破壊神ですって!?!あり得ないわ!!だって・・・『先の戦争に現れた破壊神』はもつと老人だと聞いたわ!いくらなんでも若すぎる!」

「それくらいの知識は流石にあるのか。お前らが知ってる破壊神ブランは俺の前の破壊神、先代ブランのことだ。俺はあの人の弟子ってわけだ」

リアスはハツタリだと思っただが、今自分の眷属達を一撃で仕留めた目の前の男を見てそうとは言い切れないとも思い何も言えなくなつた。そんなリアスにブランは鋭い目つきで睨みつける。

「あのさ、町を管理とか言うのならそれはそれでいいんだがよ・・・だつたらちやんとやれよ」

「ツ!?!」

突如ブランから放たれた殺気がリアスとイツセーを襲い、背中から嫌な汗が垂れ流れ思わず息をするのも忘れてしまうほどに全身が固まってしまった。

「まんまと侵入されて好き放題されてから対処するのが管理者の役目ってわけか?それに、そいつが死んだのもお前の管理不足を表す象徴みたいなものだろ」

そう言い、イツセーを指さす。イツセーは何を言ってるのか分からないと言いたげな表情になるがすぐにハツとなりブランを睨みつける。

「お、お前！何でこんなことするんだよ!!木場も朱乃さんも小猫ちゃんもみんなボロボロにしゃがって!!」

『何を言ってるんだコイツは』と言いたくなる言葉にブランは呆れ返って思わず殺気を引っ込めてしまった。

「えー、いやいやいや・・・俺は正当防衛に沿ってボコボコにしたらだけだろ。そつちが勝手に突っかかってきたんだから文句言うなよ。さあ、そろそろ行くかな・・・遅くなると閉まっちゃうし」

「ま、待ちなさいー!」

リアスの制止を無視し、ブランはこの場から姿を消した。この日、リアスの心情には二つの感情が入り混じった。一つは自分達にとって脅威となる存在を逃したことによる『不安』、もう一つは完膚なきまで叩きのめされたことによる『悔しさ』が心に刻みこまれた。そしてリアスはブランが本当に破壊神なのかを確かめるために一度、魔王であり兄でもある『サーゼクス・ルシファー』に連絡を取ることを決めた。

一方、その頃

「よろしかったんですか?逃しておいて」

リアス達との邂逅の後、焼肉屋でグルメを満喫しているブランに対し、レムギットはそう問う。レムギットはバイサーに襲われていた少女を家に送った後、途中からブランとリアス達の様子を遠くから見ていたのだ。

「貴方ならあの悪魔達を破壊することは簡単の筈なのに」

「いや、破壊したらしたでめんどくさいことになると思うぜ。なんせ魔王の妹、しかもお前の情報によればその兄は重度のシスコンらしい



じゃねえか。さて、そんな奴の妹や眷属を消したとしよう。そうすれば今度はそいつがこの人間界にやってきて戦争になるのは確実、日本は沈む可能性も大だ」

「確かにあり得る話ですね」

「んで、今は下手に敵をここに呼び寄せるよりも腹を割って話すのが先決だと俺は思った。自分から敵を作りに行くのはそれはそれで楽しみがあるが目的はそれが第一じゃないな。はあ、地球つてのはどうも人間レベルの調整が難しいな・・・ここが価値の無い星だったら容赦無く破壊できんのにな・・・」

「では、その交渉次第でこの星、又は悪魔の運命は変わると・・・」

「まあ、ホントは堕天使やら天使のトップやらもこの町に来てくれりや手っ取り早いかな・・・そんな時にそいつらと対立するかどうかをはつきりさせとこうぜ。お前もこの地球の天使に何か言いたいことでもあるんじゃないか?」

「さあ、どうでしょう? オホホホ」

「フン」

ブランはレムギットの考えていることが読めないがとりあえず今は目の前で焼かれている肉を食べる事を楽しもうと思いい、箸を手に持った。

## 第5話 破☆壊

ブラン side

翌日、自分の星へと戻った俺とレムは家ともいえる宮殿の中でこの星で採れる茶葉を用いた紅茶を飲んでいた。すると

「あの町の墮天使に？」

俺のある提案にレムは頭に疑問符を浮かべている。三大勢力のトップ達の顔を一度拝んでみようと思つた俺は接触を試みた。レムの杖の水晶を見て顔だけは覚えたがやはり実際に会つてみないと人格を見抜けないし。

「そう、そいつらに墮天使トップの居場所とか今、何してんのか吐かせろ、それかアポでもとれるか確かめようと思う」

墮天使と天使のトップ達は気がどんなものか分からないのでどこにいるかは分からずじまいであり、あの町の墮天使どもを利用しようと考えていた。

「まあ、試してみる価値はありますが・・・もし何も情報を得られなかったら？」

「ん？破壊するに決まってるんだろ。どうせ墮ちた天使どもだ。今度は地獄にでも墮ちてもらおうってことだ」

「あつ、上手い！座布団一枚貰えるかもしれませんよ！」

「いらねーよ。んで、これで墮天使どもが少しでも危機感を覚えればトップか幹部でもこつちに引き寄せられてくるだろ・・・上手くいけばどちらにせよ目論見は達成できる・・・筈だ」

「あれ？自信がないのですか？」

「どうもな・・・万が一墮天使のトップがこの町にいる墮天使どもを気にかけてなかったら失敗だろうなって思つて。紅茶美味い」

「そうですね・・・幹部はともかくそこらへんにいる下っ端を気にかけるとはどうも思えませんからね。我ながらいい味出してます」

紅茶への感想を混ぜながら淡々と話していく。

あと、この町というかこの地球で俺の相手になる奴が一向に見つからねえ・・・まあ、簡単に見つからないものなのは分かってる。せめ

て、せめて素質があつたり伸び代がある奴が現れたら・・・レムが修行をつけてくれる筈！

そう心に思いながら俺達はまたもや地球へと向かっていった。

三人称 side

「フフフ・・・これで私は至高の墮天使に！」

駒王町の町外れにある教会の奥深く、その祭壇で墮天使レイナーレは薄く笑っていた。隣には十字架に磔にされて身動きがとれなくなっている金髪の少女がいた。今にも生き絶えそうなくらいに息が荒くなっており意識が失いかけている。

磔にされてちる彼女の名前は『アーシア・アルジェント』。どうやら彼女はレイナーレに利用され、自身の中にある神器を取り除く儀式が行われているようだ。

「もうすぐ・・・もうすぐよ・・・！」

レイナーレはもうすぐアーシアの神器が自分のものになるということに心を踊らせ、更に笑みが歪んでいく。しかし

「おい」

「!？」

レイナーレは突如背後から聞こえた声に驚き後ろに振り向く。するといつのまに教会に侵入されたのか、そこにはブランが睨みながら堂々と立っていた。

「な、なんなの!?!いつのまにこの教会に・・・い、いや、いつの間に私の背後に現れたの!?!」

「瞬間移動ってやつだ。ああ、今にも死にそんな神器所有者か」

ブランは近くで磔になっている少女を一瞥する。

「そ、そこの神父達!!この男を排除しなさい!!」

すると周りにいた複数の神父達がブランに一齐に襲いかかる。しかし

「邪魔」

「な!?!」

なんと拳を振りかぶった風圧のみで神父達を粉々に消滅させた。その事実にはレイナーレは口をパクパクと動かして一步も動けずいた。

「あああああああつ!!!」

すると磔にされたアーシアが悲鳴を上げるとダランと項垂れ、ゆつくりと息を引き取り神器がレイナーレに移された。

「運がなかったな、シスター・・・仇つてわけでもないが、まあ・・・コイツの思い通りにはさせねえさ」

「アハ、アハハハッ! 遂に手に入れたわ! これで私は「黙れ」ひっ!」  
ブランから冷たく言い放たれた一声と殺気に思わず怯えてしまったレイナーレは下級墮天使でありながらも確信できた。『目の前のコイツには絶対に勝てない』と。そう思ったレイナーレはいち早くここから逃げ出さないといい話を切り出す。

「わ、私は貴方に何も危害は加えないわ! 私に用があるなら何でも協力する! だ、だから!」

「ほう、ならば質問に答えろ。お前、今すぐ墮天使総督、または副総督と連絡はとれるか? 俺の名前は破壊神ブラン・・・そう言えば嫌でも俺の話聞いてこうとする筈だ」

「は、破壊神!?! な、なんでここにそんな化け物が!!」

破壊神と聞いたレイナーレは名前を聞いただけで恐怖がすぐに体を支配し動けなくなってしまう。が、何とか声を振り絞りその問いに答えた。

「わ、私如きがアザゼル様とシエムハザ様に連絡は取れない・・・あの方々に会ったことすらないのよ!」

「ふむ、まあ想定していた候補のうちの一つの答えだったか。答えてくれて感謝するぞ」

ブランは話を終えると手を前方に翳す。するとそこに

「アーシアアアア!!」

「ん？」

ブランが声が聞こえた方向に振り向くと、そこはこの教会の地下の最奥と地上に通じる出入り口であり、そこから前にブランに軽く叩きのめされたグレモリー眷属の2人と茶髪の少年、兵藤一誠の姿があった。この前はブランから相当のダメージを受けたのか、疲労や傷は回復しきっていない小猫と木場をブランは一瞥してからレイナーレに向き直る。

「なんで悪魔が教会に・・・と、まあそんなことはいいか」

「お前っ・・・この前の!!お前もコイツとグルだったのかよ!」

「んなわけあるか。破壊神がこんな小物と手を組むなんて恥さらしもいいところだ・・・さて」

前回、たった一撃でボロボロになるまでやられたせいとか小猫と木場は最大限まで警戒を強めるが、そんな2人にブランは全く興味を示さず、レイナーレの首根っこを掴む。

「が、がはっ!?な、なんで・・・!!」

「悪いな。お前はもう用済みだ・・・精々地獄で反省でもしてな」

「に、逃してくれるんじゃない?」

「そんなわけないだろ。というか誰も逃すなんて一言も言っていない・・・消えろ」

「いっ・・・!」

ドオオオオオオオン!!

レイナーレは近くにいたイツセーに助けを求めようとしたが、最後まで喋らせてもらえずそのまま斜め上に放たれた気弾によって消滅した。気弾は天井を貫通しそのまま空高くへと舞い上がっていく。

「予定通りにはならなかったが・・・まあいいだろ（ついでにこのシスターの神器も破壊してやった。全く、神を崇める奴が神の作ったシステムに振り回されて殺されるとは・・・皮肉なものだ）」

ブランはさっさとこの場から立ち去ろうとすると、小猫と木場は冷や汗を流しながら警戒を弱めず、イツセーは磔にされて死んだと思われていたアーシアと最後の言葉を交わしていた。どうやら神器を抜

かれても息は奇跡的にまだあったようで、少し時間が経つと今度こそ息を引き取った。するとイツセーはブランの胸ぐらを掴んで怒鳴る。木場は止めようとするがイツセーは止まらなかった。

「兵藤くん！」

「お前！神様なんだろう!!?何でアーシアを助けてくれなかったんだよ!!この子は何もしてないじゃないか、とてもいい子だったのに何で死ななきゃいけないんだよ!!」

しかしそんなイツセーにブランは逆にイツセーの首根っこを掴んで持ち上げる。

「ガッ・・・!」

「お前は『神』って存在に何を期待してんだ？神ってのはな・・・居ても居なくても何も変わらねえんだよ。神器っていう人間にとつては災厄しか訪れない代物をばら撒き、そんなでもっていざって時には助けに来ない。それに、そもそも俺はコイツを助けに来たのが目的じゃないし俺は破壊神だから助ける方の神じゃない。そしてコイツを救えなかったのは・・・『お前らが来るのが遅かったから』だ。何で悪魔がシスターを助けに来たのかはどうでもいいが勝手に責任転嫁すんな」

「ッ!」

するとイツセーはブランの言葉に触発されたのか、拳を握りしめ、声を震わせる。

「返せよ」

「ん?」

「アーシアを返せよおおおおお!!!」

『Dragon Booster!』

イツセーの叫びに応えるように神器が動き出し、手の甲の宝玉が眩い輝きを放つ。ブランはその輝きを眺めるとイツセーから手を離れた。

『explosion!』

「ほう、気が一気に膨れ上がったな。といつても・・・」

「うおおおおおおおっ!!」

アーシアを見殺しにした目の前の神が許せない。その一心でブラ

ンに殴りかかるイツセイだが、それでもブランにとっては蚊に等しい  
気の大きさだったようで

「ん」

「ガハッ！」

すぐさま木場と小猫にいる位置に向けてカウンターを放ちふつと  
ばした。

「悪いがお前達の相手をしてる暇なんてない。んじゃ」

ブランはその教会から姿を消した。逃してもらえたと小猫と木場  
は若干の安堵の息を吐くが、その場に頂垂れたイツセイに残ったのは  
悔しさだけだった。

一方、その頃

「ク、クソッ！何なんだよアイツは！」

教会から離れた場所、命からがらに逃げ出そうとする1人の男性が  
いた。緑色の髪に糸目の見た目はただ好青年に見えるこの男、実は悪  
魔である。彼の名は『ディオドラ・アスタロト』・・・アスタロト家の  
次期当主である。彼は先程のブランがレイナーレを破壊するところ  
を見ていた。しかしそれは偶然ではなく

「よお、逃げてても無駄だぜ」

「!？」

いつのまにか目の前に先程自分が見ていた破壊神 ブランが現れ  
酷く狼狽する。

「お前、さっきの一部始終を見ていたな？」

「な、なんでそれが!!？」

「気でバレバレなんだよ。魔力とやらを抑えていたのかは知らないが  
気は全く隠しきれていなかったらしいな」

「僕をどうするつもりだ!？」

「それは今から決める」

怯えるディオドラに近づき、ブランは彼の頭をガツチリと掴む。す

ると彼の記憶や心の中を読み取ることができ、彼の目的を瞬時に理解することができた。

「へえ、なるほどな。世界中のシスターをゲスな作戦で墮としてきたと・・・それで今のシスターも自分が助けに行くことで惚れられようとしていたと」

「な、なんでそんなことまで・・・！」

デイオドラは世界中のシスターを無理矢理自分の身に委ねるように墮としていき、快樂を得ていた。それが簡単にバレてしまったことにまた酷く動揺していた。しかし

ドオオオオオオン!!

突如、デイオドラは隠していた右手を前方に翳すと特大の魔力が込められた弾を不意打ちとしてブランに向けて放った。そしてそれを待っていたかのように次々とブランに向けて魔力弾を放っていく。

「ハハハハハッ!!どうだこの僕の魔力は!!ざまあみろ!!誰にも僕の邪魔はさせない!!死ねええええ!!」

歪んだ笑みを崩さないまま、魔力弾を休まず放っていくデイオドラ。しかし

ガシッ!

「ヒッ!?!」

「凶に乗るんじゃねえ」

ブランは直撃した魔力弾を受けたにも関わらず、傷一つつかないどころか息一つ切らしていない。ブランはデイオドラの左手を掴み、手を180度捻らせる。デイオドラはあまりの痛みに声すら上げられず苦痛に顔を歪ませる。そしてブランはデイオドラの眼前に空いた手を翳す。

「破壊」

ドクン!



「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

そう静かにつぶやき、ディオドラの体から心臓の音に似た音が響くと、ディオドラの全身が足を最初に消滅していく。そして彼の悲鳴は虚しく響くだけであってつま先から頭部の隅々まで紫の粒子状になり、やがてディオドラの全身は跡形も無く破壊された。

「気持ちわりい奴だ……悪魔ってのはやっぱり欲望に忠実な生き物か。いや、人間もそれは同じか……。こうやって誰かを虐げることで快楽を得るってくだらないことに知恵を使うことしかできない奴もいる。ザマスの言っていたこと、多少は理解できるかもな……。アイツは人間全てが悪いって思ってるけど」

こうしてディオドラはこの世から消滅し、これによりアスタロト家の次期当主がいなくなつたというところで冥界は大騒ぎとなつた。まあ、ブランにとっては特に気にすることでもなかったのだが。

## 第6話 無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）

サーゼクス side

「何故……リアスの管理する町に破壊神が……!？」

私、魔王サーゼクス・ルシファーは困惑していた。先の三大勢力、そしてそこに乱入してきた二天龍の戦争を遠くから眺めていた老人のような人物がいた。それは自らを『破壊神』と名乗り暴れていた二天龍を『たった一撃』で戦闘不能にしたという恐ろしい存在である。その後、呆れたようにその場から姿を消した破壊神は今の今まで誰の前にも現れる事はなかった。

現在、天使の長となっているミカエルとはちよくちよく話すことはある。彼によるとその破壊神はこの地球とはまた別の星に住んでいる、つまり私達から見れば『宇宙人』とも言えるのだろう。

そんな存在が何故この地球、しかもリアスのいる町に現れたのか……それが全く理解出来ない。報告によれば町に侵入されていた墮天使の1人を消しとばした……そしてその前には不審な人物だと思い戦闘を仕掛けたとのこと。返り討ちにされたと言っていたが殺されなかっただけでも幸運すぎた。だがそもそもその人物が破壊神だという証拠がない……いくらリアスより強いからといってそう決めるのは早計かもしれない。弟子というのも名を借りているだけの可能性はある。

そして行方不明となったアスタロト家の次期当主であるディオドラ・アスタロト……彼は一体どこに行ってしまったというのだ？まさかそれも……

「少し……調べてみるか」

「サーゼクス、如何なさいますか？」

「とりあえず、リアス達には今後その人物に手を出さないように伝えるべきだ。頼むよ、グレイファイア」

「かしこまりました」

アザゼルとも話し合う必要がある。今後のお互いの種族の未来のためにも。

リアス s i d e

「まさか・・・こんなことになるなんて・・・」

私、オカルト研究部部长であるリアス・グレモリーは若干後悔していることがある。それは先日、イツセーが助け出したいと言いだした子が墮天使に殺された事から始まる。

三人称 s i d e

先日の教会にてブランがイツセーを殴り飛ばしその場を去った後、レイナーレと同じく駒王町に侵入していた3人の墮天使を葬ったりアス、朱乃はイツセー達のいる教会に遅れて到着・・・いや、リアスはレイナーレをイツセーが倒すのを信じてワザと遅れてやってきたのだ。

イツセーはアーシアの死体を持ち上げて涙を流し呻き声を上げている。するとそのイツセーと一緒にいた木場がリアスに近づく。

「部長、報告することがー」

「後で聞いわ。今は・・・」

思えばリアスはここで木場の報告をこの瞬間に聞いておくべきだった。リアスはイツセーの側に歩み寄り、死者を生き返らせる、というよりも悪魔に転生させることができる『悪魔の駒』を取り出してそれをイツセーに見せた。

それを見たイツセーは思い出したかのように晴れた顔になり、リアスはイツセーの想いを汲み取ろうとし、更にアーシアに神器が宿っていたのを知っていたので迷わず悪魔に転生させようとした・・・『アーシアにはもう神器が宿っていない』ことを確認せずに。

こうしてアーシアは悪魔に転生することができたが、アーシアの神器が無くなっていることを後から気づいたリアスはイツセーにレイナーレはどうしたのかを聞いた。するとイツセーは以前自分達を返

り討ちにしたブランがレイナーレを消しとばしたと聞いた。ならば、  
アジアの神器は彼が持つているのか？という疑問を持ったが、木場  
や小猫に聞くと神器がブランに宿った様子はなかったとのことだ。

悪魔の駒とはレーティングゲームで戦わせる眷属を構成させる為  
に非常に重要なものであり数も限られている。そして今回、アジア  
という何も能力がない只の一般人を蘇らせたという事実にはリアスは  
その事だけを後悔していた。

リアス side

「でも幸いなことに・・・アジアは潜在的な魔力が高いわ」

眷属になつてしまったものなら仕方ないわ。主人として、魔王の妹  
として蔑ろにするわけにはいかないので大切にしなければ・・・し  
かしアジアの性格的に敵に攻撃できるかと言われれば無理な話ね。  
なんとかアジアにも戦うことができれば大きな戦力になるのだろ  
うけど・・・。そして

「またあの男が・・・一度ならず二度までも・・・！これ以上好き勝手  
はさせたくないけどお兄様から手を出すなと止められている以上ど  
うしようもないわね。・・・破壊神・・・もし本当にそうだったら・・・  
何の為にこの町に・・・？」

ブラン side

「うーん、どうしたものか」

「どれにするんですか？」

俺はブラン。付き人のレムと食べ歩きを満喫していたところだ。  
やはり地球人の食う物は美味しい。はつきり言って今までのどの星よ  
りも格別に美味しい。師匠、アンタ・・・この地球を破壊しなくて正解

だったぞ。

「んじゃ、これで」

今現在は今度何か師匠にお土産として何か買っただけだと思いい、お土産屋という場所に訪れていた。どうやらお土産にはこの饅頭というのが定番らしいので俺達はそれを買って再び街を歩く。

「いや、ホントすごい星だぜ。ここまで文化が発展している星は珍しい・・・娯楽施設も十分あって飽きない星だ」

「はい、戦闘力に関しては不十分ですがそれがこの星のレベルを補っているかと思われます」

「そーいや、この前墮天使を破壊した時にあの金髪少女の神器も破壊したけどさ。あの管理者はどうしたんだ？」

「どうした・・・とは？」

「いや、今まで一般人が殺されても何もしてこなかった奴がああ金髪少女を悪魔に転生させたのかなーって気になっただけだ」

「ふーむ、どうやら転生させたらいいですね。プツ、神器が無いと知って露骨に顔をしかめる瞬間が面白いですよ♪」

レムは水晶を見つめその様子を見ながら笑う。ハッ、そりやあ戦力となると思っただけで転生させてみたら役立たずと知ればそうなる。まあ、コイツのことだから『愛する』とか言いながらこの金髪少女を『はぐれ悪魔殺戮マシン』に変えようと何かしら手を打とうとするのかもしれないな。

「まあ、そんなことどうでもいいけど」

あの金髪少女がどうなるかとぶっちゃけ俺の知ったことじゃないな。悪魔に投げかける情なんて別にないし。

俺達はとりあえず次なるグルメを求めて足を進める。

「うーん、どうしたものか」

先程の再現をしているわけではない。実は思いがけないハプニングに遭遇してしまったのだ。破壊神の俺だって元は人間だ、驚くことだってある。何も驚かない奴がいたらソイツは最早植物人間だと疑いたくなるぜ。

んで、俺が何に驚いているのかというと

「やつと見つけた」

「ここにきて幼女に話しかけられるとはな」

俺の目の前にいるのはゴスロリの服を着た黒髪ロングの幼女。しかも胸元は全開に開いており、乳房はバツテンテープで隠してあるという側から見たら痴女にしか見えない危ないやつに遭遇してしまった。

「我、オーフィス」

おっと、勝手に名乗り始めたぞ。なに、俺が破壊神と知ってるから話しかけたのか？それとも只の痴女か？まあどっちにしろ・・・

「自分から名乗るのは偉いことだな」

とりあえずそう言った。すると

「お前、『アイツ』と同じ力、感じる。前に我をボコボコにしたやつ」

「お前をボコボコにした奴・・・？おいレム、誰のことだそれは？」

「ああ、思い出しました。姿は違いますがこの方は以前、先代様に軽く捻られた『無限の龍神』、オーフィスと言われる者ですよ。前は老人の姿でしたので気を探った今この瞬間、やつと気がつきました」

どうやらコイツはこんなナリでも無限と夢幻を司る龍神らしい。

ん、そういえば若干『神の気』を感じる。気配は抑えられているがこれは間違いなく神の気・・・しかし俺が纏うものとは違って普通の神の気だな。神なら誰でも纏うことのできる弱い方の神の気ということだ。

「お前、師匠にボコられて今度は俺にボコられにきたのか？」

その問いにオーフィスは淡々と答える。

「我と一緒にグレードレッド、倒して欲しい」  
「ふざけんな」

これが俺とオフィスの最初の出会いであった。

## 第7話 思わぬ収穫

三人称side

「ふざけんな」

グレードレッドという者を一緒に倒して欲しいというオフィスの頼みを聞いて露骨に嫌な顔をしているブランに対し、オフィスは首をコテンと傾げていた。

「どうして?」

まるで自分が何も悪くないような、寧ろこの頼みを断る理由が分からないとでも言いたいような顔をしているのにブランは溜息を吐いた。

「いいかクソガキ。グレートレッドといえば次元の狭間にいるドラゴンのことだろ?・・・だよな、レム?」

レムギットからの情報を頼りに簡潔にまとめたブランだが、いまいち自信がなかったのか彼女に確認する。レムギットは頷くと杖の水晶から映像を出した。

「ええ、その通りです。これがそのグレートレッド・・・一応、この地球で最強と言われているドラゴンで次元の狭間の主とも言える存在です」

映し出された巨大なドラゴンがぐにやぐにやした不可思議な空間を泳いでいるのを見てオフィスの視線が釘付けになっている。

「これが次元の狭間で、この大きなドラゴンがグレートレッドです」

「グレートレッド・・・」

「でも、そのグレートレッドを倒してしまうと世界のバランスが崩れて世界ごと崩壊してしまいますからね・・・戦ってもその余波で地球が破壊される可能性もあります」

「そゆこと。はつきり言つて俺がそのグレートレッドを倒してもメリットが無い。クソガキはクソガキらしく砂遊びでもしてろ」

背を向けてこの場から離れようとするブラン達だが、オフィスはその後ろをテクテクとついてくる。

「お前と我ならグレートレッド倒せる。我、静寂を得たい。だから諦



めない」

「こんのクソガキ・・・！」

聞き分けのない子供とは正にこのことかと心の中で毒づくブランはしつこいオーフィスをこのまま破壊してやろうかとも考えた。しかし、その瞬間何かを閃いたのかブランは怪しい笑みを浮かべてオーフィスに向き直る。

「おいクソガキ、なら条件がある」

「？」

「俺と戦って勝つたらお前の頼みを何でも聞いてやる。グレートレッドだろうが静寂だろうが用意してやろうじゃねえか。んで、俺が勝つたら俺の言うことを聞け。敗者が勝者の言うことを聞くのは当然だろう？」

ここで忘れてはならないのが、ブランは未だ超サイヤ人になっていない。先代と比べればノーマル状態のブランと先代では力に圧倒的な差がある。しかしそれをオーフィスは分かっているはいなく、先代ブランと同じ『破壊』の力があることしか理解しておらず今の状態のブランなら自分でも勝てると思っている。そう、つまり

「分かった」

こうあっさり承諾してしまうわけである。一方、ブランはというと

（ククク、無限の龍神だろうが所詮はクソガキ・・・乗せられやすい奴だな。まっ、ここらへんで地球二番目に強いつて言われてるコイツの実力を測るのもまた一興という奴か）

条件付きで提案した策にこうも乗ってくれるとは思わなかったのか、心の中でほくそ笑む。オーフィスのその純粹無垢なその無表情は若干自信があるようにも見えたが、ブランはそれを見てまた更に笑いがこみ上げてくるが何とか抑えた。

「さて、レム・・・彼処に俺達を送れ」

「かしこまりました。はいー」

レムギットがトンツと地面に杖をつくくと、ブランとオーフィスはレムギットが持っている杖の中に吸い込まれるように入って行く。

「ここは……」

オーフィスは自分が送られた空間を見て口をポカンと開けて呆然としている。辺りは地面がなく、背景は真っ白、そして無限に空白が広がる場所……そう、ここはレムギットの杖の中の空間。すると

「……動けない?」

オーフィスは無理に体を強引に動かそうとするが、金縛りにあつたようにピクリとも動かない。一方、ブランは平泳ぎで悠然と空間を泳いでいた。動けないオーフィスを見てブランは動けないオーフィスのために念のため説明する。

「ここは『神の気』を自分の中でちゃんとコントロールしなきゃ動けない空間だ。それに重力も地球の10倍ほどあるし酸素も薄い……。まっ、お前には酸素は必要ねえと思うが……。おいどうした、動けないや始まらねえぞー」

「……むっ」

小馬鹿にされたことを感じ取ったのか、オーフィスは一旦強引に動かそうとするのをやめ、目を閉じた。すると

「……我、動けた」

「何?」

この空間はブランが破壊神見習いだった頃、神の気を得るためにブランはこの場所で修行した場所である。そんな彼はこの場所で神の気をコントロールするのに『1週間』もかかった。いくらオーフィスに神の気があるからといって一瞬でコツを掴み、モノにする姿にブランは驚愕する。

(飲み込みが早いなんてもんじゃねえ……コイツ、一瞬でコントロールする方法を独自に編み出したのか? 単なる偶然とは考えられない……いや、俺が遅すぎたのか? 師匠は『まあまあ早い』とは言うていたが……しかしまあ)

「お前、やっぱり単なるクソガキじゃねえな・・・おし、かかってこい」  
「えい」

「ぐっ!？」

ブランの言葉に対し間髪入れずに距離を詰めたオーフィスは開始早々拳を放ってくるが、それはブランの掌に受け止められた。

(まだ本気じゃねえな・・・けどノーマル状態の1割の力でも十分ビリビリきやがる・・・ククク)

「少し見極めてやるか。ハッ！」

「ん」

見た目に反し、その細身と軽く放たれた声からは考えられない程の強烈な拳と蹴りはブランも驚き、お互いに素早い攻防を繰り返している。素早いと言っても恐らく、目で追える者は数えるほどしかいないだろう。

「ほっ」

「ほう、段々ギア上げていつてるな」

拳と拳が衝突する度に凄まじい音爆が聞こえる。

「もつと攻撃してこい。まだまだ本気じゃねえだろ？」

「・・・」

今度はブランが防御に徹し、オーフィスが間髪入れずに拳を放っていく。オーフィスの表情は未だ変わらず無表情。一方、ブランは少しだけニヤツと口角を上げながらオーフィスの拳の殴打を拳を使わずに何度も脚で受け止めている。すると

「ほらよー」

「ぐっ・・・」

拳を掻い潜り、ブランはカウンターとしてオーフィスの鳩尾に軽く蹴りを入れるとオーフィスはほんの少しだけ痛みに顔を歪ませた。その様子を見てブランは腕を組みながら余裕の表情を浮かべている。  
「ほう、感情が無いカラクリ人形と同じかと思っただがそんな顔もするのか」

「むう・・・私の攻撃、全部受け止められてる」

「戦いにおいて大切なのは相手の気の流れを察知して動きを読むこと

だ。お前は目で追いながら俺に攻撃しているだけだから簡単に動きを読まれる。お互いに気の流れを読むことで初めて本当の戦いが始まるってもんだ。気が無い奴には意味が無いがな」

「気の流れ．．．こんな感じ？」

するとオーフィスは一瞬でブランに近づき、蹴りと拳を放っている。先程とは全くの別物でスピードもパワーも桁違いに上がっているが、ブランはそれよりも驚愕することがあった。

（今度は攻撃の精度が一気に上昇しただど!? なんなんだコイツ．．． たった一言アドバイスをしただけでそれをモノにしゃがるなんてよ．．．ふぎげやがって．．．これほどの才能があつて『静寂を得た』だど!? 宝の持ち腐れとは正にこれだな!!）

流星に『1割』の力では分が悪いと思つたブランは『4割』の力でオーフィスを迎え撃つ。と、いつてもまた脚だけで対処しているが。（もう少しだな。俺の力の一端を見せるのはまだ早い．．．コイツの全力の全力を俺は見みたい．．．!）

「えい」

「ガハッ!」

ブランの神の気の流れを察知し動きを読み取るオーフィスは遂にブランの鳩尾に拳を叩き込んだ。が、しかし

ガシッ!

ブランは鳩尾に叩き込まれた拳をガツチリと掴んでオーフィスの動きを止めた。

「やるなあ．．．この状態での4割の俺にダメージを与えるなんて思わなかつたぜ．．．そろそろ本気だせ!」

ブランは幼女体系のオーフィスの身体に拳を連続で叩き込む。ブランにとつてはまだ序の口であるが、オーフィスにとつては凄まじい猛攻であり防御をせざるを得なかつた。

「我、全力出す」

ドオオオオオオオン!!

オーフィスは全身に力を込めると、荒々しい気のオーラが溢れ出す。ブランもそれを見てニヤリと笑みを浮かべる。

「8割・・・いくかな」

「んっ」

オーフィスは掌から黒い蛇をイメージさせる特大のエネルギー波をブランに向けて放つ。それは今にもブランを呑み込むと思わせるほど巨大で、並みの常人ではそれを見ただけで気絶するのではないかとブランは感じ取った。

「確かにすげえパワーだ。・・・だがな」

それを迎え撃つために、ブランは前方に掌をかざし小さな気のエネルギー球体を形成する。それは空気を吹き込まれた風船のようにドンドン大きくなっていき、ブランの体が隠れるほど大きくなるとそれを勢い良く放つ。

「ハアッ！」

オーフィスのエネルギー波に対し、ブランはエネルギー玉をぶつけ鏝迫り合いの状態となる。拮抗状態となるかと思われたが、すぐにブランのエネルギー玉がオーフィスのエネルギー波を押す形となる。

「・・・トドメだ。ハアッ！」

「！」

ドオオオオオオン!!

オーフィスを見た。自分がエネルギーの波に飲まれる瞬間、ブランの髪の色が『金色』に変化したのを。それを見た瞬間、なぜか心の中で『勝てない』と思ってしまった。

そう、オーフィスは先代ブランに続き、今代のブランにさえ敗れ去った。それはつまり

「静寂を・・・得られない・・・」

そう呟くとオーフィスの意識は闇の中へと消えていった。

「(っ)は・・・」

眼が覚めると、どこかの公園のベンチに横になっていたことに気づ

き、その公園の砂場を見てみると先程自分を倒した相手が小さな子供達と『10メートルを超えるほどの巨大な砂の城』を作ってるのを見かけた。

小さな子供と戯れているブランをオーフィスはじっと見つめている。

「すごいー！こんな大きな城作れるなんて！手伝ってくれてありがとうお兄ちゃん!!」

「ハハハハ！気にするな！それに俺も楽しかったぞ小僧ども!!クソガキが遊ぶものだど侮っていたけどやってみるとなかなか楽しいじゃねえか!!」

分からなかった。ブランという男が。なぜあそこまで笑えるのか、何が楽しいのか。今まで静寂を得たいことだけを考えてきたオーフィスはそれ以外に興味を示したことがなく、生きる意味さえも不明であった。

どうやって自分が生まれたのかすら分からない。生まれた時から既に周りを圧倒する程の力を秘めていたオーフィスはただ、『孤独』だった。ずっと一人で世界を彷徨っていた。寂しい、とは思わなかった。何も興味を抱いていないのだから。孤独な自分はどう生きていいのかわからなかったからこそ、次元の狭間という故郷で静寂を得て静かに眠りたかったのかもしれない。

だからこそ、グレートレッドさえも凌ぐ強さを誇っており、尚且つ何かを楽しんでいるブランに少しだけ『興味』を持った。ブランはオーフィスが目覚めたことに気づくと、子供達と別れオーフィスの前まで近づいてきた。

「起きたかクソガキ。さーて、俺の言うことを聞いてもらおうか」

「その前に、聞かせて」

「あ?」

ジッと目を逸らさずに真っ直ぐ見つめながら口を開くオーフィス。ブランは何が何だかわからないがとりあえず大人しく聞くことにした。

「どうしたら、楽しめる?」

「楽しめるだど？」

オーフィスはコクリと頷く。初めて他人に興味を持ったオーフィスが初めて興味本位で聞いた質問だ。ブランは『何言ってるんだコイツ』とでも言いたいような顔をしてから淡々と答えた。

「これは師匠の言葉なだけだよ。『楽しみ方つてのは自由自在』なんだよ」

「自由・・・自在？」

「そうだ。他人が面白いと思ってる自分が面白いと思うとは限らねえ。だから見つけるんだよ、自分自身がな。もしかしたら何気なくやってみたことがハマるかもしれねえ、何気なく見たことがすげえ面白いつて思うかもしれねえ。宇宙は広いし、この地球だつてお前にとっては相当広い、その気になりや楽しみの一つ二つ見つけられんだよ。お前はその気がないだけ、楽しみを見つければよかつた・・・だから未だに一つも興味を抱けていない。そうだろ？」

「・・・」

オーフィスはそれ以上、何も言えなかつた。見つけようにもどうすればいいのかも分からないのだから。ブランはそんなオーフィスの意は介さず、先ほどの話に戻す。

「もういいよな。んで、敗者は勝者の言う事を聞かつて約束だったから・・・俺からお前に一つ命令しよう」

オーフィスはそのまま『帰れ』と言われる事を分かつたのか、公園のベンチから立ち上がってブランに背中を向けようとする。しかし、その瞬間オーフィスにとって予想外の命令がブランの口から放たれる。

「お前、俺の後継者になれ」  
「・・・？」



## 第8話 オーフイス 始めての○○

三人称 side

ブランの星にて

「よしクソガキ！今日からお前は俺の後継者候補に選ばれたわけだ！早速、家事手伝いに取り掛かって貰おうか！」

「我、状況が理解できない、理解不能」

ブランからモップを渡されたオーフィスはキョトンとした表情でそのモップを眺めている。突如、地球を飛び出て別の星へと連れ込まれたら流石のオーフィスでも戸惑うのだろう。

こうなった原因としては昨日の夕方あたりまで遡る。

1日前、オーフィスは静寂を得るためにブランに共闘を懇願してきた。しかし、メリットがない事に手を貸す意味が無いと判断したブランはそのお願いを蹴る。

しかし、ブランさえいけばグレートレッドを倒せると確信していたオーフィスにとつては諦めきれなかったのか、しつこくブランに付きまとう。そしてそれに嫌気がさしたのか、ブランは『負けの方が勝つた方の言うことを聞く』という条件付きでオーフィスと一戦を交えた。

レムギットの杖の中の空間で行われた戦いを制したのは勿論ブランであった。約束してしまったものは仕方ないとオーフィスはブランに『帰れ』と言われることを分かっていたのかブランの命令を待たずに帰ろうとする。しかし

「お前、俺の後継者になれ」

「……？」

予想していた命令とは違うと気づいたのか、振り向くとブランはどこから買ったのかオーフィスの身の丈に合う服を持っていた。

「ほれ」

「これ、なに？」

「服だよ。いつまでも乳首テープ晒してつと一緒にいる俺が恥ずかしいだろうが……さっさと着やがれ」

オーフィスは投げられた服をキャッチしてみるが、どうすればいいのか分からないのかジーツとその服を眺めている。いつまでも服を着ないことに痺れを切らしたのかブランが頭を搔いてオーフィスに近づく。

「そんなのも分かんねえのかよ……こりや、世間知らずどころの話じゃねえな。こうだよ、こう！ほら、手伝ってやるからよ!!」

「ん、んう……」

「変な声だすんじゃねえー!」

ブランはオーフィスの服を掴んで羽織り、袖を通させることで何とか着させる。側から見ると子供が服を着るのを手伝うお父さんに見えるかもしれない。

オーフィスは今まで服も姿も自分が買って着たというわけではなく、念じてその姿になっていたので『着る』という感覚は初めてで自覚は無いが新鮮だと思った。しかし、このようなブランの行動には理解できないものがあり先程の発言の意図も読むことはできなかった。「さっきの、どういうこと？」

オーフィスはそう聞く。

「そのまんまの意味だ。お前は俺の後継者……破壊神候補としてこれから修行してもらおう」

一方、ブランは何か面白いものを発見した子供のような表情でオーフィスを見つめていた。

「それにしてもお前、なかなか面白い奴じゃねーか。俺のアドバイスを一言貰っただけでそれをモノにしやがるなんてよ。戦闘力に関してはまだまだだが……こんな奴は初めてだ。ったく、さては師匠……コイツとの勝負、一発K.Oで終わらせたな?そうだろ、レム」

「オホホホーその通りです。あの時の先代様は寝起きでイライラしてましたからね。寧ろ、その方が生きていたことに私は驚きましたよ。それはそうとブラン様、先程の話は本当なのですか？」

いつのまにか現れたレムギットにオーフィスはさらに驚く。気配すら感じられなかったのに目の前で声が聞こえたことでやつと気づいたオーフィスは驚きで口を挟むことができなかった。

「本当だって。コイツ、あの空間の中で気のコントロールを熟知したんだ、それもすぐに。もつと強くなるとしたら面白いことになりそうじゃねえか？」

「なるほど。あの空間で……ふむふむ、いいでしょう。破壊神候補になってみるのもアリかと思われます。これからが楽しみですね」

笑顔でそう言うレムギットに対してオーフィスは疑問に思ったことがある。

「破壊神って……どういうことする？」

「簡単だ。星を創造する界王神に対し、星を破壊するこの俺の破壊神としての仕事。宇宙の均衡を保つ為にはこの両者が存在しないとならない。まあ、詳しいことはちゃんと後で説明する。それに俺だってその内誰かに破壊神を譲る日が来るんだ。んで、お前は俺が引退した後

にそれをやってもらうってわけだ」

「でも、我、帰らないといけない」

「は？どこへ？」

カオス・ブリゲード

「帰るところがある事に驚いたブランは腕を組んで首をかしげる。」

「禍の団……我がグレートレッドを倒すために集めた奴ら」

「ふーん、組織名みたいだが何してんだ？」

「三大勢力を敵視してる。あと、悪魔の世界を変えようとしてたり、英雄を名乗って暴れたり……テロ？」

「いや、ロクなやついねえじゃねえか」

星を巡って破壊活動しているブランが言えた事では無いかもしれないが、正直そんな事はもうブランには関係がなかった。

「俺は言った筈だ。敗者が勝者の言うことを聞くことで俺達は戦った。……そんで結果はお前の負け。これはお前が俺の言うことを拒否できないって意味でもあるんだぜ。グレートレッドとか禍の団なんか知らんし勝手にやってる（目障りなら破壊すれば良いしな……）」

「……分かった。我、禍の団……抜ける」

「ウンウン、それで良い。静寂なんてつまらない、じつくりと新しい発見を探していけ」

静寂を得られないことに未練を感じている様子が若干現れているが、ブランについていけば自分に何かが変わるかもしれないという期待を寄せて彼のズボンの裾を掴む。

「さて、今日は帰りましょうか。オフィスさん、突然で申し訳ないのですが『私達の星』へと案内しましょう」

「……………え？」

無表情からでも分かる戸惑いの声と感情がオフィスの中を駆け巡る。そんなオフィスの意思を介さずにレムギットは地球からの移動を開始した。

そして現在に至る。

オフィスはブランやレムギットが住む宮殿へと案内され、その広さに驚いている。そしてそれ以上に、短時間で他の星へと移ることができたことが今まで何も興味を抱くことができなかったオフィスの心を刺激する。

「さて、まずは掃除か……俺が破壊神候補としてやってきた事をお前にはこれからやってもらう」

宮殿の中を進み、図書室へと案内されたオフィスは辺りを見回す。

そしたオフィスは先程渡されたモップを見てみるが、使い方が分からずにブンブンと振り回して遊んでいる。ブランはそれを見て呆れたのか軽く溜息を吐いていた。

「予想はしていたが、まさか掃除もした事ないとはな……レム……教えてやってくれ」

「かしこまりました」

あくまでレムギットはオフィスの教育係という立ち位置か。直接オフィスの手伝いをするわけではなく、アドバイスをして手助けをする。

「分かった」

やり方を教えて貰ったのか、オフィスはモップをかけ始める。初めてやるものだが、なかなか様になつてるのを見てブランは感心する。

「服は着てるけどスカートはゴスロリのままだからか………ハッ！これがあの地球で見た『メイド』という奴か！」

「オー、ジャパニーズメイド〜イエイ〜」

レムギットもノリに乗ってエセ外国人ばりの英語で便乗する。一方、オフィスは初めてのモップがけに真面目に取り組んでいる自分に対して疑問を持つ。

「……？」

夜飯を食べる時間となり、オフィスは目の前に置かれた食べ物を見て首をかしげる。

「これは？」

「それ、ラーメンっていうらしいぜ？」

大きな丼に盛り付けられたラーメンをオフィスは口をポカんと開けて見つめる。その様子を見てレムギットは杖を床に突いて地球のラーメンの歴史をホログラムの図として写し、ある程度分かりやすく説明する。

「ラーメンの元は中華料理であり地球にある国の一つ、中国から伝わった料理です。そこから日本で独自のアレンジが施され今は別物に変化しているんです。そして現代日本の外食産業を支える代表的な料理であり、日本の国民食なのです！凄いですよね、こんな美味しいスープが自分で作れたら私の料理のバリエーションも増えると思うのですが……」

「レム、実はお前の味付けは俺、結構気に入ってるぜ。この際だから地球の料理のレシピでも学んでみたらどうだ？更にお前の作る飯が美味くなると思うと……心が躍るよなあ」

「ああああ、そう言われたらもつと張り切らないといけませんね♪あつ、そうそうブラン様……ゴニヨゴニヨ」

レムギットはブランの横へ移動すると、何やら彼に耳打ちをした。すると、何か驚いたのか表情が強張ると、すぐに腹部を抱えて笑い転げる。

「ブツ……ハハハハハハッ!!ビルスとシャンパがそれぞれの代表選手を出しての格闘試合だつて!?!んで、んで!?!しかも全王様にバレてるつてアハハハハハッ!!や、やべえ、腹が痛い!!」

「ウイスからの情報です。神 tube もあるので後で見てくださいか？」

「あ、ああ……それにしてもビルスの奴、面白いことやってるじゃねえか。久しぶりに顔を見にいつてみるか……てかあの野郎、この俺が破壊神を継承する時に寝てたなんてふざけやがつてええ……祝いの一言も無いとか許さねえ!」

「後でアポ取っておきますね〜」

「……はあ、第7宇宙にはその内行くとして……とりあえず今はこれを食べるか。いただきまーす!」

井からユラユラと上昇していく湯気と、食欲をそそるスープの香りがブランとレムギットの腹の虫を刺激していく。ブランは早速、箸を持ち麺を掴んで口に運ぶ。しかし流石に熱いので息を吹きかけ、少しだけ冷ましながら麺を食べていく。そのブランの姿をオーフィスは見る。

「……ん」

それを真似するかのよう箸を持ち、フーフーと息を吹きかけてから麺を口に運ぶ。それを見てブランはオーフィスに聞いた。

「美味いか？お前の住んでる星の食べ物だぜ？」

「……美味い？」

「美味しいってことだよ。こうさ、食べると腹が満足感に満たされて

「……もう一度食べてみたいって思えば……それは美味いってことだ」  
「……じゃあ、美味しい……我、初めて……もう一度、何かしたいって思っただけ」

「フツ、クソガキにもこの味が分かるか、流石は俺の弟子第一号。最高だぜ、このラーメンというのは」

不思議とこのラーメンをもう一度食べてみたいと思っってしまった。その時は理由が分からなかったが、ブランから教えて貰って初めて『美味しい』という感情を理解する事ができた。

「……」

オーフィスはラーメンを食べ終わると、自らの心臓の部分に手を当てて鼓動を感じる。普段から静寂を得たいと思っっていたオーフィスにとって『今日』という時間は新しかった。服を着ることも、掃除も、食事も、やることなすことが新鮮で無意識にも『楽しい』と感じていた。

しかし、本人はそれにまだ気づいていない。自らの感情に疎いオーフィスはこの感情が何なのかを知りたいと言うかのようにブランが着せてくれた服をギュツと握る。

「我……もつと色々知りたい。この気持ち、知ってみたい」

「おし……クソガキ、風呂の入れ方も教えてやる。なに、どうせすぐ覚えるだろ」

ブランはオーフィスにお風呂の入れ方や、ついでに掃除の仕方も教えようと案内する。しかし

「あつ、ブラン様。お風呂にはオーフィスさんとご一緒でお願いしますね。恐らく、シャンプーの使い方やシャワーの使い方だつて分からないでしょうから」

「はあ!?なんで俺がこのクソガキと……」

「弟子ならちゃんと師匠が教えてあげないといけませんよ? さあ、ファイト! あつ、欲情して襲いかかるなんてことしないでくださいよ」

「するか!!」

ブランは心の中で悪態をつきながらオーフィスを浴場へと案内す

る。オーフィスはまたもや新しいことが出来るという事態にワクワクしながらブランの後をテクテクとついていく。オーフィスの破壊神候補としての生活はまだ始まったばかり、果てさてこの先どうなりますことやら。

一方、禍の団の本拠地では混乱を極めていた。

「ちよつと！オーフィスが見つからないとはどういうこと!?!」

「知らん！私にも分からん!!」

「ちよつとどうすんのよ!!まさか……裏切った!?!」

「バカな！あの無限の龍神がこの禍の団を捨てることなど……まさか、グレートレッドを倒す存在が他に現れたのか!?!」

「そんな存在がいるわけが……!!」

「もつとくまなく探せ!!奴がいなければ私達の強力な後ろ盾が無くなるに等しいのだ!!それだけは阻止しろ!!」

下っ端達は各々、分かれて搜索を続けていたがオーフィスの姿はこの地球のどこにも無かった。いや、あるはずが無いのだ。何故なら、オーフィスはこの地球を飛び出して別の星に滞在しているのだから。



## 第9話 オーフイスちゃんのお勉強

ブラン side

次の日

「自分が何やったか分かつとんのか？」

「・・・」

目の前のチンチクリン<sup>オーフェイス</sup>を椅子に座らせ、所謂、刑務所の取り調べのように照明を当てる。

「分かつとんのかあああ!!」

「？」

「カツ丼食べよ……カツ丼食べよおおおおお!!!」

自身の残像を複数作り出し、涙流しながらそれらの指を一斉にオーフェイスへと突きつけながら叫ぶ。しかし、目の前のオーフェイスはコテんと首を傾げて俺を不思議そうに見つめている。残像拳が珍しいのか、俺が怒ってる理由が分からなくてそうしてるのか……少なくとも自分が何しでかしたか分かつていないのだろう。まっ、とりあえず「食べよ」

「いただきます」

昨日で作法を覚えたようだ。食う前にはしっかりと『いただきます』と言い、律儀に両手を合掌する。そしてオーフェイスは箸を持ち、次々と出されたカツ丼を頬張っていく。口の中が一杯なのか、つい最近見た『惑星ピポポ』の『バグハムスター』にそっくりだ。おいこら、そんなハイライトが薄い目を頑張ってキラキラさせても可愛いなんて思わねーぞ。

それに俺は心の広い神様だ。いや、これは本当にそう言えると自信がある。悪く言えば甘いのかもれない。しかし、これでも弟子なに変わりはないんだ、無闇にキツく当たっても無知すぎるコイツは成長しない。一から十までしっかりと教えてやらないとその内暴走して星々を全壊しかねない。

「あのな、確かにお前はまだ新米ペーパーで分からないことも沢山ある。な? な?」

「もぎゅもぎゅ」

カツ丼を頬張りながらコクリと頷くオフィス。おう、美味そうに食ってるじゃねーかバーロー。このカツ丼は俺の物とは他にコイツの分として地球で買ってきたんだ……どうだ、俺は優しいだろう？

「けどな、けどな……俺のプリンを食べるとはどういうことだああああ!!?お前、お前おまつ、おつ、おまつ……お前お前お前お前ええええ!!」

何が言いたいのかわからなくなってきたので一旦落ち着こう。オフィスはカツ丼を食べ終わると、満足そうに俺をジツと見て、にへらと笑いながら口を開いた。

「ご馳走さまでした。プリンっていうの、あれ、美味しかった。我、また食べたい」

「俺の！あれ俺のプリン!!取っておいた俺のプリンを何で食った!!」

「冷蔵庫、目に、入った、それで、惹かれた」

「急に露骨な片言になるなあ！魔が差したって正直に言え！」

冷静になれ。まあ、俺も名前を書いていないというのも悪い。コイツのことをまだ理解していなかった俺も悪い。けど、言わせてもらう。

「クソガキ、たとえばお前……次元の狭間が故郷なんだろう？」

「うん」

「でだ……その中のグレートレッドに追い出されてお前は故郷を離れざるを得ない状況ってなった。これに対してどう思う？」

「むかつく」

「そうだ！むかつくんぞ嫌だろう!!?自分に嫌な事されてその気持ちになるなら俺の気持ちの方が分かるはずだ!!悪い事したら?おい、どうする?どうするんだクソガキいいいい!!やることは一つだろうがあああ!!」

「あう、あう」

両肩を掴んでガクンガクンと揺らす。これも分からないのか……

!

「ごめんなさい……だ」

「ごめん……なさい？」

「そう、相手を不快に思わせてしまったならちゃんと謝まれ。二度と  
しません、ってそう誓うんだよ」

「……ごめんなさい……もう、勝手に食べない」

「そうだ、それなら許す。俺も今度からは名前を書く。食べたいなら  
ちゃんと言え。分かったな？」

「分かった」

うん、ひとまずこれでいい。オーフィスはこれから破壊神候補とし  
て学ぶ時間が設けられているのでレムギットの元へと向かう。宇宙  
の知識担当はレムに任せているのでその間は自主鍛錬でもしてよう  
か。

### 三人称 side

「これが……怒られた？」

「どうしましたオーフィスさん？」

とある部屋に入ったオーフィスは誰にも聞こえないようにそう呟  
いた。そこに先に部屋に入っていたレムギットはそんな彼女の様子  
に頭に疑問符を浮かべている。

「ししよーのプリン、食べちゃった」

「あらまあ」

オーフィスはそう言うと、レムギットは手を口の辺りに翳しながら  
驚く。

「悪い事したら、謝るって言われて……謝ったら、ココがチクチクする  
ようになった」

オーフィスは心臓の辺りに手を添えながら顔を俯かせる。しかし、  
レムギットは優しく微笑みながら彼女の肩に手を置く。

「フフフ……オーフィスさん、それは良い事なのですよっ！」

「えっ？」

「それは反省している証拠です。その反省は次に活かし、相手の心を理解する第一歩なのです。気に病まず、前向きになつてみてはどうでしょう?」

「……これも初めて……でも、怒られるようなことはもうしない」「貴方が感じる『初めて』が必ずしも良い事とは限らないことが今回証明されましたね。さっ、キリのいいところでお勉強をしましょう」

宇宙の神々、神話系についてレムギットはオーフィスに説明。オーフィスは椅子に座り、興味津々にレムギットの話聞く。

「まずオーフィスさん、貴方方のような地球の神々は宇宙全体でみるとどれくらいの地位にいますか?間違つてもいいので答えみてください」

「……?三番目」

「ブツブツ!正解は七番目です。あくまでだいたいなのですがね」

かなり適当に答えてみたがやはり間違つていた。レムギットは杖を床に突くと、オーフィスの目の前に立体映像を出現させる。そこにはピラミッド型の図が表示されており、レムギットは棒を指しながら説明をする。

「まず、『界王神』。この方はブラン様の言った通り、星を創造する神……地位はブラン様と同じ三位と言ったところででしょうか。この界王神とブラン様のような破壊神は対となつており、この両者による創造と破壊により宇宙の均衡は保たれているのです」

「なんで創造と破壊、する?」

これはもつともな質問だ。理由もなく破壊と創造を繰り返す意味をオーフィスは知りたいのだろう。レムギットはその問いに淡々と答える。

「それは『人間レベル』を保つ為です」

「人間レベル?」

「そうです。人間レベルというのは、宇宙全体の生きる者の戦闘力、文化、知能、様々なステータスを星の価値として平均して出される数値。これを保つ為なのです」

「でも、それに関係、ある?」

「勿論です。たとえば、人間のいない星が存在したとしましょう。土地も荒れ果て、環境は汚染されている……そんな星などあっても平均を出すときに足を引っ張るだけで意味がないでしょう？悪く言えば『価値』がないのです。そしてそれを破壊神が破壊し、新たに文化を築くことを期待を込めて界王神が星を創造する。これは仕事……破壊神と界王神に課せられた義務なのです」

「ん……難しい。いつか、我もそれをするの、大変」

「それに関しては問題ありません。その為のサポーター、付き人として私がいるのですから」

オーフィスはそれを聞いて少し安心した。右も左も分からない彼女にとってレムギツトの存在はとても心強かった。

「それと、破壊神に使えるこの私は『天使』なのですよ。驚きましたか？」

「ん、地球の天使とは何が違う？」

「根本的に種族的に違う……かもしれないね。呼び名が同じだけで彼等とは全く接点がありませんから。まあ、ここは特に重要ではありません。話を戻します。私は破壊神に仕える者ですから地位的なものも存在しません。破壊神と同等の立場にあるのが界王神、それより一つ下が『大界王』です」

「大界王？」

「簡単に言えば、宇宙全体のあの世の管理者のトップ。主に界王は天国に行ってしまった者を育てたり、見守ったり、時にはあの世で武道大会なども開きます。その大界王に仕える者が四人の『界王』。次に宇宙全体のあの世の死者の生前の罪を裁くのが『閻魔大王』ですね」「あの世……ハーデス？」

「ハーデス……地球のギリシャ神話の冥府の神の名前ですね。それはあくまで地球担当の冥府神でしょう。閻魔大王はハーデスにとつては上司という立場になります」

「おー」

オーフィスは気になったことを知ることができて喜んでいる。レムギツトはさらに続けた。

「そして、貴方方地球の神はそのハーデスと同じ地位です。ここからは破壊神より上の存在について話しましょう」

「破壊神よりも……上？」

考えただけであのオーフィスが震える。自分よりも圧倒的な力を持つているあのブランよりも高い地位にいる存在を知ってオーフィスは驚きを隠せていない。

「破壊神であるブラン様よりも上の地位にいらっしゃるのが『大神官』様。強さはブラン様を遥かに超えています」

ここで、レムギットは大神官が自身の親だということは言わなかった。言う必要はないとの判断の上だろう。オーフィスは驚きながらもレムギットの話聞く。すると今度はレムギットの口調に重みがかかる。

「そして……全宇宙の頂点立つお方が……『全王』様なのです」  
「あつ……」

オーフィスは昨日ブランの口から出た『全王様』と言う言葉を思い出す。

「これだけは言っておきます。全王様には逆らわないで下さい。何があっても」

「どうして？」

「全王様は全宇宙で一番お偉い方なのです。機嫌を損ねたり、問題を起こしすぎると即……消滅されるかもしれませんよ」

レムギットの笑顔を見るに冗談ではない、これは本当なのだ。オーフィスは直感し首をブンブンと振る。因みに今の話を分かりやすくまとめるとこんな感じである。

ランキング

一位 全王

二位 大神官

三位 破壊神Ⅱ界王神

四位 大界王

五位 界王

六位 閻魔大王

七位 その他の神

「敬語の使い方も覚えなさいといけませんね、いつか、もしかしたら近いうちに全王様にもお会いすることになるでしょうから。さて、続けましょう。これが今日で最後のお勉強です。オーフィスさん、私の話で気になることがありますでしたか？」

「色々気になる。もっと知りたい」

「そうですね。ならばお教えしましょう。宇宙は13個あるのですよ」

「……………ん？……………!？」

言葉の意味を理解しようとしたが追いつかない。オーフィスはレムギットの言っている意味が分からなかった。宇宙に個数などあるのか、そもそも宇宙って何だ？そんな疑問が頭の中で循環していた。「宇宙は1つではないのです。地球に様々な国があるように宇宙も分けられて存在しているのです。宇宙は無限に広がっているとはよく聞きますが、実はそれ、普段は見えない壁に阻まれておりそれを通過することで他の宇宙に移動できるのです」

「我、頭がこんがらがってる」

無理もないだろう。いきなり話のスケールが壮大になり、それが重なればいくらか以前周りに関心がなかったオーフィスでも動揺してしまう。

「頭に詰め込みすぎるのは良くないですから、この宇宙の数、そしてこの『第0宇宙』に関しては次回のお勉強に持ち越ししましょう。今日はここまでです。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

レムギットに合わせてペこりとお辞儀をしてオーフィスは部屋を出て行く。

「我、色々なことを覚えた」

胸を張りながら自室へと戻っていくオーフィス。徐々に他への関心を深めながら彼女はこれから成長していくだろう。

そして

「ふう、これで終わりにするか」

ブランは宮殿から離れたところで自主鍛錬を行っていた。両手首、両足首には何やら重りなどが巻かれており、

その重さを感じさせないほどの素早い動きで戦いのシミュレーションをしていた。

「今の俺じゃ100トンの重りじゃ軽いわな……今日はここまでにして部屋に戻るか」

ブランは思い出す。昨日、レムギットから第7宇宙と第6宇宙が選手を出して格闘試合を行なったとの情報を聞いた。実際に行われてからはそこそこ経ってはいるが。

「よし、早速見てみるか」

そこでブランは部屋に戻り、神々の間でサービスとして提供されている動画サイト、『*sh tube*』というものを使ってその格闘試合の映像を拝見してみた。

「まさか……サイヤ人が他の宇宙にいたなんてな」

ブランと同じサイヤ人が第6宇宙と第7宇宙に存在することに驚愕し、ある二人のサイヤ人に注目した。

『界王拳!!』

『ファイナルフラッシュ!!』

「おいおい、そんなことしたら体ぶつ壊れるだろうが……あつ、なんか骨や筋肉がボキボキいつてら。おつ、コイツは……同じサイヤ人として気高い誇りを感じる……まだまだ伸びるな。しかもこの二人……まさか俺と同じブルーになれるとはやるじゃねーか。しかし、まだまだムラがある……神の気を完全には使いこなせていないな」

その二人のサイヤ人を冷静に評価する。これを見てブランは近いうちにこのサイヤ人二人に会うことを決意。しかし、この二人を見てブランはどこか不思議そうな顔をする。

「なんか……顔似てないか？」

自分はその二人を足して二で割ったような顔をしているとブランは思わずそう思ってしまった。



## 第10話 オーフイスちゃん、頑張ります

三人称 side

「今回はこの場を設けて感謝する……と言っておこう。日本神話 主神……天照大神」  
アマテラスオオカミ

「この度ははるばる遠くの星からようこそおいでくださいました。破壊神ブラン様」

ここは日本の駒王町ではなく、日本神話の神々が住む普段は一般人が入る事はない場所、『高天ヶ原』。その神殿内部の広大な部屋では緊迫とした雰囲気か漂っていた。ブランの隣には付き人としてレムギツトが立ち、天照の横には同じく日本神話の神、須佐之男命スサノオノミコトが立っていた。

ブランは出された粗茶を飲み干すと、目の前に座っている天照大神に向かって口を開く。

「まずは自己紹介から……俺は破壊神ブラン。恐らく、お前らの知っているのは先代ブラン……俺はその後継者だ」

「私は付き人のレムギツトです」

「日本神話所属の神、天照大神です」

「同じく、須佐之男命でございます」

お互いに名乗った後、ブランは目の前に座っている天照大神に向かって口を開く。

「前日はお前達、日本神話の神の気を辿って入り口までやってきた。まあ、予想通りお前達の部下が俺が何者かを問いただしてきたな」

「そ、その件は本当に申し訳ありません。なにゆえ、他の勢力が攻めてくる可能性もあり警戒を強めていたもので……」

「いやいや、寧ろ当然の反応だ。わざわざすんなり自分のテリトリーに侵入させる方が馬鹿だ。俺が宇宙の破壊神と知らないのもそれは仕方のないことだ。今まで面識がなかったんだからな」

「その寛大な心になんとお詫びすればいいか……」

（そこまで腰が低いとこちらもやりづらいなんだけどなあ……まっ、立场上仕方の無いことか）

天照の隣には『須佐之男命』<sup>スサノオノミコト</sup>が付き人として立っており、天照は緊張しているのか若干声が震えており、須佐之も冷や汗を流していた。一方、ブランはそこまで緊張されているとは思わなかったのか、なるべくフレンドリーに接する。

「そこまで緊張するな。俺はお前達と戦争を起こす気なんてサラサラないし、ましてやここで暴れるなんてことはない。あまり堅くならなくたっていいぞ」

「は、はあ……」

天照と須佐之はそう言われてほんの少しだけ落ち着きを取り戻す。

「今日はお前達に確認したいことがあった。とても重要なこと……世界に蔓延るはぐれ悪魔どもやその他諸々……簡単に言えばお前らの言う聖書の三大勢力のことだ」

「ツー！」

「それだけじゃない。神器とやらを持っている人間達を実験材料にしている堕天使ども、信者に聖書の神の不在を明かさず、あまつさえ様々な実験を放置している天使ども……調べたところ、一番新しいのは『聖剣計画』ってのがあったらしいな。日本の土地を収める者として、一部とはいえ三大勢力に好き勝手されているのは確かだ……それについてどう思う？」

ブランがそう言うと、また体に緊張が走る天照と須佐之。しかし、ここで怖気づいて失言をするのは避けようと天照は何とか声の震えを抑えて口を開く。

「私達日本神話の神々も、その件に関しては目に余るものがあります。はぐれ悪魔に関しても元を辿れば貴族、魔王が『悪魔の駒』を開発したから。……堕天使に関しては言わずもがな……我々も対処はしたいのですが……」

「戦争を起こせば……この日本が火の海になる……と」

「はい……」

（全く、地球という星は脆いな。界王神界並みの耐久力が無いとまともにも戦えやしない）

戦争を起こすのは簡単。他の神話と手を組むことで勝てる見込み

があるのは確かだ。

しかし、それを起こせばこの日本に被害が及ぶ可能性がある。悪魔への転生、はぐれ悪魔による被害、墮天使による神器の実験体……三大勢力による様々な被害を受けて日本神話も黙っているわけにもいかず、何とか手を打とうとするにも……

「現代魔王、サーゼクス・ルシファー、アジユカ・ベルゼブブ……『超越者』と呼ばれるこの二人が厄介で。勿論、墮天使総督のアザゼル、現在、天使のトップであるミカエルもまた然り。特にこの町の管理者と自称している悪魔達……その中の一人であるリアス・グレモリーに手を出せば、間違いなくこの日本にサーゼクス・ルシファーが激昂し、攻めてきます」

「……なるほど」

これに関しては良い判断をしているとブランは思った。闇雲に戦争するよりも何倍もいい。天照の苦渋の顔、須佐之の怒りの表情。それを見てブランは彼らが嘘をついていないこと、彼らは自らが収める土地の人間達のことを良く思っていると理解して一つ提案をする。

「一つ……考えがある」

「そ、それは……？」

「簡単だ。俺、破壊神ブランと同盟を結ぶことだ」

「ツ!?よ、よろしいのですか……!?貴方からみれば我々は弱小どころか羽虫のような集団……何のメリットもございませんし、申し訳ないですー!」

「それはあくまで単純な『力』で考えればの話だ。が……これは俺にとっても損はない。日本の文化を失うとこちらにも都合が悪い……これ以上、人間を死なせたくないんだろう?さあ、どうする?俺としては別にどっちでも構わないが……これだけは言っておく。俺は三大勢力と手を取り合うつもりはない。敵対することになり、更にお前らがアイツらと手を組むというのなら……その時は……」

「……………」

ブランが前方に掌を翳すことと言いたい事を理解したのか、天照と須佐男はビクツと身体を震わせる。はつきり言っつてブランを味方に

つけることにデメリットが感じられない。三大勢力を敵視している  
ブランと手を組むことはこれ以上ない強力な後ろ盾を得ることとな  
る。だからこそ、何か裏があるのではないかと疑ってしまう。

「まあ、裏があると疑ってるだろうな。確かにお前らの考えは間違っ  
てはいない。が、俺にとってはお前らとは敵対する理由がない……そ  
れだけは覚えておけ」

「……分かりました。他の者達にも伝えておきますので、また改めて  
考え、答えを出してもよろしいでしょうか？」

「構わん。……さつ、真面目な話はこので終わりにして……ちよつと  
聞きたいことがある」

「な、なんでしよう……？私に答えられる範囲内であれば、何とでもお  
答えます……」

まだあるのかと、天照は緊張の糸を張り巡らせながらそう言い、ブ  
ランは質問をする。

「あのさ、オムライスって……美味しいのか？」

「え、えつと……はい？」

「オムライス……知らないのか？日本の神なのに……」

聞き間違いだと願いたいのが、どうやら本当に『オムライス』という  
単語を発したようだ。まさか宇宙の破壊神からそのようなことを聞  
かれるとは思わなく、動揺してしまうが、慌てずに何とか平常心を保  
ちながら答えた。

「は、はあ……コ、コホン、好みは人にもよりますが、私や須佐男も好  
みの料理の一つです。破壊神ブラン様のお口に合うかどうかは……  
分かりませんが……」

「う、美味しいのか!?そうかそうか!レム、早速食べに行くぞ!!あのメイ  
ド喫茶とやらにあった『愛情たっぷり特製オムライス』とやらを俺は  
食べてみたい!!」

「かしこまりました!では、私達はこれで失礼します。また、何かあれ  
ばこの水晶を通じて私達に呼びかけてください」

「わ、分かりました」

レムギットは一つの水晶を天照に手渡すと、二人は背を向け神殿を

去っていった。神殿を出て行くブランとレムギットを見送った天照と須佐男は緊張の糸がぷつんと切れると、へなへなと力弱く座り込んでしまう。

「口に合わなかったら……破壊されるのでしよるか？」

「……そうならないことを願うしかないな」

胃を痛めながら眩くが、彼らは知らない。その二人の心配は杞憂に終わることを。

「ふむ、愛情たっぷりというだけはある……美味しいな、モグモグ……」

「やはり料理は愛情ですね♪」

メイド喫茶にて、ケチャップによるハートフルな文字が書かれたオムライスを如何にも美味そうに食べるブラン達を見て店員達は微笑みを浮かべていたそう。

その夜、ブランとレムギットは自分達の星へと帰ってきた。オーフィスはブラン達のお出迎えをした後、突如ブランの足へとぴつたりと張り付くように抱きついた。

「ししよー、お風呂、一緒に入る」

「ふぎけん、流石にもう一人で入れるだろ」

うざったいと心の中で毒づき、彼は足をブラブラと揺らす、オーフィスは取れない。それどころかビツタリと、まるで接着剤でもついているのかと思う程の抱きつき具合だった。

「入りたい〜」

「クソガキが……!」

「いいではありませんか。弟子とのスキンシップは大事ですよ?」

「これがスキンシップの一つなら世の中終わってるな……ふん、おいクソガキ、風呂は沸かしてあるんだろうな」

その問いにオーフィスは何度もコクコクと頷いて、やっとブランの足から離れた。

「はぁ……行くぞ」

「うん」

先導するブランの後をオーフィスはテクテクと歩いてついつていった。

数分後

「我、お友達が欲しい」

「急にどうした」

ブラン達が住む星の宮殿……その浴場でオーフィスはそう言う。彼女の髪を洗ってあげているブランは訳が分からないと言いたげな顔をしている。

「本で見た。お友達増えて、遊ぶともっと楽しくなる。だから、欲しい」

どうやら、図書室での小説を見て自分も友達が欲しいと思ったようだ。友達とは気を許せる、話し相手になってくれる、遊び相手になってくれるなど……他人とそのような関係にあること。

(何かしら知ると実行したくなる……好奇心旺盛だな……)

「ししよーは、我の友達？」

ハイライトの薄い目をキラキラさせながらオーフィスはブランに対し聞いてみた。しかし

「俺とお前は友達じゃねえよ」

そう、バツサリと言われたことにオーフィスはシュンとなって露骨に落ち込んだ。

「ししよー、我の友達、なつてくれない？」

その問いにブランはただ、黙っていた。

「……(友達……か)」

「ししよー？」

突如、口を開かなくなりボーツとしているブランに対し、オーフィスは首を傾げる。が、すぐにブランは我に返り、オーフィスの髪についたシャンプーの泡を洗い流すと、彼女に聞こえないように呟いた。「その友達作って……いなくなった時、後悔するぞ……」

「……?よく聞こえない……」

「何でもねえさ……はあ……」

湯船に浸かった二人は汚れた身体を清め、浴場を後にする。

「チツ……」

「……」

舌打ちをし、髪をくしゃくしゃと掻きむしりながら去っていくブランの背中姿をオーフィスはジツと見つめていた。

## 次の日

「さて、今日の修行はこれだ」

「宜しくお願いします」

ブランはオーフィスを外に連れ出し、何か重りのような物体を見せつける。それは以前、同じく破壊神候補だった頃のブランの修行の一環だったもので、その重りの上面部には両腕を通す穴があった。

「今日はこれに腕を通し、持ち上げて星を一周しろ」

「分かった」

やる気に満ちた表情のオーフィスは、早速その重りを持ち上げようとする。しかし

「ふにゅ〜……!」

力を込めても全く持ち上がらないことに納得行かないのか、オーフィスはムキになって力任せに持ち上げようとする……が、やはり上がらない。

「やつぱり、単純な力はまだまだか。それを持ち上げるにはコツがい

る……そこからは自分で何とかしてみろ」

「うう……重い……」

「軽かったら意味ないだろ」

オーフィスは少し、諦めかけてしまった。しかし、変な所で真面目な彼女はすぐに再起すると今度こそ重りを持ち上げようとする。

「ふんにゆ……い……」

「おお……」

重りがほんの僅か1センチほど浮き上がり、オーフィスは頬を膨らませながら何とか足を一步踏み出す。オーフィスが持つている重りの重さはブランにとっては軽いものだが、彼女のその根性に感心する。

「よし、そのまま一周だ。生半可な気持ちでやると……ほれ」

「えっ……」

ブランが後方を指差し、オーフィスは後ろを振り返る。みると、地面が一定時間毎に徐々に消滅していつてることが確認できる。このまま止まっているとオーフィスの立っている地面も消滅していく……それを察した彼女は普段は感じない切羽詰まった感情を募らせ、進むスピードをなるべく速くした。

「破壊神候補って……大変……我、こんなの初めて……」

「今までのほほーんと楽して生きてきたことがここに来て返ってきたというわけだな。おいおいどうした、それ以上遅くなると俺の気弾も躲しながらという更にハードモードになるぞ」

「それだけは……やだ……」

今でも充分辛いというのにこれ以上の鬼畜修行になるのは流石に嫌だと思ったオーフィスは何とか歩くスピードを上げていった。しかし、先程ブランの言ったことは実はハツタリであり、それを実行するつもりはなかった。追い込まれることによって生物は生存本能を爆発させ、本来の力が限界を超えて引き出される。強くなるためにはこれが一番手っ取り早いとブランは思い、オーフィスを限界まで追い込んだのだ。

（まずは単純な『力量』が必要だ。どれだけスピードが速くとも、戦い



のセンスがあろうと……相手をぶちのめせる力がなければ始まらない)

「そういえば……」

オーフィスの修行とは別に、ブランは何かを思い出す。

(食料の調達はいつもレムに任せていたな……あいつは付き人だし、俺が行くって言うても自分で何とかしちゃうからな。なんかいつもパシらせるのも悪いし、他にもう一人いれば……)

「よし……」

ブランは腕を組み、頷くと再びオーフィスに目を向ける。どうやら、ブランの予想以上に進み具合は良いようで、彼女も何とか死なずに済みそうであった。

「ししよー、助けて」

「甘ったれんな」

「うう〜」

この後、星を一周したオーフィスは予言魚さんの水鉢を綺麗に洗う、図書室の掃除、庭の草刈りと様々な家事手伝いをこなした。その慣れた手つきを見て、ブランは少しずつだがオーフィスが成長していつていることを確信した。

## 第11話 弟子二号Ⅱパシリ一号

ブラン side

次の日

「レム、リサーチは済んだか？」

「はい、粗方済みでしたよ。後は向かうだけですな」

地球に訪れた俺はレムと共にある場所へと向かう。その案内された場所は若干、薄暗く気味の悪い森の中であり、心地の良い場所と言うには程遠い。

「さて、パシリでも一匹捕まえてさっさと帰るか」

使い魔の森……まあ、要するに部下をゲットできる森でいいだろう。普段は悪魔が使う場所らしいが、明確に悪魔の物ではないので俺に入る権利がないわけではない。よって普通に入ることを決めた。

「その使い魔の森の最深部に天魔の業龍カオス・カルマ・ドラゴンと呼ばれるドラゴン……『ティアマツト』という者が存在するらしいですよ。この方が良いとリサーチしてる中で私は思いましたよ」

「え？な、何？カ、カ……カツオ・カルビ・ドラゴン？」

「カオス・カルマ・ドラゴンですよ」

覚えづらいんだよ。天魔って書いてカオスってなんだ？業ってあるからカルマなのか？漢字とカタカナ合わせれば何でも良いとか思ってるんじゃないぞバーロー。たとえば、あの管理者ベにがみのルイン・プリンス(笑)は悪魔内では『紅髪ベにがみのルイン・プリンスの滅殺姫』とか呼ばれてるらしいけど、もっと分かりやすくするなら『赤髪の管理者(笑)』で良いと思うぞ。勿論、皮肉を込めての命名だが。

今の一連の話を聞いて、そのティアマツトがこの使い魔の森で一番強いということを理解した。が、それを聞いて俺がそいつの強さに期待するわけではない。俺はレムと共に食料を調達してくれるパシリが欲しいだけだからな。

「ドラゴンっていうけどさ……俺は人型のパシリが欲しいわけなんだが……図体がデカくてかえって邪魔じゃねえか？」

「大丈夫です。人型にもなれるドラゴンらしいですから」

「そうか。なら安心だ」

数分後

薄暗い道を進んでいくと、看板のようなものを発見した。そこには『使い魔の森』とはつきり書かれており、到着はしたのだと俺達は確信し一度足を止めた。

「ここからが普通の森から使い魔の森に変わったってわけだな」

「そういえばブラン様、ティアマツトという者のことはどれくらい知っていますか？」

「ティアマツト。この地球の古くから伝わるバビロニア神話に出てくる原初の海の女神……と、いうことしか調べてない。しかし……ドラゴンなのか神なのか判別しにくいな」

俺達が無気ない会話をして立ち止まっていると

「ゲットだぜい！」

如何にも夏休みの少年が虫取りに行くようなラフな格好で帽子を逆に被っているおっさんが颯爽と俺達の目の前に現れた。

「俺はザトウージ！使い魔マスターだぜ！おっ、見ない顔だな。アンタ達も使い魔を探しに来たのかい？」

「そんなところだ。けど、使い魔を手に入れるのはレムじゃなくて俺だけだ。ザトウージとやら、悪いが中まではよく分からないから案内をしてくれないか」

「お安い御用だ！それで、アンタ達名前は？」

「破壊神ブラン」

「付き人のレムギットです」

「フアツ!？」

名乗った途端、その男は目玉が飛び出るんじゃないかというくらい驚愕の表情を浮かべ、俺に対して深々と頭を下げた。

「まさか貴方が破壊神様だったとはあああああつ!! 大変な無礼を働いてしまい申し訳ありません!!」

「次から気をつければいい。それよりも、この森の最深部まで案内を頼む。ティアマツトというドラゴンに用があるからな」

「あの龍王を……。この使い魔の森の中での強さはトップクラスですが……。貴方に比べたら……」

「心配するな。強さに元々期待などしてない。ただ、意思疎通できる有能パシリさえゲツトすればそれでいい。あのクソガキと一緒に家事手伝いもやらせれば、少しはアイツの負担も減るだろう」

アイツも宮殿の掃除や、洗濯、草刈りなど、様々な仕事に慣れてきている。しかし、もう一人増えれば更に効率が良くなる事を考えた俺は今日ここにきたというわけだ。

「ま、まあ、大丈夫なら問題ないか……。よし、張り切って案内しますぜ! ささっ! こちらへ!」

「切り替えが早くて気に入ったぞ。その調子で頼む、ザトウージ」

「私はここでお待ちしていますので。お気をつけて、ブラン様」

「おう、行ってくる」

ザトウージを先頭に俺は森の中を進んでいく。

にしても薄気味悪い場所だ……。何かキラキラした装飾くらい付けとけばもつと華やかな場所になるんじゃないか? メルヘンチックな使い魔の森つても面白そうだ。

しばらく歩くと、如何にも生物の気配が少ない……。というよりも、誰も寄せ付けないと言わんばかりの冷たいプレッシャーのようなものを放つ巨大なドラゴンが眠っていた。ザトウージは俺を案内すると、役目を終えて一度一人で後方へと下がっていく。流石に使い魔マ

スターのザトウージでもこのドラゴンの相手は出来ないようだ。

さっ、後は俺の番ってわけだ。

「しっかし……弱いプレッシャーだなあ。そもそも殺気も弱い。本当に誰も寄せ付けたくないならもっと熱い気を放出しろよな」

俺がそう喋っていると、その声に反応したのかそのドラゴンの眉がピクツと釣り上がりゆつくりと目を開いていった。

「なんだ……貴様は？」

眠りを妨げられて気が立っているのか、その声には怒気が含まれている。しかし、その程度の迫力では俺を恐怖させるには全然足りない。俺は少しも怖気づいた様子も見せずにそのドラゴンへと話しかける。

「おはよう。目覚めが悪いのは見て分かるが、少し俺の話を聞いてもらえるか？」

「……いや、聞かなくてもいい。どうせ、私を使い魔にしようとする場に訪れたのだろうか？」

「そうだ。んで、お前が……お前が……えっと、なんだっけ……カ、カ……」

カカオ・マルマイン・ドラゴン!!

カオス・カルマ・ドラゴン  
「天魔の業龍だ!!何だそれは!?!豆なのか!?!自爆するのか!?!」

いいツツコミだ、感動的だな、だが無意味だ。そうそう、そんな名前だったな。まあ、それはどうでもいいんだ。

「用件が分かっているなら話は早いな。さっ、今なら返事一つで俺の使い魔として雇ってやる……言っておくが、チャンスは一度だ。抵抗するならそれでいいが……精々、後悔しない選択をすることだ」  
「何……!?!」

要するに、そのまま大人しく使い魔になるか、抵抗して力づくで使い魔にするかの二択を選ばせている。ドラゴンは自由気ままで傲慢

と聞くし、結果は見えているが。

「こちとらここに長居するほど暇じゃないんだ。お前を使い魔にしたらラーメンを食べに行くつもりだからな」

すると、その言葉に対しティアマットはムクリと起き上がると、鋭い眼光で俺を睨みつけて来た。

「ほう、随分と舐めた口をきく……よほどの度胸があるのか、それともただの馬鹿なのか……どちらにしろ、私を使い魔にしたいのなら……それ相応の力をを見せてみる!!」

ボオオオオオツ!!

奴から放たれた燃え盛る炎が俺の上半身を包み込む。しかし、俺はそれを避けようとはせずに唯々真っ正面から受け止めた。炎を吐くのをやめたティアマットは俺を見下しながら鼻で笑う。

「所詮はこの程度か」

奴はこのように言っではいるが

「まあ、所詮はこの程度か」

「ツ!?ば、馬鹿な……いつのまに私の頭の上に!？」

「んー、バリアは張っておいて正解だったな。これ、地球の服でも気に入ってる方のやつだし……燃えるのは御免だ。さて……」

奴の認識さえも許さない速さ（これでもかなり加減）で奴の頭上に両足を乗せる。悠然と奴の頭にそびえる俺は首をコキコキと鳴らすと、奴の頭に足でチョンツと軽く突いた。すると

ドオオオオオオオン!!

「ガアアアアアッ!？」

それだけの攻撃で奴の頭は急降下していき、凄まじい衝撃音と共に身体ごと地面へと突っ伏して意識を失った。まあ、地球では強い方なんだろう。けど、相手が悪かったな。

「よっしゃ、捕獲成功〜」

気の抜けた喜びの声を上げる俺は気絶したティアマットの角を掴んで引きずりながら使い魔の森の入り口へと向かっていった。

「いや、ホントすみませんでした。調子に乗って」

30分後、そのドラゴンは使い魔の森の入り口前で目を覚ますと人間と同じ姿となって土下座までしてきた。美女……と一般的にはそう言われてもおかしくないような顔立ちで少し予想外だった俺はポカンとしており、ザトウゲシもティアマトのこのような姿を見るのがレアだったのか目を輝かせていた。

「す、すげえ……これが破壊神、とてもクールだぜえ……!!」

「は、破壊神!?!でも、シヴァの方じゃない……もしかして、宇宙の方の……わ、私はそのような人に喧嘩を売ってたっていうの……!?!」

すると、そのティアマトは目尻に涙を溜めながら俺の足にガツチリと抱きつき、これでもかというくらいに泣き喚いた。

「びええええん!!怖かったああああ!!お願い!!何度でも謝るから許して下さいいいいい!!何でもじばずがら”あ”あ”あ!!」

「ん?今何でもするって……っておい!鼻水を垂らすなクソツタレが!!離れろおおお!!破壊するつもりなんてないから!!使い魔にするってだけだからな!?!」

「ホ、ホント!?!良かったああああああああああ!!私は生きてるんだあああつ!!アハハハハハハハハハハハハッ!!」

それを分かった途端、歓喜の声を上げて子供のようにはしゃいだ後、地面へ仰向けに倒れて地面の草を筆り空へと投げ払った。

何だコイツ、気でも狂ったか。全く、奴隷のように扱うわけでもないしそこまで怖がらなくてもいいじゃないか。

「んじや、お前は今日から弟子二号兼パシリ一号ってことでよろしく」「はい!……って何でよおおお!!使い魔パシらせるって考えられないわよ!?!それと弟子って何!?!」

「だって俺、破壊神だから」

「理由になってない!?!」

「ごちやごちや言っている場合じゃないので、ザトウーヅにお礼を言  
い俺とレムギットは使い魔の森を抜け出した。」

その後、ラーメンを食べ終わった俺は早速ティアマットを自分の住  
む星へと連れて行く。今はその途中で何万光年も先の星への道をレ  
ムが移動役として担っており、俺がレムの、ティアマットが俺の肩を  
掴んでいる。

「カカオ、お前……案外素直についてきてくれるのな」

「ねえ、それって私のこと？だとしたらシヨックどころの話じゃない  
んだけど」

ティアマット改め『カカオ』は心底複雑そうな表情で俺の背中越し  
から答えた。

「まあ、使い魔の森にいる以上、認めた主人に従うしかないわ。でも、  
私に乱暴する気でしょう?! エロ同人みたいに!」

「……? エロ同人って何だ、レム?」

「えーつと……確かー」

「わーっ! やっぱり忘れて!! 調べなくていいから!!」

地球の文化を把握しきってないから……何が言いたいかを理解  
できなかったが深く追求するのはやめた。

「あ、あの……本当に敬語じゃなくていいの?」

先程、コイツには敬語ではなく、いつも通りの感じで俺に接してく  
れと頼んでおいた。それがかえって怖いのか、もう一度確認してきた  
ティアマットに対し俺は軽く溜息を吐いて答えた。

「あくまでお前やアイツが特別なだけだ。敬語はレムだけで十分だ」

流星に全ての者を同等に扱ってるとかそういうものではない。た  
だ、俺と師匠がそんな感じだったからそれに習ってるだけの話だ  
……。

「ここが俺とレムギットが住んでいる星だ。今はもう一人住んでいる  
が……」

「……ん? あれって……」

星へと到着し、着陸地点へと降り立つ俺達の元に今日はメイド服を  
着たオーフェイスがお出迎えとして歩いてきた。



アイツ、あの服気に入ってるのか……？

「おかえりなさい、ししよー、レムギット」

「ただいま、お留守番ご苦労だったな」

「あ、あれ、ちよつと待って……？（この龍の気配……知ってる気がする……いや、ドラゴンの間では知らない方がおかしい!!まさか……まさか……!!）」

どうやら、俺の後ろにいるティアマットは目の前にいるオーフィスのことが気になっているらしい。

眉間に皺を寄せ、ジロジロとオーフィスを舐め回すように見た後、目を見開いて驚きの表情を浮かべた。

「……ア　ン　タ　ま　さ　か　……　オー　フィ  
スウウウウウウウウウウウウウウウウウツ!？」

「あつ、ティアマット、久しい」

知り合いだったのか。

「今日からお前と同じようにここで仕事するようになったカカオって  
いうんだぞ。クソガキ、同じ職場に知ってる奴がいると気が楽じゃ  
ねえか?」

「うん、ありがとう、ししよー、カカオ」

「いや何でアンタもカカオ呼びなのよおおおおおおおおつ!?!訳がわか  
らないわよおおおおおおおつ!!」

ティアマットの魂の叫びが星の隅々まで響いた。こうして、二人の  
ドラゴンがまさかの別の星で再会してしまったことを、地球の人物は  
誰一人として知ることはないだろう。

## 第12話 新生活スタート

三人称 side

「はあ……地球を飛び出すわ、破壊神の使い魔になっちゃうわ、掃除はするわと……五大龍王のこの私がこんな事になるなんて……人生……いや、龍生って何があるか分からないわ」

「フンフンフーン♪フフフーン♪」

オーフィスが鼻歌を歌って宮殿の掃除をしている中、ティアマットは溜息を吐いてそう言う。しかし、破壊神ブランと出会ったことで自分の『五大龍王』という称号がどれだけちっぽけなものかを思い知った。

「しかもご飯は美味しいし、ベッドはフカフカだし、お風呂は気持ちいいわ……最高って思わず思っちゃったじゃない。この現状を割と受け入れてしまっている自分が怖いわ」

「ティアマット、楽しい？」

「まあ、アンタがティアマット呼びに戻ってくれたから若干マシになったかも……それよりも、オーフィスは変わりすぎたわ」

「……う、我が、変わった……？」

一度モップをかけるのを止め、オーフィスは首を傾げると自分の顔をペタペタと触ってみる。しかし、ティアマットはその行動に対し首を横に振った。

「違う違う。確かに姿も変わったけど、私が言いたいのはそこじゃないわ。『中身』の方」

「中身？」

「そう、前までは何も興味を抱かなかったオーフィスが何かをする事にこんなな楽しんでそうにするなんて……おまけに鼻歌なんて他の龍にも見せつけてやりたい程よ。あつ、それが決して悪い事ってわけではないわ。寧ろ、それだけオーフィスが人生を楽しんでいるってことだと思うし、私はそれでいいと思うわよ」

「我は今、物凄く楽しい。毎日がワクワクして、目に移るものがとても変わったような感じ」

オーフィスは心が高鳴る鼓動を感じて無い胸を張って再びモツプがけをする。その姿を見てティアマツトも同じくモツプがけを再開した。

（オーフィスをここまで変えた破壊神……それに、あのオーフィスが更に強くなっているのが分かる。絶対に勝てないと思つてた者が更に遠くへ引き離されていく……なんか、同じドラゴンとして悔しいわね）

「と、お前は思っているだろう?」

「ひゃあああつ?!ちよつと!ビックリさせないでよ!!」

いつのまにか、ティアマツトの背後にはブランが立っており、突然の事でティアマツトはビックリし、悲鳴を上げた。

「カカオ、目指したいとは思わねえか?全宇宙で最強のドラゴンにさ!」  
「わ、私が……?」

「はつきり言つて地球の奴らは弱すぎる。お前らに合わせてたとえるなら、俺が人間ならお前はハエだ。そんなくらいの差がある……しかしだ、そんなお前が修行をすることによつて、このクソガキや、グレートレッドとかいう雑魚すらも軽々と超えられる……今まで勝てなかった奴を追い抜くつて考えるとワクワクしてこねえか?」

「あのグレートレッドに!?そ、そんな力は私にはない……イタツ!」  
流星にグレートレッドには勝てないと自信無く言うティアマツトにブランは頭をチョップして黙らせる。

「全く、そもそも修行なんかしたことない奴が出来ないとか言うんじゃないやねえ。お前ら地球のドラゴンはどいつもこいつも怠惰すぎる。グレートレッド?あんな雑魚だぞ?ここで修行すれば絶対に勝てるようになる。破壊神である俺とその付き人のレムが約束しような、レム」

「はい。意欲さえあれば必ず、私かブラン様があなた方を強くしてあげましょう。勿論、生半可な修行ではないことは覚えておいてくださいね」

「……!（レムギットも、いつの間に近づいたの?気がついたら現れたつて感じ……この二人はやっぱり底が知れないわ）」

近く気配すら全く感じられないことに驚きを隠せず、ティアマツトは息をするのを一瞬忘れてしまった。しかしそれと同時に不思議と期待や意欲などが心の奥から溢れてくる。自分が強くなるための修行など考えたこともなかった。

果てしない強さを持っているブランは自分では想像もつかない程の厳しい修行をしてきたのだろうと確信。そしてそれをこなした時、果たして自分はどこまで強くなれるのだろうか。彼女はあのグレートレッドすらを圧倒する自分をイメージしてみると心の底から闘志、やる気、高揚感が更に湧き上がってきた。

「面白そう……私、ここで頑張ってみるわ。そしてオフィス、私はいつかアンタと同じステージに立ってみせる」

「ティアマツトが我と同等……楽しみ、ワクワク」

ブランは二人の会話を聞いて、その様子を見ると自分の部屋へと戻っていった。

#### 数時間後

オフィスとティアマツトは今日の家事手伝いが粗方終了すると、今度はブランとの修行が始まる。

「まずお前らは『気』の扱いがクソがつくほどの効率が悪い。特にカカオ、お前はクソガキよりも下手くそだ」

「うぐっ……！」

容赦なく放たれた言葉は的を得ているのでぐうの音も出ないティアマツト。オフィスもまだ気の扱いには完全ではやく不慣れであり、それは彼女もよく分かっているようだ。

「気つてのは扱えるのが上手いほど戦況を有利にできる。戦術の幅も広がる。気を抑えれば気配を消し、相手から位置を特定されなくなる。ことだって可能。そして相手の気の流れを察知することで、相手の動きを読み、自分のペースへと持ち込んでいくこともできる。多少の力

があつても、気を読めることが出来ればそれだけでも戦況は変わってくるぞ。ほら、クソガキ、試しに俺を殴ってみろ」

ブランは目を瞑り、自らの視界を塞ぐと指クイクイと動かすことでオーフィスを挑発する。彼女は早速、そのブランの顔面めがけて思いつきり拳を放った。しかし

「えい……あれ？」

あつさりと避けられる。それ以降も背後や側面から連続で攻撃をしていくが、ブランはそれを体を逸らすだけで躲していく。ティアマットは心の中で『凄い……』と呟いてその光景を眺めていた。まるで、後ろにも目があるのではないかというくらいにブランは目を瞑りながら攻撃を避け続け、最終的にオーフィスの拳を掴んで強制終了させた。

「つまり、こういうことだ。クソガキはまだまだスピードが足りないってのもあるが、極めれば視界を塞がれてもある程度は戦えるし、保険にもなる」

すると、ブランはオーフィスとティアマットに見せつけるように、掌にポワンツと自らの気で形成された球体のエネルギーを出現させる。

「イメージだ。自分の中にある生命エネルギーを……自分の力をこの掌に具現化させる感じだ。んで、それを放つ！」

岩盤めがけて放ったその小さなエネルギー弾は一直線に向かっていき、やがて

ドガアアアアアアン!!

物凄い衝突音と爆発音に包まれてその岩盤は粉々になった。

「よし、やってみろ。そしてこれは毎日習慣として取り組んでもらうぞ」

オーフィスとティアマットはブランから少し離れた場所で今言われた通りに自分の気を操ってみようと試みる。

「力まない、力まない……ふう……」

ティアマットはなるべく力まないように、その両掌にエネルギーを出現させることに集中する。焦っても変わらないことは彼女自身も

良く分かっていることなので、敢えて落ち着きを重視して取り組んでいた。

「うー……ほいつ」

一方、オーフィスは惜しいところまでは到達していた。飲み込みの早い彼女は気弾を出したことがないが割と簡単にできるんじゃないかと思っていたが、エネルギーが形成されたと思っただけで霧散してしまいどれも失敗に終わってしまう。

「む〜」

二人の修行を見てブランはふとあることに気づいた。

（むっ、クソガキは出来ないことにイライラし始めて力んできたな。こういうところで差は出てくるぞ）

飲み込みの早いオーフィスの方が上達するのは早いかと思われたが、ティアマットは彼女よりも気の扱いが下手なのを自覚している故、焦らず、着実にステップを踏んでいくことを考えている。オーフィスは焦りやイライラでなかなか上手くコツが掴めず、その為更に焦燥感に駆られて気の扱いが雑になつてきている。

## 次の日

今日の家事は全てレムギットに任せ、オーフィスとティアマットは一日中修行漬けであり、夜に差し掛かる頃、二人は空腹など忘れて気のコントロールの修行に没頭していた。

「ふう……イメージは出来た。後は具現化させるだけ……」

ティアマットは目を閉じて意識を集中させる。そして身体中のエネルギーを掌に乗せるイメージを持って修行に励んだ。

「蛇を出すのは簡単なのに……むう〜」

（カカオはあと少しだな。それに比べてクソガキは……流石のコイツでも最初のアドバイス受けてもイメージが出来なかったか。それ以降のアドバイスは無しで独学だともポンコツになるとは……）

「44990……!」

ブランは二人の修行を見守る中、重りを装着し一人で身体を逆さに

し、指立て伏せを行なっていた。それも片手でだ。

「49991……49992……49993……49994……！」  
ノルマの50000回達成まであと少し。そのあと少しというところだ

「出来たあああつ!!」

「うおっ!?あわわっ、うわあああつ!!」

ティアマットが突然大声を上げたことでビックリしたブランは体を崩してしまい、そのまま仰向けになって倒れてしまう。

「やつちまった……あれだけのことで倒れちまうなんて体が鈍ってる証拠だな……」

ブランは舌打ちをすると、すぐに立ち上がってティアマットの方へと歩み寄る。すると、彼女の掌には彼女と同じ綺麗な蒼い髪と同じ色をした蒼い球体エネルギーがフワフワと浮き上がっており、それを維持することに今度は集中していた。

「よし、今度はそれを自分の周りに飛び回せろ。まずはゆっくりでいい」

「ふう……ぐっ、難しいわ。少しでも気を抜くと弾け飛んでしまいそう……!」

ティアマットはそのエネルギー弾を自在に操れるように動かそうとしてみるが、まだ思うように動かせずエネルギー弾自体もプルプルと震えていた。そして

「あっー!」

集中しすぎて張り詰めた糸が切れたようにそのエネルギー弾シュンツと消えてしまう。それを見てブランは顎に手を当ててなにかを考えた後にティアマットにアドバイスをする。

「ステップーは終了ってとこだな。いいか、まだこれは序の序の口だ。これを毎日続けて気を自分のモノにするんだ」

「はあ……はあ……分かったわ……」

これだけでも気力の消耗が激しいことにティアマットは如何に修行というものが困難なものなのかを改めて理解する。そしてオーフィスはというと

「むむむ……！」

未だに気の玉を維持することに行き詰まっているようである。飲み込みが早すぎても、彼女自身まだ感覚が掴めていないのだろう。

「クソガキ、頑張ってるようだけどそんなのはただ力を入れていただけで何も生まれないぞ。諦めるか？」

「やだ、我、諦めない」

オーフィスのその頑固さだけはブランは一流だと認める。が、修行はともかくティアマツトが段階的に自分の先にいることにオーフィスは焦りを感じる。その様子を見てブランは察したのか、オーフィスの頭を軽く叩いた。

「あう……！」

「おい、お前は力カオとは違うぞ。周りなんか関係ねえ、自分のペースで強くなる事を考えろ」

「でも……」

「所詮、俺から見ればお前らなんかどんぐりの背比べってやつだ。それに焦らなくても時間はたっぷりあるんだ。まずは落ち着け」

「……うん」

ブランはそれだけを伝えると、オーフィスは力弱く頷いて今日の修行はここで終わりとなった。

「腹も減ったし、そろそろ飯にするぞ」

「はあく……それを思い出したら一気に空腹が押し寄せてきたわ」  
「我も何か食べたい」

そのまた次の日、またまた次の日と、時間はどんどん流れていった。そして、気のコントロールの修行を始めて5日後、ついに

「出来た、我にも出来た……！」

嬉しそうにそう呟くオーフィスは自分の手から出現した気の塊を大事そうに両手で包み込む。

「戦闘力に関しては普通の一般人よりも高いし、力の扱い方には多少なりとも上達は早いな。まっ、やればできるじゃないか、クソガキ」  
「うん……！」



何かをやり遂げ、成功した時の達成感を感じたオーフィスは笑顔になる。ブランはそれを見て今度はティアマツトの方に視線を向ける。「右……それでそこから左に方向転換、上、下、前……これをもっと速く……」

命中度を高めるために、ティアマツトは自ら出した蒼いエネルギー弾をゆっくりだが自在に操ることに成功している。それを見てブランは口角を上げて笑みを浮かべる。

「よし、今度は飛べ。といっても、クソガキは出来そうだな。無意識だが気を扱って飛ぶことは出来ていたし。カカオは龍化して翼で飛ぶんじゃない、気を使って身体を浮かせるんだ。いいな？」

気を扱うことに慣れ、それをコントロールし飛ぶ術、これを一部では『舞空術』と呼ばれる。気をコントロール出来るならば、これを会得するにはそこまで苦労はしない。基礎は出来ているので後は応用というわけだ。

「気のコントロールを会得したなら後は出来る。やってみろ」

これに関してはオーフィスはすぐに出来た。元々飛ぶという事は自分で会得していたためか、そこまで苦労はしなかった。一方、ティアマツトは

「よつと……ちよつとだけ浮き上がったわ」

ほんの少しだけだが、ティアマツトの身体が宙に浮く。それを維持すると、ブランは次の指示を出す。

「よし、そのまま飛び回ってみろ。が、クソガキのようにいきなりビュンビュンと素早く飛び回るのじゃなく、徐々に体に慣れさせていくんだ」

見ると、オーフィスは空を縦横無尽に駆け回っていた。しかし、ティアマツトはそんなことよりも自分がそれを目で追っていたことに気づく。以前は圧倒的な差があった自分とオーフィス。その彼女の動きを自然と目で追っていることに驚愕する。

「オーフィスの動きを捉えているというの……私が？」

「それも気の動きを読めているという証だ。ただ単に目で追うよりもよっぽど楽でいいだろう？」

「……よし」

ティアマツトは少しずつだが、オフィスに近づいていつていることに自信を持つと、空を自由自在に飛ぶ練習を始める。

こうして、二人の修行は毎日続いていた。しかし、これはまだ修行のスタート地点に過ぎない。二人にとつての本当の修行とはまだ先の事であった。

一方、その頃地球では一つの事件が勃発していた。

三大勢力の一角、墮天使勢力の幹部が教会側が所持している『エクスカリバー』というものを盗んだらしく、その対処役として教会側から二人の聖剣使いが駒王町に派遣された。

何故、駒王町なのかというと、その聖剣を盗んだ犯人が町に潜んでいる可能性が濃厚だからである。

今、その二人の聖剣使いは白いローブを纏い、夜の町を歩いていた。「ねえゼノヴィア。明日、悪魔側と交渉をするんでしょ？大丈夫なの？」

栗色髪のツインテールの少女、『紫藤イリナ』は相方にそう聞く。そして、その問いに青い髪に緑のメッシュがかかった少女、『ゼノヴィア』は無表情のまま答える。

「ああ、向こうが勝手な真似さえしてくれなければ、問題無く聖剣は取り戻し、もしくは破壊が出来るだろう。聖剣を忌むべきものと考えている悪魔と墮天使が手を組んでいる可能性を考慮すれば下手に手を貸してもらうよりも余程良い。私達の命の保証はないが」

「そうね。それに最近、この町に破壊神が現れたという情報を耳にし

たわ。まさか、異教の神がコカビエルと手を組んでいるのかしら？」  
「それは分からない。しかし、警戒は怠らないようにしよう。そして今は寝床を探さなくては……」

二人はそう言うのと寝床を探すために歩幅を合わせて道を進んでいった。

一方、あのレイナーレとの事件が終わるとイツセー達は上級悪魔との婚約破棄を賭けたレーティングゲームを行った。ゲームには負けしたが、その後の魔王が取り仕切った式典余興を制したことでリアスの婚約破棄には何とか成功した。

そしてその数日後、イツセーは先程の聖剣使いの幼馴染、イリナと再会し、彼女とその相方であるゼノヴィアと家で別れた後、イツセーはある事を思い出し、拳を震わせた。

「部長はあの破壊神ってやつに手を出さなつて言われたけど……納得いかねえ」

その顔は怒りに満ちていた。その矛先は以前、自分を殴り飛ばしたブランに対してであるが、それ以上に許せないことがあった。

「どうやったか知らないけど、アーシアから奪った神器を何処かにやりやがって！あれはあの子の力だつてのに……レイナーレも、破壊神も許せねえ！いつか、いつか絶対にぶっ飛ばしてやる！」

イツセーはあの時、ブランによって破壊されたアーシアの神器の行方が分からず、何かしらの方法でブランがレイナーレと共にアーシアの神器を消したと思い、怒りを燃やしていた。しかし

「や、やめろー！それ以上奴に喧嘩を売るな相棒！破壊神にだけは手を出しちやいけないんだ！まず、そもそもこうやってまだ生きているところこそが奇跡なんだぞ！」

「うるせえ！何でアーシアがあんな酷い目に合わなきやいけないんだ！あんな優しい子に相応しい力を奪われて……黙ってられるかよ!!」  
彼に宿る神器の意識、『ドライブ』は必死になってブランと対決しようとするイツセーにやめさせようと呼びかける。先の戦争で先代ブ

ランに一撃でやられた彼はまず、イツセーでは絶対に勝ち目が無いと分かってるので戦う事は避けるべきだと思った。しかし、そんな彼の声は怒りに囚われたイツセーには届かず、力を貸すよりも早くここから抜け出したいと思うほど精神が追い詰められていた。

## 第13話 ちよつとだけ深まる師弟関係

三人称 side

翌日、駒王学園オカルト研究部にて、二人の聖剣使いと魔王の妹がお互いに向かい合っていた。魔王の妹であるリアスの後ろには彼女の眷属達が背後に立っており、その一人である木場 裕斗は何やら部屋の隅っこの壁に腰をかけて聖剣使いであるゼノヴィアとイリナを睨みつけていた。それにはゼノヴィアやイリナも気づいてはいたが、無視をして要件について話し始める。

「この度、会談を了承してもらって感謝する。私はゼノヴィア」

「私は紫藤イリナです」

「私はグレモリー家次期当主、リアス・グレモリーよ。それで、教会側の人達が私達悪魔に何の用かしら？」

お互いに挨拶を交わすと、リアスはゼノヴィアとイリナを鋭い視線で見つめると今回の会談の内容についての疑問を投げかけ、それに対してはゼノヴィアが答えた。

「簡潔に言おう。教会側が所有しているエクスカリバーが、墮天使たちによって奪われた」

「何ですって!？」

「我々がこの地に来たのはエクスカリバーを奪った墮天使がこの町に潜伏しているという情報を掴んだからだ。我々はそれを奪取、もしくは破壊するためにここに来た」

「墮天使に奪われるくらいなら、壊した方がマシなもの」

リアスが驚くと事の経緯を説明するゼノヴィアとイリナは割と淡々としており、リアスは教会側の不手際に対し不満や苛立ちを覚えるが外面は冷静であった。

「……………ならば、その墮天使の名は？」

リアスはそう聞くと、ゼノヴィアは重い口調で答えた。

『神の子を見張る者』の幹部……………コカビエル」

「コカビエルですって……………!？」

その犯人の名前が挙がると、その場にいたイツセー以外は驚愕の表

情を浮かべる。コカビエルは先の三大勢力の戦争にも参加していた墮天使で、少なくともリアスや聖剣使いの二人よりかは戦闘経験も豊富な実力者である。

「……………それで、貴方達は私達に何を要求するのかしら？」

「簡単だ。私達の依頼…………いや、要求は私達と墮天使のエクスカリバー争奪の戦いに悪魔が介入してこないこと。つまり、今回の事件で悪魔側は関わるなということだ」

「まさか、私達が墮天使と手を組むとでも？」

「可能性がない……………と言いきれるか？悪魔にとってエクスカリバーは忌むべきものだ。そうだろう？もし、そちらが墮天使と手を組んでい  
るなら、私達はあなた達を完全に消滅させる。たとえば、魔王の妹でも  
ね」

リアスはゼノヴィアのその言葉に対し、軽く殺気を飛ばしていた。瞳には怒りが感じられ、まだ新人悪魔として日が浅いイツセーはビクツと身体を震わせているほどだ。が、それでも痾癩は起こさず、彼女は優雅に対処する。

「そう、ならば言わせてもらおうわ。私達はそんなことしない。魔王の妹として、次期当主として、魔王の顔に泥を塗るような真似は決してしないわ」

「それを聞いただけでも十分だ。それでは失礼する」

会談がキリのいいところで終わったことでゼノヴィアとイリナはその場から立ち去ろうとするが、その場にいた一人の少女の存在に気がつくと足を止めて怪訝な顔で彼女を見つめた。

「……………ん？顔を見た時もしやと思ったが……………君はもしかしてアーシア・アルジェントか？」

「は、はい……………」

「まさか……………こんな地で『魔女』に会えるとはな」

「あく！あの墮天使や悪魔を治す力があるから追放されたっていう元聖女さん？」

イリナもアーシアの存在をやっと確認した事でバカにするように彼女をマジマジと見つめ、笑っていた。

「まさか悪魔と一緒にいるとはな。とことん堕ちるのか」

「わ、私は……………」

「今でも信仰を続けているのか？それとも、もう主を信じてはいないのか？」

「す…………捨てきれないだけです…………。ずっと…………信じてきましたから…………」

すると、ゼノヴィアは背中に携えている包帯が巻かれた大剣、

『破壊の聖剣』に手を伸ばし、そのまま剣をアーシアに向けた。

「ならば今すぐ私達に斬られるといい。君が罪深くとも主は手を差し伸べてくれるはずだ。せめて私の手で断罪してやる。…………むっ？だが、今の君には何か特別な力を感じないな…………まさか、力を抜き取られてそれから悪魔に転生させられたと言ったところか」

「わ、分からないです。でも…………あの力を取り込んだレイナー様を倒したのは、その破壊の神様なのでその方と何か関連があるんじゃないかって、部長さんが…………」

あながち間違っていない推理である。何故なら、アーシアに宿っていた神器はレイナーごと、そして『システム』ごとブランに破壊されたのだから。神器所有者は今代が死ぬことよってランダムで生まれてくる人間に宿る。そのシステムを破壊したことよって最早、誰にも宿ることはなくなった『聖母の微笑み』トワイライト・ヒーリングという神器はこの世から抹消されたということである。そして、ここでイリナは確信にも近い推測をする。

「恐らく破壊の神様なのだから、何らかの方法で神器を破壊されたところじゃないかしら？でも、主からの贈り物を破壊されるなんて、主を崇める私達からしたら怒り心頭よね」

「フツ、だとしてもその破壊神には感謝せねばな。魔女と言われる根源である神器を取っ払ってくれるなど、君にとってはこれ以上のない罰だ。それに主が作り上げた神器を君のような魔女に使われるよりはよっぽど良い」

「テメエツ！もういつペン言ってみろ!!」

ゼノヴィアの言葉に激昂したイツセーは彼女に掴みかかろうとし

だが、背後の小猫に肩を掴まれ、静止させられていた。それでもなお、怒りの表情を変えないままゼノヴィアを睨み続けるが彼女はそれを見て鼻で笑った。

「魔女は魔女、それは事実だ。彼女は教会側からそのように呼ばれるだけの存在だと思おうが?」

「勝手に聖女聖女と祭り上げといてふざけんな!!アーシアはただ傷ついている人を治したただけだろうが!!この子の優しさが分からないお前らも、助けてくれなかった神も……アイツだって最低な奴らだ!!」

「貴様……主を侮辱するつもりか!!」

イツセーの言う『アイツ』というのは恐らく破壊神である『ブラン』のことだろう。そして自分達だけでなく、信仰している聖書の神までを罵倒したことで今度はゼノヴィアがイツセーに食ってかかる。

「イツセー、やめなさい!」

ここでお互いの怒りが衝突し合い、暴力で解決しそうになったところをリアスは止めようとしたが、ここで一人の男がイツセーとゼノヴィアの間に入ってくる。

「なら、僕も混ぜてもらおう」

「なんだ、君は?」

先程から部屋の壁に腰掛けていた木場がやつと口を開いたと思ったら何やら妙にゼノヴィアやイリナに喧嘩腰で睨みつけており、ゼノヴィアが反応すると彼はこう答えた。

「君達の先輩だよ。……失敗作らしいけど」

一方、ブランの星に滞在しているオーフィスとティアマットは今日も修行に励んでいた。

「501……502……!し、死ぬ……!」

レムギットの不思議な力により、40倍の重力をその身体にかけた



ティアマットとオフィスはそのまま腕立て伏せを行なっている。因みにノルマは1000回であり、ブランは実際に腕立て伏せをしているオフィスの中で腰掛けながらアドバイスをしていた。

「徹底的に自分を追い込まなきゃ、本当の強さは得られないぞ。それに、まだこれでも序盤なんだ。慣れてきたらどんどん重力を上げていき、それと同時に日課である気のコントロールの修行にも取り組んでもらうぞ」

「ししよー、重い……510……511……」

「そうか、残念……これが終わったらレムが作るハンバーグが食えるというのに。頑張ったらとびつきり美味しいのを作るって言っただけどなあ」

それを聞くと、オフィスの目がキラリと光り、あからさまにやる気を増幅させ腕立て伏せにもキレが出てきた。どうやらハンバーグは彼女にとっては好物のようで、

「40倍の重力って……ふっぎけんじやないわよ……これ、キツイってもんじやないわよ……!?600……601……!」

立っているだけでも膝をついてしまいそうだというのに、これで腕立て伏せなど今までのティアマットなら考えたこともなかった。すると、ティアマットは腕立て伏せの最中、気になったことがありブランに問う。

「あのさ、貴方はどれだけの重力に耐えることができるの……?」

その問いにブランは彼女を一瞥すると、顎に手を当てて考え込む。そして、軽いため息をつくティアマットにまた視線を移して口を開く。

「そうだな……まあ、重力トレーニングはしばらくやってないから俺自身、どこまでが限界かは忘れた。……が、その気になれば600倍の重力くらいは耐えられる筈だ」

「……600倍……?あは、ははは……狂ってるわ……」

嘘とは思えないブランのその言葉の重みと自身が見た圧倒的な強さはそれほど、ブランはこの星で過酷な修行を受けてきたということ物語っていた。それを改めて理解したティアマットは乾いた笑いを

を浮かべる。

「だが、それはお前達でもその内耐えることが出来る筈だ」

「……貴方にも勝てる日が来るのかしら？ 実はその自信が全く無くて……」

ティアマットとブランの差はまだ天と地……いや、それどころか地球と太陽の距離ほどある。それ故にティアマットは少し自信を無くしていたが、ブランはそんなティアマット対し、自分なりに鼓舞する。「それはお前達次第だ。それに、たとえ相手よりも弱くても努力すれば、エリートを超えることがあるかもしれねえぞ。そう、エリートを超える……ことがな」

すると、思わず何か口を滑らしてしまったのか、突然下を向いて黙ってしまったブランに対しティアマットは頭に疑問符を浮かべ浮かべる。ティアマットは下からブランの顔をのぞいてみると、彼は普段は見せないどこか暗い顔をしていた。だからこそ、心配になったティアマットは彼に声をかける。

「どうしたの？ 下向いちやって……」

「ん？ あつ、いや、何でもねえ。あー、修行の邪魔しちゃってわりい、続けてくれ」

声をかけられ、また元の無表情になったブランはティアマットに修行を再開させ、オーフィスの背中から降りると歩き始め、二人からどんどん離れていく。

ブ  
ラ  
ン  
s  
i  
d  
e

俺はこれ以上いると二人の修行の邪魔になると思い、あとは自主練とさせて宮殿よりも少し離れたところにあると丘の上へと座り込む。

「……ファン、凡才がエリートに勝つ……か」

そう言うと、破壊神の正装の一つのポケットからある物を取り出す。それはいつも俺が肌身離さず持ち歩いているものだ。俺はそれ

を見つめるとギュツと握りしめ、星の風景を眺めていた。

「情けねえ。やつぱり、過去を今でも引きずってる俺は全宇宙の破壊神と比べて未熟だ。こんなんじや、俺の心はいつまでも冷えてるままなんだよ……」

たとえ表向きは笑っていても、俺の中身は既に『あの時』から時が止まったように固まったままだ。仕事をこなし、美味しい飯を食い、修行をして、寝る……その毎日の繰り返しにある日、変化が起こった。それがオーフィス、ティアマツトという二人の弟子だ。いつか、あの二人は俺に追いついてくる。その可能性だってある。だが、追い抜かれることへの不安はないし、寧ろ俺にとっての好敵手、遊び相手になるのなら万々歳だ。しかし

「でもやつぱり……俺はお前と闘ってみてえんだ……もう一度……」

しかし、その気持ちの反面、俺の胸を締め付けるような感覚が走る。ズキズキとした、形容し難いこの胸の痛みは泥沼に沈みかかっている俺の心を更に奥底へと引きずり込もうとする程、苦しいものだった。会いにいかうと思えば、会えるのかもしれない。だけど俺にはその資格がないんだ。

「メザーナ……すまねえ……」

ある人の名前を呟き、持っている『物』をまた強く握りしめると、俺は仰向けに寝そべて夕焼けになりかけた空をジツと見つめたまま、ゆっくりと瞼を閉じていく。そして……やがて自然と寝息を立てながら眠ってしまった……。

## 夜

「……ああ……寝ちまつてたのか……」

俺はいつのまにか寝てしまっていたらしく、目を覚ますと身体を伸ばして起き上がろうとした。空は暗く、夜になってしまったことはすぐに理解し、それと同時に空腹を感じたことで急いで宮殿へと帰ろうと思った。しかし

「すう……すう……」

「……はあ……」

何故かオーフィスが俺のすぐ横で気持ち良さそうに寝ていた。

何でコイツがここにいった。まあ、とりあえず起こすか。

「おいクソガキ、起きろ。……おい！」

「んみゆ……」

身体を揺さぶってみると、ゆっくりと目を覚ましたオーフィスは俺のことをジッと見つめる。そして……笑った。その表情が癪に障った俺は無表情で聞いてみた。

「何で笑ってやがる？」

「ししよー、泣いてたから」

「は、はあ？」

何言ってる？俺が……泣いてた……？

俺は自分の目元に手を触れてみると、若干の生暖かい感触を感じ取れた。認めたくはないが、恐らくは涙の跡だろう。俺はそれが分かるのと、急いで手で擦って拭ぐう。

「今日の修行終わった。それと、本に書いてあった。泣くときは、悲しい時だって。だから、我、ししよーのこと元気にしたかった。一緒に寝てあげようって、思った」

「泣いてなんかねえ、あれはただ目にゴミが入っただけだ。お前が気に入ることじゃねえよ」

俺はまさかそんなところを見られていたとは思わなかった。心の中では少し動揺したが、弱みは見せたくないため、敢えて平常を装う。そのままその場から立ち去ろうとしたが、オーフィスはそれを阻止するかのように、俺にとって衝撃的な質問をしてきた。

「メザーナって……誰？」

「ッ！お前、どこでそれを……！」

「ひゃう……！」

その瞬間、俺はオーフィスに軽く殺気を飛ばして睨みつける。普段からは発しない威圧感に奴はそれに耐えきれないのか、膝を地面について声を震わせながら呟いた。

「寝言……あう……」

「ッ……悪い」

そうだ、考えれば分かることだった。寝る前に呟いた言葉を寝ている最中にも呟いても可笑しくはないし、なにせコイツは俺の横に来ていたんだ……可能性としては十分に考えられる理由だった。俺が今コイツにしたことは只の八つ当たりに変わりない。それだったのに、俺はこれだけのことで頭に血がのぼるなんてよ……。

「我、ししよーのこと、元気付けたくて……」

「クソガキ、すまん!!俺の早とちりでお前に八つ当たりしちまって、今回は完全に俺が悪かった!」

「?」

俺が突然大声で謝罪をし、反省の意を示そうとした。オーフィスは首を傾げて分からないという表情をするが、俺が何のために謝っているのか理解すると和やかに笑って返答をした。

「でも、ししよーがいつも通りに戻って良かった。だから、我、気にしてない……あれ?」

オーフィスは立ち上がりようとしたが、修行の疲れが身体にきていたせいもあって上手く立てないようだ。俺は先程立ち去ろうとしたが、すぐにオーフィスの脇の下に両手を入れて身体を持ち上げる。

「流石に疲れもあって殺気も受ければ立ってないか。今回は俺に非があるからよ、このまま連れて行ってやる……っつておい、抱きつくな! ひつつくな!」

「暖かい……ししよーの身体……」

両脚を俺の腰辺りまで回し離れなくなったので何故か抱つこのよくな体勢になってしまったが、仕方ないので俺もオーフィスの背中に片腕を回してこのまま宮殿へと歩みを進めた。

（ししよーといると、我、とても楽しい。でも、ししよーが悲しくなると、我も悲しくなる……どうして?それに、ししよーの身体と触れると、胸が熱くなる……何、この感情……?）

（全く、一丁前に誰かの為にかかするなんてよ……変わったじゃねえか……弟子が頑張ってるのに、しよぼくれてる師匠なんてみつともねえよな）

「よし、カカオは飯食っただろうし、二人で一緒にハンバーグ食って明日も頑張るか」

「おー」

今日の事は俺にとってはもしかしたら特別な日だったのかもしれない。少しだけだが、コイツも人との関わりを深めていつている。そしてオーフィスは勿論、ティアマツトの成長を確認できたことに心が躍った俺は、明日コイツらの為に何か地球でお土産を買っていこうと決めた。

しかし、この時の俺は知らなかった。今、地球の駒王町ではとある事件が起こっていたということ……そして、それに対する戦力があまりにも非力すぎることに呆れてしまうことを。

## 第14話 食べ物とお婆さんの想いを込めて

ブランチ side

次の日

今日の午前は修行ではなく、レムによる講義を行った。学び舎の教室を思わせる部屋には二つの椅子と机が用意されており、そこにオーフィスとティアマツトが座ってノートを広げている。

黒板の前にはレムギットが立っており、俺は部屋の隅で腕を組みながらその様子を眺めていた。こうして第三者からの視点で見ると俺もアイツらと同じように勉強に励んでいたころを思い出す。

懐かしいな……初めの頃は何にも分かんなくて大変だったし、俺は戦うことしか能がなかったからな……。

「さあ、今回も始まりました！楽しい楽しい、レムギットちゃんの授業です！オーフィスさん、ティアマツトさん！今日も一日頑張りましょう！」

「おー」

「お、おー……？」

オーフィスはレムの掛け声に呼応して両手を上げ、万歳のポーズ。一方、ティアマツトはノリに乗れずにぎこちない感じで片手を上げた。

そして授業が始まる。因みに俺は副担任って感じの立ち位置で生徒であるコイツらのサポートをする役だ。

オーフィスはこれまで何度か宇宙の神々についての話は聞いていたが、ティアマツトはこれが初めての授業である故、少し遅れがちだ。なので、奴はこれまでオーフィスの習ったことをそのまま教え、オーフィスの得た知識に追いついたら二人同時に進めることとなった。

ティアマツトは自分が知らない神様である界王神や全王様などの話を聞いて度肝を抜かれたような顔をしながらノートを取っている。ここでおさらいとして、全王様は簡単に言えばこの世で一番偉い人だ。そして、『最強』。戦わないが、『最強』である。宇宙というものが存在した時から全王様はこの世で一番偉かった。それは何万、何億年

も変わらず、後釜なども存在しない……宇宙の法則、まあ、神の中では極当たり前に知られていることなのだ。

ん？何故、そのことに疑問を持たないのかだって？……そうだな、何故一番偉いのか、何故そんな力を持っているのか？様々な疑問は出てくる筈だ。

じゃあ、聞こう。何故、オーフィスは『無限』のエネルギーを秘めている？何故、生まれた時から地球の中では二番目に強かった？オーフィスだって自分が『無限』を司る本当の理由など知らない。気づいてたら生まれていて、その力を持つてたって認識なのだから。そう、お前達が聞いているのはそういうことだ。誰も分からない……要するに、大まかなことは一般に知られているが、解き明かせない謎を質問していることに変わりないんだ。一々気にしてたらキリがない。

さて、ある程度レムがティアマットに説明する中、オーフィスは自分が先に習っていて暇だからかヨダレを垂らしながら爆睡してやがった。

このクソガキ……。

「おい、起きろバカ」

「あうっ！」

俺はオーフィスの背後にすぐさま立つと頭に軽いチョップを下す。頭にチョップを叩き込まれたオーフィスは頭部を押さえてうずくまると、垂れかかっていたヨダレを『じゅるっ』と言う音と共に口の中に戻した。

「ありがとうございますブラン様。ちょうど終わったところですから」

「フン、これくらいは手伝ってやる」

『氣遣うな』という意味でのその言葉に対し、レムは『フフッ』と和やかに笑うと授業を再開する。

「ここまでで何か質問をしたい方、今なら受け付けますよ」

「はいー」

「はい、ティアマットさん」

「宇宙って個数があるって聞いたけど……本当？」



「おお、実はその質問の答えは今明かす予定だったのでナイスタイミングでの質問です。ブラン様、お手伝いをお願いしてもよろしいでしょうか?」

「任せておけ」

レムは杖をトンツと床に突くと、辺りの背景が宇宙空間と同じようなものへと変わった。オーフィスとティアアマットは驚くが、これは本当の宇宙空間ではなく、あくまで立体映像であるので酸素の心配はない。

すると、その立体映像の中心に全王様の住む屋敷が映り、それを囲むように13の宇宙が球体として表示され、俺は説明する。

「この宇宙は個数で分かれてあつて全部で13個ある。そして、それらは『第1宇宙と第2宇宙』、『第6宇宙と第7宇宙』と足して『13』になるように対の関係となっている。そしてお前ら、宇宙は元は全部で『18個』あつたんだ」

「元は?」

オーフィスとティアアマットは首をコテンと傾げる。ここで二人の疑問は一致する。そう、つまり

「今、お前ら二人の間には同じ疑問が頭をよぎった筈だ……そう、『13個以外の宇宙は何処にいったのか?』というものだ。答えは簡単、全王様に消滅させられたからだ」

「嘘……宇宙ごと……消滅!?!」

ティアアマットは背中がゾクつとするような悪寒に襲われる。幾ら何でも宇宙ごと消滅させる程の力があるのは次元が違うどころの話ではなかったからだ。

「消滅させられる理由はいくつかある。まず一つ、人間レベルが低すぎる事だ」

「人間レベル……あらゆる星の文化、人間の戦闘力、知力などをステータスとしてまとめ、平均化したものってさつき習ったわね……それって基準はあるの?」

「……俺はそこまで詳しく聞いてない。0から10まで段階での細かいところまで評価され、確か現時点で一番低い第9宇宙は1.86だ

……それより低いのが無いから1未満がアウトなのかもしれないねえ。因みに、そんなに低いレベルになるのは人間達が悪いんじゃない、破壊神と界王神に問題がある」

「……どういうこと？」

「破壊神はレベルが低い星を破壊……要するに間引きしていき、新たなスタートをさせる為に界王神は星を新たに創造する。これらの繰り返しで人間レベルを保っていくのがセオリーだ。つまり、仕事をサボりすぎるとレベルの低い星ばかりが残ってしまい、破壊しないことで界王神は星を創造も出来なくなつてレベルを下げる要因と化す。そう、人間レベルは本来、人間がどうするかではなく、どちらかといえば破壊神と界王神の仕事の手早さによってレベルは左右されると言つても過言じゃないつてわけだ」

平均化されるのは星と人間のステータスだが、あくまで調整役は俺と界王神ということだ。

「さて、続きだ。まだ消滅させられる理由はある……が、これはぶつちやけかなり酷い理由だ。それは、全王様が機嫌を損ねたから……というものだ」

「……は？」

二人は素つ頓狂な声を上げる。それはそうだ。レムは涼しい顔をしているが、はつきり言つてこれには俺も納得はいかないしな。

「まあ、全王様には逆らえない。逆らつた時点で消滅。しかも自由奔放な方で、お前らがえげつないと思うことでもあの方は笑顔でそれをこなすだろう。この世はあの方の為に動いている……そう捉えてもいいかもな。理不尽だろ？」

二人は頷く。

「だが、理不尽なんかどこでもあるし、これが特別な事じゃねえぞ……あくまで規模が大きすぎるだけだ。だから俺達、破壊神はその理不尽から逃れようと、機嫌を損ねないように振る舞い、仕事をこなす。人間レベルには特に気をつけないといつ破壊されるか分かつたもんじゃないからな」

「つまり……破壊神の立場つて……常に宇宙の命運を握つて……て

こと?」

「まっ、そういうことだ。お前らもそれを肝に命じておけ。確かに破壊神は自由で、戦いだつて少ない、美味しい飯を食つて美味しい酒に酔う……楽しい生活に見えるかもしれないねえ。だが、その裏には重いものを背負つてゐることを忘れるなよ」

俺の言葉にオーフィスとティアマトは強く頷いた。まあ、全王様の話も絡めば流石に動揺はするだろう。怯える様子もあるが、粗相のないように接すれば何もされない。それも後で教えておくか。

「さて、俺の説明は終わりだ……レム、あとは頼む」

「かしこまりました。オーフィスさん、ティアマトさん、これが今日の最後の授業です。この宇宙はこの宇宙とも対になっていない故に『第0宇宙』と呼ばれています。何故か、分かりますか?」

レムが質問をするが、二人は机に突つ伏しており、動かなくなつた。「無理、今日はどつと疲れた……」

「我も……凄い話聞いて頭が追いつかない……」

まあ、流石に動揺が大きすぎたか……いつ、消滅させられるか分からないからこそ、ビクビク怯えながら生きていかないといけないと感じているのだろう。少し精神的にきたか……?

「あらら……仕方ありません。今日こそは教えようと思いましたが、また今度にしましょう。あとはこれだけなので、次回こそは絶対に覚えましょうね。では、今回はここまで!ありがとうございました!」  
「ありがとうございます!」

今日の講義はここで終わりになり、俺はレムに地球へと連れて行つてもらつた。一方、レムは元の星へと帰り、オーフィスとティアマトと女の子同士の戯れをするらしいので午後は一人で地球をぶらつき回わる。

▽

地球に着き、俺は駒王町のとある店へとやってきた。そこは俺とレムのお気に入りのお豚カツ屋であり、一人の婆さんが経営しているとても小さな店である。が、味は絶品だ。

俺がその店に入ると、その婆さんは愛想良く笑いながら俺を迎えてくれた。

「あら、今日も来てくれたんだねえ、カツコイイ兄ちゃん」

「兄ちゃんはやめてくれ、もうそんな歳じゃねえよ」

確かにサイヤ人は長き戦闘を行う為、若い時期が長い種族である。それ故に、この地球では『おっさん』と言われる歳でもまだ老けるほど見た目は変わらない。お兄さんと言われてもおかしくはないがむず痒い気持ちになるのであまり嬉しくはない。

「婆さん、特製秘伝のタレ付き豚カツを20切れくらいくれ」

「はいよ、いつもありがとねえ」

この店には何度か来ており、店特製の秘伝のタレがかかったこの豚カツがたまらなく美味かったので偶によく買いに来ている。オーフィスとティアマットの土産にはちょうど良いだろう。

……あつ、そういうえば師匠にお土産持つていくのすっかり忘れてたな。近いうちに会いに行くか、あの老いぼれ……日頃は呑気に茶でも飲んでるだろうからいきなり来たら驚くだろうな。

「嬉しいねえ、こんな年寄りが構える店に来てくれるなんて、身寄りがない私にとってこれ以上ない喜びだよ。いつ死んでも構わないよ……」

「弱気なこと言ってるじゃねえよ。少なくとも、こんな美味しいもの作れるくらい元気ならまだ長生き出来る。アンタが生きてる内には俺もまだまだこの豚カツを食べるつもりだからよ、それまではちゃんと生きておけよ、婆さん」

「そこまで言われちゃ、まだまだ死ねないねえ」

そんな会話を交わし、会計を済ませて品物を受け取った俺はその場を後にした。

「また来ておくれよ。あつ、レムギットちゃんにも宜しく言っておいてちょうだいな！」

「サンキュー、また来るぞ。レムには俺からバツチリ伝えておく（ぷっ、『ちゃん』付けとか子供かよ……！・ククク……！）」

アイツは確かに子供と間違えられてもおかしくなくらいチビだからな。……アレで強さは俺以上とかおかしいだろ。

▽

レムが俺を迎えに来るのは夜だ。それまで暇なのでせっかくだから街を散歩してみた。

まあ、それでもやはり暇なのに変わりのないで、街に蔓延る一般人とすれ違う度にその声に耳を傾けてみた。

マジ卍？水素の音？

こういう時、レムがいないと何も分からないから、地球の流行にはついていけないな。今度自分でも調べてみるか……そういえば、レムがこの地球には『スマホ』と言われるものがあると聞いたことがある。あらゆる情報をその端末一つでゲットできるという優れものらしい……チツ、しかし今は金が足りないな。

今までこの星で買い物が出るのは、他の星で採れた珍しいものを売って金にしていたからだ。が、それが尽きるのも時間の問題。そろそろ他の星で金に変えられそうな物を調達してこなければな。

▽

夜

「チツ、どうなってやがる……」

レムはまだ来ない。が、それよりも気になることがあった。気まぐれとして辺りの気を探してみると、この町にいつのまにか墮天使が

入ってきてたのが分かった。人数は二人……だな。しかも、そいつらの気がこの前破壊した奴らよりもよっぽど大きい。……が、俺にとつてはゴミレベルだし、もう一人の奴は気の隠し方が下手つぴも良いとこだ。これで隠れてるつもりだったらお笑い草だぜ。まずはコイツと接触を図ってみるか。もしかしたら親玉かもしれねえからな。  
俺は瞬間移動で隠れてるつもりで墮天使の元へと向かった。

▽

「おい、お前誰だ？」

「うおおっ!?!ビックリしたあぁっ!!お前こそ誰だ!?!てかどうやって入ってきた!?!」

瞬間移動した場所にいたのは金髪のオヤジだった。呑気に酒なんか飲んでるし、更にはコイツがこの町に侵入してるのに気づいていないのかあの管理者(笑)。まあ、別にアイツに期待も何もしてないが。いや、よくよく気を探してみるとあの管理者やその他大勢が戦っているような気配がした。ゴミのような気だが同じ場所にもう一人のクラスがいる……そっちの対処に向かってコイツを放置してるのか、それともただ単に気づいてないのか……まあ、どうでもいいか。

「おい、まさかお前がカラスの親玉か」

「……まさかそういうお前さんが、最近この町にちよくちよく現れる破壊神様ですか?」

ブランは自分が質問してるのに相手が質問で返したことで軽くキレて、金髪の中年男性が持つてる酒の入ったグラスを視線による気の圧力だけで割った。

「!?!」

金髪の中年男性は何をされたか分からないという顔をしているがそんなことはブランにとってどうでもよかった。

「質問を質問で返すな。質問には答えで返す……そんな事も分からないトリ頭か?」

「ッ……申し訳あります……せん……」

ブランの殺気に耐えられず、軽い口調から一気に敬語に直った彼は墮天使総督『アザゼル』。彼は以前、彼を危険視していたサーゼクスからの話を聞いて、ブランが本当に破壊神かを疑っていた。そして、確信ではないが、放たれた殺気に気圧され、今自分の目の前にいるのは本物の破壊神である可能性が充分にあることを理解した。

「おい、この町で暴れてるカラスと二人の一般人は何をしようとしてる？それくらい知ってんだろ」

ブランの問いにアザゼルはあつさりと事の経緯を吐いた。話を聞くところによるとまず、天界側が所持している聖剣がコカビエルという墮天使の幹部に奪われた。しかし、その天界側のトップであるミカエルは二人だけ聖剣使いを町に寄越して対処をしようとしたらしいが、成り行きでグレモリー眷属とも共同戦線を張ることになり一緒に対処に向かったがコカビエルには全く勝ち目が無いらしい。

戦う前でもアザゼルはこの問題をグレモリー眷属と聖剣使いでは対処出来ないことを分かっていたので、その対処の役を自身の勢力に引き入れた今代の白龍皇に任せただのことだ。今はまだ到着はしていないが、間も無く来るようだ。

「もうすぐ、今代の白龍皇のヴァーリが到着し、コカビエルを止められるはず……です……」

「ふーん……んで、お前は何してんだ？お前は墮天使総督という立場のせいで軽くは動けないという理由は100歩譲って認めてやる。だがな、それはお前がこの町にいる理由には全く関係がないだろ」

「せ、赤龍帝の神器が気になっ……ぶほおっ!？」

全部言う前にブランはアザゼルの殴り飛ばし、アザゼルはその勢いで部屋の壁を破壊しながらふつとばされる。

「フン、全く危機感がないようだな。そもそも幹部一人すら言うこと聞かせられない、対処がギリギリの時点でお前には呆れるしかないな。そのお前が言う白龍皇なんか待ってられるか……ホンツト使いねえ」

唾を吐き捨てるように冷たく言い放つと、ブランは瞬間移動でコカビエルの元へと移動していった。因みに、ぶつとばされた先でアザゼ

ルは一日中気絶していたそうなの。

▽

駒王学園にて

リアス達グレモリー眷属、そして聖剣使いのゼノヴィアはコカビエルが連れてきた『ケルベロス』という魔獣を倒したところだ。

しかし、まだ他に三人の人物が残っており、ここからが本番の戦いであった。その一人であり、首謀者のコカビエルはリアス達の戦いを上空から優雅に眺めていた。

「ついに完成したアア!! 4つのエクスカリバーが1つになったぞ!! フリード!!」

「あいよおー!」

『バルパー・ガリレイ』……今回の事件の犯人の一人であり、現在、奪った三つの聖剣と聖剣使いであるイリナからは奪った聖剣、合わせて四つの聖剣を融合させたものをこの場で作り上げた。完成すると、それを同じく共犯者であり、白髪の男、『フリー・セルゼン』という者に投げ渡した。

「フハハハ!! これでこの町は20分後に崩壊するぞ!! さあ、俺達を止められるかな?」

「何ですって!?!」

巨大な魔法陣が駒王学園の中心に展開され、嘲笑うように

言うコカビエルにリアスは激昂して叫ぶと歯軋りする。するとそれとは別に

「バルパー・ガリレイイイイッ!!」

過去に『聖剣計画』と言われるにによってモルモット扱いされた自身と同志達の無念を晴らす為、その計画の首謀者である男の名前を叫ぶ木場は魔剣を構えて突っ走る。しかし

「がはああっ!?!」

「うし、到着」



「「「「?」」」」

バルパーと言われた中年オヤジは瞬間移動で現れたブランに両脚で踏みつけられてうつ伏せになって倒れた。いきなりブランが現れたことにリアス達や、ゼノヴィアも驚愕と困惑の表情を浮かべる。

「ア、アイツ!!」

「嘘!? ソーナ達が結界を張ってる筈よ!? 一体どうやって……!?」

イツセーはブランを見ると表情を険しくさせるが、そんなことは御構い無しでこの場に現れたブランはあたりを見回していく。

「今回の首謀者つてのはどのカラスだ!? ……何だ、このおっさん?」

彼が下を見ると、はぐれ悪魔バイサーと同じように誰かを足で踏みつけていた。するとその人物は顔だけを起き上がらせてブランに対し怒号を上げる。

「貴様あああつ!! このバルパー・ガリレイに何をすー」

「五月蠅え」

ドオオオン!!

「バルパーのおっさん!」

ブランは自身が踏んでいた中年の司教っぽい人物が突然大声を出したので耳障りだと思い、エネルギー波を放った。司教の彼は断末魔も上げることすら出来ず、チリも残らずに消滅した。そして、今度は聖なるオーラを放つ剣を持ったフリードがブランに近づいてきた。

「なんなんですかあ? なに急に現れて喧嘩売っちゃってんの? ぶつ殺されたいんですかああつ!? アンタみたいな筋肉モリモリ野郎の出番はー」

「邪魔だ」

品性のかけらもない、礼儀も知らない、更には見たこともない人物であり、共犯者だとすぐにわかったブランは、その男に見向きもせず、冷たく放たれたその一言と共にフリードに人差し指を向ける。すると

「ギャアアアアアアアアアアアツ!!」

白髪の彼の身体は粒子状となって破壊された。すると、持っていた剣らしき物も一緒に破壊された事で金髪の少年、リアスの眷属の一人

である木場がブランの背後から襲ってきた。

「ふぎけるなあああつ！それは僕が破壊するものだったんだ!!それをおおおおつ!!」

「ツ！待ちなさい祐斗!!」

リアスの制止を無視し、木場は憎悪に塗れたその顔で魔剣を握り締め、ブランへと突っ込んでいく。そして、背後からブランに斬りかかる。しかし

バキン！

「な!?!」

返り討ちにするかと思いきや、ブランはそこから動かずコカビエルを下から見上げていた。木場の魔剣はブランの身体に当たると逆に折れて使い物にならなくなる。しかし、それでも彼は折れた剣を今度は突き刺そうとする。

バキン！

今度は刃全体が粉々になって今度こそ使い物にならなくなった。ブランは未だに微動だにしない。

その理由は簡単。そもそも、ブランは木場が背後にいることに気づいていなかった。彼にとって木場の魔剣は『強い風が当たっているのか』という認識くらいで然程気にするような衝撃ではないのだ。

『いや、気を察知できてないのでは?』と思うかもしれないが、そうではない。ブランはコカビエルを含めこの場にいる者達の気を察知するほどの価値はないと判断した。わざわざ、そんなことしなくとも蹂躪できるほどの差があるのはブランもよく分かっている故、今はコカビエルに自らの怒りをぶつけることに集中しているのだった。

また、無視されていることに対しても怒りを燃やす木場は次々と魔剣を創造していき、渾身の力を込めて何度も何度も剣を振るっていくが、それでもブランは気づかない。

『ん?何かのお笑い?』とでも言いたくなるような木場の一人演技のように見えてリアス達は困惑しながらその状況をただ見つめることしか出来なかった。

「お、おい、背後を気にした方がいいんじゃないのか……」

今回の事件の首謀者であるコカビエルですら、この状況に戸惑っており、複雑な顔をしながらブランに気づかせてあげようと声をかけてみた。しかし

「何言ってるんだ？今は風なんかどうでもいい……俺はお前に用があるんだよ」

コカビエルの『あつ、そう……』のような声が咳かれたと思われる。コカビエルは咳払いをすると、先程の言葉は無かったことにしようとしたのか意気揚々とブランを見下し、シリアスな雰囲気を取り戻した。

「ククク！誰だか知らんがまた一人虫ケラが死にに來たか！」

「黙れ」

「ヒッ！」

突如、ブランの前方に放たれた気の圧力に触れたコカビエルは怯える声を上げ、身体を震わせる。

「お前が首謀者のカラス野郎だな？コカ……コカ……まあ、カキクケコでいいか」

「コカビエルだ！フ、フン、確かに俺が首謀者だ！そ、それがどうした!? 貴様に何の関係がある!?!」

その言葉が更にブランの心に火をつける。

「何の関係があるだと……!?!」

拳を握り締め、静かな怒りが爆発寸前にまで達し、ついにそれは解き放たれる。そして、ブランは身体を浮き上がらせると、フツとその場に消えた。

「き、消えー……」

コカビエルはブランが消えたと思った。しかし、それは間違いでただ単にブランがコカビエルの目の前に移動しただけであって決して消えたわけでは無い。コカビエルが気づいた時にはブランの拳が彼の頬に当たっていた。当たったことを認識するのすら遅くなるほどコカビエルにとってブランの速さは尋常ではなかった。

一方、ブランはコカビエルに拳を当てながら、思いつきり怒りをぶつけるように叫んだ。

「この町破壊されたら……」

あの美味い豚カツ作る婆さんが死ぬだろうがあああああつ!!」

「ガアアアアアアアアアアアツ!?!」

パライイイイン!!

怒号を上げるが、それでもかーなり弱めに放ったブランの拳を受けたコカビエルは駒王学園に張られていた結界を突き破って空の彼方へとふつとばされる。

「あと、その邪魔な魔法陣、破壊!!」

怒りに燃えてはいるが、先程コカビエルがこの駒王町に展開した街全体を崩壊させる術式が込められた魔法陣をブランは見逃さない。完全に怪しいものと察した彼は空中で下方に掌をかざすと、そこから放たれた見えない破壊のエネルギーによってその魔法陣は霧散して消え失せる。するとすぐさま上空の彼方へと飛ばされたコカビエルの後を追った。

そう、左片手にお婆さんから貰った豚カツの入ったレジ袋を持ちながら。

「な、何をしたの……!?!」

先程までケルベロスやコカビエルと対峙していたリアスはブランの動きを捉えられていない。『ブランが何かした』ということだけは理解出来たが、あまりの動きの速さに『何をしているか』は理解が追いついていない。結果だけが脳裏に焼きつく。

その他のグレモリー眷属、そして結界を張るのに集中していた貴族悪魔、シトリー家の次期当主、『ソーナ・シトリー』率いるシトリー眷

属も、先程ブランによつてぶつ飛ばされたコカビエルが結界を突き破り全壊したことで異変に気付きリアス達のいる場へと駆けつけた。

しかし、その後両眷属は何が何だか分からずにその場に呆然と突っ立っていることしか出来ず、木場は自らが憎む聖剣を破壊出来なかったことを、そして最後の最後まで無視され続けたことを嘆いていた。

## 第15話 事件の終幕

三人称side

ブランに殴り飛ばされ、遙か上空へと飛ばされたコカビエルは何とか体勢を立て直した。雲の上にとどまっている自分の現状を把握すると、追いついて来たブランに対し激しい怒りをぶつける。

「貴様あ……!!」

「どうした、俺を睨みつけて……豚カツはやらねえぞ」

「いらんわ!!というか貴様は誰なんだ!!?なぜ俺の邪魔をする!!?」

「これだから神の気を感じ取れないやつは……まあいい。俺の名前はブラン……『破壊神ブラン』。聞いたことあるだろ?」

「何!?俺が知っている破壊神はジジイだったぞ!!?どう見ても別人だろう!!」

ブランはため息をつく。何回この説明をしなければいけないのかと。そう思いながら腕を組み、説明を開始する。

「ああ、もうかなりの歳いってて身体も全盛期と比べて動かなくなつてたからな。早い内がいいと思って死ぬ前に俺が破壊神を継承したんだよ」

説明はするものの、コカビエルはまだ納得はできていないようである。

「……まだ破壊神かどうかは信じることはできんが、そうだとしなげ俺の邪魔をする?貴様は悪魔の味方だとしてもいいのか?」

「あんなゴミどもと一括りされちゃうとはな。どいつもこいつも、この地球の三大勢力とやらは俺をイライラさせるやつばかりでウンザリしやがるぜ。俺はお前を破壊しにきたんだよ。これからも食う豚カツのためにな」

「……そんなことのために……!!?」

「そんなことのために?……お前ら地球の人物はその気になればいつでも食えるがな、俺にとっては希少価値なんだよ。特に地球の食べ物以外の星の食べ物と比べて絶品という言葉では表現出来ないほどの美味さを秘めてる。それをお前はその一部を消し去ろうとしたんだ。

ならば阻止するのは当たり前だろう」

「く、くくく……ふうふううざけるなああああつ!!」

コカビエルは自身の戦いの執念の前に、ブランのふざけた理由を聞いて怒りが募ったのか堕天使の光の槍を手に持つと、彼に襲いかかる。

しかし、ブランは腕を組みながらそれを軽々と避けていく。コカビエルが槍を突き刺そうとすれば横に避け、なぎ払おうとしてくれれば後ろに体を仰け反らせ避けていく。

すると、コカビエルは何回も何回も槍を振るっていき避けられていくだけでなく、自身の体力も極限まで擦り削られていくのであった。

「な、何故だ……!?何故こんなにも疲れる……!?」

普段は槍を振るっただけで体力など消耗するはずがないコカビエル。その理由はブランが放つ神の気にある。彼の放つ神の気による圧倒的なプレッシャーは神性がある地球の神々であろうともガクガクと震えだす程だ。

「これで終わりか?」

「バ、バカな……何だこの差は……!?こんな差があつていいのか……!?」

ただ殺してもつまらないので、ブランは何か思いついたのか、笑みを浮かべながら口を開く。

「そうだ、お前に最後の思い出作りをさせてやる。なに、旅行をさせてやるっただけだ。安心しろよ、すぐに終わるからな」

「な、なんだと……!?」

ブランは一気にコカビエルとの距離を詰めると、彼の胸あたりに掌をかざした。すると

「さあ、飛んでけ」

「ガハアアアアア!!」

何やら衝撃波のようなものを放つと、コカビエルは飛行機よりも早くとある場所へと墜落した。

▽  
人気のない場所でコカビエルは倒れながらも目覚める。その隣にはブランが悠然と立っており、コカビエルが目覚めたのを確認すると笑みを浮かべる。

「ここは……どこだ……?」

「ここは大阪。たこ焼きやお好み焼きが有名な所だ。観光なんかにちようどいい地域なんだと。さあ、次行くぞ!」

「は?……がはああつ!!」

ブランは再びコカビエルをはるか上空へと吹っ飛ばすと、高速で先回りした。コカビエルは訳も分からず、衝撃や勢いに身を任せ、気づいた時にはブランが先回りしており、額に手をかざされていた。

「ほらよ」

「ガツ!!」

ブランは次の目的地へと移動させるためにコカビエルに力を入れないほどの軽いデコピンをする。コカビエルはデコピンをされたと思えないほどの凄まじい衝撃を受けて、新たな地へと墜落。

▽  
コカビエルが次に墜落したのは、とある地域のよく人が通る道のど真ん中だった。周りの一般人は、翼を生やした者が落ちてきたと興奮し、コカビエルを珍しそうに見ながら写真を撮っている。

「なんだコイツ!? 宇宙人か!」

「い、いや黒い翼が生えてる! まさか、天使ではなく、墮天使!? すごい!!」

一般人でも、翼を生やしたコカビエルを見れば墮天使だと分かるのだろう。そして、この後これがニュースとなって墮天使総督アザゼルが一般人達からコカビエルについての記憶を消すこととなるのは言わずもがな。

ブランもそのクレーターの近くにヒュツといきなり現れて降り立



つと、一般人達は今度はブランに注目し、写真を撮っていた。しかし、ブランにとつては本体がバレようとも気にしないので、構わずうつ伏せに倒れているコカビエルに対して口を開く。

「ここは京都。えつと、日本人……だっけ？その国の多くの学生が修学旅行の行き先として候補に挙げられる有名な場所。いやあ、すげえよな……武力がお前達に劣つてようとも、こんなに文化が発達してるなんてよ」

まるで、旅行ガイドのように感想も交えながら説明をしていくブランは『もう、いいか』と呟くと再びコカビエルを上空へと蹴り飛ばした。

「ほらよー」

「ぐおおおおおおおつ!!」

またもや先回りし、今度はそこから一気に、駒王学園の校庭へと戻すように投げ飛ばした。



ドオオオオオン!!

コカビエルは駒王学園の校庭へと墜落すると、リアス達はボロボロのコカビエルを見て驚愕していた。

「か、彼がやったというの……!!」

「これが……破壊神……!?!」

そうリアスやソーナが呟くと、ブランはコカビエルの近くへと瞬間移動をし、倒れているコカビエルを見下す。

「ほら、立てよ」

「ふ、ふざけるな……俺は墮天使幹部のコカビエルだぞ……俺は生き残つて……戦争を……!!」

「お前の意志なんてどうでもいいんだよ。俺はお前に対して俺を楽しませられるとか、ライバルになれるとかそういうもん望んでいるんじゃない。お前がどれだけ俺の退屈を紛らわしてくれるかって

だけの話だ」

「……ふううざああけるなああああ!!ぐはあっ!!」

叫んで身体を動かそうとするものの、その瞬間にブランはコカビエルの背後に回る。そして肩にチョンツと指を置くと、コカビエルの身体は一気に地面へと叩きつけられその真下にクレーターが出来上がる。

「な、なんだよアイツ……!?圧倒的じゃねえか……!!」

イツセーは墮天使幹部であるコカビエルを倒すつもりでいたが、実際に戦ってはいないので彼の強さは実感していない。しかし、今のブランの動きが見えていないことに驚愕し、その強さへの恐怖に無意識にも身体を震わせていた。

「お前はもう終わりだな……さて、そこにいる奴、出てこい」  
「!?」

「やれやれ、バレてしまうか。流星は今、各勢力で噂されている宇宙の破壊神だ」

少し遠くからブランの様子を見ていた謎の人物はそう言うと、月を背景に駒王学園に現れた。白く輝く鎧を全身に纏っており、背中から光輝く翼を展開させ、宙に浮くその姿はとても神々しいものがあった。その人物はブランに対して自己紹介をする。

「俺はヴァーリ。今代の白龍皇だ」

「白龍皇……!?」

リアス達は今代の赤龍帝であるイツセーの宿敵といえる白龍皇までもが現れたことに状況の整理が追いついていなかった。

ヴァーリはアザゼルに言われ、コカビエルを回収をしに来たのだろう。しかし、ブランにとってはそんなことはどうでもいいことであり、今更墮天使側にコカビエルを引き渡すつもりもなかった。

「その墮天使はこちらで処分を下す。悪いが、それをこちらに引き渡してくれないだろうか?」

「知るか。今更来て何かを要求するなんて凶々しいにも程がある。おい、一回だけ言うぞ。その後は口よりも先に手を出す。……今すぐここから失せろ。雑魚に興味はない」

『雑魚』と言われ癪に障ったのか、ヴァーリはそれでもブランに近づこうとした。が、何やら彼の翼が点滅すると、その神器に宿っているバニシング・ドラゴンである『アルビオン』がヴァーリを止めようとする。

【おい、やめろヴァーリ！ 奴には手を出すな！ 死ぬぞ!!】

しかし、それでも止まるところか彼は更に闘争心を燃え上がらせるだけであった。

「フツ、だからこそ面白い。それに、アザゼルに連れて帰って来いと言われてるんでな。……悪いがぶべらっ!？」

「「「「!」」」」

ヴァーリは全身に鎧や兜など被っているが、それらは全てブランの拳圧だけで砕けた。そして、その衝撃は生身の身体にも伝わり、露わとなった彼のイケメンフェイスは衝撃で歪むと、鼻血を出しながら遠くまでふつとばされた。

「失せろって言うてんだ。話が分からない奴はホント面倒くさいぜ。……さてと」

ブランは飛んで行ったヴァーリのことなど無視して、倒れているコカビエルに再び視線を戻した。

「お、俺は……戦争を引き起こす……！ 今度こそ、堕天使の勝利のために……!!」

「ああ、戦争ね。そんなの勝手にやってくればいいじゃねえか。俺はお前らが戦争しようがしまいがどうでもいいからな。だが、せめて他所でやれ。気に入ったこの世界を荒れ地にされたら人間レベルに支障が出るんだよ」

「……………うおおおおおっ!!」

コカビエルは最後の力を振り絞ってブランに渾身の一撃を放とうと、翼をはためかせて真正面から向かっていく。しかしその刹那……………。

「しかし良かったな、俺と戦争出来て。まあ、お前の負けだがな」

「ガ……ア……」

コカビエルにはブランの動きが見えなかった。コカビエルにはただブランが突つ立っているようにしか見えなかったのだが、気づいた時にはコカビエルの腹部には大きな風穴が空いており、ブランはその穴を覗き込むように見ている。

「ひゃーっ、綺麗に向こう側の景色見えちゃってるじゃねえか。そうそう、因みに、今のはちよーっただけ強めにやってみたデコピン、いや腹ピンなんだが……かなり脆すぎねえか？」

墮天使の幹部ごときの実力に期待をしていたわけではないが、自分にとつて彼のここまで身体が脆かったせいも、逆にブランの方がコカビエルよりも驚いていた。

コカビエルはそのまま倒れると、やがてピクリとも動かなくなり墮天使としての生涯を終わらせた。

「それともう一つ、確かにお前は死んだが、その戦いへの執着、実力差は分かっても俺に立ち向かうその勇気だけは褒めてやる。だから、その褒美として跡形も無く死体は消し去ってやるよ」

ドオン！

軽く気弾を放つとそれはコカビエルを飲み込んで死体を消滅させた。これにて、コカビエルが起こした聖剣強奪の事件は終わり、ブランはレムが到着するまでその場で待つことにした。

すると、ブランがコカビエルや白龍皇を倒すまでずっと呆然としていたリアスやソーナがハツとなってブランに話しかけた。

「貴方……何が目的なのかしら？私の管理する町に度々侵入してくるわ、コカビエルを殺すわと……いい加減教えてくれないかしら」

「それに、貴方がコカビエルを倒す理由が全く見当が付きません。良かったら、教えてもらえないでしょうか？」

「ん、豚カツを守るためだが」

「……は？」

リアスやソーナは軽く叩くように言ったブランに対し『何を言っ

るんだ』と心の中で呟き、ブランは苛立ちながらリアスに質問する。「おい、お前らだけでアイツと戦っていたのか？他にはいないのかよ。あつ、その黒髪ショートのは周りでクソ弱い結界張ってたやつか。じゃあ、戦ってたのはやっぱりお前かよ、紅髪の管理者（笑）」「……一応、魔王様に連絡して援軍は呼んであり……ます……」

本当に目の前の破壊神が相手かもしれないと念の為、リアスは仕方なく、ぎこちない敬語に直した。

そして、実際に援軍を呼んだのはリアスではなく、朱乃である。リアスはサーゼクスに迷惑はかけたくないとのことで援軍を呼ばなかったのだが、朱乃は流石に自分達ではコカビエルには勝てないだろうということをもって魔王に連絡したのだ。しかし、リアスはそれを明言はしなかった。

「にしても来るの遅いじゃねえか。まあ、どうせ直前で呼んだんדר？ホント墮天使も悪魔も仕事おせえな。部外者である俺の方がよっぽどお前らよりも仕事できてんじゃん。お前、まさか援軍呼ぶ前にこのメンツでアイツを仕留めようとしたのか？おいおいおい、バカかお前。アイツはこの地球ではそこそこの実力者なんדר？実戦もまともを経験したことのないボンボンのお姫様とその兵隊どもが戦争から生き残った実力者に勝とうなんてよく思ったな」

「くっ……」

リアスはボロクソに言われて悔しさに唇を噛んでいた。

戦争で生き残ったという点ではブランはコカビエルのことを多少は評価をしていた。故に、部外者でもリアス達では絶対にコカビエルに勝てないということは充分に分かっており、だからこそ、この場にリアス達グレモリー眷属、そしてゼノヴィアという聖剣使いだけしかないことに疑問を思っていた。

リアスは魔王サーゼクスから、ブランには手を出すなど言われているので、迂闊に動くことはできなかったが、そんなリアスにブランは気遣うはずもなく続きを述べる。

「んで？どうだった？勝てる見込みはあったか？さっきの流れを側から見れば幾ら何でもお前らバカどもだつて分かるはずだ。勝てるは

ずないよな。おいおい、管理もまともにできない……つてのは、まあそれはお前をここに送り込んだ魔王共々が無能すぎるのもある。更には実力もゴミ以下、お前は一つでも不足を何かで補おうとしたのか？ 優しさか？ 慈愛か？ プライドか？ ハッ、まるで何も活かしきれない。前にお前に言つたよな、管理はしつかりやれと。せめて、反省を活かそうとする姿勢くらい見せろゴミクズが」

すると、ズケズケと言うブランに対してイツセーがリアスの前に立ち、彼に怒りの眼差しを向けた。

「おい！ 部長だつて町の管理やはぐれ悪魔の討伐、その他も色々頑張つてんだ!! 何も知らないやつが……部長を悪くいうんじゃない!!」  
「イツセー……い！」

リアスはイツセーに恋心を抱いているため、自分を擁護してくれた彼のことを見て感謝の目を向けていた。しかし、はつきり言つてブランから見れば、失敗を犯している人物に非を認めない奴が慰めをかけているだけの光景であり、思わずヘドが出るほどの気持ち悪さを感じていた。

「戯言もここまでくると病気だな……それにお前、誰に対してタメ口きいてんだ？ いい加減に理解しただろ、俺が破壊神だということをな。お前と俺の立場は天と地の差があるんだ。優しく言つてる内にさつさと態度を改めろ」

「そんな難しいこと知るか!! 神とか墮天使とか悪魔とかそんなの関係ねえ！ お前が部長を傷つけるなら、俺はお前を許さねえ!!」

「コイツ……マジか……」

度胸がいいのかただのバカなのか。ブランはイツセーを見てそう思った。そして、ここでいい加減、破壊神に対しての態度が無礼だということものを本当に分からせようと思つたブランだが、このままだと話が進まないと思い、今回もスルーをすることを決めた。

「ええっと、頑張つてる……だっけ？ お前、頑張つてるつて言えば何でも許されるとでも思つてるのか？ はつきり言おう、この世をナメるな。努力しようが結果が伴わなければそれは本当に『頑張つた』なんて言えねんだよ。それに、お前はなんも理解してない。上に立つもの

がどれだけの人の命を背負ってるのかということ。この世の様々な頂に立つもの、そしてリーダーという存在には『責任』というものが付き纏う上に、立場も上に行くほどその責任の重さは比例して重くなる。そして、その紅髪無能もその一人だ。町の管理者という一つの責任者という立場にありながら、力だけに特化した頭からつきしの無能の極み。はぐれ悪魔に關しても被害が出てから動き出すという後手に回るだけで、何でも力だけで解決しようとする。そしてそれに満足。それを何度も繰り返して『頑張ってます』なんて言われて納得しろという方が無理だ」

「くっ!!」

何も言えないのかイツセーは悔しそうに歯ぎしりする。が、それと同時にイツセーはブランに聞きたいことがあり叫んだ。

「じゃあ、アーシアの神器をどこにやった!? レイナールに奪われて、そのままお前に宿ってんだろ!? 返せよ! あれはアーシアの大事な力なんだぞ!!」

「アーシアって誰だ」

ブランがアーシアの名前を知るはずもなく、辺りをキョロキョロを見回す。そして、見覚えのある金髪の少女を見て察した。

「ああ、あのシスターのことか。あれか……あんなもの破壊してやったが。何か文句あんのか?」

「ッ!!」

「ふああ……何か眠くなってきた。そろそろ帰るかあ」

全く悪びれる様子も無く、あくびもしていることが分かった、イツセーは先程のリアスへの罵倒の怒りも含めてブランに掴みかかろうとする。

「てめええええっ!!」

「やめなさいイツセー!」

「もういいんですイツセーさん! わ、私は気にしてませんから!!」

リアスとアーシアはブランに殴りかかろうとするイツセーの身体をなんとか抑えているが、イツセーの怒りは一向に静まらなかった。

「離してください部長、アーシア!! アイツはアーシアの優しさも踏み

にじつて、部長の努力すらもバカにした!!許せないですよそんなの!!」

「その二人は実力の差や立場はもう理解できたか。その茶髪野郎は怒りで立場なんかクソ食らえって顔してるが。はあ、なんかコイツらと話していると疲れてくるな……おつ、やっと来たか」

上空を見ると、ブランを迎えにきたと思われるレムギットが光の速さを超えて地球に降り立ってきた。

「お待たせしましたブラン様、あら、その方はどうするのですか?」  
イツセー達の存在に気づいたレムギットはブランにそう問いかける。

「俺は今日もう無駄な労力を消費したくねえんだよ。だから念の為に……ハアッ!」

リアス達如きにこれ以上、一欠片も労力を使いたくないと思ったブランは威嚇のため、最後の労力として半分程力を込めて自身の身体に破壊のエネルギーを混ぜた濃密な神の気を纏った。

逃すかと言いだけなイツセーはまた力を込めるが、それでもリアスやアーシアに体を抑え込まれているので動けない。

「やめとけ、俺は今濃密な神の気を纏っている。近づけば、破壊のエネルギーに当てられて消滅するぞ」

目に見えるほどのオーラを見て、近づけばタダでは済まないということはリアス達もソーナ達も流石に理解しているのか、その場からは動く事が出来なかった。しかし

「うおおおおおっ!!」

「裕斗!」

その中で最も冷静ではない木場がブランに対して背後から迫る。ちやんとブランの警告はきいたはずなのだ。

「同志の仇は僕が討つ!聖剣無き今、それを破壊したコイツを討つことで僕は復讐を果たせることになるんだ!!」

荒々しい雄叫びを上げる。そして、先程のように木場の剣が再びブランの身体に当たる。しかし、次の瞬間

フッ!



「……はっ?」

イツセーの間の抜けた声が響く。剣が当たったと思えば、それらは砂が落ちるように消え、更にはその余波で木場の身体も粒子となって破壊された。そう、それは彼がこの世から消滅したということの意味していた。

それを見ていた朱乃やアーシアは両手で口を抑え、嗚咽を漏らしている。小猫はガクツと膝から崩れ落ちる。ソーナ達シトリー眷属も、まさかこんなことが起こると思っただけか身体が固まってしまうている。そして、リアスやイツセーは心の底から怒りが湧いていたのであった。

「なにしてんだ……こいつ……?」

警告はしたはずなのに、突然自分の背後に来たと思えば、勝手に粒子となって死にゆく木場を見てブランはなんとさえいのか分からなくなってしまうた。

「木場あああああああああああああつ!!!」

イツセーは叫び、ついにリアスの制止を振り切つて神器を出すとブランへと走り込む。

「警告はした。しかし、そいつは従わなかった。誰か無理矢理にでも止めれば良かったな」

「テメエはやる事なす事全てがクズだ……ふざけんなああああああああああつ!!!」

「ああ、ついでにこの国以外の別れの挨拶も交わしてみるか……チャオ」

ブランはイツセーが近づく前にレムギットの肩を掴むと、彼等は地球を抜け出し元の星へと帰還していった。

「ちくしよおおおおおおおつ!!!」

イツセーはリアスの元を離れたとはいえ、仲間の一人である木場が破壊されたことでさらにブランへの怒りが増幅していくのであった。そして

「とりあえず……教会へと帰ろう。任務はあの破壊神によって解決はしてしまつたが……今はつきりした。彼は私達が敵う相手じゃない、

関わるだけでも避けるべきだ」

聖剣使いであるゼノヴィアはその一部始終を見ていたが、任務は一応果たし、もう一人の聖剣使いのイリナは負傷してあることもあったので、とりあえずこの場を離れてイリナを連れて教会へと帰っていった。

▽

「ししよー、おかえりなさい」

「ただいま」

イツセー達のことなど蚊ほども気にしていないブランは自分の星の宮殿へと帰還。オーフィスの出迎えを見ると、彼女の分の買った豚カツをあげた。

「ほらよ」

「えっ」

まさか自分にプレゼントをしてくれるとは思わなかったのか、オーフィスは口を栗のような形に開け、彼女なりの驚きの声をあげた。

「ししよー、病気?」

「ぶっ殺すぞ」

普段、オーフィスにとって自分がどんな印象なのかがよく理解したブランであった。

その後、ブランはティアマットにも豚カツを渡すために、彼女の部屋へと向かっていった。

▽

ティアマットの部屋の前にて

「カカオ〜、豚カツ買ってきたから一緒に食おうぜ〜」

ティアマットの部屋のドアをノックしてみると、そこから彼女が眠そうに出てきた。恐らく、仮眠でもとっていたのだろう。

「ふわあ……お帰り……今日は何してたの？」

「墮天使総督ぶつとばして、幹部一人破壊してきた。あと、なんか悪魔が一人勝手に死ににきた」

「へえ〜」

散々、驚きの連続を体験してきたティアアマットにとって、この程度では最早ドキツとするどころか流せる程の精神力となっていた。またはブランの強さをよく知っている故の反応なのかもしれない。

## 第16話 第7宇宙へお邪魔します

ブランチ side

数日後

「お前ら、今日は修行は無しで『ある所』に行くぞ」

朝起きて、飯を食った後に『さあ、修行の時間だ』とでも言いたげにやる気を出しているティアマツトとオーフィスにそう言うと、2人は首をかしげる。

「行くって……どこへ？」

「第7宇宙だ」

「えっ、他の宇宙に行けるの!? 本当にも!」

ティアマツトは随分とワクワク感を膨らませているが、オーフィスはまだ首をコテンとさせており理解が追いついていないようだ。なので、コイツのために俺は手短かに説明をする。

「他の宇宙、地球、食べ物、食べられる」

「わーい、やったー」

伝わった。マジで伝わったぞ。

「まあ、食べ物もそうだが、お前達には俺以外の強敵ってのをその目で見てもらいたいつてのものもある」

「強敵……?」

「そうだ。それは俺と同じ種族の『サイヤ人』っていう奴らだ」

「サイヤ人……レムギツトさんから聞いた宇宙でも名高い戦闘民族って聞いたけど、地球では多分知ってる人なんていないわよ」

「当たり前だ。俺の故郷、『惑星サダラ』って場所は既に『滅んだ』。それに、こっからでも地球からでも何万光年も先にある遠い位置の星なんだ。接点がないのは不思議じゃない」

「へえ……って、滅んだってどういうこと!? まさか、前の破壊神に破壊されたの!」

「バカ、違えよ。惑星サダラは破壊神じゃなく、その時期に台頭してきた『宇宙海賊』の親玉に破壊されたんだ」

「宇宙……海賊……? そ、それって……何……?」

「知らなくていい。もう、そいつらもいねえんだからよ……」

あまり自分の事は長々と話すのは好きじゃない故に、溜息を吐いて俺は話を戻す。

「事前にアポはとってある。あとはレムに移動を任せて向かうだけだ。レム、頼むぞ」

「かしこまりました」

俺が後ろからレムの肩に手を置き、その俺の右肩にティアマツト、左肩にオーフェイスが手を置いたのを確認したレムは光の速度よりも速く、この星を出発してこの宇宙とは別の宇宙、『第7宇宙』へと向かっていった。

(ちよつと待つて……さつき、故郷が滅んだということとはサイヤ人はこの人以外死んだってことよね……じゃあ、何で師匠はどうやって生き延びたの……?)



### 三人称 side

第7宇宙。その宇宙にもブランが住む星があるように、この宇宙の破壊神、『ビルス』が住む星もある。ここはその星の広い平野であり、その上空では黒髪のサイヤ人の二人が格闘限定による組手を行っていた。

「へへっ、また腕え上げたなベジータ！」

一人は、不敵に笑うサイヤ人、『孫悟空』。地球育ちのサイヤ人であり、これまで数々の強敵から何度も地球のピンチを救ってきた戦士。そして、この宇宙の破壊神、『ビルス』とも一戦交えてから、この星で修行をさせてもらっている身でもある。

「フン、いつまでも貴様の後追いは御免だからな！でやっ！」

もう一人の厳つい顔の髪が逆立ったサイヤ人は『ベジータ』。元々は地球を侵略してきたサイヤ人であるが、悟空達や愛する者と触れ

合っていく中、気高きプライドを持ちながら徐々に穏やかな心を作っていた。今は地球で暮らしており、悟空と同じくこの星で時々ビルスの付き人である『ウイス』に修行をつけてもらっている。

「お二人とも、ザマスとの戦いを経て更に強くなったようですね」  
「フン、まだまだ全然僕には敵わないだろうけど」

レムギットとは正反対の長身の天使、ウイスと見た目が人型の猫っぽい人物が破壊神ビルス。二人は悟空とベジータの組手を眺めて感想を述べる。

「そういえばビルス様、今日はブラン様が来る日ですよ。レムギットからの通信によると、そろそろ来る頃かと」

「アイツか……顔を見るのは久しぶりだな。おいお前ら、一旦やめろ！今日はアイツが来る日なんだ！このままだと煩くて仕方ないっからありやしない！」

その叫びで悟空とベジータは動きを止めるとビルスとウイスの元へと降り立った。

「あ、あぁっ！そうだった！今日は第0宇宙の破壊神が来るって前にビルス様が言ってたもんなぁ」

「しかも、ソイツは俺達と同じサイヤ人って聞いたな。興味深いが……果たしてどんな奴なんだ……」

「なぁ、やっぱり強えのかなぁ」

悟空のつぶやきに対してはウイスが答えた。

「勿論、強くなければ破壊神にはなれませんからね。貴方達はこの修行はまだ数年程しか経ってませんが、その第0宇宙の破壊神ブラン様はその倍以上の年数の修行をこなしています。ですが、実践の多さで言えば貴方達の方が上だとは思いますが」

ウイスの言葉に二人は感嘆の声を上げる。すると、ビルスの耳がピクリと動いたかと思うと、彼の目がゆっくりと開かれる。

「……来たか」

ビルスの呟きに皆が反応し、目線の先の上空を見ると光の速度を超えて現れた人物達がこの星に降り立ち、ビルス達の元へと歩み寄ってきた。

「久しぶりだな、ビルス」

▽

ブラン side

着いた着いた。ここにくるのは久しぶりだ。

俺達はビルスが住む星に到着する。視線の先にはこの第7宇宙の破壊神ビルス、さらにその横にはそれに仕える天使、ウイスもおり、後ろには見覚えのあるサイヤ人二人がいた。

「お久しぶりです。ウイス」

「そうですねレムギット……あら、もしかしてそれは……」

「はい、これはハーゲンダッツというアイスクリームです。お土産ですよ」

「あらまあーこれはこれはとーっっても美味しそうなアイスクリーム！今は冷やして後に頂きましょうか！」

近づくともずはお互いの天使が挨拶を交わし、レムギットは地球でティアマットと一緒に買ったアイスクリームをウイスに渡した。すると、俺はビルスの後ろにいる奴らに視線を移してみる。

「お、おいベジータ……あの破壊神、オラとおめえが合体した姿の『ベジット』にそっくりじゃねえか？」

「言うな……！貴様と合体など思い出すだけでもヘドが出るんだ……二度とそのことについて触れるな……!!」

なにやらコソコソ話をしているサイヤ人が二人。ああ、神 tube で見た第7宇宙のサイヤ人か。それにしても、何やら俺と顔が似ている気がするな……まるで、あの二人を足して二で割った姿が俺って感じで不思議な気分だ。

「久しぶりだな『ヴェルドラ』……いや、今はブランと言った方が正しいのか。僕が眠っている間に破壊神に就任しただなんて、相当強くなったらしいね」

「まあな。じやなきや破壊神になんてなれねえよ」

「ふーん、その後ろの二人は何だい？もしかして、コイツらと同じで修行中の身って感じかい？」

「まあ、そんなとこだ」

その後、破壊神同士で挨拶を交わす。オーフィスとティアマツトはビルスを一目見ると、戦慄していた。恐らく、俺と同じ気質の神の力を感じ取ったのだろう。

（ウツソでしょ……分かってはいたけど、あまりにも私達と纏う気質の違いすぎる……！こんな濃密な神の気……近寄るだけでも息がつまるわよ……！）

俺とビルスの挨拶が終わると、ビルスの後ろにいたサイヤ人の一人が前へと出てきた。

「オッス！あつ、いや！こ、こんにちは、わ、私は孫悟空というものでお、おっしやいます！」

コイツは孫悟空という名前か。なんだかぎこちない挨拶だ……逆に聞きづらいぞ。

「敬語が苦手なら普通にしてくれていい。同じサイヤ人としてののよしみだ。特別にな」

「本当か?!いやー助かったあ！この話し方はよくわかんねえから……ん？そっちのおめえらは破壊神なんか？」

「我？」

オーフィスは首をかしげる。

「バカか。服装を見れば破壊神かどうかなんて普通分かるだろうが」

ビルスにそう言われて悟空はハツとなってその後、にへらと笑う。どこか抜けている部分があるようだ。オーフィスは自分達のことを指されたことでハツとなって一歩前へ出る。

「我、オーフィス。今、破壊神見習いとして修行してる。えっと……よろしくお願いします」

おお……コイツが敬語を使った挨拶をしている……偉い！偉いぞ！初めて会った時よりも随分成長しているじゃねえか！

「私はティアマツト。地球では五大龍王なんていう名前負けしてる異名で呼ばれている破壊神ブランの弟子兼パシリよ」



自分で言うのか。実際そうだけど。

「オラ、孫悟空！おめえ達とは違って破壊神にはならねえけど、色々あって、ここでもっともつと強くなるために修行してんだ！」

「へえ、そんな人もいるんだ……ねえ、貴方もそうなの？」

「ティアマットは悟空の隣にいるサイヤ人にもそう聞く。」

「フン、俺はコイツに抜け駆けされたくないだけだ」

ティアマットはベジータが悟空にライバル意識を抱いているのだと察する。しかし、ティアマットは思い出す。自分達の地球での強者は、自ら強くなるうとするものなど数える程しかないという事実を。その後話を聞く限りだと、悟空の他の仲間も強くなるための努力をしているというのに、自分達の宇宙の地球といったら比べることすら恥ずかしくて仕方なかったのだろう。

「なあなあ、アンタ第0宇宙の破壊神、ブラン様っちゅうんだろ？」

「如何にも。俺が第0宇宙の破壊神ブランだ。それで……そっちの奴、お前の名前は？」

「……ベジータだ」

もう一人のツンツン頭のサイヤ人はベジータという名前のようだがぶつきらぼうだが、名前を名乗るだけでも礼儀はなっているようだな。

「俺はお前ら第7宇宙のサイヤ人に興味が湧いてな。見たぜ、あの第6宇宙の格闘試合……アレを見て一度お前らの顔を見ておきたかったんだ」

「じ、じゃあさ！お願いがあるんだけど、ちょっとオラと手合わせしてくんねえかな？頼む!!」

「何？」

両手を合わせて頭を下げるまで懇願して来るとは、破壊神に手合わせを挑む奴なんて珍しい光景だ。見たところ胴着を着ていることから武闘家っぽい気がするが……いや、これはサイヤ人としての闘争本能が勝っているか？

すると、ベジータが先を越されたと思って焦りながら孫悟空に詰め

寄った。

「おいカカロット！それは俺がやろうとしていたことだ！抜け駆けは許さんぞ!!」

……カカロット？

そういえば、孫悟空って絶対にサイヤ人につけられそうな名前じゃねえよな。ってまあいいか……そこは別に重要ではないから気にしないでおこう。

「ええ〜!?ずりいぞベジータ！オラが先に言ったのによ〜!!」

どちらも先に戦いたいと融通がきかない第7宇宙のサイヤ人……なるほどな、二人で戦うという選択肢がない辺り、一人で俺を倒したって思ってるんだろうな。

「んじゃ、じゃんけん決めてようぜ。ベジータ」

「フン、いいだろう」

仲良しか。というか、俺まだ戦うなんて言ってないんだが……。……しかし、これはチャンスだな。このところずっと戦ってないし、地球の奴らとの戯れなんかカウントに含みたくないから丁度良かったぜ。

「じゃんけんポン！あいこでしょっ！しょっ！しょっ!!」

結構長くあいこが続いたが、ついに決着はついたようだ。勝者は……。

「よっしゃーっ！オラの勝ち〜!!」

「チツ!!」

悟空の勝利のようだ。ということ、ベジータは今日の所はお預けってことになる。しかし、ビルスは何やらイライラしながら怒鳴り散らしてきた。

「おいお前らあああっ！……ここは僕が住む星だぞ！戦うかどうかを勝手に決めるんじゃないぞ!!戦闘の余波で宮殿が壊れたらどーするんだあああっ!!」

「いやいや、大丈夫だってビルス……遠くで戦うし、レムやウイスの二人の張る結界があれば問題ないだろ」

「ぐっ……ぬぐぐ……フン、まあいいや。壊れたらそっちの地球の食

べ物を献上してもらおうかな」

「いいぜ」

(チヨロい……)

▽

三人称 side

話は決まり、ブランと悟空は離れた場所で空高く上昇をすると、レムギットとウイスは余波で宮殿が壊れないように二人の周りにバリアを張って保険をかけた。

悟空は身体を伸ばして準備運動をし、ブランは空気を殴るかのように連続で何も無いところにパンチを繰り出して彼なりの準備運動をする。両者、身体が充分に動くことが確認するとお互いを見つめ合う。

「そういえばブラン様、聞きてえことがあるんだけど、いいか？」

「ふむ、何だ？」

「ブラン様からは超サイヤ人ゴッドやブルーでもねえのに、神の気を感じられるんだ。何でだ？」

「何だ、そんなことか。俺は長年、この星にも流れている神の気を身体に慣らしすぎたせいがこの状態でも神の気を纏うことが出来たんだ。勿論、解くことも可能だがな」

「ひゃあ、すげえや！オラは超サイヤ人ゴッド以上にならなきゃ神の気を纏えねえからな……もっともっと修行していつかブラン様みたいになっぞ!!」

「いい心がけだ……さあ、いつでもかかってこい」

「へへっ、なんか初めてビルス様と会った時を思い出したぞお……よしっー」

悟空は亀仙流という一流の武闘家として過ごしてきた隙のない構えをし、そして表情もキリツとしたものへと変化する。

「だりやつー！」

「フツ！」

悟空はゼロからの一気に加速によりブランとの距離を詰めると、連続で拳と蹴りを放っていくが、ブランはそれを腕を盾にし、弾いたりしてダメージを最小限に防いでいく。

「そらっ！」

「ツ！」

ブランはこちらの番だと思い、悟空が攻撃の手を止めた瞬間に拳を放つ。しかし

ピシユン！

「な!？」

そう見せかけ、拳が当たると思った瞬間、それはフェイントで本命の瞬間移動をして悟空の背後に回り込み、回し蹴りを放った。しかし「やべえっ！ハアツ！」

「むっ!？」

悟空は上空に狭範囲の気弾を放つと、それを噴射機のようにして下へと避けた。ブランはその悟空のときの判断と行動に舌を巻く。

（今のは完全に死角だったし、フェイントまでいれて反応は遅れたはず……避けるのだから精一杯だったようだが、機転をきかせて気弾を放ち、それを噴射機にして躲したつてところか。単なるバカつてわけじゃねえな、コイツは……戦闘センスが高いバカだな）

「ふう……まさか瞬間移動まで出来るなんてよ……けど、まだまだ！」

「ハアツ！」

悟空は距離を取り、今度は横に移動しながら気弾を放っていく。ブランはそれを高速移動で避け、何とか悟空との距離を詰めようとする。瞬間移動で近づいてもいいのだが、さっきの対応を見て悟空は瞬間移動を知っている、もしくは使えるのだと判断した故に彼にはもう不意打ちは通用はしないと踏む。

「なら……単純に攻めてくか。フツ！」

「！」

ブランが気弾を搔い潜り距離を詰めると再び肉弾戦へと移る。拳

や蹴りをぶつけ合う度に轟音が辺りに響き、ブランも悟空も流れを変え、頭で戦況打破のイメージする。

「だりやりやりやりや！」

「だだだだだだだだだっ！」

悟空が殴り、ブランも時に受け流し自分から殴っていき、悟空もそれを受け流すの繰り返し。今のところ戦況は五分五分に見える。だが、その戦況を揺るがしたのはブランだった。ブランは一度防御に徹し、悟空の打撃を弾いていくようにいなし、カウンターを行うタイミングを見計らっていた。

「そこだ！」

「ぐうああっ！」

放たれた拳を上方に弾くと、すぐさま懐に潜りこんで鳩尾に一撃を与え、その後、首の後ろのうなじに肘鉄を喰らわせて悟空をぶっ飛ばす。

「うわあああああつ!!」

悟空は上空から急降下していくものの、何とか体勢を立て直してブレーキをかけるように勢いを止める。

「へへへっ、流石だなあブラン様！もっとワクワクしてきたぞお！」

「俺はまだ全然だ。もっと楽しませられないのか？」

「まだまだ余裕って顔してんなー？………だったら！フツ！」

ドオオオオオン!!

悟空が構えを直して力を込めると、彼の髪が逆立って金髪という金色の戦士の姿へと変わった。

「ほう、超サイヤ人か」

「ブラン様もなれるんだろ？見してくれよ！」

「フツ、いいだろう。ハアアツ!!」

ドオオオオオン!!

ブランも力を込めると、金色のオーラを放ちながら超サイヤ人の姿へと変わった。そして、それを見ていたティアマットは驚きの声を上げる。

「ちよ、何あれ!?!なんか金色になってるわよ!?!」

その問いに対してはベジータが答えた。

「あれは超サイヤ人だ。サイヤ人が戦闘力を上昇させる為にする変身……通常での、ある程度の戦闘力が必要かつ、純粹で穏やかな心、または悪の心を持ち、激しい怒りや悲しみによって目覚める伝説の戦士だ」

それを聞いて、オーフィスはあることを思い出す。

「あれ……見たことある」

それはブランと初めて会った日のこと。オーフィスはトドメの一撃を放たれた時、一瞬だけブランが金色の戦士になったのを見た。アレを見て、自分は絶対に勝てないと思うほどの圧力を感じたことを思い出したのだ。

「オラの得意技……見してやんよ！」

悟空は気合を入れて気を高め、更に上空へと飛翔するとと、斜め下方にいるブランに向けて両手首を合わせて手を開いて、体の前方から腰にもつていく。

「かー……めー……」

次に腰付近に両手を持っていきながら、体内の気を集中させて両手の間に淡い青色のエネルギーを形成していく。

「はー……めー……」

(アイツの掌からエネルギーが形成されている。それに、どんどん気も上がっていく……なるほどな。なら、やってみるか)

ブランは悟空から特大のエネルギー波が放たれるということが分かり、迎え撃つ為に前方に手を翳すとブランの掌にも悟空と同じ淡い青色のエネルギーの塊が形成されていく。

「波あああああああつ!!」

「ハアツ!!」

ドオオオオオン!!

悟空のかめはめ波とブランの気功波……お互いに放ったエネルギー波がぶつかり合い、鏝迫り合いの状態となる。一見、ブランが押しているようにも見えるが、悟空は負けじと力を込めて何とか押し返そうとする。

「ギギギギギギつ……負けねえぞ……!」

「やるじゃねえか。だが、これならどうだ?」

ブランはもう片方の空いている掌にエネルギーを形成すると、今放っている気功波に重ね合わせるように赤い気功波を放ち、それらは混ぜ合わさると紫色の巨大な気功波へと変わった。

「負けつかあああああつ!!」

悟空は叫ぶも、どんどん押し出されていき、いつ押し負けてもおかしくない。しかし、これで終わる悟空では無かった。

「なら……久し振りに、アレやってみつか……体持ってくれよ!!  
超界王拳スパーかいおうけん……ツ!!」

「なっ……!!」

悟空が叫ぶ。すると、彼の身体が赤いオーラに包まれ、かめはめ波のエネルギーの大きさも膨大なものへと変わった。そして

ドオオオオオオオン!!

一気に罅迫り合いを制し、ブランは反撃の隙もなくエネルギーの奔流に飲み込まれていってしまい、そのまま地面へと墜落する。悟空は赤いオーラを纏うのをやめ、先程ブランが墜落した地面を見る。巨大なクレーターが出来上がり、砂塵が巻き起こっているところにブランは脱出するように飛翔すると再び悟空の前に現れ、首をコキツと鳴らすと腕を組んで悟空を評価する。

「土壇場で力を増幅させたのはなかなかの不意打ちになったぜ。今の技、第6宇宙との格闘試合でもやっていたやつだな?」

「ああ、今のは『界王拳』ちゆう技で……体力をこつそりと持っていたのを引き換えに身体能力を増幅させる技なんだ。イタタツ……あぐっ……この状態で久し振りに使ったせい結構ダメージきちまった……!!」

「しかし、まだまだ余力はあるようだな」

「へ、へへっ……流石破壊神だ……まだ息切れすらしてねえなんてよ。でもオラ、こんな不利に見える戦たたけえでもすっげえワクワクすっぞ!」

「なら、もっと力入れてみるか?」

「そうこなくっちゃ!」

ブランと悟空は構え直すと、同時に加速してお互いに向かって飛んでいく。

しかし

「そこまでです」

「!?!」

悟空の拳をウイスが、ブランの拳をレムギットが指一本で受け止めた。悟空とブランは押し込もうにもビクともせず、仕方なく引き下があるとレムギットが口を開く。

「ブラン様、今日はここまでにしておきましょう。たった今、あの日本神話勢からの連絡を受けました。要件は同盟による誘いに関する答えを出したとのこと……なるべく早く話をつける為に、ここは一度お帰りになった方がよろしいかと」

それを聞くと、ブランと悟空は超サイヤ人を解除した。

「……ちえ、仕方ねえな。今はこちらよりも、地球の問題を片付ける方が優先事項か」

ブランは仕方なくレムギットの言うことに従い、悟空に向き直る。

「ブラン様、帰っちゃうんか?」

「そういうことだ。すまないな孫悟空、またの機会があれば、今度は全力でやろうぜ」

「あ、ああ!今日はあんがとな、ブラン様!またやろうぜ!」

悟空とブランはサイヤ人として、またもう一度戦う事を約束すると、ブランはレムギット達と共に元の宇宙へと帰る準備をする。帰る前に、ブランはビルスと向き合って少々の会話をする。

「今日はサンキューな。なかなか有意義な時間だったぜ」

「まあ、僕もだよ。久し振りにお前が戦う姿を見た……本当にあの頃から強くなったようだな」

「もしかしたら、今ならお前にも勝てるかもしれないぜ?」

「何だと……!?!」

不敵に笑うブランの言葉にビルスは睨み、低い声で呟く。ブランはビルスから放たれる神の気のプレッシャーには負けず、同じく神の気のプレッシャーを放って威圧することで見えない戦いを繰り広げた。



すると

「いてっ！」

お互いに仕えている天使が杖を頭上から軽く叩いたことでその戦いはすぐに終戦した。

「ごらごら、大人しく帰りますよ」

「ビルス様も、軽い挑発に乗らないで下さい」

「……チツ！」

破壊神同士は実際に肉体での戦闘を行ってはならない。お互いに戦うことで破壊のエネルギーの余波が広がり、それは、すなわち宇宙の消滅を意味するのだ。

「おいビルス！あまり修行サボってると早いうちにコイツらに追いつかれるぞ！ププツ、そんな事あったらダツセえな！」

「んなことあるわけないだろうが！さっさと帰れこのクソガキのペーペーが!!」

「おい！俺はもうペーペーじゃねえよ!!……じゃあな!!」

最後に別れの言葉を交わし、レムギツトの肩を掴み、その背後にティアマツトとオーフィスもブランの肩を掴むと、彼らはこの星を出発して自分達の住む宇宙へと帰っていった。

「またなー、ブラン様ー！」

▽

帰り道の途中、オーフィスはブランの戦いを見て思った。修行中の身とはいえ、まだまだ自分はブランの足元に及ばないと。

「ししよー、悟空も強かった。私も、もっと頑張って強くなる」

「おう、頑張れよちびっ子」

「あつ、オーフィスの呼び方はちびっ子に変えたんだ？あれ？じゃあ私は？」

「うーん、コーヒーかな」

「いや、それ結局『豆』繋がりじゃない！うわああああん!!私、いつに

なったらマシな名前で呼ばれるのおおおおっ!?!」

ブランは流石に可哀想になってきたし泣き声も煩いと思ったのか、ティアマツトと普通に呼ぼうとした。しかし、長くて呼びづらいのか、妥協してこれからは『ティア』と呼ぶことにした。

「あれ……結構……というよりも……十分良い呼び名になってる……?」

「なんだ、コーヒーが良いのか?」

「いいや全然!まーったくそんなつもりはございません!!ひゃっほおおおっ!!やったあああああつ!!」

「気持ち悪っ」

「気持ち悪いですね」

「気持ち悪い、ティアマツト」

「アンタ達、いい加減泣くわよ?」

ブラン side

自分達の星に到着すると、俺は昼寝をする為に宮殿に戻ろうとするところをレムに止められた。

「そういえばブラン様。先程、ウイスから耳寄りな情報を手にしたのですけど……これには私も驚きを隠せません」

「ん?お前が驚くなんて相当だな……何なんだ、その情報って。まさか、俺達の宇宙の地球にはない美味しい食べ物があるのか!?!」

この時、俺はこのことを聞かなければ良かったのではないか?とのちに自問自答を繰り返した。それは何故か?それは……それすらも考えたくないほどの事態を聞かされたからだ。

ワクワク感に満ちた俺の顔を、レムは背中を向けたまま口を開く。

「全王様が二人に増えたようですよ」

「おっし、寝るか」

聞き間違いだと願いたかった。夢だと思いたかった。しかし、それが現実だと理解するのに俺は丸三日間もかかることとなった。

## 第17話 持ちかけられたチャンス

ブランチ side

全王様が二人に増えたとレムから聞き、その日はすぐに寝た。思いの外、ぐっすりと眠ることが出来たのは、それほどそのことを忘れたかったからだろう。

しかし、翌目を覚ますと、昨日言われたことが現実ではないというのを捨てきれずにそのまま日本神話との話し合いの場へと訪れる。

この前は同盟を受け入れるかという話をし、それを考える期間を日本神話の神々に与えた。

結果は言わずとも分かると思うが、同意を得ることに成功。同盟は結ばれたということだ。これによって正式に俺はこの日本の土地を害をなさない限り、自由に歩き回れる。美味しい食べ物も食べ放題……もしかしたら俺の知らない料理を日本神話から紹介される可能性もあり、まさに万々歳だ。

しかし、この時の俺はそんなことを考えている余裕がなかった。レムを介してでなければ話を聞く余裕もなく、時々適当に返事をしてしまふ時もあった。全王様が二人に増えたというその現実から逃げたい気持ちが邪魔して内容が頭に入ってこないのだ。故に、若干放心状態の俺の顔を見て天照に『あ、あの……お疲れなら肩をお揉みしましょうか……?』なんて気を遣われるほどに俺の顔は生気を感じられなかったのかもしれない。同盟を結んだのは問題ないとして、ここからが問題だった。

現実を受け止めるのにそこから2日かかったのだ。そして、これが本当に現実だと気づくと同時に俺の頭はパニックになった。

いや二人に増えたってどういうことだ!?!何でだよ!?!どうやってたらそうなる!?!教えてほしいわ!!

レムですらもその理由は分からないようだ。なんと、その真実を知っているのはあの孫悟空だけらしい。もう一人の全王様を連れてきたのが奴のようだが、一体全体どうやって連れてきたのかという真

相は俺達にとっては現状、闇の中に沈んでいる。

孫悟空……一体、お前は何なんだ……？

そう空に話しかけるように俺は呟くと、目の前の弟子二人に目を向ける。今、ティアマツトとオフィスは100倍の重力をレムの力によつて自身の身体にかけさせてもらい、自在に飛び回り組手を行なっていた。

アイツらも、孫悟空を見て自分達はまだまだ弱いということに気づき、また更にやる気を出して修行に取り組んでいる。

二人はもう、100倍の重力には余裕で耐えられる身体にはなつた故に、その分スピードもパワーも以前とは桁違いに上がった。

だからこそか、俺はコイツらの今の力を試してあげようと、声をかける。

「よし、今日は俺が相手をしてやる。二人でかかってこい」

「えっ、師匠と……？」

「我……ちよつと不安」

その声に反応した二人は、一旦組手をやめ、俺は二人の元へ飛んでいく。二人は流石に俺の相手をするのは気が重いのか、少し落ち込みを見せる。

なので、俺は少しやる気を出させる挑発を試してみる。

「勝て……なんて言わねえよ、どうせ勝てねえんだ。ただ、お前らの今の力を測るだけのことだ」

俺はクイクイと指を曲げて挑発すると、カチンときて二人はやる気を出してきた。いくら力の差があるからといっても、やはりナメられっぱなしは納得がいかないのだろう。

「力を試す……か。よし、いくわよオフィス……今の私達の力、見せてあげましょう」

「うん、分かった」

二人は俺を見据えながら腰を下ろして構える。俺はそれを見て少しだけだが、感心を持つ。

(構えが様になってきてるな……防御にも攻撃にもすぐに転じれるように自分なりにアレンジしたものか)

前まではただブーツとして構えていたオーフィスも若干だが面構えも違う。俺との実力差は歴然と分かっている故か、それとも……本気で勝てるつもりでいるのか？

「はぁあっ!!」

最初はティアマットが正面から突っ込み、その後を追いかけるようにオーフィスが続く。ティアマットは高速連打で両方の拳を放ち、俺は後ろに後退しながらもそれを片手で全ていなす。

一方、オーフィスは俺の目がティアマットに集中しているのを活かして俺とティアマットの周りに自身の残像を複数作りながら動き回る。そして

「フッー」

残像を作り出して背後という死角から一気にストレートの蹴りを放つものの、俺はすでにもう片方の手を背後に回しており、その足を難なく掴む。

「わぁ……」

気の抜けた声を上げるオーフィスの足を掴んだ俺はそのまま放たれたティアマットの拳を今度はガツチリと受け止めた。

「グッー」

ティアマットはその拳を引こうにも押そうにも俺の手はビクともしない。動きが止まった二人のうち、俺はオーフィスの足を掴みながら真下へと投げ飛ばす。

「そらっー」

投げ飛ばされたことで身体が逆さになって急降下していくオーフィス。しかし、これで終わりではない。

俺はティアマットの拳を掴みながら瞬間移動を行う。ティアマットの拳を掴んでいることで奴も同じく俺と同じ場所へと移動をした。

そして、その移動した場所というのは、丁度オーフィスの落下してくる場所だった。瞬間移動は相手の気を察知してその近くに移動できる術だ。故にその落下地点に移動したことで、ティアマットの頭上にはオーフィスの頭が突っ込んでくる形となった。そして

ゴチンッ!

「イッタアアッ!!」

「あいつたーっ」

このように気持ち良くお互いの頭がごっちんとぶつかり、二人は倒れると頭を抱えながら地面をのたうちまわる。

ふむ、ちよつと早いがここで終わるか。

「まだまだ、修行が足りねえな。だが、重力トレーニングのお陰もあつてスピードやパワーは格段に上がっている。後は、気のコントロールを極めることを重視したトレーニングもしておけ。まだ、戦いの途中での気の乱れが見えるぞ」

「はーい……」

その後、二人には別々のアドバイスを施す。

「ちびっ子、残像を作つて惑わすのは良かった。だが、あの蹴りはフェイントを入れることや、あれさえも残像を作るなど工夫を入れてけ。お前は感覚で戦うタイプだから、それを活かし、戦闘では頭で考えるよりも戦いの仕方を身体に慣れさせろ」

「うん」

「ティア、お前はオフィスとは逆で頭で考えて戦う傾向が強い。だからその分、出遅れてスピードが落ちてるんだ。そうならないように、なるべく頭をクリアにしろ。だが、気の扱いや察知はちびっ子よりも上手いからそこを長所にして修行に取り組め」

「分かったわ」

戦闘のセンスはある。才能を開花させ、センスを磨くことを怠らないこの二人はその内、孫悟空達のように強くなるだろう。

そして、二人で俺にかかつてくれば……もしかしたら俺に勝てるかもな。これからも楽しみだ。

▽

修行が一通り終わると、俺は木の下で休みを取っていた。日陰だし、風も気持ち良く感じられるこの星のお気に入り場所の一つだ。

すると、俺の横にティアマトが俺に話しかけてきた。

「ねえ、そういえばレムギツトさんから聞いたのだけれど、師匠って三大勢力を滅ぼすつもりでいるのよね？」

「いつ聞いたのか……まあ、別に隠すつもりもないし、答えてやるか。まあ、現時点では決まってるけど……恐らくそうするだろうな。なんだ、不満か？」

俺は別に怒っているわけではないが、ティアマトは落ち着きながらも首を横に振る。

「いいえ、強いて思うなら……『ああ、ついにこの時がきたか』……って感じかしら」

……まるで予想できていたとでも言いたいようだな。

「確かにね、三大勢力はどこかおかしいと思ってるたのよ。戦争によって純潔悪魔の多くが死んで、出生率も低いことから他の種族に頼らなくてはならなくなった……そこは分かるのよ、仕方ないってことが。そこだけは分かる」

ティアマトは頷きながら言うのと更に続けた。

「問題はその後……その為に魔王達は『悪魔の駒』という、側から見ればものすごい欠陥品を作った。私は魔王に友達がいるんだけど……そいつの名前がアジュカ・ベルゼブブっていうの。アジュカはこの悪魔の駒を、種の繁栄だけではなく、レーティングゲームという娯楽に適応させる為にも開発に組み込ませた」

「レーティングゲームってのはなんだ？」

「レーティングゲームというのは、地球の人間界というチェスというゲームを模した、お互いの眷属を動かしてチームとしての実力を競い合うものよ」

「ほう、それだけ聞くと面白そうに思えるな……それだけを聞けばの話だが」

「師匠も思っている通り、悪魔の駒は使用される者の意志に関係無く悪魔に転生できる。でも、中には悪魔に転生したいなんて思わない人だっているでしょう？そんな人は逃げ出したり、元の生活に戻せと言う場合もある……そうすると、どうなると思う？」



「どうせ、強制的に従わされるか、反逆者として殺されるか……だろ」  
俺の言葉に『それで合っている』と言いたげに目を瞑りながらテイアマットは頷くと、今度は芝生へ寝そべりながら語る。

「確かにこれで種の繁栄は問題ない……けど、力に溺れたはぐれ悪魔になつてしまい、尚且つそれが人間界を脅かすなんて愚の骨頂……各場所で町の管理をしている領主が討伐するにしても、目撃した者や食い尽くされた者やそれに関する記憶を消し去るなんてマッチポンプも良いところ……だから私は盟友であるアジュカに言った。『今すぐ悪魔の駒を廃止しなさい。これはきつと後に災いを呼ぶ代物よ』……と」

「んで、帰ってきた返答は？」

「蹴られたわ……無駄に寿命が長いくせに繁栄に拘りすぎたことで盲目な目になつてて忠告は無駄になった。まあ、それしか手段が無いのならそれでいいわよ……その代わり、私はアジュカが提案したレーティングゲームの重要ポストの就任を蹴ったけどもね」

「ふん、笑えねえ。ほんと笑えねえな。開発担当のそのアジュカつて奴は後先考えないバカつてのが俺が聞いた印象だな」

「でもね、ここから先が笑える話なのよ。あの悪魔ども、悪魔の駒を開発してから何年も何百年も経っている癖に、一向にはぐれ悪魔の問題は解決しない。只々、人間を自分達の種の繁栄として利用しておきながら、反逆したらゴミのように切り捨てる」

しかし、それだけじゃないはずだ。墮天使だって神の作った神器所有者を危険とみなし殺していったり、天使側だって神の不在について信徒を騙してまで信仰を得ようとしている。神器だって所有者が死ぬばまた次の所有者へと移り、また神器狩りが行われる。これが何度も繰り返されているということをおかしくないのか、それとも分かってて放置しているのか……。

「というか、そもそも前提がおかしいのよ。種の繁栄の為の手段とレーティングゲームで有能な人材を確保するのを両立させようっていうのがそもそも間違いよ。良い人材を確保しようと無理矢理悪魔にする奴だっているのだから。まさに悪魔……欲望深く、平和を望

みすぎて研究にのめり込んだ結果がこれよ」

悪魔の駒……ティアマツトから聞くと改めて恐ろしい物だと感じさせられる。流石に俺は奴らとは実力差がありすぎて悪魔になんて転生できやしないと思うが、何も力が無い奴を無理矢理転生させることができると考えたら俺でもゾツとする。

「そして、災いがついに来たのよ……破壊神という名の災いが……まっ、別にアジュカや他の悪魔が減ぼされようが何でもいいわ。もう情なんてないし、多くの悪魔を気にかけてやれるほど私は優しいドラゴンじゃないから」

それを言うとなティアマツトは宮殿へと戻っていく。奴との話は実に有意義だった。後々参考になると思うから頭の隅に留めておこうと俺は決め、次の日の為に今日は早めに睡眠をとった。

▽

それから一ヶ月は経ったか……地球の季節は夏に差し掛かるほどに気温が上がる時期となっていた。周りは半袖の服を着た人間達が町を蔓延っており、俺もそれに合わせて地球の服に着替えて町に躍り出る。

まあ、俺は過酷な環境にも修行で適応していったおかげか、この気温の変化にもあつという間に身体が適応しており特に気にはしなかった。

「ちびっ子とティア、お前達はこの町で何か美味しい物でも自由に食べていけ。こつからは二手に分かれて行動だ」

今日は四人で地球へと降り、俺とレム、オーフィスとティアマツトに別れて駒王町を歩き回り、俺とレムは現在、たこ焼きを食べ歩いてるところだ。

「レム、この店のたこ焼きって美味しいな。かかっているマヨネーズとソースの分量も丁度良くてしつこくないし、更には焼き具合も最高で何個食べても飽きないぞ」

「本当ですねえ……ホカホカで中にあるタコも美味しいです。しかも食べ歩きも容易とは……恐るべしジャパニーズフード……」

この駒王町の食べ物屋はとても美味なものだらけで良い。悪魔やら墮天使やらの存在さえ無ければ、それを作る人間が殺されずに済むのに……どうしたもんかなあ……今回は星全部ではなく、一部を破壊するというシビアな難易度となっている。一思いにやるわけにはいかない故、どう三大勢力を滅ぼそうか悩んでしまう。

俺はそう頭の中で呟き、たこ焼きを食いながら歩き続けるが、それを邪魔する不屈き者がいることに気づいた。

「おい、さっさと出てこい。そこにいるのは分かってんだ」

先程から魔術的なもので俺を後ろから監視のようなものをしてい  
る奴らがいるな。気配が丸わかりだ。

俺はその正体がいる方向に視線を向けた。

(バカな……5km先の私達に気づいているだ?!?)

(嘘だろ……この前もそうだったが、気配を消しているのに……!?)

その視線に気づいたのか、その正体の奴らは観念したかのように俺の前に魔方陣らしきものを展開させて目の前に転移してきた。一人は長髪の紅髪をした男、もう一人は見た目がプリンのようなグラデーシオンがかかった髪の色をしたあの墮天使総督だった。

奴らは俺に対して頭を下げ、謝罪をすると一人一人自己紹介をする。  
る。

「ご無礼なことをして申し訳ない。私は悪魔の王……魔王サーゼクス・ルシファーと申します」

「私はアザゼル。墮天使の総督をやらしてもらっています」

「俺は破壊神ブラン……っていつても信じないだろうがな、どうせ」

自己紹介をするが、それよりも気になるのは、コイツらは気の扱いが下手すぎる。気の内容というものを曖昧に理解して使用している証拠だ。だからすぐに見つかる。今ならティアマツトでさえもすぐに分かるぞ。

「俺をずつつけてたんだろ？要件をとつとてええ」

「……はい」

あの魔王……紅髪の女と顔立ちも似ているし、身内か何かだろう。まあ、別にそれはどうでもいいが。だからなのか、何故か俺に怒りを

ぶつけるような視線を感じる。

「なんだ、身内を批判されたことにそんなにもイラつくか？」

「俺がそう思っていると、魔王は平静を装っている様子を保ちながら口を開く。」

「我々三大勢力は、此度この駒王町でこれからのお互いの関係について話し合いをしようと思っっています。そこで、貴方にも是非、その会談に参加してもらいたいです」

「三大勢力っていつでも天使側のトップがいらないな……まだこの町にはいないのか。」

「まあ、別にいなくてもいいが、恐らくコイツらは、天使側のトップも一緒に俺の所に来るのが理想だったが、神出鬼没の俺がいるうちに早めに話をつけておこうとそいつを待たずに二人で来たのが正解か？」

「へえ、三大勢力の会談に俺も参加して欲しい……ね。何故だ？」

「実は、我々トップはお互いに和平を結ぼうと考えています。破壊神ブラン様から見て、以前より平和な道を歩んでいくという証をその目で見てもらいたいです。どうか、ご検討の程をよろしくお願いします」

「それに、破壊神ってのも本当か分からないですからな。是非、本当かどうかを確かめさせてもらいたいです。理由の一つですよ」

「魔王、総督の順にそう言う。しかし相変わらず、この総督は癪に触る野郎だ。そんな軽い感じで接するその態度が、俺に媚を売ろうと、心のどこかで考えているのが目で見なくても理解できる。」

「んで……平和な道……ね。それがこの地球にとってもいい方向だと願うさ。期待はしないがな。」

「そして、別に俺にこの話を断る理由はなかった。寧ろ、コイツらとは一度顔を合わして話し合うって前々から言っていたからな。」

「ああ、いいぜ。その会談に参加してやる……存分に有意義な話にしようじゃないか。あと、俺が破壊神だったのもその会談の時に証明してやるよ。材料はあるからな」

「分かる。目の前の墮天使総督と魔王の内心がホツとしているのが

目に見えて分かる。表情を変えずともな。

「そのかわり、面倒事は起こすなよ。俺もお前ら如きに多くの時間を割いてやれるほど優しくはないんでな」

「分かっています」

俺の言葉に魔王は返事をする。

この持ちかけられた話は、俺にとってはチャンスでも、得でもない。寧ろ、『コイツらにとつてのチャンス』なんだ。話の内容によつてはいつでも破壊することができるとは知らな。

ああ、実に面白いな。こんな能天気なトップ共の顔を拝むのはよ。その安心感が本当に心から安心できるものになるのか……会談が楽しみな。

話が終わると俺と魔王達は別れる。一応、会談の日には明後日の夜……あのコカビエルつてやつを破壊した場所である駒王学園という場所で行われるようだ。

「ブラン様、自身を破壊神だと証明すると仰りましたが、如何します？」

レムの問いに俺は残った一つのたこ焼きをパクリと食べると、迷わず答えた。

「師匠を……『先代ブラン』をここに呼ぶ。あのジジイさえ見れば流石に奴らも信じるだろう」

「かしこまりました。ならば、明日にでも呼びに行きましようか」

師匠に会うのも随分久しぶりだ……ついでにお土産も持って行く。

俺はそう決めると、オフィスとティアマットを迎えに行こうと歩みを進めた。

▽

三人称 side

一方、ブラン達がサーゼクスと会う何時間か前の頃……オフィス

にとって、とある『再会』が訪れた。

オーフィスとティアマツトはブラン達と別れると、お互いに仲良く食べ歩きを満喫していた。もう、自身の目的であった次元の狭間に帰るといふことも忘れているのか、オーフィスもブラン同様日本の文化を楽しんでいたのだ。しかし

「オーフィス！貴方、今までどこほつつき歩いていたのですか!?!さっさと帰りますよ!!」

その途中、何やら『褐色の顔色をしたメガネをかけた女性』がオーフィスを見て怒鳴るように話しかけてきた。

(あー、コイツ……分かる、分かるのよ……!でも誰だっけ……分かるらない!思い出せない!!)

ティアマツトは見たことのある顔をしたこの『褐色のメガネをかけた女性』を見て誰か誰かと頭を抱えて思い出そうとしている。

彼女の名前は『カテレア・レヴィアタン』。悪魔であり、旧魔王と現代の悪魔に呼ばれている者である。更には、以前オーフィスがトップとして君臨していた『禍カオス・ブリゲードの団』というテロ組織の旧魔王派という派閥の一員でもある。先の戦争を再び勃発させようとしている旧魔王派は、現魔王に悪魔界を追放された存在であり、今はそれらを見返して自らが魔王になる為に禍の団に入っている身だ。

ブランの介入によつて禍の団からオーフィスが抜けたということを知らないカテレアは、そのオーフィスをやっと見つけたと喜び、彼女を連れ帰ろうとするが、今のオーフィスにとっては迷惑行為である。

しかし、オーフィスが独断とはいえ禍の団を抜けたのは何ヶ月か前の事だ。しかも、オーフィスはそのメンバーは、ただ自分に協力してくれる手駒としか考えていなかった為、信頼という涙ちよちよ切れる関係などでは無かった。故に

「……誰?」

最早、オーフィスはこの褐色の女性ことカテレア……つまり、禍の団のメンバーの顔を半分以上忘れていたのだった。

## 第18話 決別

三人称 side

ブランがサーゼクスとアザゼルと会う数時間前の話。

地球で食べ物で満喫していたオーフィスとティアマットの前にカテレア・レヴィアタンが現れた。ティアマットは先程購入したと思われるココナッツミルクをストロー付きの容器で堪能している。それと同時に、目の前のカテレアの名前を覚え出そうと必死に頭を働かせて記憶を呼び起こさせる。

(カ……カテ……ここまでは思い出せるのよ……！何で分からないのおおおっ!!)

すると、オーフィス以外にティアマットの存在に気づいたカテレアは彼女を凝視すると、ボソツと呟くように言う。

「……その青い髪にドラゴンのオーラ……まさか、カオス・カルマ・ドラゴン天魔の業龍……ティアマットですね」

「へっ？あつ、ま、まあね……？そういう、貴女……悪魔よね？でも名前が思い出せないのよねえ……誰？」

久し振りに異名を呼ばれたせいか、少し驚くティアマットに対し、カテレアは名前が覚えられていないことに不服なのか、声を荒げる。

「な!?!この私が分からないとはどういうことなのですか?!いいですか?!私の名はカテレア・レヴィアタン!!今現在、最もレヴィアタンの名に相応しい悪魔の名です!!どうです?!思い出せましたでしょう!!?」

「ああ……そういうえばそんな名前だった」  
「あ、貴女達い……!!」

何かオーフィスやティアマットにバカにされているような雰囲気を感じたカテレアは拳をワナワナと震わせる。すると、ティアマットは何か気づいたのか彼女に質問をする。

「あつ、貴方、現時点では悪魔界に追放された旧魔王って扱いじゃない。あまりここら辺うろついてたらずいんじゃないの？」

「黙れ！我々にとつて、旧魔王と呼ばれることすら汚名なのですよ！闘争本能さえも消え、ゆとりに浸っている現魔王こそが腐っているだ

けです!!」

「ふーん、あっそ」

そうカテレアは憤慨するものの、ティアマットにとってはどうでもいいことであり、内心では『どっちもどっちね』と結論付けて、早く話が終わらないかと心の中で毒づく。ブランの元で修行を続けていたせいか、こんな面倒な話で時間を持て余して身体を鈍らせるならば、いつそ今から修行していた方が時間を潰せそうだと思うほどだ。(というか、割と気づかれないものなのね。この町にいる悪魔がカテレアの存在をキャッチしているかと思っただけど、周りにはそんな気配もない……監視している様子もないことから、そもそもこの町にいることすら気づいていないようね。まあ、所詮はその程度の実力者ってことかあ……)

ティアマットが一人で周りの状況分析をしている間、カテレアはオーフィスに詰め寄ると、ヒステリックに近い感じで叫ぶ。

「オーフィス！何故帰ってこないのです!?! 貴方が禍カオス・ブリゲードの団のアジトから抜けて行方不明と聞いて探し回ったのですよ!?!」

「はあ……オーフィス、アンタそんな組織入ってたの?」

「うん、我、グレートレッドを倒すために色々な奴ら誘った」

「うわっ、迷惑だからやめなさいよ。それに、グレートレッドなんかそうそうお目にかかれるものじゃないのに(そもそも、こんな奴らと手を組むなんて良からぬことしか起こらないでしょ……)」

「どうして!?! 貴方は次元の狭間に帰るために我々に力を貸すと言った! それに対して私達も貴方に協力するという関係を結んだ! 我々は貴方にとって大切な存在で、貴方は私達にとっても大切な人! 貴方の望むものは禍の団にこそある! さあ、一緒に戻りましょう!?!」

「……」

オーフィスはカテレアに自身の居場所を与える……という感じに言われているように感じた。ここでカテレアの言う通り、禍の団へと帰ることだって出来る。しかし、禍の団を作ったのはあくまで自身が故郷の次元の狭間へ帰るため、グレートレッドを倒す戦力を集めるためだった。



だが、今のオフィスにその気持ちはあるのか？それを彼女自身は自問自答しながら考え込む。恐らく、初めてかもしれない。本能のまま、自由気ままに行動して来た時とは違い、オフィスは生まれて初めて長い時間をかけて思考を行っただろう。

そして、その答えは出た。

「……違う」

「えっ？」

ティアマツトはオフィスの眩きに眉をピクツと動かして驚きの表情へと変わる。恐らく、以前のオフィスなら、カテレアの口車に乗せられていたと思われる。しかし、今の彼女は誰の助言も無しに否定をして見せた。

「我、考えた。ししよーと一緒にいて、考えることを覚えて、答えを出すことを知った。そして考えた。お前達が欲しかったのは、我という後ろ盾。決して友達になりたいなどという親切的な気持ちで引き受けたんじゃ無い」

「ツー」

ただ、世界を混沌に導く目的があるカテレアにとって、オフィスの願いなどただのおまけとしか思っていない。それを見透かされたように、淡々と指摘されるカテレアは思わず表情を歪ませる。

「それに、グレートレッドの足元どころか、鱗一つすら及ばないお前達が、どうやってグレートレッドに勝つ？」

「そ、それはー貴方の蛇がもっと大量になれば!!」

「それは無理。もし、大量の蛇を取り込んだとして、それに耐えうる器がお前達にあるはずがない。今の強くなつた我の蛇をちよつとでも取り込めば、今度は肉体どころか魂までも無限という力に喰われるだけ……それに、もう蛇を渡すつもりもない。はつきり言って、お前達じゃグレートレッドには絶対に勝てない。蛇で強くなることしか考えてないなら尚更。無駄に命を捨てたくないならやめておいた方がいい」

「ふ、ふぎけるな……！散々、自分勝手に我々を招集しておいていざ協力しないなど!!ならば、私達はどうすればいいのです!?!そんな勝手

が許されると思いですか!？」

その言い分は最もである。学校の部活で例えるならば、創設者である部長がいきなり、その部活を辞めるようなものだ……それはあまりにも無責任なことである。

オーフィスも、それは分かっているわけで、ただ一つ、謝罪をした。「だから、ごめん。協力してくれようと禍の団を作って、メンバーを集めてくれたことには感謝する。でも、我にはもう……必要がなくなつた」

オーフィスはこの瞬間、本当の意味で禍の団との決別を果たした。その言葉に、カテレアは目を丸くして驚く。

(……何だ、私は何を見ている？今、自分の目の前にいるのは本当にあの無限の龍神だというのですか?)

カテレアは困惑する。他人に謝るオーフィスなど、今まで自分が見てきた彼女とは全く違う。別人を見ているかのようだった。かといって、ここでオーフィスを手放すのははつきり言つて禍の団にとつては大きな痛手となる。それを阻止するため、無理矢理にも連れていきたいのは山々だが、それを成功させるための実力は無いとカテレアは分かっているつもりだ。

(しかし、私達には前もって渡されたオーフィスの『蛇』がある！それに、最近、禍の団に加入した『白龍皇』もいる！これならば、後に行う三大勢力への襲撃は成功するはず……！)

故に、カテレアは諦めることにした。オーフィスという後ろ盾があることを隠し通す気であるようだ。

「……分かりました。これ以上は何も言いません。しかし、この事は口外しないことをお願いします。……それだけでいいです」

カテレアはオーフィス達に背を向ける。その背中はどこか憤怒を感じさせるものはあつたが、決して爆発させないように堪えているような感じであつた。

(……コイツ、向かってくるだけの単細胞じゃないだけまだマシね。引き際はわきまえてるつてところかしら)

ティアマツトはそれを見てカテレアをそう評価すると、持っている

ココナツツミルクが入った容器のストローを啜えて再び飲み始める。  
カテレアは渋々、魔法陣を展開してこの場を去り、オーフィスと  
ティアマツトは再び歩き始める。

「いいの？これで」

ティアマツトは歩きながらそう聞き、オーフィスは答える。

「……うん、善意ではないとはいっても、カテレア達は我の為に集まってくれた……だから、我は何もしない。それに、ししよーとティアマツトともつと一緒に居たいから。我の知らないこと、もつと知って見たいから」

またもやオーフィスの言葉に驚愕するティアマツト。オーフィスはこの世界で孤独だった身で、その孤独を紛らわせてくれたのが、破壊神であるブランだった。

「……まっ、他人に流されずに自分の意見を言えただけでも、進歩してるんじゃないの？はつきり言って、昔とは大違い……いつか、『無意識に歩く破壊兵器』となるんじゃないかと心配だったけど、そうならなくて良かったわ」

ここでオーフィスは気づく。ティアマツトはオーフィスの意思を尊重しようとし、敢えて何も助言をしてくれなかったということに。それに対してオーフィスはお礼の意味も込めて、ティアマツトの手をそつと握った。

「……ありがとう、ティアマツト」

「ちよっ、やめなさいよバカ……アンタからお礼を言われるなんて恥ずかしいのにも程があるわよ……」

以前は関わることなど殆ど無かった二人ではあるが、ブランの元で一緒に過ごして来たお陰か、二人の間には一つの繋がりが出来ていたようで、特にオーフィスはその『繋がり』を大切にしているかのようだった。

オーフィスとティアマツトはまた食べ物を満喫しようとしたが、ここで二人は『ある存在』が自分達を見ていることに気づく。その方向にチラッと視線を動かしたティアマツトは、歩きながらその存在の中にある白龍皇のドラゴンのオーラも感じ取った。

(あれで気を完全に隠していると思つてゐるとは……まだまだね。それに、アルビオンも墮ちたものね……ドライグとのくだらない喧嘩に拘つて、神器に封じられようともそれを未だに成し遂げようとするなんて見苦しくて見てられないわよ。アンタが別にどうしようも勝手だけど、恐らく……早く、その宿主から抜け出さないと……本当に死ぬわよ)

誰かに見られていることに気づいたティアマツトとオーフィスだが、彼女達は敢えて気づいていないフリをしてそこから立ち去る。その相手が最早、自分達の脅威にならないほどに力の差があることを戦う前から察したからである。

その一方で――。

(アザゼルに破壊神を会談に呼ぶと言つたが、この事をカテレアに言つてしまうとビビつて襲撃が中止になってしまう可能性もあるから黙つておこうか)

白龍皇であるヴァーリは、先程のオーフィスとティアマツト、カテレアの様子を遠くから見つめていたのだ。以前、コカビエルが死ぬ直前、ブランに触れられることもなく一方的にふつとばされた彼ではあるが、その闘志は衰える事などなく、寧ろリベンジを果たそうと思つており、カテレアと同じく禍の団へと加入。ブランのリベンジも視野の一つにいれているが、彼の本当の目的は『アボカリユプス・ドラゴン真なる赤龍神帝』、『真龍』、『D×D』と称されるグレートレッドを倒し、自身が白龍神皇の称号を得るためである。

ここで彼のフルネームを明かそう。彼の名は『ヴァーリ・ルシファー』。先代ルシファーという、悪魔界においても圧倒的な魔力を身体に内包している者の血を引いている。故に、その才能、神滅具の強さ……正に、偶然の奇跡というものが重なつたと言える彼の強さは、『歴代最強の白龍皇』と呼ばれるほどである。

勿論、だからといって、誰相手でも必ずしも勝てると思つたほど彼は自信過剰ではない。上には上がいることを自覚しており、いつかブランさえも追い抜かそうという気になつている。

が、彼は大きな勘違いをしている。そもそも、彼は今まで、神器の

扱いについて学んできただけであり、本格的な訓練や修行などはあまりしたことはない。それでも、才能がありすぎたせいかな、この地球ではそこそこの実力者といえるほどに値する。

彼の勘違いしていることは、『ブラン相手にその内時間をかければ実力が追いつく』と思っっていることである。神器、才能、それらをもつと磨けばブランに追いつけるだろうと思っっているのだろうが、それだけでは到底彼の足元にも及ばない。ブランは、破壊神になるまでも数十年、先代ブランの元で強さを磨いてきた。戦闘センスもある。それらを極限を超えるほどに伸ばし、磨き、今の強さに至ったのだ。そんな彼に、今のヴァーリが修行をしたとはいえ、簡単に追いつけるものなのだろうか？いや、当然の如く追いつけるわけもない。

これはヴァーリ以外の神器所有者、神々、悪魔、墮天使の実力者にもいえることだが、彼らは『鍛える』、『特訓』、『修行』などという類のことをするのは非常に稀なのである。

理由は、『元々、自身にある強い力を持ってしまっていた』から。その分、心に油断を持ってしまいがちになる。

ここで、現魔王である『サーゼクス・ルシファー』を例として挙げてみる。彼もこの世界では『超越者』と言われる神々も恐れるほどの力を身に秘めている。しかし、それは決して修行などと言った類で生まれたわけではなく、『自然にそんな力を持っていた』だけに過ぎない。しかし、サーゼクスはそれ以上の絶対的な力を得ようとはせず、自身の妹の成長を楽しみにしているだけで、今もその眷属であるイツセーを筆頭に強くなってくれたいことを願っているだけだ。

確かに、圧倒的な才能があれば多くの凡人を上回ることなど、そう珍しくはない。サーゼクスも、自身の強さに自信を持っていたからこそ、鍛錬など必要無いと判断したのでだろう。

しかし、ある人は言った。

『落ちこぼれだって、必死に努力すればエリートを超えることもあるかもよ』

そう、実際にその人物の言う通りだった。圧倒的な力を誇っていたエリートをその人物は絶え間ない努力で抜いたのだ。

努力は決して裏切らない……と言う言葉は、第三者から見ると、何かと嘘に感じられるかもしれない。だが、それでもその人物は可能性を証明することは出来たのだ。そして、鍛錬という概念は、この地球の実力者の心に最も欠けているものであり、弱点。

結論的に何が言いたいのかと言うと、『生半可な気持ちと修行では破壊神に追いつくことなど不可能』……もう少し砕いて言うと、『自惚れるな怠惰な者達』。神の気を読み取れる神々ならばともかく、三大勢力やドラゴンなどは、まず、破壊神との本当の実力差を理解することに専念するべきなのだ。

そして、今のヴァーリがブランに追いつく可能性があるとするならば、それはもつと未来のことになるだろう。それは勿論、絶え間ない修行をしたという前提があれば……そして、それまでに彼が生きていればの話であるのだが。

後に、彼らは……三大勢力は知ることになるだろう。

自分達がどれだけ狭い世界で『強者』と名乗っていたのかということ。

## 第19話 先代様に会いに行きます

三人称 side

「この星にいるんだ……先代様って」

そう呟くのはティアマツト。横にはオーフィスとブランとレムギットといういつもの四人が揃っているが、今回、彼らは地球からもブランの星からも遠い星へと足を運んでいたのであった。

「惑星ナッツ……相変わらず緑が多い星だな……」

ここは『惑星ナッツ』。主に農業が発達した星であり、温厚な星人達が暮らしているのどかな星である。ブランはこの地に流れる空気がとても心地いいのか、口元が少し緩んでいた。

「そういえば、私達は来なくても良かったんじゃない……」

「いや、ついでにお前達の顔も師匠に見せておきたかったからな。まあ、ちびっ子は以前見たことがあるようだし、一応覚えてるだろう？」

オーフィスはその問いにコクコクと頷く。

今日、ブラン達がここにやってきた理由は、先代ブランに地球で行われる三大勢力との会談に参加して欲しいが為に同行をお願いしてきたのだ。

「我、ドキドキしてきた……」

オーフィスはまたぶっ飛ばされるんじゃないかとヒヤヒヤしている。

「わ、私も……」

一方、ティアマツトは初めて会う為か典型的な緊張。

いま現在、彼らがいるのは大きな山のふもとと辺りであり、ティアマツトとオーフィスはこの上に先代ブランがいると思うと緊張が高まってしやうがなかった。

「さて、行きましようか」

レムギットは、そう言うのと前方に手をかざして何やら念をこめた。すると、そこは先程まで視覚には現れていなかった紫色の結界が張っていて、レムギットはその結界を壊さず、正面に穴を開けたのだ。

四人はその中に入り、彼の……先代ブランの領域のスタート地点へ

と立った。しかし

「あれ？飛んでいかないの？」

レムギットが自ら先導して飛ばない辺り、もしかして歩いていくのかと思ったティアマツトだが、その予想は外れではないようだ。

「この先は結界で守られているのですよ。無闇に空を飛ばうとして侵入して進んでしまうと、不法侵入として扱われます」

「……因みに、そうなった場合どうなるの？」

ティアマツトの問いに、ピクツと反応したレムギットは口角を上げて意味深な表情でこう答えた。

「……それは、聞かない方が良いかと……」

その瞬間、オーフィスとティアマツトは自身の顔が青ざめ、血の気が引いて行くのを感じた。一体、どれだけ危険な破壊神なのだろうかと緊張しながらレムギットの話を聞く。

「ここからは、私が事前に知りうる正規のルートを通って歩いていくのですよ」

「……いや、歩いていくって……」

「……高い……」

ティアマツトとオーフィスはその山の山頂を見ようと顔を見上げる。しかし、いくら見ても頂上が見えないのだ。ティアマツトは地球にある山で一番標高が高い山、『エベレスト』を見た事があるが、これは最早それすらを超えるものであり、飛ぶのではなく歩くとなれば相当の気力を消耗するだろうと確信した。

「オーフィス、アンタ無限の体力あるんだから羨ましいわよ」

「我の蛇、飲む？」

「それは死んでも嫌」

「ほら、無駄話しないで行くぞ。飛んではダメだが、走ってはダメとは言っていない……つまり、分かるな？」

そのブランの言葉にオーフィスとティアマツトはハツとなると、突如、身体を伸ばしてアップを始めた。そして

「なるほど……つまり……」



競争!」

「その通りだ……行くぞ!!」

ブランと共に、オーフィスとティアマツトは全力で山登りをスタートした。そして、その背後にはレムギットがおり、笑顔を絶やさずに軽快に後をついて行くのであった。

いや、その言葉には語弊があるので訂正しよう。彼女は彼らを一気に『追い抜かして』いくのであった。

数時間後

「ぜえ、ぜえ……何とか……ついていけた……!」

「そういえば我とティアマツト……ルート、知らなかった。ついていけてなかったら迷ってた……危なかった」

「……まあ、上出来だな」

山頂付近まで到着し、ブランが足を止めると二人も止まって休憩を取る。ブランは汗は少しかいているものの、まだまだ余力は残っている様子だ。

「とうか、レムギットさんは何で私達の先にいるの!?!」

「オホホ、まだまだスピードが足りませんねえ」

ブランよりも先に走っていたレムギットは未だに余裕の表情を崩していなかった。

「ほらほら、あともう少しですよ」

レムギットの声に応じ、今度は四人一緒に歩きながら進んでいく。雑談を交わしながら

「あつ……もしかしてあの人が先代様?」

「ん?どれどれ……あつ!?!」

山登り終盤、ふと目線の先を歩いている人物の姿があった。その人物は、山のとっぺん付近という気温の低い場所だというのに短パンに

アロハシャツを来ており、白髪に口の周りを覆う程の髭をもつきりと生やした小さな老人であった。

「散歩中……なのかな、あのお爺さん」

「あつ……我、あの顔知ってる……」

「えっ!? ってことは……」

「そうです。ティアマツトさん、あれが先代様ですよ」

「ええっ……?」

レムギツトの言葉にティアマツトは、『イメージと違う』と呟いた。こんな山奥に住む人など一人しかいないと分かっているブランは、その先代ブランの元へ駆け出していく。

「……むっ!」

どうやらその人物もブランの気配に気づいたようだ。

「師匠く! 久し振りじゃねえかー! っ!! 元気にしてつかー! っ!!」

ブランは久し振りに会ったせいかわ、大声を上げながら接近する。すると、先代ブランはハツとなって口を開く。

「おお、お前さん!」

「……誰じゃ?」

「ダハーツ!」

あまりの間の抜けた反応に、その横をブランは思わずヘッドスライディングするように転ける。急いで立ち上がると、先代ブランの

「ブラン! ブランだつての! ほら、旧名『ヴェルドラ』! アンタの弟子の!」

ブランは先代にそう言うと、彼は思い出したかのようにポンと右拳を左掌に打ち付けた。

「おー! ヴェルドラか! 又ハハハツ、すまんすまん、この歳になるとボケてしまつての!」

「お久しぶりです。先代様」

「むむつ、レムギツトも久し振りじゃな。それにしても、相変わらず小さいのー！アツハツハ!!」

「それよりも先代様、私達がふもとに来る辺りから存在は感知出来ていたでしょう。忘れたフリなんて、お茶目なところは変わりませぬね」

「ホホホ、バレておったか」

「チツ、結局気づいてたのかよ……」

（大丈夫かな……）

後ろからその光景を眺めていたティアマツトはこの和やかな雰囲気気に馴染めず、苦笑いしながらそう思う。

すると、先代ブランは後ろにいたティアマツトとオフィスに気づき、声をかける。

「お主らは誰じゃ？」

「我、オフィス。地球に住む師匠の弟子。よろしくお願いします」

「同じく弟子のティアマツトです。よろしくお願いします。先代様」

軽くお辞儀をして簡潔に挨拶をすると、弟子という言葉に驚く。

「なんと！ヴェルドラの弟子とな!?又ハハハツ！これは面白いではないか！ヴェルドラ、しっかりと指導してやるがいい」

「あいよ〜」

ブランは軽く返事をする。すると、先代は今度はオフィスに視線を集中させる。

「およつ？そちらのちびつ子の……オフィスとやらじゃったな。お主から感じる気……何処かで……」

まるで覚えがあるかのように聞いたその先代の問いにはレムギツトが答えた。

「先代様が地球へ足を運んだ時、しつこく何か要求してきた老人がいらしたでしょう？それがこのオフィスさんですよ」

「おお、あの時のか……ふむ、前にあった時よりも相当鍛えているようじゃな。感じられる気も随分と澄んだものになっておるし、いいことじゃ」

「あ、ありがとう」

あの時とは打って変わって褒められたことに素直に嬉しくなったオーフィスは、心なしか口元が緩んでいた気がしたが、それを彼女自身は気づいていなかった。

先代ブランは次に初めて見るティアマットを見る。長い蒼髪、スリムなボディに目を通し、最後に目に行くのは、彼女の豊満な胸であった。

「ほほう……」

「ちよつと、目がいやらしいんですけど……」

やはり、男の目にはどうしても焼き付けられてしまうのか、胸をジーツと見つめてしまう先代ブラン。それを見て、ブランは彼を嗜める。

「はあく……ジジイ、その辺にしておけ。困ってんだろ」

「おつとすまん、どうもこんなナイスボディな女性を見るのは稀での。思わず見とれてしまったわ。しかしこれじゃあ格好がつかんわい」

そう言い、ちよつとした戒めのように先代ブランは自身の後頭部を軽く叩く。先程の行動は、この星であまりにも一人で生活していた時間が長かったせいかな性欲にも飢えていた……と言つていいかもしれない。

ティアマットはそれを見て困惑する。先代の破壊神に会うという緊張もあった為か、これからどう発言していいかも分からなくなってしまい固まってしまった。すると

「ほっほっほ、にしてもなかなか良いボディじゃのう……相当なべつぴんさんじゃし、お主、全宇宙ミス・コンテストに出てみんか？」

「ちよつ、ぺっぴんだなんてそんな……ことないわよお〜！」

「嬉しそうだなー……まっ、そんな大会ないけどな」

「ガーン！だ、騙された……」

ブランの淡々と言われた真実に口を開けて大きさに落ち込むティアマットに、先代ブランは笑いに耐えきれずに自身の片膝をバンバンと叩いて面白おかしく笑っていた。

「フェツフェツフェ……！軽い冗談じゃ。しかしどうじゃ、緊張は晴

れたじやろ?」

「あつ……えつ、ええ……ありがとう……ございます?」

ティアマツトは彼の言葉にいつのまにか乗せられていたが、そのお陰かその緊張もどこか晴れていたことに気づく。

「又ハハハハツ!別に敬語なんぞいい。何、弟子の弟子……孫弟子にあたる者が出来たんじや。気軽にお爺ちゃんと呼んでもええぞー」

「は、はあ……」

ティアマツトから見た印象としては、先代ブランは温厚なお爺さん……と見えたかもしれない。あまり破壊神らしい強面なイメージを予想していただけに、貫禄は今のところ感じられなかった。

一方、オーフィスは初めて彼に会った時に、これだけ温厚な彼を少し怒らせてしまったのかと、今自分の命があることに奇跡を感じた。

(我、生きてるんだ……生きてるって幸せ)

▽

その後、先代ブランはブラン達を自分の住む家に案内する。一人で住む為か、そこまで大きくはない小屋のような家に全員入り、テーブルを囲んだ椅子へと座る。

「先代様、これはお土産です。饅頭というものですよ」

「おお、ありがとうレムギット。ほうほう、これは美味そうじゃ……地球の食べ物も見ないうちに進化したものじゃ。まっ、これは後で食べようかの」

レムギットは杖からお土産用の饅頭を取り出すと、それを先代ブランへと渡す。喜ぶ先代ブランはそれを部屋の隅にあるタンスの上へと置く。

すると、今度は台所へと移動し、何やら作業をして数分後……湯気の出た暑い液体が入ったコップを持ってテーブルへと持っていき、それをオーフィスとティアマツトの前に差し出す。

「ほれ、この地で採れた茶葉で作ったお茶じゃ。飲むがいい」

「あつ、ありがとうございます。いただきます」

「いただきます」

ティアマットとオーフィスは出されたお茶を一口飲む。すると、二人はカツと目を見開き、まるで突然目が覚めたかのように視界がクリアとなる。

「美味しい……地球のお茶とはまた別の苦味がある……それに、凄く飲みやすい」

「苦い、おかわりー」

出た感想の違いはあれど、美味しいということに変わりはない。オーフィスも気に入ったようですぐさま飲み干してしまいらお代わりを要求する。そして、それを快く茶を入れてあげる先代ブランは言う。

「気に入ってもらえて何よりじゃ」

そう言い、再び椅子へと座ると、先代と現代の破壊神二人の雑談へと入る。

「いやー、それにしても元気そうで良かったぜ。まだまだ身体は動かせそうだな」

「そうじゃな。まだまだ元気はある。破壊神の仕事だつてその気になれば出来るぞい。どうじゃ、また見習いに戻ってみるのは」

「はっ、冗談言うなつて。ちゃんと仕事はこなしてるつての。まあ、身体が鈍って仕方ねえがな」

話を聞いているティアマットとオーフィスにもはつきり分かる。年老いても、この先代ブランは自分達よりも遥かに強いということ

を。  
「どいつもコイツもつまらねえ……自分で言うのも何だが、俺は強くなりすぎた。でもよ、最近面白いと思えたのが孫悟空つて奴なんだ。俺と同じサイヤ人のな」

「ほう……ビルスから聞いた話じゃと、第7宇宙のサイヤ人はこの宇宙のサイヤ人と同様、滅びたと聞いたんじゃが」

「……まっ、俺と同じ生き残りつてところだろ。アイツやベジータつ

て奴は同じ超サイヤ人ブルーになれるらしいし、その内破壊神を超えるかもしれないなあ……今度やる時が楽しみだぜ」

「かあく、サイヤ人は血の気が多いのう。破壊神の方がよっぽど生易しい心を持ってそうじゃ」

「どうだろうな。破壊神だつて血の気が多い奴ばつかなんじゃねーかな。ビルスとシャンパだつて顔を合わせる度に喧嘩しそうだろ。ハツ、全くアイツらバカだよなー、喧嘩する度にウイスとヴアドスに窘められて、学習しない奴らだぜ」

「ヌツハツハ、お前さんよりかはマシじやろ単細胞が」

「は?」

「ん?」

そこで、沈黙してから2秒。

(……えっ?なにこの空気……なんか、上手く言えないけどヤバい気がする……)

ティアマットは冷え切ったような静けさにダラダラと汗を流す。ただ、今言えることは、この空気に逆らわず、巻き込まれないように絶対に喋ってはいけないということだけだった。

そして、その沈黙を遂にブランが破る。

「……まあ、あれだよな。アンタも元破壊神だけどき、こうやって落ちていて隠居生活するのも案外楽しんでんじゃないのか?」

今の沈黙からは考えられないほど、ケラケラと笑いながら会話を再開し、それに対して同じく笑顔で先代が返す。

「そうじゃな。畑耕して、時々山のふもとにいる小童達と戯れるのも楽しいぞい。前は飴ちゃんなんか授けてやったのう」

「へえ、案外優しいところあるじゃん。てつきり、ここらでお山の大将  
気取って威張り散らしているかと思っただぜ」

「ヌハハ、ワシほど優しい破壊神なんぞ他にはいないじゃろ！お前さ  
んは忘れん坊じゃなあ！」

ティアマットはホツと息を吐く。『何だ、仲が良いじゃん』と思い、  
先程の間を置いた微妙な空気は気のせいなんだと安心感を得た。し  
かし

「あはは、何言っただ頭大丈夫か？」

「あん？」

「あ？」

　　またもや沈黙が流れていく。聞こえるのは、オフィスが茶をズズ  
ズツと飲む音くらいである。ティアマットは、こんな時でも呑気でい  
られるオフィスが羨ましく、どこか尊敬の眼差しを向けていた。そ  
して

「あっはっはっはー！」

「ヌツハツハツハツ！」

　　元破壊神と破壊神がお互いに高笑いをする姿に、和やかな雰囲気は  
ない。二人の間にはとてつもない火花が散っていることにティア  
マットは気づき、レムギットも額に手を当てて『やれやれ』と呟く。そ  
して、ブランと先代が立ち上がると、ブランは親指をグイツと玄関の  
ドアの方へと向けて言う。

「表出ろよクソジジイ」

「よかろう」



その後は無言になり、ブランを先頭に二人は外へ出ていく。するとその瞬間

ドゴオオオオオオン!!

「ひいっー」

家の中だというのに耳が荒むほどの轟音が響き、ティアマットは両手で耳を塞ぐ。慌てて外へ出ると、その上空でブランと先代が肉弾による戦闘を繰り返していた。

「てめえこのクソジジイ！今日こそはそのすまし顔崩してやらあ!!」

「ハハハアッ！やれるものならやつてみる小僧がアアアッ!!」

まるで不規則に動く流星の如く、素早い動きで上空を駆け回り、攻撃がぶつかり合うたびに二人は徐々に上へと舞い上がっていく。

「ねえ、あれって止めなくていいの?」

地上からその様子を見ているティアマットは未だにお茶を優雅に飲んでいるレムギットにそう聞き、レムギットは然程変わらない様子で淡々と答える。

「オホホ、あのお二人は再会するたびにあんな感じですから。心配はご無用ですよ」

「あつ、いや、それよりもこの星が保つのかなー……つて」

「それについても大丈夫です。本来、破壊神と元破壊神の戦いなど宇宙全体が崩壊する恐れがありますが、辺りには私が張るバリアがありますし、問題はないかと」

「へえ……ん?」

ここでティアマットは考える。レムギットはブランに仕える天使である。そして、上空で戦っているのは前に仕えていた先代ブランもいる。単純に計算しても、破壊神二人分の戦いの余波を完全に防ぐことのできるバリアを張れるなど、余程のことであると気づいた。

「レムギットさん……貴方、ただの使用人つてわけじゃなさそうね」

「あら?言ってみせませんでしたか?私、あの先代様の師匠なんですよ」

「はあああっ!?!」

これに対してはオーフィスも驚いたようで、レムギットに問う。

「レムギット……師匠より強い?」

「オホホ、それは勿論……数字で強さを表せば、今の貴方方が1くらいだとして、ブラン様が10、先代様が12、私が15といった所でしよるか」

ブランが10だとすれば、単純に今のオーフィス達、二人の力を合わせた全力でブランの1割程の力を引き出せるということになる。それでもまだ1割しか到達していないことに先は長いとため息を吐く二人。

そして、ティアマットはそのブランよりもはるかに強いレムギットに問う。

「レムギットさん……貴方って何者なの……?」

それに対して、レムギットは思わせぶりな表情でこう答えた。

「フフフ、レムギット……という生命体でしょうか」

答えの意味がよく分からずにいたその瞬間、ついに決着がついたのか、誰かが地面へと墜落してきた。

ドガアアアアン!!

隕石のように落下してきたその人物は、体全体が地面へと埋まっており、身動きが取れない状態にあった。

「ヌツハツハツハ！ワシの勝ちじゃな!!まだまだやのうヴェルドラ!!」

その後地上へと降り立ったのは、先代ブランだった。要するに、先程地面へと墜落してきたのは……言うまでもなくブランであった。

「ち、ちくしよ……年老いてもこれかよ……」

地面に深く埋まったブランは、何とか地上へと這い上がるが、まだまだ先代の力には追いついてないことを自覚し、悔しさに唇を噛みしめる。

「因みにあの二人……お互いまだ3割程度の力でしか戦ってません」

「さ、3割……あれで……?」

「わー……」

追い討ちをかけるようなレムギットの言葉にもはや言葉が上手く出ないティアマットとオーフィス。師弟の些細な喧嘩はここで幕を閉じ、全員再び家の中へと入る。

落ち着いたところで、ブランは今回ここへきた目的を先代ブランに話す。多少、足を運ぶことになるが、ブランは先代にも地球の三大勢力の会談に参加して欲しいと懇願する。

「それで、ワシにその会談に出て欲しいとな？」

「ああ、めんどくさいと思うが、ここは一緒に来てもらいたいんだよ」

そうブランが言うが、先代は苦い顔をするばかりであった。

「はー、本当にめんどくさいのう。しかも、会うのはあの時、戦争していたバカ共じゃろ？そして、その内容が和平じゃと？……くだらない。お互い多くの犠牲者が出た中で、いきなり仲良くしようなどと頭がお花畑な奴しか思いつかんわい。どうせ、それに反対するものも多いいじゃろうよ。和平を成功させたとしても、瓦解するのも時間の問題じゃな」

「ふーん、なんだか俺よりも三大勢力に詳しいんじゃないか？」

「奴らがドンパチやっていた戦争を側からつまらなそうに見ていたから。……クソレベルの低い戦争で思わず笑ってしまっじやったが……それでも、『期待』はしていたんじゃないよ。まあ、その様子だと何にも変わっちゃいないようじゃな。期待外れもいいところ……か」

「……期待？奴らの何に期待してたってんだ？」

ブラン自体は、三大勢力に期待することなど何もなかった。ただ人間レベルの低い彼らを、そのまま始末することしか考えていなかったが、先代は別だった。大昔、彼らが戦争をしていた頃に、彼らに何かを期待していた……しかし、先代はその真意を喋ることなく、只々会談に出ることを渋っていた。

(……そうだ)

流石に動かないかと諦めていたが、ブランはあることに気づいた。先代はこのところ地球の食べ物に飢えている筈だと。

先代とはそう多くない頻度で会っているので、地球の食べ物にありつけるのもそう多くない。今日渡したお土産も、その地球の食べ物のほんの一部であり、このまま地球へ連れて行き、多くの地球の食べ物に巡り合わせる……これが突破口だと確信し、誘惑を誘う言葉を先代

に投げかける。

「なに、あとで地球の食べ物ご馳走してやるさ……レムがな！」

「はいはい……」

レムギットは分かっていたかのように軽く返事をする。先代ブランは少し考える素振りをし、その数秒後に晴れた顔になると、一回だけ強く頷いた。

「……うむ、いいじやろう。どうせ暇じゃし、これが奴らを最後に見る機会だと思えば苦にはならんわ」

「ああ、サンキュー、師匠」

こうして、遂に三大勢力との会談の準備は整った。果たして、先代ブランを混じらせた三大勢力との会談はどう転ぶのか……？

## 第20話 破壊神、会談に参加する

三人称 side

次の日の夜、先代ブランを連れ、地球へと舞い降りたブラン一行は駒王学園へと足を運んでいた。校庭の周りには、三大勢力から集めた護衛が何人もおり、ブラン達が来た途端に警戒心を強め、ざわついた。「予定よりも少し早いが、別に問題ないだろう」

ブラン達は駒王学園の校庭にいる護衛達には目を向けず、正門から入り、正面玄関へと足を運ぶと、そこに一人の護衛が近づいてくる。

「破壊神ブラン御一行様……ですな？」

「そうだ」

「失礼しました。どうぞ、中へ」

外の護衛に学園の中を案内され、会談が行われる部屋へと辿り着く。そこで護衛は元の場所へと戻り、いなくなると部屋に入ろうとするブランだが、その前に気がかりなことがあったことを思い出す。

(何か、周りに複数の気を感じるな……それも大量に)

ブランは外にいる三大勢力の護衛の他に、遠くに邪な気を多数感じ取ったのだ。それは、オーフィス、ティアマット、レムギット、そして先代ブランも気づいていた。

「鬱陶しい気じゃな。いまずぐ破壊してもええかの？」

「まあ落ちて着けよジジイ、ここは放っておこうぜ。知らないフリだ、知らないフリ。にしても、こんな気がうじゃうじゃいるのに会談を中止にしようとするない辺り、三大勢力のトップ達は気づいてないか……まっ、それはそれで面白そうだな」

『良い交渉材料として使えそう』と付け足してブランは笑みを浮かべる。

(これは……カテレアね。何となく読めてきた。大方、ここを襲撃するつもりでしょう。しっかし、バカよね……ここに三大勢力のトップが集まっているなら、手薄になってる冥界でも攻めればいいのに。いくらオーフィスの蛇があろうとも、自殺行為でしょ)

「おっ、お前らも気づいているか」

「うん、だって気でバレバレなもの。それと師匠、多分あれってオーフィスが抜けた禍の団の組織よ。どうするの?」

「今はほっとけ。それよりも、ちびっ子はいいのか?」

「うん、忠告はした。何か直接仕掛けてこない限りは、我からは何もしない」

「はっ、自分の為に集まってくれたお礼としての人情って奴か?随分と律儀な奴になったもんだ」

その後、ブランは『けど……』と付け足して続きをオーフィスに伝える。

「奴らを組織として集めたのはお前だ。恐らくだが、まだ増える可能性もある。俺達の地球でやるべきことに対して、奴らが本当に邪魔となれば、お前はその尻拭いとして奴らを殲滅しなければならない。そこんところ、分かってるか?」

その言葉にオーフィスは頷く。破壊神候補として、安っぽい情けはこれから破壊神になる物としては邪魔なだけだ。ただ、オーフィス自体、別に禍の団に仲間意識など感じていないのでそこは問題ない。

だが、ブランが気にしているのは別の事だ。これから、オーフィスにとつて『親しい者』と呼べる者が現れ、その時、その人物を破壊、または倒す事が出来るのか……それだけがブランにとつては心配だった。

(そんな時は……どうすつか……)

一応、候補としてはティアマットもいる。今すぐ結論を出すのは早いと思つたブランは、再び扉に向き直り、レムギットが先頭となつて部屋へと入る。

「よっー!」

レムギットが会議室の中に入ると、中でテーブルを囲むように座っている7人の人物に気さくな挨拶をするブラン。その態度に、『どのツラ下げて笑顔を振りまくんだ』と内心毒吐く紅髪の魔王。

部屋の中にいる人物を紹介しよう。

まずは天使勢力の現トップ、ミカエル。聖書の神がない今、彼がそのトップを担っており、この会談に参加するイツセー達には、聖書

の神じやなく、何故自分が参加するのかという理由をここで伝えるつもりらしい。そして、その後ろには護衛として居る四大熾天使の一人、ウエーブのかかったブロンド髪のカブリエルという女性が立っていた。

次に墮天使勢力。言わずもがな、トップのアザゼルがいた。その後ろには、以前、全くブランに興味を示されなかった歴代最強の白龍皇、ヴァーリが護衛としていた。

最後に悪魔勢力。勿論、座っているのはトップであるサーゼクス。そしてもう一人、そこには同じく魔王であるセラフォル・レヴィアタンもいた。その後ろに、護衛として立っているのは、サーゼクスの妻であり、女王のグレイフィアであった。

「ほらっ、連れてきてやったぞ。俺の師匠、先代ブランだ」

ブランは後ろにいる小さな老人、先代ブランを見せつけるように言う。

「同じだ……あの戦争で見た……！」

「本当に……破壊神なのか……」

セラフォルとサーゼクスは小声で驚きの声を上げる。

「彼が……その弟子なのですか、ミカエル様」

「ええ、そうらしいです……」

カブリエルの言葉にミカエルが返す。

「チツ、まだ生きておったか……」

聞こえないように毒吐くのは先代ブランだった。場には緊張感が漂っており、そこでサーゼクスとセラフォルはある人物に目を移して驚愕の表情を浮かべていた。

「ティアマツト!?まさか、君は五大龍王の一頭、ティアマツトか!？」

「ええ、そうだけど?何か問題でも?」

「ティアマツトちゃん、何で……?アジュカちゃんのお願いは無視して、どうして破壊神に……?」

サーゼクス、そしてセラフォルからも悲痛な声が漏れる。以前、アジュカからレーティングゲームの重要ポストに入ること賛同しなかったというのに、何故、ポツと出の破壊神なんか下つたのか

……それがサーゼクス達だけでなく、アザゼルやミカエルも疑問に思った。

そして、話しかけられたティアマットから返されたのは拒絶の言葉だった。

「ハッ、別にいいわよ。どうせ、心配してるのは悪魔の未来や平和でしようし、私はその為の装置として役立てられるだけよ。それに、今は破壊神ブランという方が充実してるし、アンタ達には関係ないことよ」

そう吐き捨てた後、それを傍観していたアザゼルは先代ブランに目を向ける。

(マジで本物じゃねえか……あの時の戦争で現れた頃よりも更に老けてんな……それと、もう一人は……?)

アザゼルはもう一人の護衛であるオーフィスに目を向ける。無論、他の者も同様。恐らくだが、以前のオーフィスなら、この段階で正体はバレてしまうだろう。しかしアザゼル達は何か力を感じ取ろうと念を込めるものの、彼女からは何も感じられないのだ。護衛というにはあまりにも小さな力しか感じられない。

それはそうだ。今、オーフィスやティアマットは極限まで気を抑えている。そのお陰で彼女はこの場にいる者達に自分がオーフィスだということがバレていないのだ。

……本人からしたら隠す理由など別に無いが。

一方、ヴァーリはメラメラと燃えたがるような目でブラン達を見つめている。いつか、自分は奴らを超えるんだと夢見ているのだろう。それがいつになるかは定かではないが。

「先日はうちのヴァーリがお世話になりましたな」

「は？誰？」

アザゼルの言葉にブランは心底分らないという顔をする。ヴァーリが誰のことか、アザゼルに説明してもらおうと、彼はコカビエールを破壊する前に自分が拳圧で殴り飛ばした人物だということをブランは知った。しかし

「ああ、悪い、雑魚のことなんて一々覚えてないんだわ」



「！」

その興味がカケラも無いその態度にヴァーリは『今すぐ、自分の本当の力を見せてやろうか』とでも言いたげな表情で詰め寄ろうとしたが、アザゼルはそれを止めた。

ブランの挑発的な言葉によって緊張感漂う中、その空気を破ったのはレムギットだった。

「皆さん、ご機嫌よう。硬い挨拶は無しにして、さっさと始めましょう。こちらもこれから用があるので」

「それは待つていただきたい。まだここには、コカビエルの襲撃事件の当事者である私の妹達がない。到着するまで、会談の開始は待つてもらいたい」

「……ふむ」

「……当事者……ね」

内心ほくそ笑んでいるが、とりあえずサーゼクスの言葉に了承するブラン達。ブランと先代ブランは指定された椅子へと座ると、その後にはティアマツトとオーフィスが立った。

▽

数分後

「失礼します」

新たに会議室に入ってきたのは、イツセー達グレモリー眷属と、ソーナ達シトリー眷属の一部のメンバーだった。リアスの他のグレモリー眷属はイツセーと朱乃とアーシアのみだった。

小猫はどこにいるのかはブラン達には興味がなかったので特に気にはしない。それどころか、ブランはイツセー達には一瞥もしないで出されたコーヒーを飲んですることにイツセーやリアス達はキツ！と睨みつける。

だが、予めサーゼクスからは手を出すなど言われているので木場の仇を討つ事は出来ない。何故なら、今日は和平の為の交渉話に集まっているのだから。

「君達や破壊神殿も知っているとと思うが、私の妹とその眷属だ」

「コカビエル襲撃のときは大活躍だったのよ☆」

サーゼクスの紹介。そして『どこが?』とセラフォールの言葉にブランは内心でツツコミを入れる。彼らがやったことと言えば、コカビエルの前に何も出来ず、全てブランに任せたようなものだ。恐らく、サーゼクスは妹が活躍したと冥界で広めたのだろう。所謂、身内鼻肩というやつだ。

すると、イツセーは辺りを見回し、ある人物に目が釘付けとなる。「ぶ、部長、ミカエルさんのお隣にいるあの、おっぱいの大きなお姉さんは何ですか!?! もしや、あれが聖書の神ですか!?!」

そう、ミカエルの護衛であるガブリエルのことだった。ブランを睨みつけることを忘れ、だらしなく鼻の下を伸ばして見られていることに彼女は困惑している。

それを見てティアマットは軽く引いていた。

(コイツ、キモ……ドライブもよくこんな宿主についていけるわね。それはそうと、アイツ、私がいることに気づいてワザと寝たふりかましやがって……! しかも、私の財宝をいつまで経っても返さないコイツは許さない……! ああ、何だか無性にコイツを殺したくなってきたわ……)

ティアマットは若干キレ気味である。

「わ、分からないわ。私も実際に見たことがないから……」

ガブリエルの姿と、その豊満な胸を見て鼻血を出して質問をするイツセー。それにリアスは答えられない。何故なら、リアスも聖書の神やガブリエルの実際の姿を見たことがない故に知らないから。

しかし、その代わりに答えたのはサーゼクスだった。

「リア……リアス、イツセー君、彼女は四大天使のガブリエルだよ。そして、その前に座っているのは同じく熾<sup>セラフ</sup>天使のミカエルだよ」

「ええっ!?!」

イツセーに続き、リアスや朱乃、アーシア、ソーナ達も驚く。そして、彼らは疑問に持つ。それを察したのかサーゼクスは続ける。

「ああ、聖書の神の話については後に――」

そこまで言いかけると

「ん？聖書の神は死んだじやろ。今更なにを言っておるんじやお主ら」

「……えっ……？」

そう、声を漏らして呆けているのはアーシアだった。

その言葉に凍りついたのは彼女だけでなく、この場にいるブラン達以外の者達だった。そう、さつきまで鼻の下を伸ばして鼻血まで出していたイツセーもだ。

アーシアは今、先代ブランから放たれた言葉の意味が分かっていないのか、それとも分かりたくないのか、少なくとも、今の言葉は彼女の頭の中を真っ白にさせる程に強烈な真実だった。

そして、アーシアだけでなく、リアスやソーナ達も同様。彼らはこの真実をサーゼクスから聞かれていなかったらしく、衝撃を受ける。しかしブラン達にとっては、別に隠し通すべきことでもないので、アツサリした感じで先代ブランに説明をする。

「あー、そうか、ジジイは知らなかったもんな。いやー、コイツらさ、何やらシステム何やら守る為に信徒達を騙し続けてたんだよ」

「待って下さい……えっ？何で……主が……？」

頭の整理が追いつかないアーシア。そして、狼狽えたものの、リアスはそれを否定する。

「そんな……嘘よ！あり得ないわ!!だって……だってそんなの一度も聞かされて——」

「嘘じゃねえって。三大勢力にとって重要なこの会談に聖書の神じゃなく、ミカエルって奴が代わりにここに来てるのが何よりの証拠だろ。大方、聖書の神は既に死んでるってことをこの会談で言おうとし

たのだろうか……あらら、もしかしなくてもタイミング早かったのか？」

先代ブランも含め、悪びれもしない一行に対し、アザゼルはテーブルに拳を叩きつけ、心の中で憤慨していた。

「コイツ！よりによって一番バラしちやいけねえことをいきなりバラしやがった!!クソが！そんなの御構い無しかよ!!」

「……今、このタイミングで言わなくても良かったのでは？」

サーゼクスもアザゼル同様、あまり良い気持ちではないようだ。しばらくは、先代ブランの虚言として話を通し、後でちゃんと説明すればいいものの、いきなり全部隠さずにぶつちやけたことで周りは混乱している……そんな事態には招きたくなかったからだ。

「そんなの、お前らが？をいついてきたのが悪いだけだろ。どうせ遅かれ早かれ、知られることだろう？それを今教えてやっただけの話じゃねえか。というか、そんなの秘密にしてるなんて、他の星にいたジジイが知るわけないだろうが……そういうのは事前に言っておけよ」

「なるほどのう。なんじゃお主、今の今まで数ある信徒を騙し続けて来たんか。神の使徒の割に随分と嘘つきじゃのう」

「それは……違います！ちゃんと、和平を結んで落ち着いた所で、アジアさんにも真実を伝えるつもりでいました！ただ、神の祝福によるシステムは戦争の後から不安定で……」

ミカエルは我慢出来ずに反論をする。彼が言うには、神の奇跡や、信仰による恩恵を信徒に与えるシステムは、完璧に信徒全員に加護を起こすことはできなくなったとのこと。システムに近い教会などに信仰を揺るがす者がいることによって不具合が発生する程にデリケートだった。そして、今は亡き、癒しの力を悪魔にまで使えるアジアは、それだけでシステムにとって害悪となる……故に、アジアは教会を追放された。

そして、その事実はイツセーがこの会談で知りたい事の一つだった。直接、質問する機会は無くなったものの、知りたいことを知れたことで彼は納得はするが、一つだけ許せないことがあった。

そう、アジアのことだった。

「ふむふむ、なるほどなるほど、お前の言い分は分かった。けど知ってるか？嘘つてのは雪玉と同じなんだぜ？転がせば転がす程大きくなって、後になってバラせば、それだけショックも大きくなってくる。見てみるよ、お前らに散々振り回された挙句、悪魔にも転生させられて、やつとの思いで大切な居場所を見つけ、幸せな思いをしていたのに、突然、絶望の淵に叩き落された信者の姿を。お前、最初からこうなることを分かっていて今更真実を伝えようとするとか、もしかなくともかなりの愉快犯なんじゃないのか？信者たちの人生をメチャクチャにして、弄ぶ事に悦を感じてるんじゃないのか？」

「違う！それは違う！」

この時、アーシアは泣き崩れていたのだ。大切な友達であるアーシアを、何気なく出た発言で泣かされ、あまつさえその発言に何も悪びれないブラン達に怒りを覚える。以前、木場を殺されたこともあり今のイツセーは今にもブランに殴りかかりそうになったが、そんな彼の状態を察したのか、イツセーに鋭い眼光を放って制止させたのはサーゼクスだった。

「……やめなさいイツセーくん、言いたい事は言わせるつもりだ。この話を進めたその時、君の意見もしっかり聞くんつもりだ」

「で、でも……！」

イツセーにも分かる。明らかにサーゼクスからは怒りのオーラを感じることを。妹の眷属を傷つけられたのだ。前には一人殺されている。怒るのも無理はない。我慢をしているサーゼクスの思いを汲み取り、イツセーは何とか堪えるもの……。

「そうそう、会談があるんだから。そこでじっくり話し合えばいいじゃねえか。なあ？」

「くっ……！」

挑発するように言うブランにイツセーは唇を噛み締めて我慢するしかなかった。そしてアーシアはもう、聖書の神がない事に耐えきれなかったのか、そこで気絶し、会談の部屋から保健室へと運び込まれ、ベッドに寝かされた。

よって、彼女は会談には参加出来ずに離脱し、険悪な雰囲気のまま

会談は行われることとなった。

▽

「以上が、私、リアス・グレモリーとその眷属悪魔が関与した事件の報告です」

まず最初に、リアスが関与したコカビエル襲撃事件を彼女の口から経緯や結果を報告される。それを真面目に聞かない者や、聞く者もいればという纏まりがないまま、報告は終わりとなる。

「御苦勞、戻ってくれて構わないよ」

「ありがとうね、リアスちゃん☆」

リアスは緊張から解き放れたように、息を吐くと部屋の壁辺りのイツセーの隣に戻る。

「さてアザゼル。墮天使総督としての、この報告に対する意見を聞きたい」

「報告の通りさ。コカビエルの行動は俺や他の幹部に黙って起こした単独犯。そこに、破壊神様がやってきて見事に殺してくれた……:そんなだけさ」

「予想通り、説明としては最低の部類ですね。それと、貴方個人が我々と大きくことを起こしたくないという話を聞いています。それは本当なのでしよう?」

先程の狼狽えから落ち着きを取り戻したのか、アザゼルの言葉に呆れるミカエルはそう聞くと、アザゼルは大きく頷いて答える。

「まっ、幹部一人さえ言う事聞かせられないもんな。それに加えてガキの神器目的でここに観光なんてするくらいだし、こんな能天気なカラスが普通、戦争なんて考えないよな……:考える頭が無いからな」  
「ぐっ……」

ブランから皮肉気味に、脳みそ空っぽのトリ頭と言われた事に、ヘラヘラしていた顔から、悔しそうな顔に変わったアザゼル。しかし、アザゼルからしたら、ブランは自身の組織の尻拭いをしてくれたわけ

だから何も言い返せない。

「アザゼル、一ついいか？」

アザゼルの了承を聞いてから、サーゼクスは鋭い視線を彼に向けて静かに質問をした。

「ここ数十年間、神器所有者をかき集めている理由はなんだい？最初は戦争再開のための戦力増強かと思っただが……」

「それに関しては私も驚き、警戒を強めてました。白龍皇を勢力に引き入れたのを知った時はね……」

「研究のためさ。俺の送った資料見ただろ？コカビエルも俺のやり方が気に食わなくてあんな事しかしたんだ。俺自身は戦争を起こすつもりなんてこれっぽっちもねえよ」

ミカエルもサーゼクスも、アザゼルの性格は理解している。故に、その言葉は信用できるものだった。

「話を戻そうか。と言っても俺はこれ以上めんどくさい話し合いをするつもりはない。とっとと和平を結ぼうぜ。おまえらもその腹積もりだったんだろう？」

その言葉にサーゼクスとミカエルも一瞬、固まるが彼らが答える答えは一緒のようだった。

「確かに私も和平の話を持ちかけようと思っていたところだ」

「私も今回の会談で三勢力の和平を申し出るつもりでした。戦争の元である神と魔王はもういないのですから争う必要はありません」

「そう、神はなくとも世界は回る。俺たちは、戦争起こさず平和にやっていくことができるってわけだ。さて、今度は赤龍帝と白龍皇に話を聞こうじゃねえか。世界に影響を及ぼすお前達にな」

三人は和平を結ぶのに賛成だ。しかし、その前にアザゼル達は、世界を滅ぼせる程の力……ドラゴンの神器を宿すイツセーとヴァーリに話を振った。

「ヴァーリ、お前はこの世界をどうしたい？」

「俺は強い奴と戦えればそれでいい」

「はっ、そうかよ」

予想通りだったのか、ヴァーリの答えを聞くアザゼル。そして今度

はイツセー。

「よし、赤龍帝、お前さんはどうしたい？」

「お、俺はまだよく分かってないです……和平とか、戦争とかよく分かってなくて……」

「じゃあ恐ろしいほどに噛み砕いて言うぞ。戦争が起きると二天龍は間違いなく表舞台に出る羽目になる。そうなるとリアス・グレモリーを抱けないぞ？」

「和平でお願いします！俺、部長とエッチがしたいです！平和が一番ですよ!!」

あまりにも必死すぎる。そして単純過ぎる。目の前にはリアスの兄がいるというのに、その兄本人は何故か喜んでいる感じで、リアス達は呆れるように苦笑いしてるものの、ブラン達からしたら『阿呆らしい』の一言しかなかった。

「なんかジジイと似てね、アイツ」

「……おい、それ以上言えばお主でも殺すぞい」

「……へいへい」

小声で冗談交じりで言っただつもりだが、それでも先代ブランにとっては不快極まりないものであるようだ。流石にブランは失言だったのか、その鋭い眼光にビビってしまった。

「何か、他にイツセーくんから何か聞きたいことはあるかい？例えば、破壊神殿に……」

「そ、そうだー！」

イツセーは思い出す……木場が殺された時のことを。そのことについて知りたいのはサーゼクスやセラフォル、アザゼルやミカエルも同じ。勿論、怒りを募らせているのはリアス達も同じことだった。やっと、あの時のことについて糾弾出来ると思いい、ブランに指を指した。

「お前のことだ破壊神!!」

「……」

ブランは彼に一瞥もしない。する気がなかった。しかし、イツセーは構わず彼に怒りをぶつける。



「何で木場を殺したんだ!!俺はそれが許せない!それについてちゃんと説明してもらわなきゃ納得できねえ!納得しても、お前に一発殴らなきゃ気が済まない!!」

相変わらず敬語は使わない。ブランはコーヒーを飲みながら、先代ブランは出された和菓子をポリポリと食べながらイツセーを鬱陶しく思っていた。

「こやつ、やたらと怒つとるのう。煩いったらありやしない」

「ホントそれだよ。敬意を弁えない奴に話すことなんてないっての」

「てめっ……!!」

「って、思ってるけど、このまま煩いのもどうかと思うからな……とりあえず聞いてやる。ええつと、この前消した奴……ああ、あの金髪のことか。……フツ」

「何がおかしいんだ!」

薄く笑ったことでイツセーの神経を逆撫でる。しかし、ブランは平常心を崩さないまま淡々と言う。

「アイツはさ、俺の忠告を聞かないで勝手に突っ込んできて消滅したんだ。まあ、確かに俺が殺したようなもんだが、アイツは自殺しに來ただけで俺が全般に悪いわけじゃないだろ?」

「ふざけんな!木場は、イケメンで、女の子にもモテて嫉妬するけど、部長の眷属で優しくいい奴なんだ!仲間なんだ!!なんでいい奴が殺されなきゃならねえんだ!ただ、殺された仲間の仇を討つ為に戦っただけなのに、アイツが殺される理由なんかねえだろ!!それを血も涙もないお前は平気で殺しやがった!許せることじゃねえ!」

仲間思いの彼の必死の叫びだった。いつもは覗きなどで学園からの評判が悪い彼でも、その優しさはグレモリー眷属やシトリー眷属の心に響いた。

しかし、ブランから返ってきた言葉は非情なるものだった。

「ぶっ」

「……はっ」

まるで興味を示さないその態度に、激怒するどころか驚愕のしすぎで呆けてしまうほどだった。

「言いたい事はそれだけか？悪いがお前らの気持ちなんか俺にとつては知ったこつちやないし、わざわざ情けをかけ、謝罪をする程の義理なんか持ち合わせちゃいねえんだ。ああそれと、『殺される理由なんかない』……だっけ？」

「ツ！ああ、そうだよ!!」

「お面白い事言うなあ……いいか？アイツは戦ってたんだろ？あの戦場に立ってたんだろ？なら、殺される理由はそれだけで十分なんだよ」

「何!？」

「戦場に立っている以上、そこはもう殺し合いの場なんだよ。生きるか死ぬか。どんな理由があろうと、どんな立場であらうと、そいつがどんなに善人であらうとそれは変わらん。あの小僧は無謀にも俺に戦いを挑み、そして負けた。そう、負け犬になって無残に死んでいったに過ぎないんだよ。お前がギャーギャー喚いたところで、それがかえって際立っているがな」

あまりにも見下した物言い。その言葉にイツセーではなく、リアスも憤慨した。

「貴方……私の下僕を殺した挙句、侮辱したわね……!!万死に値するわ!!ルシファア様！何故、このような者と同盟を結ぼうとするのですか!?!こんな非人道的な行いをする破壊神と!!」

我慢出来なくなったのだろう。今まで溜め込んできた怒りが爆発したのでだろう。しかし、リアスの反論に驚いたのはサーゼクスではなく、ブランやレムギット達だった。

(コイツら、俺らと同盟を結ぶ気だったのか？おめでたい奴らだな……)

「リアス、落ち着きたまえ。君達の気持ちも分かるが、私からも気になることがある」

サーゼクスはリアスを何とか制止させると、今度は彼がブランに質問をした。

「私から質問したい。何故、世界中のはぐれ悪魔を殺したのですか？それと……ディオドラ・アスタロト……この名前に聞き覚えは？」

これに関して気になるのはリアスも同じことだった。知り合い程の仲だが、それでも彼は冥界を将来支える若手悪魔の一人……そのような者がいなくなれば心配するのは当然だ。

「ディオドラ・アスタロト……ああ、そういえば記憶を覗き込んだな。俺が破壊したが？」

その言葉にリアス達だけでなく、サーゼクスやセラフォルーまでもが狼狽え、それまで静かだったセラフォルーが立ち上がってブランに物申す。

「な、何でディオドラちゃんを!? 彼は冥界でも優秀で優しいと評判の悪魔なのに! どうしてそんなことを!!」

「えっ? あんな奴が……? (記憶を覗いたが、どう見てもあれはクズだよなあ……まあ、それはコイツらが奴の本性を知らないだけか)」

これまた可笑しいと心の中で笑うブラン。

「ディオドラ・アスタロトって?」

イツセーは分からない。貴族の悪魔のことについては知識が空っぽなので、隣にいた朱乃がそれを説明した。

「ディオドラ・アスタロト……アスタロト家の次期当主ですわ。以前から行方不明となっていて捜索隊も出されていたんですけど、まさか破壊神に殺されていたとは……どうやら彼等は命に対する価値観、感覚が狂ってるようですわね。善良な悪魔さえ平気で殺すなんて……」

「そうなんですか! あのカズ野郎……やっぱ許せねえ……!!」

小声で聞こえないように話す彼等だが、ぶっちゃけ普通にブラン達に聞こえていた。しかし、彼等はそれを咎めることはなく、寧ろ楽しんでいた。

『何も知らない愚か者の遠吠え』として。

「俺がはぐれ悪魔と、そのディオドラ・アスタロトって奴を殺したのには共通の目的がある。だが、その為にはお前らにこの宇宙の事を知ってもらわなければならない……俺達、破壊神のことも……全王様のこともな」

聞き覚えのない言葉、名も知らない人物の名前が口から放たれ、破壊神ブランや付き人のレムギットによって会談はまだまだ続くので

あつた。

## 第21話 破壊神、会談を続行

三人称side

「俺が何故、世界中のはぐれ悪魔をぶっ殺したのか……まず、お前らにはこの宇宙について知ってもらわなければならぬ」

ブランの合図により、レムギットは自身の杖を瞬時に自分の手元に出現させると、それを床に突く。すると、そこには広大な宇宙空間の中心の高い位置に屋敷のようなものが佇んでおり、その下にそれを囲むように12個の宇宙が円状になるように並び、そのまた中心に一つの宇宙がポツンとあった。

「まず、貴方達から見れば私や先代様、ブラン様は『宇宙人』……と言ってもいいでしょう。それを踏まえて、貴方達に質問したいことがあります。……貴方がたは、宇宙が何個あると思っていらいっしょいますか？」

「[[[[[?]]]]」

何個ある……と聞かれて、普通は一個だと答える。だが、映像を見て勘のいい者は答えを理解した。

「正解を言いますね。この世界には、宇宙は13個あるのですよ。貴方がたは、宇宙は無限に広がっていると思っっているのですがそれは誤りの知識です」

「13個!? そんなの、あり得ない……信じられない……」

宇宙に『個数』という概念があることすら、普通は信じることは出来ない。地球人は、宇宙は無限に広がるものだと言われてきたことだった故に。

しかし、レムギットの口からはそんな出任せにも思えるぶっ飛んだ話が続く。

「貴方がたにとっては突拍子もない話ですが、本当のことですよ。そして、この宇宙は『第0宇宙』。数ある宇宙はそれぞれ足して13になるように対になる宇宙が必要となり、それによって均衡を保っています。第1宇宙なら第12宇宙と、第7宇宙なら第6宇宙……ここまでは理解できましたか？」

「首脳陣は何とか理解は出来ているが、リアスやイツセーなどはイマイチ理解出来ていないのか、首を傾げて、信憑性の無い話だと疑う。疑うのは誰しも同じだが、彼らはそれが態度として顕著に現れていた。」

「しかし、お気づきでしょうか？この宇宙は第0宇宙、第13宇宙などありませんし、何処とも対にならない……しかし、宇宙自体が存在出来ている、均衡が保たれている……これって、矛盾してますよね？」

「その言葉に全員が頷く。ここから先はオーフィスやティアマツトすらも知らないことも話すので、二人も耳を傾けてじっくりと聞くのであった。」

「そう、だからこの宇宙は『矛盾の宇宙』と呼ばれているのです。そしてここからが本題……この世には元々宇宙は18個あったのですよ」先程よりも驚くことはなかったが、大なり小なり驚いたのは確かだった。

「今13個ってことは……5個は失くなったということでしょうか？」

「ええ、半分は合っています」

「……半分？」

「まあそのことも話すので、話を進めましょう。私達、第0宇宙を含め、現在ある13個の宇宙、失くなった宇宙5個さえも統べる王……それが『全王様』です」

ミカエルの問いに答えるレムギット。すると、今度はイツセーが問う。

「ぜ、全王……？そ、それが何だつてんだよ！」

「口を慎め。お前、本人の前でそんな口聞けば消されるぞ。一瞬でない、一瞬……!?!」

イツセーの軽はずみな発言にブランが刺すように指摘する。

「全王様とは、この世の頂点に立つ偉いお方なのです。貴方達が会うことは一生無いくらいに偉い……この世を統べる王そのものなのです。最強……この称号はまさに彼の方に相応しい名です」

最強、という言葉聞いて同じく説明を聞いていたヴァーリは心を

たぎらせる。戦闘狂の彼にとって、戦いに対する恐怖はないのだろう。もし、全王と対峙するのなら、戦いにすらならないだろうが。

「しかし遙か昔、全王様が機嫌を損ねたことで5つの宇宙が全王様の手によって消滅したのですよ」

「し、消滅!?宇宙を消滅だなんてそんな馬鹿な話が——」

セラフオルーはいつものキャピキャピ感さえ忘れて狼狽えるが、レムギットは淡々と返す。

「あるのですよ。ですから、『失くなった』というよりも『失くした』の方が正解なので、半分だと言ったのです。太陽も、銀河系も全て消える……宇宙が消えるその先は『虚無』、『無』そのもの……本当に何も無いのですよ。ほいっ!」

レムギットは自身の杖の水晶から映像を映し出す。それは大きな天秤だった。

「宇宙が13個になってしまったことで、この宇宙はまるで輪から弾かれるように対になる宇宙がなくなってしまった……」

レムギットはそう言うのと、映像にある第0宇宙以外の12個の宇宙の模型を半分ずつ右と左の天秤にかける。

「例えば、第0宇宙を除く全ての宇宙を、この天秤に半分ずつかけましょう。そうすれば、天秤は傾かず、水平になります。では、どこに第0宇宙を乗せればいいのか?右に置けば、勿論右に傾きますし、左に置けば左に傾く……」

天秤の中心……支点にちよこんと第0宇宙の模型を置く。だが、不安定。あまりにも不安定だ。微妙ながらもグラつきが見える。

ここから先はブランが答える。

「この宇宙はとても不安定だ。対になる宇宙がない分な。だから、師匠の先代ブランは人間レベルに関してには特に気をつけてきた」

「人間レベル……?」

「人間レベルとは、1つの宇宙のあらゆる星のステータスを集め、それを平均化させた数値のことだ。分かりやすく言うと戦闘力や文化、知能、科学、娯楽といった、様々なジャンルが数値化されたもの……それが低すぎると、その宇宙は存在する価値が無いものとして全王様に

消滅させられるんだよ」

「そして、その調整を担うのが、ブラン様のような破壊神、そして星を創造する界王神なのです。界王神が星を創造し、破壊神が星を破壊する……それを何千、何万、何億年と繰り返して今の今まで宇宙のバランスを保っていたのです」

「か、界王神？星を創造って、そんなの破壊神なんか必要ねえじゃねえか！界王神って奴がどんどん星を創ればいいだけだろー！」

イツセーの言葉に、レムギットは淡々と返す。

「それは非常にマズイことです。貴方も今の話の流れで分かったと思います、この星も勿論、界王神が創造したものです。まだ青くなく、赤い頃の地球から、恐竜が生まれ、そして今の時代まで発展していった。これは大きく人間レベルの向上に繋がりました。けど、考えてみてください。もし、この地球がいつまでも白亜紀状態だったら………生物が生きられないような劣悪な環境が続いていれば、当たり前ですけど、貴方は今ここに存在すらしていませんよね？」

今の時代が白亜紀状態……つまり、恐竜しかいない時代がいつまでも続くということ。生物としての知能は全く進化せず、高い人間レベルの星の足を引っ張ってるのに他ならない。

「宇宙の大きさは無限ではなく、有限なのです。当然、創造できる星にも限りがあります。例えば、物を作り過ぎれば、部屋のいたるところに物を置けば、自分の部屋に置く場所がなくなってしまおうのと同じ。星が多すぎると、近くの有人惑星同士で争いが起こり、荒れ果てた星が多くなってしまう。科学もなければ、娯楽もない。知性もまったく向上せず、そんな地球……地球と似た星がいつまでも存在してるだけでは、この宇宙の人間レベルの向上に支障をきたす……星の住民に戦闘力が無い限りは只の荒れた星として、破壊神がその星を破壊しなければならぬのですよ。この宇宙に不必要な存在として……ね。そして、破壊神が破壊した星の分、また界王神が新たに星を創造する……これを何万、何億、何兆と繰り返して、この宇宙の均衡と人間レベルの向上、そして維持を保っているのです」

「訳わかんねえ……じゃあなんだ、それがあんなら星を破壊する理



由が、それだったのか!?馬鹿げてる!」

アザゼルも言葉では理解してるつもりだが、あまりにもスケールの大き過ぎる話に心では納得がいかないようだ。

「あら、そうでしょうか?創造は破壊からしか生まれない……よく言われることでしょう。界王神が創造をしすぎると、レベルの低い星がレベルの高い星の足を引っ張る可能性が大きいですから……それが、破壊神が必要な理由なのです。そして、この地球はとも文化が凄いものでしてね……ブラン様は、わざわざその素晴らしい文化を築いた人間たちを襲うはぐれ悪魔を退治してあげたのですよ」

「では、この地球は人間レベルの向上に役立ってる……ってことでよろしいのでしょうか?」

「ええ、その通りです。この星の文明はとても貴重なので、それを脅かす者を排除するためにわざわざ遠い星からかけつけたんですよ。まあ勿論、破壊神なので人間レベルの低い星の破壊もしますがね」

レベルの低い星を破壊する理由。それは理解した。だが、イツセーにはどうしても気になることがあり、思わず聞いてしまう。

「そ、それって悪党だけを破壊してるんだよな!?幸せに暮らしている子供や何の罪もない優しい人、おっぱいの大きな綺麗なお姉さんは殺さねえよな!」

「何を甘いこと言ってるんだ?そういうのも含めて破壊神やってんだよこっちは」

その言葉の意味は、イツセーが求める答えとは真逆。つまり、幼い子供も犠牲になる時があるということだ。その事実にはイツセーは声を荒げる。

「な!?そんなの許せることじゃねえだろ!いくら何でも、無闇に誰かの命を奪うなんて、どんな理由があろうとダメだろうが!!」

「ああ、お前の言う事は正しい。まさにヒーロー、正義の味方が言いそうなセリフだ。だがな、これはそういう仕事なんだよ。これは俺が決めたことじゃなくて、世界が、宇宙がそうすることを望んでいるからやってるだけだ。元々世界がそうする事で回るように出来てしまってるんだよ。自然現象と同じでな……。というか別にお前らの

許可なんか必要ねえから」

「ええ、それに貴方方、墮天使による神器所有者を狩ることも同じことでしょう。いつか自分たちの脅威になる可能性のあるものが芽吹く前に殺す……実際、そこにいる兵藤 一誠さんもあなた方の被害者ではありませんか?」

そう言い、アザゼルに視線を向けるレムギット。アザゼルは事実を言われ、苦い顔をして答える。

「ぐっ……確かに、レイナーレが赤龍帝を殺したのも含めて、組織としては当然のことをした……」

「でも、アンタを想っていたレイナーレのせいでアジアまでも死んだんだぞ!」

「ああ、そうだな。だが、お前達は今、悪魔になって生きてる。少なくとも、お前達が悪魔になって喜んでる奴は少なからずいるぞ?とても充実してそうでいいじゃねえか。それをひっくるめて、俺達は平和を結ばなきゃいけないんだよ。今、俺達がやるべきことはそれなんだ」

アザゼルの言葉にイツセーは納得してしまう。だって、今の自分は人間だった時の頃よりも生活が充実しているのだから。更には、リアス達のような美女と戯れる……人間だった頃には到底かなわないと願いであり、自身の夢であるハーレム王の道をやっと歩めているのだから。

「はっ、それであわよくば俺と同盟を結ぼうってか?おいおい、なんか勘違いしてるが、俺はお前らと同盟を結ぶ気は更々ない。寧ろ、お前らには今すぐ死んでもらいたいって思ってるんだぜ」

「「「……はっ」」」

イツセー達は分からなかった。何故、自分達が死ななきゃいけないのかと。それを代表するかのようミカエルが聞く。

「何故、私達が死ななければならぬのです?私達が貴方に何かしたとでもいうのですか?」

「わからないか?なら分かりやすく言ってやる。お前達はこの地球の人間を滅ぼす害悪……邪魔な存在だってことだよ。だから、俺達はお前を破壊する……三大勢力の全てをな。俺はそのためにこの地球に

来たってわけだ」

「……どういふことだよ」

アザゼルも問い、ブランは長々となるが答える。

「墮天使の神器狩り……これは言ったな。その神器ってのは、人間にとって必要なのか？ 必要ないよな？ だって、日常生活でどう使えつてんだ？ 殺人や証拠隠滅にでも使えつてののか？ 馬鹿らしい。そんなものがなくなつて人間は生きていけるんだよ。神の加護？ 必要ない必要ない。だって、人間の営みは人間自身が築き上げてきたものなんだからよ。お前ら天使も必要ねえ。それと、神器システムって、取り除かれたら即死するわ、死んでもまた新たな人間に宿るって代物だろ？ そして、それをまた墮天使が狩る……なあ、これって無限ループじゃねえか？」

「そ、それは……」

「まだある。はぐれ悪魔に関してだ。あーいうゴミどもが地球を脅かすんだよ。なんだ悪魔の駒って。そんなクソゴミアイテムを作って、搾取してる癖に、何でもおまけ付きって感じで不良品どもに人間が襲われなければならぬんだ？ そーゆーのってダメだと思っただよ俺って。デメリットがあるなら、何かしらリカバリーするってのが定石だろ？」

「ですから、我々がはぐれ悪魔の討伐を——」

「その赤髪と眷属、前にはぐれ悪魔を討伐しにきた時、俺がその際に討伐してやったの覚えてるだろ？ あの時、実はコイツらが来る前に人が襲われてたんだよ。俺が来なかつたら、そいつは間違いなく死んでいた」

「ぐっ……そ、それは仕方ないことですよ……平和の為には、多少の犠牲はやむを得ません……」

サーゼクスの立て続けに放たれる言い訳にブランは返す。

「だからリカバリーしろって言ってんだよ。何かしら駒に改良とか加えろよバカか。無能集団なら集団らしく全員で頭捻らせて考えろゴミが！ そんな奴らが人間を守る？ 平和？ 笑わせるな。お前らは気づいてないんだ。いいか？ この地球で現在進行形で脅威になつてのの

はお前らなんだよ！現実を否定して、そうやって自分達を平和の象徴みたいに言うのを見るとな、反吐がでるんだよ！偽善者が!!」

初めてブランはこの場で大声を上げた。その勢いに場にいるもの全員か何も言い返せなかった。

（やべえな、俺とした事がつい感情的になっちまった……まあ、言いたい事は言えた。これで十分クールダウン出来たな……）

今まで溜めていた怒りをぶつけて、感情的になってしまったが、ブランは冷静に気持ちを落ち着かせる。その様子に、今の今まで一言も喋らなかつたオーフィスがブランの背中をさすって気遣った。

「ししよー、大丈夫?」

「ああ、気にすんなちびっ子。というか、前みたいに寝ないでよく話聞いている分、コイツらよりも偉いぞ」

「うん、ありがとう」

オーフィスにはへらと笑ってお礼を言う。ブランも褒める時は褒める。今のオーフィスは、ただ純粹過ぎた彼女とは変わった……ブランはそう確信しており、いつかは破壊神の座を譲ってもいいのではないかと認めてはいる。

その後、静かになった空気の中、ある人物がブランに視線をぶつける。

「……ふざけんな」

「ん?」

そう怒気を含んだ声で言い放つのはアザゼルだった。お気楽に話す彼が、ここまで怒りを表すのは珍しいとサーゼクスやミカエルは思った。

「人間レベル?宇宙の均衡?そんな訳の分からない話をされて、いきなり殺すだ?!?んなもん納得出来るわけねえだろうが!」

他の者もアザゼルと同意見のようだ。それを証拠に、皆がブラン達を睨みつけるような硬い表情になっている。だが、ブランはさほど変わらず、冷静に返す。

「何言ってるんだお前ら」

本当にアザゼルが何言ってるのか理解出来ないブラン。それ

に反論するようにティアマツトが追い打ちをかける。

「そうね。アンタ達だつて、今までやってきたことでしょうが。はぐれ悪魔という害悪を殺してきて、墮天使なら神器所有者という芽を摘んできた。そんなことすら何も知らない一般人を殺してきて、いざ自分が殺されるとなると逆ギレするの？多分ね、今までアンタら三大勢力に殺されてきた奴らはみんな同じ事を思ってるわよ。あれよ、因果応報ってやつじゃない？」

「だからといって納得出来るかってんだ！こちらら、神がいない間にどれだけ平和に向かって準備してきたと思ってる!!」

「……ここまで言っても認めないか。おい、いい加減気づけ。お前らがこの地球の平和を乱してるってことをな。それすらも気づかないのか？まあ、自分達の罪すらも知らないフリをかましてきたんだからな……無理もないか」

可哀想に。そう付け加えてやれやれと首を横に振るブラン。

「サーゼクス様や、部長だつてみんな平和の為に頑張ってる！それを邪魔してるのはお前達じゃねえか！」

「そうだ！兵藤の言う通りだ！お前が破壊神だからって、そんな横暴な理由で殺されるなんて納得出来るわけねえだろ!!」

イツセーが叫び、そしてソーナの眷属である『匙 元士郎』もイツセーに便乗するようにブランに言う。

（頑張ってる頑張ってるって……それだけしか言えねえのか？指摘された事に対して、否定してただ庇うだけじゃあ、この先進化しないし、未来は無いな……メリットだけ受け入れ、デメリットには目を向けない。バカな奴らだ）

「お前ら、さつき説明してやったつてのに、いつまで俺にタメ口きいてんだ。……破壊するぞ」

「「「「「」」」」」」

今までとは違い、信じられない程強い威圧がイツセー達に襲いかかる。何かを考える前に、彼らはブランに対して頭を垂らしてお辞儀をする体勢になっていた。

「下手に出て我慢してやればつけあがりやがって。さて、ここまで俺

に無礼を働いたんだ。ただ頭を下げるだけじゃ物足りないな……：跪  
け」

「[[「!?!」]]」

ブランが『跪け』と言った途端、オーフェイス、ティアマツト、先代  
ブラン、レムギット以外の者達がまるで言霊にでも取り憑かれたかの  
ように今度はブランに向かって膝をつき、頭を垂れる。

(な、なんだこれは……!?!言葉すら発する事が出来ない……!?!)

サーゼクスは何をされたのか全く理解出来てない。無論、他の者も  
だ。

だが、これは言霊のように言ったことが現実になったわけじゃな  
く、彼から放たれる気のプレッシャーによるものである。

天と地どころか、天国と地獄という更にかけ離れた実力差があるブ  
ラン一行とその他。ブランにとって、魔王や墮天使総督、天使長です  
らも塵に等しく、この程度のこととは造作もなかった。

「さっきまで我慢してやったし、まあ、それはキャラにしてやる。それ  
で、確かその茶髪がなんか部長が平和の為に頑張ってるって言っ  
たよな。それ、これを見ても同じ事言えるのか?」

『レム、あれを』と言うと、レムギットは了承し、杖を床にトンツと突  
く。すると、今度はやけにリアルな映像が映る。

なんとか目を動かして全員その映像を見る。そこには衝撃の映像  
が映っていた。場面は駒王町の公園の噴水前。そう、イツセーが墮天  
使レイナーレに殺された場面だった。

(こ、これは!俺が殺された時の!)

「これ、録画しておいたんだぜ。おお、改めて見るとなかなか無様な殺  
され方だな……うわあ、最悪なドッキリ番組って感じじゃねえか。流  
石にこれは同情するな……」

(コイツ、俺が殺されるって時に何にもしてくれなかったのか!やつ  
ぱりクズじゃねえか!俺達に散々説教垂れといて自分は傍観するな  
んて!アジアのことも含めてコイツは許すべき存在じゃねえ!バ  
カな俺でもそれだけは理解できる!)

イツセーは憤慨する。すると、そこにリアスがイツセーの前に現れ

る。この時、リアスが来た事はイツセーも分かっているが、何を言っていたのかは覚えていない。

そして今この瞬間、リアスが衝撃の言葉を口にしたことを彼は知る。

『死にそうね。傷は……へえ……面白い事になってるじゃないの。そう、貴方がねえ……本当に面白いわ』

イツセー達は驚愕する。この声は、いつも聞いているリアスの声だ。しかし、映像のリアスはまるで、イツセーの死をまるでゲーム感覚のように眺めて品定めでもしているような様子だった。

『どうせ死ぬのなら、私が拾ってあげるわ。貴方の命、私の為に生きなさい』

立て続けに映像を流す。イツセーは戸惑う。まさか、自分が死ぬ直前にこんなことを言っていたなんて思わなかったから。この時、彼の心にリアスの主人としての在り方に疑念を抱く。

「いやー、酷いと思わねえか？自分の管理している人間が死にそうだったのに、『面白い』だったさ。俺よりもよっぽど破壊神向いてるよコイツ。こんな野蛮な奴が情愛やらなんやら言われてさ、そんな危険な奴が貴族だなんて……平和の為に頑張ってるとか言われて、俺がそれに納得して同盟を結ぶと思ってるのか？なあ、魔王の妹なんだろう？世界の平和を担うんだろー？何が面白かったんだー？おい、何とか言ってみたらどうだー？」

ブランは椅子から立つと、リアスに近づいて彼女の頭をグリグリと踏みつける。これまで我慢してきた彼女の無礼に対する怒りの表れだろう。リアスはリアスで、こんな屈辱は今まで受けた事がなかったのか歯軋りしながら怒りの炎を燃やし続ける。

イツセー達もリアスが踏みつけられていることで更に怒りを募らせる。しかし、ブランのせいで喋ることすら出来ないのでリアスを助けることも出来ない。

この時、ブランはリアスに向けて気のプレッシャーを当てるのをやめたことで、リアスは口だけは開くことが出来、喋ることが可能となった。

「……ッ！」

ブランはリアスの頭から足を退けると、また椅子に座り足を組んでリアス見下しながら問う。

「なあ、おい。もう一度聞くぞ？何が面白かったんだ？自分の領地で、管理している町で、住民が死んで、何が面白かったんだ？」

リアスが顔を青ざめる中、ブランは笑顔で、それも優しくない笑顔で丁寧聞くのであった。

そして彼女は焦る。なんて答えればいいのか、頭の中で回路を巡らせる。そして、彼女は至った。この場を乗り切る答えを。

「……め……よ……」

「……？」

何か呟く声が聞こえるが、ブランにはよく聞こえなかった。すると、彼女は次の瞬間、破壊神でさえも驚くべき言葉を発した。

「そんなのはデタラメよ！私は、眷属を家族だと思っているもの！大切なイツセーに向かって、あまつあえ死にかけのあの子にそんな言葉をかける筈がない！虚言もいい加減にしなさい！私やこの場にいる私の優秀な眷属達全員はそんな言葉に惑わされないわ！」

「……はあ？」

これにはレムギットも珍しく驚く事態だった。まさか、この局面で事実を捻じ曲げて自分の行いを偽る者が目の前にいるとは思わなかったのだろう。

その言葉に、跪いているイツセー達は歓喜の言葉を心の中で叫んだ。『リアスはやはり、最高の主人なんだ』と。



恐らくだが、リアスは怖かったのだろう。もし、この真実を認めてしまえば、自分が最も好きであるイツセーに嫌われてしまうのではないか？または、眷属達からも失望の眼差しを向けられるのではないか？そう、予想してしまったことで、逃げる道を選んだ。自分が『情愛のグレモリー』であり続けるため、これまで育んだ関係を壊したくない為、自身を偽った。

(とんだ道化だな……これは想像以上に面白い。逆に面白いな)

これはオーフィスさえも思った。以前の自分は素直すぎたと思っていたが、このように嘘を吐きすぎるのもどうかと思う……と。

よくよく考えれば、こうやって映像を見せたものの、サーゼクスやイツセー達にはブラン達の言葉よりもリアスの言葉の方が信頼性が高いので、彼女の言葉を信じるのは当たり前だ。合成じゃないかという疑惑も出てくるのだから。

「なんだか、一瞬で殺すのが惜しくなってきたな……」

ブランは最早、リアス達に哀れみの目を向けることしか出来なかった。いや、そうせざるを得ない。他にどうしろと。保身の為に自身と他者を偽って、それに流される場の空気……ここで馬鹿らしいと一瞬で破壊してもいいのだが、なんだかそれでは腹の虫が治まらない……そんな感覚を覚えた。

「あー……はいはい……そうだな、凄い絆だな、感動的だな……はあ……」

寧ろ、こんな者達ばかりが三大勢力の主力に集まっているのかと考えてみると、先代はよく破壊しなかったものだと思心してしまうほどだった。

ブランはこうやって跪かせることすらも無駄な労力だと思ったのか、気のプレツシヤーを放つのをやめた。なんとか立ち上がる者達の一人、サーゼクスはこの結果に対して大いに喜んでいた。

「どうやら、その子達の仲を引き裂こうとでも考えたのですが、無意味だったようですね。彼らの固い絆はこれからも砕けず、今後の冥界の平和を守ってくれるでしょう……貴方の目論見は外れたのです」

『別に引き裂こうとかは考えてないが』とブランは全くの的外れな

サーゼクスの言葉を無視して心の中で呟く。すると

「……………あ？」

瞬間、世界の時間が停まった。それを瞬時に理解した時、レムギットと先代ブラン、ブランは重大な事を思い出したのであった。

この世は、『時間のコントロール』は重罪であるということ。

## 第22話 襲撃

三人称 side

会談を進めていると、突然、世界の時間が停止する。時間が停止したということは、ブラン達でも理解出来ていた。だが、何が原因なのかは知らない。その原因を聞こうと思ったが、イツセー達やアザゼル達はその正体を知っているようだった。

「な、何だこれ!? 朱乃さんや会長まで止まってる!?!」

動いているのは、三大勢力のトップと、その護衛。そして、赤龍帝を宿すイツセーと、彼に触れていたと思われるリアスだけであった。

「これは、あのハーフヴァンパイアの『フォーレヒトウン・パロール・レヒュー停止世界の邪眼』だな。どうやら、無理矢理禁手を発動されたらしい」

アザゼルがそう言う。話によると、どうやらこの時間停止はリアスの眷属の一人が発動したものでらしく、その力を使う本人は、自分の力を扱いきれていないとのこと。だからか、会談には参加せず、護衛にはこの場にはいない小猫に任せ、旧校舎の方に置いてきたのだ。

「じゃあギヤスパーが敵の手の内に!?!...私のお大切な下僕を道具のように好き勝手使うなんて、許せない! 万死に値するわ!! 一体誰がこんなことを!!」

「なら見ろよ、窓の外を」

憤慨するリアスとその他に向け、アザゼルが窓の外を見るように促す。外を見ると、黒いローブに身を包んだ集団が学園を取り囲んでいた。味方とは言い難い、如何にもこちらに殺気を向けていた。

「アイツらがギヤスパーを...クソツ!」

「フフ、なら建物ごとその眷属も吹き飛ばせばいい。その方が事件解決だって楽だろう」

「んだとテメエ!!」

今度はヴァーリがイツセーを煽る。ブランだけでなく、ヴァーリにまで怒りの矛先を向ける彼をサーゼクスが止め、ヴァーリはアザゼルが嗜める。そんな中、何故こんなことが起きたのか疑問に思うサーゼクスがアザゼルに問う。

「まさか、アザゼル……神器使いを集めていた理由というのは……」  
「ああ、アレに備える為だ。アイツらは『禍の団』っていう、三大勢力の反逆者達を集め、平和を嫌う、戦争を引き起こしたいっていう古臭い考えを持つ奴らさ。そして、そのトップに君臨するのが……無限の龍神だ」

「何!？」

その言葉にサーゼクスだけでなく、ミカエルやリアス達も驚く。だが、イツセーはオーフィスがどういう者かよく分かっているないので、首を傾げる。

「無限の龍神……世界最強の龍神で、お兄様や二天龍だって敵わない存在よ」

「そ、そんな奴がボスなんですか!？」

イツセーは度肝を抜かれたような驚きを見せるが、ブランはそれを見てため息を吐いた。

(そいつ……ここにいるんだけどな)

気を読めないと不便すぎると改めて思ったブラン。ここまで近くにいるのに気づかないとは、連中がどれほどオーフィスと関係が薄かったのか、気のコントロールを熟知していないのかがよく分かる。

一方、会談に飽きたのか、後ろからブランのツンツンした髪を興味津々に触って遊ぶオーフィス。

「ししょーの髪、面白い。ツンツン、わつくすやった?」

「お前ワックスって知ってるのか。いや、覚えたのか? まあいいや。ワックスなんてやってねーよ。自然だ自然」

話を戻そう。リアスの眷属が力を扱いきれないというところに、目をつけたのか、禍の団が彼を襲った。

(ヴァンパイア……吸血鬼……地球には色々な生物がいるんだな。リサーチ不足だったぜ)

ブランは心の中で呟くが、重要なのはそこではない。今重要なことは、この時間停止を誰が起こしたのかということだ。それが分かった今、ブランがやることは決まっていた。

(おい、レム。『銀河パトロール』に通報しておけ。いつでもそいつを

取り押さえられるようにな)

(はい、了解しました)

念話を送って、他の者に悟られないようにレムギットに話す。勿論、先代やオフィス、ティアマツト達にも伝達は忘れない。とはいつても、先代は特に何もする気はなさそうで、ブランやレムギットに任せるつもりのようなだ。

宇宙において、時間のコントロールは重罪である。破壊神であるブランでさえ、時を越えたりすれば罰を与えられるくらいの重さだ。破壊するのはブランの仕事だが、捕まえるのは違う。こういう場合、動くのは銀河パトロールなので、ブランは動かないのだ。

「ブラン様、先代様、どうやら揉め事らしいので、終わるまでケーキでもどうでしょうか?」

「気がきくのうレムギット。有り難くいただくこう」

「いや、俺はいい。後で食べばいいし、コイツらに食わせてやれ」

ブランはケーキを遠慮する。了承したレムギットは杖からケーキを出すと、先代ブランにまずケーキを渡し、その後ブランの代わりにオフィスとティアマツトにケーキを譲った。

「勿論、お二人の分も用意しております。はい、どうぞ♪」

「ありがとうレムギットさん」

「ケーキ、ケーキ!」

礼を言うティアマツトと、喜んでケーキを受け取るオフィス。フォークを片手に持ち、レムギットに用意された椅子に座って食べる。至福のひと時といえいいのか、とても笑顔である。だが

「おい、何でそんなに呑気なんだよ! テロが起こってるんだぞ!」

自分にとって神経を逆なでするようなことばかりするブランに対してイツセーが怒号を上げる。他の者も、訝しげに睨む感じの態度であるが、ブランにとっては無視してもいいことだ。だが、このまま騒がれるのもどうかと思うので、仕方なく返事をする。

「俺には関係ないことだ。それに、眷属が捕まっているなら、俺に構ってる余裕なんてないと思うが?」

「くっ……分かってるんだよそんなことは!! 俺が言いたいのは――」

「だったらさっさと行けよ……こっちは面倒な事起こすなって言つて、わざわざ忙しいのに会談に参加してやったつてのに……起こされた被害者なんだからな……そんなお前らに俺を責める権利はない」

そう言われ、口を紡ぎ悔しそうにするイツセー。リアス達も同様であり、まずはテロリスト達の対処を優先するのであった。

因みにブランが眷属の救出をイツセーに促せたのは、単なる情ではなく、時間停止をする人物の顔を確認する為なので、決して温情ではない。

「ヴァーリ、お前はあの魔法使いどもを蹴散らせ。肩慣らしくらいにはなるだろう？」

「ふむ、少々物足りないが……いいだろう」

『Vanishing Dragon Balance Break er!』

アザゼルの命令されるがままにヴァーリは窓の外へと出ると、神器である『白龍皇の光翼』を煌めかせ、白い鎧を纏うと、外にいる魔法使いの集団を一気に散らしていく。

「すげえ……！……って、そんなこと言ってる場合じゃない！部長、ギヤスパーは俺が助けに行きます！」

「いや、私も行くわ。ギヤスパーは私の下僕……責任を持って取り返す！それに、部室に保管してある使われていない戦車の駒でキャスリングすればすぐに旧校舎に行けるわ！」

リアス達の言葉にサーゼクスも賛成のようで、グレイファイアの処置でキャスリングの転移で転移できる人数を増やし、そうすることでイツセーとリアスの二人同時に転移が可能となった。

（そういえば、赤髪は保健室で眠っている金髪女のことはどうするんだろうな……まあ、それは多分、トップの護衛に任せるつもりか。それとも、狙われるはずがないと踏んで後回しにしているのか、単純に忘れているのか……いや、流石にそれはないか）

ブランは茶を飲みながらリアスを見て考察をする。だが、幾ら自分が考えたって何か変わるわけでもないし、助言する意味もないと判断

してすぐに視線を外した。

「よし、赤龍帝、これを持ってけ」

「なんだこれ……腕輪？」

アザゼルがイツセーに渡したのは、2つの腕輪のようなものだった。どうやら、力を抑えることのできる代物で、時間停止で暴走を起こしているギヤスパー用にイツセーに渡したようだ。そして、それは対価を支払わずに禁手も出来るようで、まだ禁手に至っていないイツセー用としても使える。

「サンキューー！部長！俺達も行きますようー！」

「ええー！」

有り難く受け取ったイツセーとリアスは、ギヤスパーを助けに行くために、生徒会室を転移で出ていき、旧校舎の方へと向かっていく。こんな時だというのに、未だ呑気にケーキを食べているブラン達を睨みつけながら……。

「我々も行くこう。だが、時間停止で動けない者もいる。グレイファイア、保健室にいるアーシアクんの回収を。セラフオール、君はソーナくん達の護衛を」

「ガブリエル。私達も行きますよ」

「はいー！」

サーゼクス達も禍の団に対して迎撃を行おうと動き出そうとする。しかし、部屋の隅になにやら魔法陣が展開され、その紋様に彼らは驚く。

「サーゼクス様！これはー！」

「これはレヴィアタンの魔法陣……まさか！」

そこから現れたのは、カテレアだった。予め、ヴァーリから会談の情報を聞いてきたカテレアはこれを機にトップ達を一網打尽にしようと誓い、ついに彼らの目の前に姿を現したのだ。

カテレアは薄く笑うと、サーゼクスとセラフオールを中心に視線を移し、不快に思いながらも挨拶をする。

「ごきげんよう、現魔王サーゼクス殿、セラフオール殿。そして、アザゼル、ミカエル」

「カテレアちゃん！」

「カテレア……これはどういうつもりだ」

「勿論…貴方を滅ぼ……滅ぼ……ん？……んん?!」

意気揚々と現れたのはいいものの、サーゼクスやセラフオールよりも目がいく人物を発見してしまう。そう、オフィスだった。

（ちよつとおおおおつ!!? な、何でオフィスがいのよおおおおつ!!? それにあ、あれは……先の戦争に現れた破壊神!? なんで、なんでこんな奴までここにいてのよ!? ハッ、白龍皇……まさか貴様ツ!!）

視線をぶつけるようにカテレアは窓の外のヴァーリを睨む。だが、まるで知らないふりをするかのようにヴァーリはカテレアを見ようとしないうことで、疑惑が確信へと変わった。

（ゴイツ隠していたのか!! 単なるルシファーの末裔で……神滅具を持っていてのからといって凶に乗るんじゃないわよクソが!! 誰よこんな仲間にした奴!!? そうよ、私達よクソ!!）

「ああーえつと、その……」  
「？」

突然現れ、何故か動揺を見せるカテレアに対して疑問符を浮かべるアザゼル達。はつきり言って、破壊神と組んだら勝てるわけがないと思っただのか、一瞬『撤退』の選択肢も頭に浮かぶカテレア。

すると、くだらだらと冷や汗を流しまくるカテレアの心情を察したのか、ブランがお茶を飲みながらカテレアに話しかけた。

「ああ、勝手にやっついていいぞ。俺はお前らに手を出すつもりはないから。逆に手を出してくるなら正当防衛させてもらうけど」

「[[[[[?]]]]」

何故、こんなにも近くに敵がいるというのに何もしないのか。幾ら何でもおかしいと思っただ全員。それを代表するかのようには、アザゼルが眉間にしわを寄せながら問う。

「おいアンタ、本当に一体どういうつもりだ」

アザゼルが苛立ちを含む声でブランに話しかけた。自分達の意にそぐわない行動や言動ばかりを放つからか、他の者はブラン達を完全



に敵視している。そして、ブラン達がテロリストの仲間なのではないかとも疑っている。

だが、そんな目を向けられていても何も感じないのか、ブランは淡々と返した。

「はあ？お前何言つてやがる。コイツは所謂、お前ら三大勢力……特に悪魔側が生み出した問題だろ？お前らの同盟なんか組む気なんてさらさらない俺が、わざわざお前らの助けになるとでも思ってるのか？正直、お前らがここで引き分けになって死んでくれれば、俺がお前らを破壊する手間が省けて助かるし、むしろ好都合じゃあねえか」

(チツ、コイツ……!!)

そもそもブランが彼らを手伝う義理がないので、自分から手を出すことはない。それを聞いたお陰か、少しだけ緊張が和らいだカテレアがオドオドしながら聞いた。

「ああ……あの、では……手は出さない……ということでもよろしいのでしょうか……？」

「ああ、破壊神は嘘をつかない。安心しろよ」

(どの口が……先程はリアスとイツセー君達の仲を引き裂こうとしたというのに……!!可愛い僕の妹とその眷属を傷つけた貴様は万死に値するぞ……!!)

先日、リアスを傷つけられたことへの怒りが強いサーゼクスは、この会談を通して更にブランへの怒りが増していた。

「だが、それは外でやれ。埃が舞うとケーキに汚いものが付着するからな」

シッシと右手を振って追い払うような仕草をすると、カテレアは言われるがままに窓の外から飛び降りる。そして、それを追いかけるかのようにサーゼクスではなく、アザゼルがカテレアを追いかけた。

「カテレアちゃん……どうして……！」

どうしてこんなことをするのか意味が全く分からないのか、セラフォルーが悲しそうに呟く。だが、それを見てティアマツトは容赦なく言葉をぶつける。

「はあ？どうしたも何もないでしょ。アンタ達の意味に歯向かった力

テレア達旧魔王派が遂に動き出した……それだけのことでしょ？」

「それだけ……それだけだというのに、何故ここまで……！テロを起こすことに何の意味がある!？」

今度はサーゼクスが怒りを込めるようにぶつけるが、ティアマツトは呆れるようにため息を吐く。

「アイツらにとっては、それだけの意味があるってことよ。でなきや、こうまでしてテロなんて起こさないし……それにサーゼクス、あなただっていつかはこうなるんじゃないかって、本当は分かってたんじゃないの？だって、旧魔王派を追放し、迫害してきたのは貴方達現代魔王じゃない、サーゼクス」

「そ、それは……彼等にも他に道があるんじゃないかと、私はそう思ってます……！」

「サーゼクス、アンタは最善の魔王かもしれないけど、決して最高の魔王ではなかった。この件は完全にあなたたち四大魔王の落ち度……それに、上に立つ者としては、甘すぎるのよ。その甘い考えがこのテロ事件を引き起こしたといってもおかしくはない。カテレア達旧魔王派がどれだけ悪魔の伝統を重んじているかは、あなただって知っているはずなのに、まさか彼らを野放しにするだなんて普通はしない。少なくとも私はしない。平和の為にとか、悪魔の未来の為にとか戯言を抜かす暇があったなら、まずは自分達の負の遺産をどうにかしなさいよ……何事も綺麗事で済まされることがあるんだから」

「くっ……！」

ティアマツトに呆れたように返されたサーゼクスは唇を噛み締めながら俯く。魔王といっても、サーゼクスは優しい悪魔と言われる程の人格者である。悪魔を統べる王ではあるが、情愛に満ちている彼は、冷酷になりきれず、旧魔王派を殺しはしなかった……というよりも、殺せなかったのだ。

（平和ってのは、多くの犠牲を払って成り立つ場合が多い。実際、破壊神の仕事も、人間という多くの犠牲を出して宇宙という大きな物を守っている存在のようなものだ。皮肉にも、そうやって世界は回ってしまっている……残酷だよ、ホントに）

優しいだけでは、守れない物があり、解決できるものも解決出来ない。時には非情にならないければならない。サーゼクスのことを、『元から優れた力があったというのに、それをうまく使いこなせなかった可哀想な人物』と心の中で称するブランもそれを分かっているのか、サーゼクスに対して哀れみの視線を向けるのであった。

▽

そこから少し時間が経った現在。外の状況を説明しよう。結果から言うと、カテレアは死んだ。彼女はアザゼルに戦いを挑んだのだが、彼が纏った人工神器によって苦戦を強いられた。だが、予めオーフィスから受け取った蛇を使ったカテレアはパワーアップ。

だが、それでもアザゼルとは互角。なかなか拮抗から抜け出せないカテレアは、最終手段として自爆を凶った。アザゼルの腕に巻きついた伸びたカテレアの腕により、逃げられない状況へと陥ったが、アザゼルが自身の片腕を切り落としたことで、カテレアの自爆は総督の腕を失うだけで終わってしまった。

そして、ギヤスパーと小猫を取り戻したイツセーとリアスも校庭へと戻ってきた。アーシアも回収し、ギヤスパーの時間停止も収まったことで、ソーナや朱乃も動き出すことが可能となり、残りの魔法使い全てを一掃。

「よっしゃー！これで終わ——」

イツセー達も参加したことで、予定よりも早く事件が解決したと思われた。だが

ドオオオオオオオオオン!!

誰かが空から落ちてきた。落ちてきたのは、先程カテレアと戦闘を行っていたアザゼルだった。

「チツ、このタイミングで反旗かよ……ヴァーリ」

その言葉にイツセー達は上を見上げる。そこには、鎧を纏ったヴァーリが倒れるアザゼルを見て笑っていた。

「悪いなアザゼル。こっちの方が面白そうだと思っただけな」

「俺は『強くなれ』とは言ったが、『世界を滅ぼす要因だから作るな』とも言ったはずだぞ。まさか、お前もオーフィスに下ったのか？」

「いいや、俺自体、世界の覇権には興味がない。だが、魅力的なオファーをされてね。『アースガルズと戦ってみないか?』なんて言われては、自分の力を試したい俺としては協力せざるを得ない。和平が成立すれば俺が戦う機会も減ってしまうだろうしな」

このタイミングで反旗をひるがえしたヴァーリは、アザゼルを倒すと、次に新校舎の方へと目を向ける。

「本当は兵藤 一誠とも戦う予定だったが……今この体力が有り余っている状態で、俺が戦いたいのは……奴だ」

「まさか……やめろヴァーリ!!」

『やめろクソガキイイイイイイツ!!』

察したのか、アザゼルだけでなく、神器の中にいるアルビオンですら、ヴァーリをクソガキと罵り、やめさせようとするが、ヴァーリは容赦無く旧校舎に向けて魔力弾を放った。

ドガアアアアアアアアアアアン!!

向かっていった魔力弾は、旧校舎にぶち当たると、衝撃音が響く。そして、旧校舎はその衝撃に耐えきれず、崩壊する。つまる所、中にいるブラン達は瓦礫の山の下敷きとなってしまうた。

『クソツ……終わった。終わった……!!』

アルビオンは酷く狼狽するが、これまでボロクソと言われてきたイツセー達からすれば、『ざまあみろ』と言いたげな顔をしている。だが、校舎の瓦礫を押し退いて出てきたのは、無傷のブラン達だった。

「む、無傷?」

ヴァーリ如きの攻撃で傷が付く彼等ではない。瓦礫を全て吹き飛ばして現れたブラン達は、ヴァーリに攻撃させられたことよりも、よほど気になることがあったのか、顔が強張っていた。

「レム……これは、マズいな」

「ええ、そうですねえ」

ブラン達の傷は一つもない。だが、建物が崩れたことで、おかわりとして食べていたケーキがぐちゃぐちゃになって地面へと落ちていた。

「これは……儂のケーキか……」

そう、寂しそうに呟くのは先代ブランだった。瓦礫を退け、彼の目の前では自分の口に運び込まれる筈だったイチゴシヨートケーキが無残な形でばら撒かれていた。

「ま、待てジジイ！落ち着け!!な!？」

肩を掴んで落ち着かせようとするブラン。だが、それでも先代ブランはブランには目を向けず、代わりにあたりを見渡す。そして、自分を興味津々に見る眼差しの正体……ヴァーリを発見し、彼がこれをやったのだと確信した。

「……儂は、他の破壊神に比べれば温厚な方だと自負しておる。人は誰でも過ちを犯す……それに対して謝罪をし、相手は許す。人間も神も、みんなそう。儂もそうじゃ……それを分かっているからこそ、ふりかかった間違いに二度は許す……そう決めておる」

静かにそう呟く。だが、突如彼の髪が逆立ち、明確な怒りをその場にいる全員に示した。

「だが、どうしても許せないことが一つだけある。それは……食事の邪魔をされることじゃ」

「「「「?」」」」」

ただ、食事の邪魔をされただけの怒りだというのに突然、ゴゴゴと地響きが鳴り響く。先代ブランは表情が強張ったまま動かないというのに、大気や地面は揺れている。それだけだというのに、ブランやティアマットはギョツとなつて驚く。

オーフィスとティアマットも、その力の大きさに震えているのか、安心を得るためにお互いの手をギユツと掴んでいた。

「化け物か……!？」

「こんなのありえないよ……!？」

サーゼクスやセラフォルは『勝てない』ということは今やつと確信した。先代ブランの力はブランにも計り知れないものだ。彼でさえ、先代の本気の本気を引き出せたことはない……だからこそか、ブランも今回ばかりは相当焦っていた。

「待てつつつてんだろジジイ!!」

ブランが叫ぶも、聞く耳持たずの先代。このままでは、地球が地割れを起こし、やがて真つ二つになるのも時間の問題だ。それを悟ったのか、もうダメかと思った……その時。

「いけません!」

「ガッ!」

先代ブランがうなじ辺りに衝撃を感じたのか、倒れて気絶した。彼に衝撃を与えて気絶させたのは、レムギットだった。地響きが収まり、安全は確保されたのか、ブランは一息吐いて汗を拭う。

「レ、レム……助かったぞ。危うくこの場が地獄に成りかわるところだった……」

珍しく焦りから九死に一生を得たかのような安心感に満ちるブラン。ティアマツトとオーフィスもガタガタと震えていたが、地響きが収まった途端、何とか落ち着きを取り戻す。

「あの破壊神を鎮めた……?」

「そういえば、先の戦争でも居たが、何者なんだあの女……?」

先代ブランの怒りを無理矢理だが鎮めたレムギットを見て、彼女の正体について疑問を抱く一同。だが、ブランの心臓の鼓動は未だに収まっていない。

（し、心臓に悪いんだよクソツ……ここに連れてきたのはいいが、なんでもこうもバカが多いんだ……!!）

「チッ!」

もう一度、先代ブランがヴァーリを見れば今度こそ何をするかわからない。ブランがやるべきことは一つだった。彼はヴァーリに目を向けると、空を飛んで彼の目の前へと現れた。

「ジジイじゃあ、この地が死んでしまうかもしれないねえからな。仕方ねえから俺が相手してやるよ」

「ふつ、やつとこの時が来た。破壊神に相手をしてもらえるなどこれほど嬉しいことはない。俺の力がどこまで通用するのか、試させてもらおう」

嬉しそうに笑うヴァーリ。ブランにとって、ここまで自分に喧嘩を売ってくる奴は初めてだった。以前、悟空はブランにお願いをするように頼んで勝負を挑んできたので、それはまだ許容範囲だ。

未知の力に対して自分の力を試したいと思う気持ちはブランでも理解出来る。だが、今回のはまるで、挑発されるかのように、無理矢理引きずられたような戦いへの介入であり、不快になる一方だ。以前、一撃で倒したというのに、ヴァーリはブランとの本当の実力差を理解しておらず、自分の思うままにブランに戦いを挑む。

はつきり言って、それは勇気でも何でもなく、『無謀』としか言えないのだ。

「お前 T P O って知ってるか? time と place と occasion の頭文字を合わせたもの。この地球の言語の一つの英語ってやつらしいが、なかなか感心できる言葉だ。時と場所と場合に応じた対応、言動、服装を合わせるって言葉なんだが……今、お前は避けられるはずの最悪の結末を避けられなかった。この意味、分かっているか?」

「悪いが、俺はそんな言葉知らなくてね。戦いさえ出来れば、そんなことはどうでもいいのさ」

「……あっそ」

「フフ、さあ見せてくれ!破壊神の力というものを!」

あの時のようにただのワンプンでやられるつもりはないのか、やたらとリベンジに燃えているヴァーリ。だが、ブランが取り出した得物を見て、ヴァーリは先ほどの喜びから一変して激怒した。

「……!?おい貴様……ふざけているのか!?!」

「ん?全くふざけてねえよ。生憎、これ以下の武器は持ち合わせていなくてな。まあ、これで十分だろ」

ブランがブンブンと振って感触を確かめる『ソレ』は、周りからしたら、とても武器とは言い難いものだった。戦いというものをナメて

いるとしか言いようが無いソレを、ブランは少し満足そうに見つめてニツと笑う。

「いやー……結構振りやすいな、この『木の枝』は」



## 第23話 神の遊び

三人称side

「何のつもりだ!?!」

ブランがおもむろに取り出したのは、そこら辺に落ちていたと思われる『木の枝』だった。何を考えているのか全く分からず、ヴァーリはブランに向かって声を荒げる。

「何って……武器だろ。武器を持って何が悪い?」

「ふぎけるな! そんなのは戦いではない! 俺を馬鹿にしているのか!?!」

「おう、馬鹿にしているぞ。なんだ、ハンデが足りないなら左手の小指一本だけで戦ってやろうか?」

「……ナメるなあ!!」

その慢心が命取りだと言わんばかりに先制攻撃を仕掛けようと、背中の翼で加速し、ヴァーリはブランに向かって突進する。しかし、ただ突進するだけでなく、背後に回り込んで後ろから殴りかかる。

「ブン」

それに反応できないブランではなかった。彼は振り向きざまに木の枝に自身の『気』を纏わせて強度を上げる。そして、突き出された拳を木の枝を横に振るって弾いた。

「ただの木の枝で弾いただ?!」

拳を変なもので弾かれたことに驚きを隠せるはずもなく、ヴァーリは距離を取った瞬間、動きを止めてしまう。そして、それを逃さずブランが自身に接近してきた。

「しまっ……い!」

『やられる』

そう確信したヴァーリは咄嗟に両手をクロスしてガードの体勢に入る。そして、ブランはヴァーリの眼前に手をかざして気弾を出す体勢となり、ついに……。

「はあっ!!」

パンッ!

「……は？」

何が起きたのか。ヴァーリは一瞬理解出来なかった。見てみると、自身の鎧には、よくパーテイで使用される『クラツカー』から飛び出る紙テープや紙吹雪が纏わり付いている。

そして、ブランの方へと視線を向ける。彼の掌からはプスプスと煙が上がっている。そう、まさにブランの手からは、あのクラツカーのように中に仕込んだ火薬が発火しパンと音が鳴ったのだった。攻撃ではなく、ただ『音を鳴らしただけ』だ。

「あはははっ！引っかかりやがって！お？どうした？ただクラツカーで脅かしたただけだぞ？何をそんなに怒っている？」

「クソが……ラアアッ！」

彼にとつて、これはただの遊びに過ぎなかったのだ。その事に憤慨し、早くも冷静さを欠いたヴァーリは、拳を突き出す。が、それよりも速く、ブランが持つ木の枝が彼の手の甲に置かれていた。そして

「そらっ」

「ぬああっ!?!」

そのまま、その枝でヴァーリの手の甲を押し込むと、彼の身体がまるで扇風機のように横回転するのであった。

「ほいよ」

「ガハッ！」

目が回るほどの高速回転を自らの身体で起こすヴァーリは、回転中全く身動きが取れず、代わりにブランが回転の中心である彼の胴体を軽く蹴る。

「ぐっ……こうなつたら……!」

ヴァーリは、完全に遊ばれているこの状況を打破しようと、ブランから距離を取り、次なる力を解放する。

『Harf Dimension!』

その音声後、校舎近くの空間が歪み、それが圧縮されるように小さくなっていく。何が起こっているのか分からないブラン。そして、それはイツセーやリアス達も同じことだった。

「な、何だ!？」

「アイツの能力は、相手の力を半減する能力。お前さんとは逆って感じの能力だが、禁手状態でのアイツにはもう一つの能力が付与される。それは、特定の空間の大きさを半減し、それを自分の力へと変換することだ。勿論、物体の大きさを半減することだって可能だ」

「マジかよ……ってことは、その能力で使い方次第では部長のおっぱいも小さくなるってことじゃねえか!アイツも許せねえ男だ!!」

「イツセー、貴方って子は……もう」

女性の大きな胸こそ自身の全てであるイツセーの文句に呆れているのか、それとも自分の身体に興味津々で少しだけ嬉しいのか、それはリアス本人にしか分からない。

一方、ブランは一度地上へと降りる。いつまでもニヤリという余裕の笑みを崩さない彼に対し、ヴァーリは、能力で自身に上乘せした力を魔力弾として手のひらに集中させる。かなりの大きさであり、地上に落ちたら、さぞ大きなクレーターが出来上がるだろう。

「覚悟はいいか？」

「覚悟?……おいおい、分かっているようだな。そんな虚仮威しが俺に通用すると、本気で思っているのか?」

「……くらえっ!」

ヴァーリは巨大な魔力弾を地上にいるブランに向けて放つ。しかし

「……」

臆することもなく、その場にジッと佇むブランは、その魔力弾が自身に当たる直前、手のひらをかざして受け止めた。そして

「ほい」

「なっ……!!?」

ちよつと握ることで、その魔力弾をあつという間にかき消したのだった。破壊の力を使ったのではなく、ただ単に『潰した』だけだ。少しは効くと踏んでいたヴァーリは、強化された自身の力が全く通用しないことに戦慄し、動きを止めてしまった。

「終わりか? なんなら今度はこっちからいくぜ」

ピシユン!

「!?」

瞬間、ヴァーリの背後に一瞬で回り込んだブラン。攻撃はせず、ジツとヴァーリの背中を見る。背後を見てやつとブランの位置に気づいたヴァーリは慌てて距離を取った。

なお、驚いたのはヴァーリだけでなく、三大勢力のトップ達も同様であった。

「何だ!? 今、奴は何をした!?!」

「消えたり、木の枝を強化したり……一体どんな能力か見当がつかない……!!」

(馬鹿ね、木の枝を強化するのはあくまで鍛えれば誰でも出来る『気のコントロール』の応用。コイツらは大抵、『強者には特異な能力がある』という考えが頭に染み付いているから、師匠が特に変な能力を使っけてないってことが分かっていない)

(消えて見えるのは、ただ単に白龍皇の背後にししょーが高速で移動しただけ。我とティアマツトのように気を扱えない者、みんな理解力が乏しい)

ティアマツトとオフィスは特に驚きもせず、ブランがやっていることを冷静に分析し終わっていた。歴代最強の白龍皇といっても、彼女達はブランが負けるはずがないということとは最初から分かっているのだった。

「おらよ」

「がぼっ!?!」

バキンッ!

(ば、馬鹿な……！木の枝で殴られただけで鎧が壊された!? 見かけはただの枝だぞ?! 一体何をしたこの男!?! ば、化け物め……!!)

距離を取ったヴァーリの行動は無意味に終わった。すぐさま近づいたブランが振るう木の枝が銀色の兜に炸裂すると、音を立てて割れる。そして

「ほらよ」

「ぐあああああっ!!」

追撃として今度は顎に一発木の枝を当てる。体が仰け反って上へと飛ばされるヴァーリ。軽く振るっただけなのに、何故このようなダメージを食らうのか、彼には納得ができず、とりあえず一発仕返しをしなければ気が済まなくなるほど冷静さはなくなっていた。

「ツアアアッ!!」

ヴァーリは仰け反りから立ち直ると、すぐさまブランに拳を突き出す。イツセー達がやっと思いで追いつけるほどの高速の連打。禁手を纏っている彼の拳の威力は、堕天使総督のアザゼルでさえ脅威に思う程だろう。

しかし、それではブランには通用しない。彼は身体を横に逸らすくらしいの最小限の動きで躲し続ける。目で追っているわけでは無い。ただ、相手の気の流れを感じ、動きを読んでいるだけである。

一方、ヴァーリにそんな技術はない。ヴァーリも相手の気を読むことは多少出来るが、戦闘時にその力を応用することは出来ていない。たとえ、ブランの神の気が読めたとしてもだ。

「はあ、はあ……!」

避けるブランに息切れが見えず、代わりにヴァーリに疲れが顕著に現れる。動きを止めたヴァーリに対し、距離を取ったブランはクルクルと木の枝を自分の掌で回しながら口を開く。

「もつと本気でやって欲しいな。それとも、本気でやってそのザマだったかな? だとしたら悪かったな。謝るよ」

「キ、キサマ……!!」

フフツ、と煽るような嘲笑がヴァーリの神経を逆撫でる。

「しかし、このままではつまらないな」

元より期待はしていなかったが、これではお遊びにもならないと愚痴るブラン。すると

「クソ……神器の力さえ通用すれば……!!」

「ん?」

ヴァーリが憎々しげに呟いた言葉に、気になったのか、興味を示す。そして、同じようにその言葉を聞いていたのか、地上にいるレムギツトが彼に助言する。

「ブラン様。その方の神器の力は、相手の力を半減し、その半減した力を自分に上乗せ出来るのですよ!でも、あなたの纏う神の気がそれを邪魔して効果が発揮できないとのことですよ!」

「……ほう」

ブランは驚きというよりも、どちらかという喜びが見られる反応をする。それはつまり、自分にハンデを課せられるだけでなく、その分相手が強くなるということを意味し、それはブランのサイヤ人としての本能を騒ぎ出すトリガーとなった。

「よし、良いこと考えた。おい、よく聞け。俺は今から、一度俺自身が纏う神の気を解くことにした。それで神性が無くなったところに、お前の神器とやらで俺の力を吸い取ってみろ」

「何……!?それがどういう意味か知っていて言っているのか……!?」

ヴァーリは、自ら力を解くブランの意図は理解出来ず、完全に弄ばれているのを理解。一方、その慢心を逆にチャンスだと感じたのはアザゼルだった。神器を研究していた彼は、ヴァーリの力でこの戦況を逆転できる可能性を感じたのだ。

「随分と舐めきっているが、それは悪手だぜ破壊神様よ。ヴァーリに力を吸い取られれば、大抵な戦況は揺らぐ。しかも、余分な力は逃すこともできる。もし、本当に力を奪うことが可能となったなら、既にヴァーリに触れられた時点でチェックメイトだ」

「じ、じゃあ自分の力は増して相手は弱体化するってことじゃねえか!そんな馬鹿強いのが俺のライバルだったのかよ!」

アザゼルの解説にイツセーだけでなく、リアスやサーゼクス達も驚きを隠せない。だが……

「フッ」

「……何がおかしい？」

ブランは笑う。それが余裕か、慢心か、はたまた虚勢なのか、ヴァーリにはどれか分からない。

「いや、相手の力を奪わなければまともに戦えないなんて………赤ん坊みたいな奴なのかと思ってな。所詮借り物の力である道具にしか頼ることのできない可哀想なお前に、せめての慈悲を与えてやっている破壊神の俺は優しいもんだと自賛してるだけさ」

「ッ……!!」

口を開けば煽りや侮蔑の言葉しか出てこない。ヴァーリは、いい加減ブランの顔面に一発拳を食らわせた気持ちは溢れそうになるが、なんとか堪えて踏みとどまる。

（落ち着け……相手のペースに惑わされるな。半減してしまえばこっちのもの……奴の油断や慢心が勝敗を決するということを悟られてはならない。たとえ相手が強大な力を持っていたとしても、その余分な力を瞬時に逃せばいいだけだ。そして、後は奴の力をどんどん低下させていけば……!!）

単純なことだ。自分の力で敵を弱体化させればいい。ただそれだけだ。いつもやっていることだ。何を躊躇する必要がある？と――

そんな自問自答を繰り返し、ついにその力を発動する。

『Divide!』

（よし！成功だ！）

神器は反応した。このまま、ブランの力を吸い取れると内心ほくそ笑むヴァーリ。しかし

ブチイッ！

「ぐおおおおおっ!」

「はっ」

なんと、力を吸い取った瞬間、彼の右腕と左足が身体から噴射するようにもげてしまった。禁手の鎧も解け、ヴァーリはフラフラとなりながら地上へと落下する。

「ごぼっ!?がはっ……はっ……ガアア……!!」

千切れた部分からは鮮血が噴き出し、更には吐血までもが苦しむ。突如起きた異様な事態に皆が驚愕し、その正体に気づいたのは、彼が小さい頃から一緒にいたアザゼルだった。

「まさか、間に合わなかったとでもいうのか!?!」

「どういうことだ、アザゼル?」

「あの破壊神の力が強大すぎて、ヴァーリがその力を逃すのが間に合わなくなつて暴走した……つまりオーバーフローを起こしたってことだ……!」

この場合、完全にヴァーリやその他の者達の考えが甘かったのだ。神器が通用すれば、破壊神の弟子ならば、まだ勝機があると。しかし、そんな浅はかな彼らの常識は、破壊神である彼に通用しないのだった。

「何だ?お前の言う、力を吸い取る能力は四肢のどれかがもげる能力なのか?芸だとしても面白くねえぞ」

ブランは心底がっかりし、それと同時に納得してしまう。先程は、相手の力を吸い取る白龍皇ならば、もしかしたら自分と同等の力を手に入れるかもしれないと思っていた。しかし、よくよく考えてみれば、自分の力がヴァーリのキャパシティに収まるわけがないと納得したのだ。我に返つてみると、自分が思っていたのはただのぬか喜びにすぎず、一気に彼自身のやる気も下がってきた。

「お前、本当に俺に勝つ気あんの?」

「……何が言いたい」

「俺が当ててやろうか?お前、殺されそうになったら逃げ帰るつもりだろ?最初っから俺の力を試し、自身との差を確かめたかっただけに過ぎない。不利になればいつでも逃げられるよう、切り札でも残してんだろ?」

「逃げる?……ふっ、戦略的撤退と言ってもらおうか。俺もまだまだ強くなる……今、勝てなくても、いつか必ずお前を倒せるくらいに強くなる……それに、お前が言うように俺にはまだ切り札がある……俺は、このままでは終わらんと!」



(右腕と左足がないくせに、よく吠える奴だ……)  
「ん？」

その瞬間、ブランは何か違和感を感じた。キョロキョロ辺りを見回すことはせず、目を瞑ってその気配を察知する事に集中をする。すると

ヒュン!

数秒毎に何処からか気弾が飛んできた。風を切る音が聞こえ、動きを察知したブランは四方八方から次々と放たれるそれを避ける。敵は複数いるかと思われたが、感じる限り、人の気配は『1人』だけで、放たれる気弾の種類も同じもの。

つまり、導き出される答えは一つだった。

(なるほど、転移か知らんがチョコロチョコ移動して四方八方から撃つてるように見せかけてるだけか)

ブランは納得すると、視線と身体は前に向けたまま、右手の親指を除外した4本の指を立てると左脇腹の横からのぞかせるように後ろ斜め下へと向ける。そして

「フッ！」

「ガハッ！」

右手から伸びたエネルギーの刃。ブランが形成した気の剣が何者かの腹部を貫き、ブランはそのまま持ち上げて自分の前へと持ってきた。

「ッ！美猴！」

「ガッ……クッソ……!!」

漢服を着た男が、腹部に貫通しているブランの気の剣によって痛みに悶えており、どうやらヴァーリの仲間のようなだ。

「誰だアイツ……？」

「アイツは、開戦勝仏の末裔……簡単に言えば、かの有名なクソ猿、孫悟空だ。まさか、奴も禍の団に入ったとはな」

イツセーの問いにアザゼルが答える。その声はブランにも届いており、先程の美猴のまどろっこしいやり方にうんざりしている様子だった。

「コソコソ隠れやがって……気の消し方が甘いんだよ。……つっても、今のは仲間がやられて、ついでしゃばりたくなつたのが原因か？ まっ、悪くはねえが雑魚に変わりはねえな」

「ヴァーリ……さっさと、逃げ、ろ……」

「それに、孫悟空だど？……アイツと同じ名前を持つてるくせにその程度か。これぞ雲泥の差って奴だな……さっさと失せろ」

「ガッ……」

貫通した気の剣を上へと一気に振り上げ、心臓が真つ二つどころか胴体が真つ二つになったことで美猴は呆気なく絶命した。ポトポトと、ヴァーリの目の前に彼の死体が落ち、彼の死を嘆くかのように怒号を上げた。

「び、美猴!!き、貴様あ……!!貴様だけは、貴様だけは必ず俺が殺す!!」  
「フン、急に仲間思いな一面を見せてきたか。が、最初から逃げ道を確保し、あまつさえ勝つ気がない腰抜けのお前に次なんてあるわけがない。今ここで逝け」

ブランは終わりにしようと木の枝を親指と人差し指で持ち、まるでダーツで的を射るかのように狙いを定める。しかし

『ま、待ってくれ!!』

「あ？」

「アルビオン……？」

突然、何処からか声が聞こえた。気を感じないが、耳をすますとどうやらヴァーリの体から聞こえるのだと理解したブランは溜息を吐く。

「なんだ、その神器とやらの魂か。言つとくが、コイツを見逃してくれなんて願いは聞き入れないぞ。ジジイに喧嘩売った以上、情けで逃すなんてこちらの面子つてものが丸潰れだからな。恨むなら安易な気持ちで俺に挑んだコイツを恨みな」

聞き入れる様子はなく、ブランは気を取り直して再び木の枝を構える。しかし、アルビオンの口から出たのは、ヴァーリの助け舟ではなく、ブランの虚を突く願いなのであった。

『私を……私を助けてくれ!!』

「「「「?」」」」」

懇願するように放たれた言葉は、まさしく『命乞い』だった。アシアの神器が完全に消え去ったことを聞いて、余程同じ目にあいたくなかったのか、声が若干震えている様子だった。

一方、ブランはその言葉に驚きはしたが、その願いを突っぱねることはしなかった。寧ろ、その願いに対して受け入れたのだった。

「ほう、この地では伝説と謳われるドラゴンが神に命乞いをするとはな。ふつ、しかしなんら不思議なことじゃない。宇宙に生きる者は、何より自分の命を大切にしたいと思う。自分の身の危機を感じ、逃げ出すことに珍しさも無い。寧ろ誇るといい……お前は最適な判断をし、自らの命を救ったんだ。この俺相手にな」

『か、感謝する……!』

「なつ、アルビオンお前……裏切るのか!」

『フン、裏切るだど?勘違いするな。私はお前に力を貸してやっているだけで仲間と思っっているわけじゃない。所詮、私という他者の力を使って粹がっているだけにすぎないお前をいずれ捨てるのは容易に想像出来るだろう。……それに、それになあ……私はこんなところで死にたくないんだよ!!二天龍の宿命?そんなのどうでもいいよもう!!また一瞬でボコボコにされて消滅させられるくらいならひっそりと生きていた方がまだマシなんだよ!!バーカバーカ!!』

「ア、アルビオン……貴様アアアアアツ!!」

何とも哀れな姿だろうか。神器の中では所有者に従うしかないアルビオンに裏切られ、見捨てられたヴァーリに対しブランは淡白とした表情で彼を見下ろす。

「あらら、見捨てられちゃった。さて、どうする?このまま死ぬか?それとも、地の果てまで逃げ切ってみせるか?まっ、せめて宇宙に飛び出さない限り逃げ切るのは無理だがな」

「くっ……貴様は……(っ)はっ……」

右腕、左足がもげ、出血も酷く、ヴァーリは、何とか逃げ出そうと身体を何とか起こすことしか出来なかった。

「もはや虫の息か……まあいい、お前、さっさと殺すけどいいよなっ」

「待て！ヴァーリを殺すな！そいつの処分は俺が下す!!」

ブランがヴァーリにトドメを刺そうとした瞬間、アザゼルがヴァーリの危機を感じて飛び出す。右腕を落とされた彼だが、それでもヴァーリは自身が育ててきた息子のような存在だ。いくら禍の団に入ったからといって、黙って殺されるわけにはいかなかった。しかしグサツ！

「なっ……!!」

「答えは聞かねえよ」

構わずブランは、ヴァーリの心臓を木の枝で射抜く。しかもそれだけでなく、木の枝に刺さった心臓が枝ごとヴァーリの身体を貫通し、地面へボトリと落ち、彼の命はここで尽きたのであった。

「…ふむ、本当に心臓……というか魂と直結してやがるのか。俺には『分離』なんて技術はないしな。おいレム、これ、腐らないよう保存しとけ。コイツには後で聞きたいことも出来た」

飛び出た心臓を手に取り、その中にアルビオンの力を感じ取るブラン。彼は抜き取った心臓をレムギットに預け、彼女が持つ杖の中にしてしまう。

そして一方、今の一連の流れを見ていた内の一人、イツセーはアルビオンにこれでもかと軽蔑の視線と言葉を出す。

「なんてひでえドラゴンだよ……一緒に戦ってきて、自分の命が助かりたいからって宿主を簡単に見捨てやがるなんて！そんなのあんまりだろ！なあドライグ!!」

『えっ!?あ、ああ……そうだな……』

歯切れの悪い返事をするドライグ。自身に力を貸してくれるドライグは、そんなことはしないはずだと、イツセーはそう信じていたのだった。一方、ヴァーリを殺したことに憤慨するアザゼルはブランに詰め寄る。

「何でヴァーリを殺した!?アイツの処分は俺が下すと言っただろ!!」

「はあ?何故、敵対関係の俺がお前の命令を聞かなければならない。寧ろこっちはお前のところから出たテロリストを排除してやったんだぞ?なのになんなんだその態度は。ええ?」

「ッ……クソッ!!」

墮天使の総督としては、この場ではお礼を言うべき場面であろう。自分の組織から出した不穏分子を始末してくれたのだから。ブランは、今までアザゼルたち墮天使が神器狩りをしてきて、今度は自身の身内が死んで悔しそうに顔を歪めるアザゼルを見れたことに、してやったりという表情をして彼から完全に興味が消えたのか、視線を外す。

今回の件で、ブランは大いに健闘を称えられることになるだろう。なにせ、ヴァーリという存在はそもそも先代の魔王ルシファアの血を引く、人間と悪魔のハーフであり、墮天使総督であるアザゼルの元から離反した者である。世界を脅かすドラゴン……二天龍の片割れ、「白龍皇」アルビオン・グウィバーの魂を宿す彼を討伐したとなれば尚更のことだ。

「……ひとまず、この件は終わりとしよう。アザゼル、ミカエル、私達は三大勢力として和平を結ぶ。そして、この機に他神話勢にも協力を要請し、禍の団に立ち向かうとし——」

サーゼクスがそう言った瞬間、セラフォールが空を見上げ、ある物を指差した。

「み、見て……アレ……」

セラフォールに導かれた皆の視線の先には、信じ難きものがあった。なにゆえ、それは世間では都市伝説程度にしか語られていないものであったのだから。

「う、宇宙船……!?!」

「ほう、やつとききたか」

ブランが待ちわびたかのような顔をしていた。オーフィスとテイアマットですらよく分からない事が起きそうで頭に疑問符を浮かべていた。

その宇宙船は駒王学園で静かに着陸する。そして、その出入り口から武装をした多数の異星人らしき者達がサーゼクス達の前へと現れ、サーゼクスはその者達に問う。

「なんだ、君達は？」

サーゼクスの問いに、代表者と思われる者が警察手帳らしき代物を提示し、自身の身分を紹介するのであった。

「えー、夜分遅くに申し訳無い。我々は、宇宙の法を取り締まる、『銀河パトロール』であります。この場に、宇宙でも重罪として扱われている『時間のコントロール』を犯す者がいると報告があり、この地にやってきました」

新たな来訪者に、イツセー達は再び警戒をするのであった。

## 第24話 銀河パトロール

三人称 side

「銀河パトロール?」

突如、宇宙からやってきたUFOが着陸し、そこから宇宙人の大群が綺麗に整列するようにイツセー達の前に現れる。襲うことはせず、代表者が一人前に出て警察手帳のようなものを見せて名乗りあげるものの、イツセー達は警戒を解くことはなかった。

「簡単に言えば、地球に住むお前らの言う『警察官』つてやつ。活動範囲においてはこの地球と比べ物にならないくらい広い、つまり宇宙規模の組織……つてことは、そこまで言えばもう分かるだろう?」

「……」

つまりだ。宇宙版の警察がここにきたということ。それ即ち、ここにパトロールをしにきたか、それとも犯罪者や容疑者を捕まえにきたか……今回は後者の方に該当するだろう。

だが、サーゼクス達は考える。もしかしたら、宇宙の破壊神を悪と認定し捕まえに来たのではないかと、一瞬だけ期待を寄せるが、ブランの態度から察するにそんな救世主みたいな存在が現れるほど都合の良い展開にはならない。

「私が呼んでおきました。オホホー」

「何……!?!」

レムギットの軽快な言葉に再び警戒をする。ならば、一体誰が法を犯したのか?

「報告にあった者とはどちらの方でありますか?」

レムギットは、銀河パトロール隊の隊長に質問され、その人物を指差す。そう、その犯人は言わずもがな……時間停止の能力を持つギヤスパーであった。

「突然で申し訳ないが、これも法の一つだ。地球の時間で11時50分、君を時間のコントロールの罪で署まで連行する」

「ッ!?!僕が……?」

戸惑い、困惑、緊張が今のギヤスパーにあった。会談前、自身の暴

走を懸念してくれたイツセー達の優しさに触れたその後、テロリストに利用された挙句、このような仕打ちにどう反応すればいいのか分からなかった。

そして、その仕打ちに怒りを露わにするのは勿論、イツセー達だ。「はあっ!? ギヤスパーが逮捕!? ふざけんじゃねえ! そんな馬鹿なことがあるか!!」

「そうよ! 勝手な事を言わないで頂戴! 私の可愛い下僕が犯罪者だなんて、それ以上の侮辱は万死に値するわ!!」

自分の仲間が犯罪者扱いなのが我慢ならないのか声を荒げるイツセーとリアス。他の者も訝しげに銀河パトロール隊を見る。そんな彼等にブランが理由を説明するのだった。

「どうやら事情が理解出来てないようだから教えてやる。おい、そこのお前」

「は、はい……」

「お前だな? さっき、神器の力でこの世界の空間の時を止めたのは」ギクツと、驚いた後に怯えたように黙り込んでしまうギヤスパー。ただ、嘘をつく事は出来ず、正直に自分が原因だと頷いて答えた。

「アレはテロリストがやったことだろ!! ギヤスパーは何にも悪く…ガッ!」

「お前はいい加減少し黙つてろ……!!」

一々怒鳴られては話がまともに進まないと思ったのか、ブランは我慢ならずイツセーとの距離を詰め、彼の首を数秒締める。距離を詰めた際、あまりのスピードに皆は反応すら出来ず、その光景を見るのにほんの少し遅れた。

「カハッ、ゴホッ! ゴホッ!」

「イツセー君!」

ブランはそのままイツセーを地面へと叩きつけると、手を離し、元の位置へと歩いていく中で説明を続ける。イツセーは朱乃に支えられながらも立ち上がり、それでも尚ブランを睨み続ける。

「そいつは、いずれ己の力で時空を歪める可能性が出てくる。下手すれば、歴史の改変にも影響し、新たな『時の指輪』が現れてしまうん



だよ」

「時の指輪？」

サーゼクスが聞き返す。勿論、ブランやレムギット以外には分からないことだ。オーフィスやティアマツトでさえ知らない代物であるので、ここでそのことについて説明しよう。

時の指輪とは、表面にメビウスの輪のような紋様が象られているのが特徴的な銀色の指輪であり、それにはその名の通り時間を自由に移動できる能力……つまり『時空移動』の能力が備わっている。普段はこことは別の宇宙……第10宇宙の界王神ゴワスが管理を担当しており、界王神、すなわち界王神の証となるポタラを装着した者にしか使用は許されていない。

だが、今回問題になったのはその指輪の能力ではない。時の指輪にはもう一つの機能が備わっており、それは「過去へ赴き歴史を改竄する」という禁忌を犯した事で『新たな平行世界』が生まれてしまうと、それと同時に本来の銀色ではない翡翠色をした時の指輪が誕生してしまうというものである。

「その何が問題だと？」

説明はしたが、やはり納得はいかないようだ。

「まあ、そう思うのも無理はない。平行世界が誕生したからって、それで何が変わるんだ？何が悪いんだ？って普通は思う。しかしだな、平行世界ってのもそう易々と誕生していいもんじゃねえんだよ。例えばそうだな……その新たに誕生した平行世界の住人が、時空転送装置とかでも開発して、それを使って軍隊や兵器、爆弾を送り込んできて、この地球に戦争を仕掛けてきた。他にも、この時代の人間達が他の時代へと侵略行為を行ったり、この時代に攻めてくる可能性があるからと、有人惑星へ先制攻撃を仕掛けたってなったらどうする？そんなの、なんて迷惑なことをしてくれたんだって思うのが普通だろ？」

渋々ながらブランたち以外の全員は頷く。彼が真剣な表情で話していることから、全く有り得ない話ではないと分かったからだ。

平行世界とは、そもそもどうやって生まれるのか。主に例として挙げるなら……『過去の改変』。実は、この世界の、第0宇宙ではない別

の宇宙では、実際それを一度行なった者がいた。絶望の未来の歴史を変えようと抗ったその青年は、自分たちの未来を変えるために過去にやってきた。

だが、それは失敗に終わる。手を尽くした結果、未来が変わったのではなく、『新たな世界の誕生』に繋がってしまった。過去を変えたことで、歴史に矛盾が生じ、分岐点が生まれたことで所謂『タイムパラドックス』が起きてしまったのだ。それにより、その未来の世界と過去の世界は、もはや別々の世界となってしまう結果に終わった。その後、色々な出来事があつて、その青年がいた未来の世界は消滅するという「最悪な結果」になってしまった。

「そんな……だが、それはあくまで可能性の話だ！」

「ああ、そうだ。必ずしもそうなるとは限らない。しかしだからといって、そんなことが起こらない可能性がないわけでもない。ありえないなんて事はありえないんだよ。下手に異変を生み出さないようにする為には、時の指輪を生み出さないようにすること……つまり、歴史に悪い影響を与えそうな能力を持った連中をどうにかした方が手っ取り早いし、何より効率が良いんだよ」

「そういうのはよく分かんねえ……でも、だからってこんな横暴が許されるわけがねえだろ！お前に情ってもんはないのかよ！お前はギヤスパーがどんなに苦しんできたか知らないからそんなこと言えるんだ！何にも力に悩んでないような、力をただの暴力としか見ていないお前には絶対に分からねえ!!」

仲間思いの熱いセリフを吐くイツセーに、リアスやサーゼクス達は感心する。確かに、ルールがあるからといって仲間を素直に引き渡そうとする程、彼等は人でなしではないだろう。まあ、人ではないが……。

しかし、そんな情に流されないのが破壊神である。

「力は所詮力だ。そんなのは手段に過ぎず、勝手に使い道や定義を決めつけんのはお前らのエゴってもんだらう。それになんだ……その神器とやらは、必ず危険な代物にならないとでも言い切れるか？墮天使だってその力を危険視して、今まで神器所有者を虐殺してきたし

……。実際、そいつだつてその力を敵に利用されて、自分じゃ考えられない程の力を引き出したじゃねえか。それに、いつまでも仲間に助けてもらおうくらい軟弱な所有者なんだから……。いつそのこと監禁された方が、また誰かにその力を悪用されるよりかはマシだと思うぞ」

神器は、良くも悪くも人の思いによつて成長に変化が生じる。例として挙げるなら、イツセーである。ブランは知らないが、彼は自身の神器を介して『洋服破壊』ドレスブレイクという女性の着ているものを破壊する能力を発現させている。これは彼の煩惱だけが成せた技であり、歴代の赤龍帝とは全く別物のパワーアップである。

時間のコントロールという能力を持っているギヤスパーは、これらの進化を考えると彼を放っておくのは非常に危険で厄介なことであり、もしかた悪意を持った者に利用され、今度は過去や未来の歴史に影響を及ぼす力が発現してしまえば、彼の存在を放っておいたブランや銀河パトロールの面目は丸潰れだ。

だが、そんな事情があれど、仲間思いのイツセーにとっては関係のない事であつた。

「テメエーギヤスパーを馬鹿にするんじゃないやねえ！つーかそんなこと、いきなり言われて納得できるかよ普通!!テメエらの法律だか何だか知らねえけど、そんなの理不尽だろ!!」

「事実であり、それが銀河パトロールの仕事だ。お前たちは自分の知らない事があれば、そうやって癩癩を起して、事実を全て否定して、それが全て正しい道になると、問題全部を解決できると本気で思うか？まあ、仲間の為ならそんなもん関係ないっていう、なりふり構わない所に関しては別に分からなくもねえが……。だがな、知らない罪というのは何よりも恐ろしいことだ。今回の件も含めて、今の内に知ることが出来たのは寧ろ良かった方だと俺は思うがな……。ほら、さつさといけよ」

ブランの指示で銀河パトロールの隊長が動き出す。ギヤスパーの元へと辿り着き、懐から手錠を取り出した。しかし、次の瞬間

『Boost!』

「やめろおお!!」

ドゴオツ！

「ガハツ!!」

「た、隊長!!」

ギヤスパーに手錠を掛けようとした隊長を、なんとイツセーが赤龍帝の籠手を用いて殴り飛ばした。銀河パトロールのバカ一人が殴り飛ばされた隊長の元に駆け寄り、イツセーはギヤスパーを一時的だが銀河パトロールから解放した。

「仲間を、こんな訳のわからないことで渡してたまるか!!そうでしょう、部長！」

「ええー！イツセーの言う通りよ！これ以上、好き勝手な事をさせることは王として、グレモリー次期当主として許さないわ!!」

イツセーやリアスだけではない。他の者も同様、ギヤスパーをこんなふざけた理由で連れ去られてたまるかという一心で彼を守ろうとする。銀河パトロール隊員達は、あまりの予想外な展開に驚いている。

そして、ギヤスパーを賭けての争いがここで起こってしまう。しかし、この中で一人だけ……この状況が非常に絶望的だということを知解していた。

(ダメ……勝てない……！破壊神には、絶対……！)

忘れているとは思いが、ブランはヴァーリとの戦闘の際に自身が纏う神の気を解いている。それ故に、この中で唯一……気のコントロールを知っている小猫だけが、ブランの化け物じみた気の大きさ、圧倒的な力を感じ取ってしまったのだ。

それが原因で彼女は動けなかった。絶望的な実力差を誰よりも理解してしまったことで、ギヤスパーを守るどころの心境状態ではない。

「ギヤスパークンを守るんだ!!」

一方、戦場ではサーゼクスとセラフォルの現魔王までもが動き出し、銀河パトロール隊員を次々と薙ぎ倒していく。一応、事情は説明したものの、まさかここまで抵抗するとは思っていなかったのかプランでさえ驚きを隠せない。

「おいおいおいマジかよ、あいつら……」

銀河パトロールは、いわば地球という警察と同じと言ってもいい。このまま、ギヤスパーを取り戻す為にイツセー達が暴動を起こせば、公務執行妨害は免れないだろう。

「やむを得ない！ 応戦しろ！」

そして、銀河パトロール隊の一同も自らが持つビーム銃、エネルギーを纏った警棒を用いてイツセー達に応戦する。

「くはははっ、なんか面白いことになってきたぞおい」

側から見ていたブランは一周回って面白おかしく笑っていた。まさか、銀河パトロールと真正面から立ち向かうとは思っていなかったからだ。そして、今現在……何故、このような争いが起こっているのか分からないオフィスは彼に問う。

「ししよー、何で争い起こった？ どうして、みんなの意見反発し合う？」

「んー……まあ、そう難しいことでもねえよ。人間も神にも『心』があり、『感情』があり、例え正しかろうが間違っているように、時にその感情が先走って暴走する場合がある。それもこれも神が生き物に知恵を与えた時からずーっと何も変わらない。だが、感情があるからこそ、奴らは考え、行動し、歴史を重ねて『成長』や『進化』を繰り返してきた。まあ、その進化が良い方向に行くかが、全く予測出来ないってのが生物としての宿命で、難しい問題なんだけどな。しかし、どんな進化をしようが口で分かり合えなければ争いは起き、勝った方は正義、負ければ悪……いつの時代も、どの星も同じことだ。こちらら、そんな星を数十年間ぼっちだが見続けてきた……」

「じゃあ、ほつとくっ？ そつとしてあげる？」

「……いや、それは俺の立場上許されねえ。どうやら割って入るしかなさそうだ。銀河パトロール隊員じゃあ、下っ端どもは何とか出来るとしても、あの魔王には勝てないらしい」

イツセーは、先程アザゼルから貰った腕輪を用いて、無理矢理『禁手』を発動し、赤き鎧を身に纏う。

『Boost! Boost!』

通常時とは違い、一気に力を倍増させることが出来る。重ね重ね倍加していくことにより、彼は今までよりも強くなったと確信が持てた。銀河パトロール隊員の下っ端なら楽に倒せるくらいで、サーゼクス達もついていることから『これならいける!』とこの時は思っていた。しかし

「あまり調子に乗るなよ」

「ツ!?ぐあっ!!」

「イツセー!」

ブランは鎧を纏ったイツセーの手首を掴み、軽々と持ち上げるとリアス達のところへ投げ飛ばす。特に力を入れているわけでは無い。単にブランの力が強すぎたに過ぎない。

イツセーの動きが止まったことで、他の者も動きが止まる。リアスやサーゼクス達も、銀河パトロールもだ。理由はブランが突然この場に介入したからだ。期待を大きく抱いていたイツセーが簡単にやられたことで、眷属が動揺し、その動揺が魔王へと、そして銀河パトロールにも感染したことで戦いが収まったのだ。

投げ飛ばされたイツセーはリアスに支えられて立ち上がり、ブランを睨みつける。未だ状況的に自分達の方が正しいと思っっていることに呆れるブランは、ため息混じりに忠告をする。

「いい加減に理解したらどうだ?そいつは、今この場で捕縛されるべき罪人なんだってことを。無駄な抵抗はただお前らの首を絞めるだけだぞ?」

「ふざけんな!ギヤスパーは何も悪い事してねえ!神器のせいだ辛い生活をしてきたコイツの気持ち分かるか!!?それを踏みにじるお前らなんか、ただの外道に過ぎねえ!!ぜってえにぶっ飛ばしてやる!!」

「別に俺の知ったことじゃないな。まっ、そういう事情があれば向こうで多少の酌量の余地はありそうだが。兎に角、この件は破壊神である俺にとっては重要な案件だ。故に見逃さない……どんな事があるうとな。……おい、何している、連れて行くならさっさと連れて行け」

「はっ、(´)協力感謝いたします!このお礼は後ほどに!」

ブランは、銀河パトロールの隊長らしき者に視線を向ける。返事よ

りも動けと言いたげな視線にビビりながらも銀河パトロール隊員達はギヤスパーを連行する。

「君も、いいね?」

「は、はい……」

隊長はギヤスパーに言葉をかけ、ギヤスパーはこれが自分の運命なら受け入れるべきだと諦めたのか、連行されることに抵抗しなかった。だが

「させるかあああああつ!!」

「ブン」

イツセーは逃さまいと禁手状態で突進していく。だが、これ以上好き勝手をさせない為に、ブランは足元の石ころをサイコキネシスのように空中へと浮かばせると、それを軽く蹴り飛ばした。そして

「ガハアアツ!!」

蹴った石ころは、まるで銃弾のように飛んでいき、見事にイツセーの腹部に当たって彼をふつとばした。

「イツセー!」

石ころをぶつけられただけで押し戻されるようにふつとばされるイツセー。その衝撃で鎧も殆ど壊れ、禁手状態が解除される。リアス達は傷ついたイツセーに駆け寄り、アザゼル達は底知れないブランの力に戸惑うことしか出来なかった。

「今……あいつは何をした……?」

隊長は遂にギヤスパーは手錠をかけ、まずはUFOの所まで連れて行かれる。そして、その直前、ギヤスパーはイツセーの方を振り向いた。

「イツセー先輩……僕は大丈夫です。だから、こんな僕は忘れて下さい……」

ギヤスパーは震えた声でそう告げると、UFOの中へと入り、地球の外側へと連れて行かれる。

「ギヤスパアアアアツ!!」

連れ去られたギヤスパーに向けて叫ぶイツセー。あまりにも理不尽で残酷すぎる……許せない……その怒りだけが今の彼にあった。

一方、ここまでの理不尽な強さが未だに信じられないアザゼルは先程、たかが路上に転がる石ころ程度でイツセーがふつとばされたことに狼狽えている。

「石ころを蹴っただけなのに、赤龍帝が吹っ飛ばされただと？ドラゴンの禁手だぞ!?!さっきのヴァーリ相手に木の棒で圧倒したりと……何なんだお前は!?!」

「言っただろ。俺はお前らを破壊するために来た破壊神、ブランだと。しかし、こう直ぐにお前ら全てを破壊してしまうのは、ちと可哀想だと思つてわざわざ生かशीてやつてるんだ。そこで……たつた一度だが、お前達にチャンスやる。本当の本当に最後のチャンスだ」  
「何……!?!」

「ビルスは大抵、その星の美味しい料理次第で破壊するかどうか決めるからな……こういう時、俺はサイヤ人らしく、『戦闘力』で判断してやつてんだ。お前たち悪魔の得意な……えっと、何だっけ。レーティングゲームって言ったっけ？それで勝負してやるよ。わざわざお前達の土俵で戦つてやるというんだ……俺は優しいだろう?」

「宣戦布告……ということか?」

「宣戦布告?……ハハッ、んー……成る程、お前らにとってはそういう解釈になるか……」

「おい、何がおかしいんだよ!!」

宣戦布告という言葉聞いて少し呆れるように笑うブランが癩に障ったのか、匙が大声を上げて睨みつける。

「宣戦布告つてのは、対等な相手に対して戦いを挑む時に使う言葉だ。だが、はつきり言つてお前らなんか、俺の相手にならねえし、『戦い』つて言葉で表していいようなものになるなんて絶対にあり得ない。これは俺にとつてはただの『残業』なんだ。所詮、俺の出したチャンスにお前らがどこまで抗えるかっていうだけの話に過ぎないつてことだ」

「んだとテメエ……!」

「やめなさい匙!」

「でも、会長!こんな好き勝手言われて何とも思わないんですか!?!」



「今行っても無駄なだけ……冷静になりなさい」

まるで勝負が最初から分かっているかのような発言に怒りを隠せない匙を、ソーナが何とか止める。

「そんな話に乗ると思うか？」

「乗るさ。嫌でもな……」

アザゼルの言葉に対し、ブランは笑みを浮かべて静かに手のひらを校舎側へと向ける。そして

「破壊」

「！！！！！！」

かつてディオドラにやったように、建物を粒子状に変化させて完全に消し去った。初めて見た破壊神としての能力を目の当たりにし、一同は驚愕の表情が崩れない。

「俺の手にかかれば、こんな風に冥界だろうが天界だろうが一瞬であなる。無機物だろうが有機物だろうが何でも破壊出来る……破壊神に破壊出来ないものなんて無いんだよ。お前らが断るなら、別に一瞬で破壊してやつてもいいんだぞ？」

所詮、これは仕事の一環……といっても、今回は彼の言う通り、残業といった方が正しいかもしれない。所謂おまけみたいなものだ。これまで様々な星を破壊してきた彼にとって、どのような種族だろうが、どんな気持ちを抱いていようが、どれだけその人物が慈悲深くても関係ない。ただ、己の仕事をするだけ。

理由は至極単純。理不尽であり、残酷であるが、破壊することで皮肉にも宇宙のバランスを保つことに繋がる。そのための重要な役割を担う神……それが破壊神として最重要の責務にして義務だからだ。

校舎を破壊したことだが、これは限りなく効果的な脅しだろう。その言葉に三大勢力の各々は口を紡ぎ、ブラン達に攻撃するのを躊躇する。そして、サーゼクスやアザゼル、ミカエル……それぞれの陣営のトップは一刻も早く、この破壊神をどうにかするため、各神話に協力を要請することを決意する。

「日時やらルールなどは追って説明してやる。勿論、ハンデも与えてやるさ。精々、残り少ない余生を楽しんでいるといい。チャオ」

そしてブランと、オフィス、ティアマットは先代ブランを担いだレムギットの近くに寄ると、まばゆい光に包まれて地球を飛び出していったのだった。

「クソがアアアアツ!!」

以前、仲間を殺されただけでなく、わけのわからない集団に別の仲間がさらわれた。イツセーやリアス達には、その怒りをぶつける対象がいなくなったことで、ただ嘆くことしか出来なかった。

## 第25話 地球でのそれぞれ

三人称 side

ギヤスパーのことは銀河パトロールに任せ、ブラン達は自分達の住む星へと舞い戻る。そこで、手土産というには些か不細工なもの……白龍皇であるヴァーリの心臓をレムギットが取り出す。

腐らせず、魂が離反しないよう保存していたことで、まだこの心臓には一応ヴァーリの魂と神器、そしてその中のアルビオンの意思が込められている。そこからレムギットが魂だけを抜き取ったことで、今はプカプカと光る玉として浮かび上がっている。

「……」

魂だけとなったアルビオンではあるが、周りではどんなことが起きているか大体分かっている。オーフィスやティアマツト、そしてレムギットとブランが囲みながら魂だけとなった自分を見ている……それだけで彼は心が震えた。悪い意味で。

「お前を生かしてやったのは、別に善意で助けたかったわけでもない。聞きたいことがあるからだ。それに答えてもらう」

「は、はい……」

怯えた様子でブランの言葉に返事をする。一応、ヴァーリと道連れにならずに済んだのはブランのおかげだ。ここでちゃんと答えなきや、今度こそ死ぬ……それだけは理解出来た。

「天界で扱われている神器システムってのは、破壊したらどうなる?」「ど、どう……とは?」

「破壊したら、その時点で神器所有者にどう影響すんのかってことだよ」

その問いに言葉を詰まらせるアルビオンは、しばし考えたのち、気の弱い声で答えを出した。

「……正直言つて、分かりません」

「分からない?」

「はい……なにゆえ、私は封印されている身なので……。まるで輪廻転生の如く、現所有者が死ぬと、またすぐに新たな所有者へと渡って

しまうというシステムに組み込まれているだけで詳しいことは何も……。しかし、システムの破壊されたことなど一度もない上確証はありませんが、その流れを管理する所でもありますから、破壊すれば二度とその繰り返しは行われたいのではないかと……」

「ふーん……」

システムの破壊。それすなわち、神器のたらい回しが行われなくなり、今ある現所有者が最後になる。その可能性が高いということだ。「ブラン様、それを聞く為にわざわざこんな形で助けたのですか？」

「いや、もしシステムを破壊するとして、そのせいで大量の人間が死ぬとなったら本末転倒って思ってた。それで確認を取っただけだ。しかし明確な答えではないが、参考にはなったぞ」

「は、はは……そういつてもらえて嬉しいですな……」

(ツシャアアッ！セーフ!!第一関門突破ア!!)

叫ぶ。大いに叫ぶ。心の中でだが。もはやキャラなどどうでも良い。この生存本能をフルに活用して何としても生き残る。アルビオンにあるのはそれだけだ。だが

「んでき、答えてもらったところで悪いんだが、正直言ってお前にもう用がないんだよな」

「うっ……!!」

ブランが興味をなくしたようにそう言う。アルビオンは苦渋の声を上げ、まさか、このまま消されてしまうのか?と思ひ、心の中で嫌な汗をかいた。

(いや、それでも先ほど命乞いには成功したのだ。命までもが消されることは無い……言葉が通じ合うのなら、一か八か……)

「あ、あのく……出来るかどうかは見当もつかないのですが、よろしければ、このまま元のドラゴンの姿に戻してはいただけなんでしょうか?もう、暴れたりもしないので……」

「ほう……随分と贅沢な願いではあるが、まあその条件なら特に問題はないな」

「で、出来るのですか!?!」

アルビオンは驚きの声を上げる。実は半分混じり冗談で言ったの

だ。確かにレムギットやブランには計り知れない力があるが、まさか自分を封印前の姿に戻せるとまでは思っていなかったのだ。

しかし、返答の仕方を聞くに、それは可能であるということ。その事実には歓喜の声を心の中で上げた。

「レムギットさんならどうにか出来そうね」

「ええ、楽勝ですねえ。『封印』という形で神器の中に封じ込められているならば、その封印を解いて本体を出すことは可能なはず。聖書の神如きの封印など、私の手にかかれば解くのは簡単なことです」

レムギット自身の力と、持っている杖があればそれが可能である。そう告げられたアルビオンは、肉体はないが、きつと晴れやかな笑顔を浮かべていたのだろう。

彼は、今この時を待つてやつとの思いで狭苦しい封印から解き放たれて、自由になれたのだ。これほど嬉しいことはない、今回ばかりは感謝するしか他になかった。しかし

「……そういえばアルビオン」

「なんだ、ティアマツト」

「アンタさ、あれだけドライグといがみ合っていたけど、このまま復活していいわけ？」

「ドライグか……うーん、まあ奴との決着は、この時点でフェアではなくなつたしな。正直、そこまで争いたいとも思わん。このまま大人しく暮らしたい……本当に……」

よほど破壊神がトラウマとなっているのか、魂だけ見ても精神がすり減っているのが分かる。アルビオンにとっては、寧ろ今まで所有者に好き勝手扱われて生きていたことが奇跡だったのだろう。

とりあえず、アルビオンを復活させて隠居させるところまでは話は纏まったが、問題はどこに住ませるかが問題であった。だが、それに関しては元からアルビオン自身が決めていたのか、彼が自分でその場所を推薦する。

「地球の……使い魔の森辺りでひっそりと眠るとしよう。あそこなら誰にも迷惑はかからん。それに使い魔の森といっても、今まさに全盛期の力を取り戻した私を使い魔に出来るものなど、そうそう居ない。

……しかし、かといって何処で寝ればいいのか？」

使い魔の森で暮らしたことがないのでアルビオン自身、使い魔の森の案内が欲しいところであつた。すると、そこでティアマツトから助け舟が出された。

「アンタ、私がいた寢床でも使えば？ドラゴン一頭くらい普通に住めるわよ」

「お、おおティアマツトよ、それは助かる。なにせ、生前は赤いのと休むことなく争っていたから、生身で大人しく暮らしたことなど滅多になくてな……この先不安で仕方なかつた」

「いやアンタは一人暮らしに馴染めない社会人か!!」

九死に一生を得たドラゴンというものは人格が変わるのだろうか。ひとまずアルビオンは安心して生活ができるかと安堵していた。しかし

「いいか？貴様が人間界で再び赤いドラゴンと戦争でもして土地を汚してみる。そんで、美味しい食べ物を生み出す人間を絶滅に追い込んだら今度は俺が貴様を破壊してやる。いや……そんな時は地球が無くなると思え。人間の文化こそがこの星の唯一の価値なんだからな」

「し、しししし承知しました!!もう争ったりしません！大人しく暮らします!!」

念を押され、警告を受けたアルビオンは素直に従う。もう絶対に逆らわない……否、もう一生、破壊神には関わらないと心に誓つたのであつた。



アルビオンを復活させ、無事使い魔の森へと置いていったブラン達は、それからちよくちよく地球へと訪れていた。今の季節は夏真っ只

中。が、地球の気温くらいで参る彼らではなく、いたっていつも通りである。

違うことといえば、今日は駒王町には訪れていないことだろう。それよりも遠くの場所を観光しにきたブラン達御一行は、ただ知らない町を歩いていた。

「そういうえば、四人で地球を楽しむのは初めてじゃない？」

「ああ……この前は二手に分かれていたし、こうやって四人一緒に行動するのってのは珍しいな。つーか、腹減った……何処かで腹ごしらえしようぜ」

「そうね……あつ、あそこかいんじやない？」

ティアマツトが指差す方向に皆の視線が集中する。そこは、俗に言う『食べ放題』がウリのバイキングレストランであった。

「おや、食べ放題……ですか」

レムギツトも興味津々に見ている。どうやら彼女もこの手も店は初めてのようだ。だが、そんな彼女よりもグイグイと引き込まれるように食いついたのは、他の誰でもないブランであった。

「た、食べ……放題？」

呆然とするブラン。その看板に大きく書かれたその言葉を、一字、一字確かめる。そして、文字の読み方をしっかりと出し、認識に間違いがないことを確信した。

「何だ、こういうことなんだ？ 一体、具体的にどういう内容なんだこの魅力的なサービスは!? お、教えろ！ 教えてくれないと気になって夜も眠れん!!」

「落ちっこう？」

ティアマツトの和らげな笑顔で何とか落ち着いたブランは、彼女から食べ放題の店についての説明を受け、それを聞いた彼は、これまたビックリ仰天の如く衝撃を受けたのだった。

「……か、金を払えば幾らでも食っていいだど!? し、しかもこんな安い値段で!? 本当なのか!」

「いや、別にそう驚くことでもないような……だって、食べ放題だからといって元を取れる客ってそうそういないらしいし……むしろ損をす

る人が多いってのも聞くわよ?」

「フン、元がどうか今はどうでもいい!早速、この食べ放題とやらの料理を制覇しに入るぞ!後に続け!」

この時、ティアマットはブランに対して『ソナバカナ』と、笑顔混じりで半ばバカにしていた。オーフィスも、自分は無限の龍神とはいえど流石に胃袋には限界はあるのでは?と思い、制覇する事に対しては自信はあまりなかった。だが

「制覇……ですか。割と余裕かもしれませんねえ」

「え?」

思わず、レムギットを二度見する程に驚いたオーフィスとティアマット。

今、彼女はとんでもないことを口にしたのではないか?聞き間違いではないのか?と思ったが、どうやらそうじゃないようだ。今、確かに彼女は……ブランがこの店の料理を制覇することに対して『余裕』と口にしたのだ。

「フッフ、まあ、入ってみて実際に見れば分かりますよ」

詳しいことは教えてはくれなかった。レムギットが店の中へと入り、ティアマットとオーフィスは、この後一体どうなるのか、自身にワクワクとドキドキを兼ね備えながら続くのであった。

〜十分後〜

「モグモグ、バクバク……ムグムグ……」

ガツガツツ!

「Oh……」

テーブルの上に満遍なく置かれた料理の数々を、ブランが物凄い勢いで食していく姿にティアマットは言葉も出ない。そして止まらない。全く止まる気配がない。食べ続けていく毎に重なり続ける多くの皿がその異常さを物語っている。

ゴミをどんどん吸い込んでいく掃除機の如くバクバクと食べていくことにより、1分もしない内にどんどん皿が積み重なっていく光景に目を奪われる多くの客が周りにいた。そう、今まさに、ブランは注



目を浴びていた。

「……ひえー……」

普段、ブランが自分の住む星で、こんなに沢山の料理を食べる姿は見たことがなかったので、ティアマツトとオーフィスは開いた口が塞がらないくらいに驚いている。

「師匠って……こんなに食べるの……?」

「こちらとて食費は抑えたいですからねえ。普段は食事の量をご自分で制限していらっしやるんですが、この店を訪れた途端、枷が外れたかのように制限を取っ払って食事をなさってますね。オホホ、全くサイヤ人はどんな胃袋をしているのやら……」

レムギツトが自身の持ってきた料理を美味しく食べながら言う。すると、その会話を聞いていたブランが口をモグモグさせながら喋り出す。

「はははふはめにふまへふあふあいはひんは、ちしゅうひんひよりほはいひようふおへへるひーをひようひひはふいはらは、ははもへひひやふいんは。(訳:戦うために生まれたサイヤ人は、地球人よりも大量のエネルギーを消費しやすいから、腹も減りやすいんだ)」

「なんて?」

口の中に食べ物を頬張って喋っているのでティアマツトとオーフィスには彼が何を言っているのか全く聞き取れない。しかも少量ではなく、頬が膨らむ程の量なので尚更だ。

「ブラン様は一見、地球人と同じような見た目をしていますが、その体の構造は全くの別物……何もしていないならともかく、貴方達が来てから多少の修行に付き合っているのです、それはもう大量のカロリーを消費してしまうのです」

「は、はあ……」

兎に角、自分たちが思う以上にカロリー消費が激しいという事は理解した。つまり、それを補給する為には食事の量もそれに合わせないとならない……ということである。

「ほほのみへ、おうははふはんあふへほ、あひのひふはほひふはあ(訳:この店、量は沢山あるけど、味の質は他と比べると落ちるなあ)」

「ハムスターか！ちゃんと飲み込んでから喋りなさいよ！」  
「んむう？」

ブランはティアマットにそう指摘されると、ありったけの食べ物を頬張っている口の中に更にラーメンまで啜ると、瞬く間に全てを喉に押し込むように飲み込んだ。

ゴクンツッ！

「ちゃんと噛みさないよ……！」

力だけでなく胃袋や喉までもが規格外なことに頭を痛めるティアマット。龍の姿の自分でさえ、大食い勝負でブランに勝てるかどうかも怪しく思うほどであった。すると

「じー……」

オーフィスもブランの真似をしようと大量の料理を頬ばろうと意気込む。しかし

「アンタは真似しなくていい」

「……分かった」

オーフィスは素直にティアマットの言うことを聞き、モグモグと自分のペースで食事を楽しむ。彼女は主にデザートを食べしており、それに集中する様は側から見ればただの子供のようであった。

一方、ブランの食事は止まる気配が全くない。このままいけば、店内の食べ物を食い尽くしてしまうのではないかとティアマットは予想する……というか、確信を持ってしまった。

すると、そこにそれを危惧してやってきたと思われる店長らしき人物がブラン達の座るテーブルの前に訪れ、申し訳なさそうに申し立てた。

「あ、あの……お、お客様……出来ればそろそろお勘定をお願いしていただけないかと……」

「何……？」

店長にそう言われ、食事を止めたブランは若干の怒りを示しながら店長を睨む。確かにブランは見たのだ、聞いたのだ。お金を払えば『食べ放題』だと。これではまるで話が違うじゃないか。そう言わざるを得なかった。

「貴様、ここは食べ放題の店じゃないのか？これでは詐欺じゃないのか？」

「い、いやー、その……。このままだと、経済的にマズイといえますか……他のお客様もいますし、ここらの所で……と……」

店長はとも言いにくそうだ。それはそうだ。こんな場面に巡りあえたことなど一度たりともなかったのだから。店の経営に関しての心配を目の前の客に言う事になるなど起こるはずがないと思っていたからだ。

しかし、ここで納得がいかず、食い続けるか、怒るかのどちらかと思われたが、案外ブランは冷静であった。

「……そうか。経済的に……か。まあ、確かに、潰れたらもう食えないしな……仕方ない。ここは帰ろう。……ただし！もう『食べ放題』なんてコンセプトはやめておけ……何かしら制限をつけないと俺のような奴に店を潰されるぞ」

「ほっ……」

店員どころか、ティアマットでさえ安堵の息を吐く。このまま暴れたりでもしたらどうなるか考えたくもない。最悪の展開にならずに済んだことを素直に喜んだ。

少し不満はあったが、腹八分目というところでブランは食事を終了して一行は店を出て行く。あまりの食いつぷりと、ブラックホールでも言いたいくらいの胃袋の大きさに驚き、更には最後にブランに言われた事に対して、店員と客は心の中の眩きを合致させた。

((お前みたいな客は普通いねーよ……))



「さて、次は……」

腹ごしらえは済んだところで、また暇となつて歩き続けるブラン達。しかし、何かと地球の文化に馴染んできてはいるが、まだまだ知らないことが多すぎて誰に手をつけていいのか分からない。

「スポーツ、釣り、漫画、テレビ、映画、ネットパソコン……ね。地球人つてのは、色んな物を思いつくもんだ。良くここまで発展したな」  
いつ見ても、町の風景というものは見飽きし、娯楽を嗜むことに多少の満足感は得られている。住む家と、花と、湖くらいしかない自分達の住む星とは大違いだと、ブランはそう感じた。だが

「そして、人間は……やっぱり人格において差が出るもんだなあ。ハッ、いや、それは神も同じことか」

耳も目も良いブランは、歩くたびに遠くで周りで誰かが誰かを陰口を叩く者や、隠れて他人をいたぶって楽しむ者、他人を欺く者、他人を無理矢理的に食おうとする者……『悪意に満ちた気』の動きで存在を察知する。それを感じて、そして地球に来るたびに彼は思う。大気圏を脱出したその先から見る地球は、多くの緑と青で覆われてとても澄んだ見た目をした星であるが、実際に降り立って見ると、まるで違う世界に見える……と。

「外側からは綺麗なのに、内側からは汚い場所がよく見える」

周りで蠢く悪意を感じ取って、吐き捨てるようにそう言った。様々な文化が発展させたことは認めるが、肝心な人間を観察してみると、ついそう思ってしまうのだ。だって、必ずしも人間は皆同じとは言えないのだから。同じ考えを持つわけがないのだから。

（しかし、それでも人間が起こした問題は人間が解決しているわけだから、それでバランスを保ち、安定しているといえ、そう言えるのだろうか。だが、これではぐれ悪魔に襲われていることや悪魔の眷属化や神器狩りしていることがバレたらどうなるのやら。混乱して、世は混沌と化して戦争でも起こすか？悪魔や墮天使に戦争でも仕掛けるか？……まあそうなつたら間違はなくこの星は崩壊する。俺のよう

に外側からではなく、内側からな)

星を降り立ち、見るたびに彼は再認識するのだ。綺麗も汚いも、善人も悪人も、それが表裏一体のように何処の星でも存在しているのだと。そして、もし地球をまるごと破壊するとしても、それを差別せずに消し去るのが自分の仕事だということ。

「ししよー、どうしたの？」

「あ？……人間に与えた知恵ってのは、どう転ぶか分からないって考えてたんだよ」

「？」

一人で考え込むブランに対しての、オフィスの何気ない問いに彼はそう答えた。しかしその後、『俺も含めて……』と、小さく呟く声だけは誰にも聞こえてはいなかった。

「みなさーん、ここに入りましょーう！」

しかし、レムギットの甲高い声で、ブランはそこで考えるのを中止する。レムギットが薦めたのは何の変哲も無いゲームセンターであった。丁度暇であったのは確かなので、その暇を潰すため、ブランは誘われるように入店する。

「ここは何をする店なんだ？」

「ゲームセンターよ。ああやって、お金を払ってゲームで遊ぶの。一回につき100円だから、お手軽に暇を潰せるわよ」

もはやガイド役のように説明するティアマットに対してブランは、今この瞬間彼女が頼もしいと思った。とりあえず、数あるゲームを多くの客が楽しんでいるのを側から見て観察をし、自分のやりたいゲームを探してみる。

「あのエアホッケー……ってのはなんだか面白そうだな」

ブランは他者がやっているゲームの中で、エアホッケーに目をつける。基本、二人、または四人でプレイするゲーセンでは定番のように置かれているものだ。

「ししよー、勝負しよ」

「ほう、いいだろう。まあ、いつもの修行のように、当然の如く振り返り討ちにしてやるがな」

先客が終わったタイミングで、ご機嫌の様子でエアホッケーの台で向かい合うように配置につくオーフィスとブラン。だが

「待って、もう展開が予想出来る」

何故かティアマットに止められてブランとオーフィスは頭に疑問符を浮かべる。

「どうした？俺とちびっ子の力の差が歴然だということ、勝負の結果は見えていてもいいいたいのか？おいおい、これは人間のゲームだぞ。もしかしたら加減次第では良い勝負になるかもしれない」  
「いやいや、アンタ達は絶対にこの手のゲームしちやダメ。絶対にスムーズに出来ない」

「あん？何でだ？この器具を掴んで円盤に当てて、あの穴にそれを入れればいいだけだろ？楽勝じゃねーか」

「だからよ……一応聞くけど、どういう狙いでゴールに入れるつもり!？」

ティアマットが何故、怒鳴り散らしているのか分からないブランとオーフィスはあつけらんとした表情で答える。

「決まってるだろ。円盤を相手の持つ器具にぶつけて防御をぶち抜く。それか円盤を相手にぶつけて戦闘不能にする」

「器具に気を込めてシュート。速いし手っ取り早い」

「……こんのおバカー……!!」

地球の常識をよく知らない二人に対してそう叫ぶしかなかったティアマット。加減するとはいえ、二人が器具を壊しかけないと思っただ彼女は、一からエアホッケーのルールを説明して、ブラン達の頭の中へと徹底的に教え込んだ。

ブラン達と説明を受けたことで、自分達が如何に常識外れたことをしようとしていたのかを理解し、反省をする。

「オーケーオーケー、ようやく理解したわ。つまり、しっかりとルールを守ってプレイしろってことだな？地球人を見習い、真似をしろってわけだな？」

「ティアマット、説明ありがとう」

「はあ、はあ……お、お安いところよ……」

説明に時間をかけたのか、妙に疲れているティアアマット。その様子にレムギットは面白おかしく感じたのか、フフフと笑う。

「中々の良いストツパーとなってますねえティアアマットさん」

「ゼエ、ゼエ…レムギットさん…貴女、こうなること分かってて私にツツコミをやらせてるわね……！」

「オホホ。さあ、どうでしょう？」

はぐらかすレムギットに歯をギリギリ軋める。だが、彼女の災難は更に行く。

「よし、ならこの『パンチングマシン』とやらで最高得点出してみるか！」

「だあああああああやめなさいってのおおおおおっ!!」

「いや、加減はするし、ルールは『パンチをしろ』って……」

「うん、ごめん言い方悪かった！お願いだから力技使うゲームをやめて!!絶対に器具が壊れるから!!」

これではモグラ叩きや太鼓ゲームでさえまともに出来やしない。兎に角、器具を壊す危険性のあるゲームをブラン達にやらせないよう必死になるティアアマットであった。

▽

イツセーside

「冥界へ帰る？」

オツス！イツセーだ！三大勢力の会談が終わった後、色々驚くことがあったんだ！あの墮天使総督のアザゼルが俺達オカルト研究部の顧問になったり、期末試験があったりと大変だった！

そんな俺達は夏休みに突入し、部室で部長から気になることを告げられる。何やら、部長達は冥界へと帰ってしまいうらしいんだ。

そんな！俺を置いていってしまふんですか部長！そしたら、俺は夏休みの間、あの大きなおっぱいを眺めることが出来ないということじゃねえかちくしょう!!……と、最初は思っただけど、どうやら杞憂らしい！

「ええ、夏休みに入ると恒例行事のように里帰りをするの。勿論、今回はイツセーやアーシアにも付いてきてもらおうわ」

よっしゃあ！部長とも夏休みを過ごせる！そのことに歓喜に満ちていた。しかも、ただの里帰りではなく、俺達のレベルアップの為に特訓をするためでもあるとのこと。

俺とアーシアは初めて冥界へと足を運ぶので少し緊張はするが、部長はそんな俺達を安心させるように笑顔で『大丈夫、いつも通りにしていれば問題ないわ』と言ってくれた。会長ならこういう時、クールに注意されるよう言われるのだろうが、部長は物凄く優しいので心が落ち着く。その度に抱きしめてくれるので最高の癒しだ！

「お前さんらの……特に神器所有者に関してなら成長に大きく貢献出来る。俺が何年も費やして研究した成果を、和平を結んだお前ら悪魔にもちゃんと提供してやる」

顧問となってくれたアザゼル先生がケラケラと笑いながらそう言う。墮天使は苦手な奴が多いと思っていたけど、朱乃さんやこの人はとても頼りになる人で俺は安心した。

「そして勿論、俺も同行するぜ。ああそうだ、アーシア、確かお前さんの神器は聖母トワイライト・ヒーリングの微笑み……だったな。ミカエルの代わりにお詫びと言っちゃなんだが、俺が密かに回収していた簡単な回復神器を冥界で開け渡そうと思う。元あった神器の代わりにしてくれや」

「あ、ありがとうございます！」

アザゼル先生の言葉に俺たちは驚く。そして喜んだ。人を癒すこ



とが生き甲斐だった彼女にとって、劣化版とはいえ、その行為がまた可能となるのだ。これに喜ばずにいられるか！アーシア、良かったな……。アザゼル先生、すげえ良い人じゃねえか！会談の時は突っかかっちゃまったけど、反省するぜ！アンタ、めっちゃ良い人だよ！

「良かったわね、アーシア」

「はいー」

部長もアーシアの頭を撫でて喜びを分かち合う。しかし、問題は全て解決したわけじゃない。

「……それで部長、ギヤスパーのことは……」

そう、グダグダと説教を垂れてきた悪徳破壊神のせいで、俺達の仲間が奪われた。その事実には部長達だけでなく、サーゼクス様達も悔しい顔をしていた。勿論、それは俺も同じだ。後輩の為に何も出来なかった自分が悔しい。

「ええ、お兄様もギヤスパーを奪還するべく、魔王の仕事を多少放棄してでも動き出すそうよ」

流石、妹思いのサーゼクス様だ。ギヤスパーを見捨てることなく助ける為に動いてくれることに俺は感激した。しかし、奴らは宇宙へと飛び出してしまっている故、一体どうやって救出するのか見当もつかなかった。

「やつぱり、有人宇宙機……まあ、宇宙船を何処からか貰うってことになるわね」

「そ、それって盗むってことですか!？」

「ウフフ、心配いりませんわ。あくまでも、『平和的』に譲り受けることになりますから♪」

俺は朱乃さんの言葉でハツとなり、思い出す。そう、最近、俺の家がサーゼクス様が眷属とのスキンシップをよりしやすくするために豪邸へと改築されたのだ。

しかもそれだけじゃない！その豪邸となった俺の家に朱乃さんや小猫ちゃんも住むことになったんだ！そう、つまり部長と朱乃さんの大きなおっぱいがいつも家にあるということ、俺は興奮したぜ……。学園に行かずとも見放題というのだから、喜ばない筈がない！ま、

まあ小猫ちゃんのような小さなおっぱいも残念とは思わないよ!?

ごほん……そして、ここからが重要なんだが、その豪邸に改築する為に両隣の家の人々が引越した……ということでは話が終わったのだ。そう、部長がいうには、あくまで平和的に解決したとのこと。うん、多分、俺がレイナーレに殺された時に他のみんなの記憶を消したかのように、同じことをしたのだろう。

今回もその方法で行こうという算段だ。まあ多少、強引ではあるけど、ギヤスパーを助ける為なら仕方ないよな。魔力で何とか出来るなら丸く収まるし……。

「そして、冥界に行ったらみんなの特訓よ!あの破壊神の思い通りにさせないわよ!」

部長がそう号令をかける。一番燃えているのは部長であり、その勇ましい姿に俺達はどこまでもついていける。

「ああ、どういうわけかレーティングゲームという形で勝負を挑んできたのは好都合だ。確かに奴の力は強大だが、チーム次第では奴の慢心を突いて、吠え面をかかせることも可能な筈……その為には、お前らも冥界でメキメキと強くなってもらわなきゃな」

アザゼル先生もそう言う。そうだ!ギヤスパーや死んだ木場のためにも、禍の団とかいうテロリストも、あの破壊神にも対抗できるように強くなつてやるぜ!

## 第26話 黒猫の来訪

三人称 side

夏の地球。相変わらず、太陽の光はジリジリと地面を熱く焦がす。ブラン一行は、今日も地球で娯楽を満喫するかと思いきや……。

「……………」

そこは、いつもの街並みの風景ではない。岩場に囲まれた地帯であつた。

周りに人氣が一切ない、まさに戦う為には最適な場所と言つていいほどのスポットに、オーフィスとティアマツト……そして、彼女達の師であるブランは佇んでいた。

「さて、ここなら邪魔も入らない。どこまで強くなったか、この俺に見せてみる」

今日は娯楽を楽しむのではなく、オーフィスとティアマツトの実力の確認である。ブラン直々に手合わせを行うこととした。二人の相手をするブランは、楽しみなのか余裕なのか、笑みを崩さない。

一方、ティアマツトとオーフィスは心の糸が張り詰めているかのように緊張していた。

果たして、今の自分達がブランに対してどこまで通用するのだろうか。のしかかる重力の中での修行、筋力強化、戦術強化……最後に、気のコントロール。あらゆる強化を修行によって施してきた。

それを発揮することが、楽しみであり、不安でもあつた。複雑な感情が入り混じり、いざ参ると言わんばかりに構えを取る二人。そして、その構えに応えるようにブランも戦闘態勢へと入る。

「ふふっ、さてさて……どうなりますかねえ」

遠くから見守るレムギツトも、この手合わせに少々心を躍らせていた。彼女も、オーフィスとティアマツトの成長ぶりに日々感心している。

戦いの開始の合図は、既にブランの言葉により終わっている。故に、互いに準備は万端といったところだ。

「よし……」

まずはティアマットが向かおうと一步を踏み出す。遠くの岩場で佇むブランの元に飛ぼうと、前が出る。だが

ピシユン!

「ッ!!」

動こうとした瞬間、気がついた時にはブランがティアマットの目の前まで近づいていた。完全に不意をつくような高速移動であり、ブランは既に腕を振りかぶって攻撃態勢に入っていた。

「フッー」

ドゴオツ!!

ブランは、そのままティアマットに拳を放つが、ティアマットは両腕を前方にクロスさせてガードに成功。彼女の咄嗟の反応により、攻撃は防がれたものの、ブランの笑みはそのままだ。

「よく反応したな」

「…慣れってやつよ。フッー!」

嬉しそうにいうブランに不敵に返すティアマット。彼女は受け止めた拳を両腕を大きく、勢いをつけて広げることと弾き、すぐさま拳を握りしめ、ブランの胴体に狙いを定める。

「むっ……」

オーフィスも、出遅れながら戦いに参戦する。二人同時でブランに挑み、肉弾戦を開始。

空を飛びながら、空中戦が行われる。ブランは、果敢に攻めてくる二人の攻撃を難なく躲し、時には受け止める。オーフィスの攻撃は左脚と左腕、ティアマットの攻撃は右脚と右腕で受け止め、後退しながらも、しっかりとダメージを最小限に抑える。

若干、攻撃をしているオーフィス達が押しているように見えるが、攻撃を受けるブランの表情に焦りなどは見られない。

「……フッ」

「ッ……」

その表情が笑みに変わった途端、ティアマットに嫌な予感が走る。自分達が攻撃に時間をかける度に、ブランが防御から徐々に攻撃へと転じ始めた。カウンター気味にブランの攻撃が襲ってくることで、今

度は彼の攻撃を受け止めることにも、気をかけないとならない。

だが、ブランの攻撃が襲ってこようともし、二人の速さは衰えない。いや、それどころか、より素早くなっていた。

もつと詳しく言えば、二人は初めに本気を出さず、ある程度余力を残してブランに挑んでいたのだ。修行の際、10倍、20倍、30倍……と、徐々に自分にかかる重力を重くし、ついには3桁の重力に耐えてきた二人。地球の重力下の中で戦うとなれば、まるで身体が軽くなったかのような感覚で、その時以上のスピードを発揮出来ていた。「……この姿だと、なかなか攻めきれないな」

意外にも、ブランは驚いていた。彼は攻撃を受けていて、確実に以前よりもティアマットとオーフィスの攻撃に重みが増していることに気づく。

彼は、態勢をたてなおそうと、一度下がる。だが、それをティアマットは狙っていたかのようにニヤリと笑う。

(今だー！)

パシンッ！

「おっ？おおおっ!？」

ティアマットは指から気を練り上げ、縄のような形状を作り上げると、後退するブランの足に絡ませ、自身のところに引き寄せる。

「タアッ!」

「グハッ!」

そのまま、ティアマットが自分の所へブランを引き寄せたところで、オーフィスとティアマット……二人の同時に放たれたキックがブランの鳩尾に突き刺さる。

だが、それだけでは足りない。ブランにダメージを与えるには、自分達にとって威力のある一撃を炸裂させないとならない。

「いくよ、ティアマット」

「言われなくても!」

二人は互いの体の側面と頬を密着させ、両掌を広げる。そのまま前方に突き出し、互いの両掌を合わせ十字架を作るように構えると、二人で練り上げた特大の気弾を同時にはなった。

「ハアツ！」

ドオオオン!!

「ツ!!うあああああつ!!」

二人の合わさった気弾は、飛んで行くブランの身体に直撃すると、その全身を飲み込み、強制的に下へと押し出していく。

そして、ブランの飛ばされた先は、比較的高くそびえる岩盤。急降下の末、激突と同時に崩れると、ブランは瓦礫の下敷きになった。

「ふう……まさか、上手くいくとはね」

一息つくティアマット。様々な攻撃を仕掛けた上での結果とはいえ、初めてブランを地に着かせた。それだけでも前進したと思えたオーフィス達は喜んだ。

このまま押し切ろうと意気込む彼女達に対し、ブランはというと……。

「……どつこらしょつと」

一息つき、自身を覆い隠していた瓦礫の山を退かして立ち上がる。多少のダメージを負ったのか、口の端が切れて血が出ていた。

「フツ……」

ブランは、そのことに対して嬉しそうに口の端を上げると、その血を手で拭う。

何故笑うのか。それは、彼がサイヤ人であるがゆえ。まだ全力とはいかずとも、まともに自分と戦える人物が目の前に現れたのだ。それだけで、彼の心は高揚感に包まれる。

それが、どの人種よりも圧倒的に戦闘を楽しむサイヤ人としてのサガというものなのだ。

「いいね………だったら、次のステップだ。ちやあつ！」

ドオオオン!!

拳を握りしめ、気合いの一声と共にブランの髪の色と瞳の色が変化する。第七宇宙の戦士、孫悟空と対峙した時の、あの『変化』の名前をティアマットは強張った表情で口にする。

「超サイヤ人……!」

発せられる金色のオーラにより、近くにある数多の小石が浮かび上

がる。ビリビリと感じる力の奔流に、ティアマットとオーフィスは少々たじろぐ。

「遠慮はいらねえ。お前らの全部を俺にぶつけてみる」

「ツッ！」

この前のヴァーリに対してのおちよくりとは違う。それだけ、ブランの目は真剣なものだった。だが、気の大きさが格段に上がったブランに対して、無策に攻めていくのは、あまりにも無謀である。

「ししょーの体力とティアマットの体力は差がありすぎる。だったら、体力の際限の無い我が前に出る」

「オツケー……いくわよー！」

肉弾戦を続けられ、いずれティアマットが押されてしまう。故に、オーフィスが口にした作戦にティアマットは乗ることにした。

「……フツッ！」

オーフィスは気を上げ、ブランに向かって加速していくと、果敢にブランに向かって打撃攻撃を仕掛け、一方、サポートに回るティアマットは自身の手に溜めた球体型のエネルギー弾を上空へと放つ。

そのエネルギー弾は、上空で停止すると、まるで花火のように拡散し、数多の小さな気弾の雨となり、ブランを中心として降り注ぐ。

「むっ?」

ブランは、その降り注がれる気弾に目がいく。そして、共闘する者として、その攻撃を予知していたオーフィスは、攻撃を止めると大きく後退し、その範囲から逃れる。

「これは……」

雨のように自身に向かって降りかかる気弾。普段なら、受け止めてもいいと判断するブランであったが、彼はそれに違和感を感じ、眉をひそめる。直感で、『これはくらってはいけない』と判断し、四方八方に動き回りその気弾を躲し続けた。

その後、チラリと地面を一瞥する。通常、エネルギー弾は当たれば爆発に似たような現象を起こすものだ。

だが、ティアマットの放った気弾は爆発しない。まるで、鋭利な刃物のような形に変わって地面に突き刺さったのだ。

それが、違和感の正体。ティアマットは、直撃して爆破するいつもの気弾とは違い、エネルギーを刃物のような形に変化させ、ブランに攻撃したのだ。

(気の形状変化も上手くなっているな……騙されるところだったぜ)  
まともに受けようとすれば、死にはしないが、深く切り傷をつけられるのは免れないだろう。

「さて、今度はちびっ子か」

ブランは、次にオーフィスの攻撃が来ることを予想し、それに迎撃するため、あえて目を瞑る。辺りの気を、肌で感じ、流れを読み取り、掴む。

目を瞑ることで、開けている時よりも逆に神経を研ぎ澄まされ、自分のところへ向かってくるオーフィスの気の流れも完全に読み切っていた。

「ブン」

「ぐっ……!!」

オーフィスは背後からブランに迫ったが、ブランは身体を振り向かせずに、そのままの体勢で裏拳を放った。相手の気を読み取り、ブランは容赦無くオーフィスに打撃を加えていく。

姿は見えないのに、攻撃の精密度は抜群。的確に急所を狙うブランの攻撃にオーフィスは怯むのみで、反撃もままならない。

「終わりだ」

ブランはトドメにオーフィスの顔面に拳を叩き込もうと腕を振りかぶる。

流石に『やられる』と直感したオーフィス。ここでリタイアとなるかと思われた……その時。

「でやっー」

ドゴオツ!!

かけつけたティアマットの渾身のパンチがブランに炸裂。彼は衝撃により、勢いよく飛ばされる。

自身の背後から迫るブランから助けしてくれたティアマットに対して、オーフィスは『ありがとう』と言う暇もない。無論、ティアマツ



トも彼女に対して対話をする余裕もなかった。故に、次なる追撃へと移行。

一方、ティアマットのパンチにより、遠くへと飛ばされたブランは、ふつとんだ先にそびえる岩場を、その勢いで粉碎しながら突き抜けていく。

「フン」

ブランの視線の先では、彼を追いかけようとオーフィスとティアマットが加速しながらこちらは接近してくる。だが、それを許すほど優しくはないブランは、ふつとばされながらも、その場で気合を込めて踏ん張ることで飛ばされる身体を停止させ体勢を整える。そして

「いいもんくれてやるー！」

両手の指10本を立て、その先端にそれぞれ気を溜める彼は、出来上がった気弾を二人に向けて飛ばす。

「!?!」

近づこうとした二人は、突如迫ってきた複数の気弾を避けようと、横に移動して躲す。だが

「ブウウン！」

「ッ、追ってくる!?!」

躲した気弾がUターンし、二人目掛けて戻ってきた。合わせて10本の指から放たれた追尾型の小さな気弾は、逃げるオーフィスとティアマットを容赦なく追跡していく。

「このままだと、追いつかれる」

オーフィスの言葉で、ティアマット共々、焦りを覚える。この気弾は相手の気を探知して追跡するものであり、どこかに当たるまで消えることはない。かといって岩場に隠れたとしても、破壊神ブランの放つ気弾は岩場を粉碎して尚且つ自分達を追跡するだろう。

そう、予想するオーフィス達は、アイコンタクトで対処法を伝え合い、行動に移した。

「ハアツ！」

「！」

オーフィス達は、向かってくる気弾を、同じ数の気弾を放ち、ぶつ

けさせることで相殺した。

(成る程、『フレア』ってやつと同じようなもんか)

フレア。軍用機に使用される兵器の一つであり、赤外線誘導ミサイルの命中を回避するために空中へ放出する欺瞞装置の一種。それを思わせる回避の仕方であった。

互いの気弾を相殺したことで、その中心から煙が広がっていく。「ん?」

煙が晴れ、ブランは二人の姿を拝もうと身構える。だが、いたのはオーフィスだけで、ティアマトの姿がなかった。

何処かに隠れたのだろうかと探そうとするブランだが、それよりも気になるところに目が行く。

「おいおい……」

目線の先には、何やらオーフィスの身体が眩い光に包まれ、徐々に身体に変化が訪れる。

「……マジかよ」

オーフィスの身体は、容姿、性別、声、服装……その全てが変化していく。その姿はブランさえ驚くものであり、なんとオーフィスは、あの第七宇宙のサイヤ人、孫悟空そっくりな姿になった。

(そういえば、コイツは昔ジジイの姿をしていたってレムが言ってたな……自由に姿を変えられるのなら、孫悟空の姿をコピーしても何らおかしくねえってわけか)

あの悟空と同じ構えを取るオーフィスは、彼の言っていたセリフを同じ声で発しながら真似する。

「我、ワクワクしてきた」

「お前、形から入るタイプかよ!?!」

驚くブランの意表をつくようにオーフィスは肉弾戦を仕掛ける。

幼女の姿から男性の姿へと変わったことで、急に攻撃のリーチが長くなった。故に、ブランは戸惑いながら攻撃をかわし続ける。

攻撃をせず、戸惑ってかわし続ける理由としては、ブランは一度、悟空とは戦っており、その攻撃も実際に受けているので、避けたり受け止めたりするのは簡単と思っていた。

だが、相手はオーフィスであり、悟空ではない。彼とは攻撃のリズムも違う。その上、表情も無なので行動が読みづらい。完全に初見の相手と組手をしているような感覚だった。

「なんだ？」

警戒するブランは動きを止め、身構える。

一方、オーフィスは第七宇宙に行った時のことを思い出していた。あの時は見ているだけだったが、それが功を奏していた。じっくりと見ていたからこそ……構えだけだが、あの時に完全に覚えた。悟空が放っていた『あの技』を……。

「かーめーはーめー」

「ツ！まさか……」

ブランはその瞬間に察する。他人の技を真似ることは、本来難しいことだ。しかし、オーフィスは右腰に添える両掌の間に気の球体を作り出すイメージで気を溜めていくことで、完全にそれを再現をしていた。

「はー」

ドオオオオオオン!!

気迫のない掛け声とは裏腹に、あの『かめはめ波』という技そっくりなエネルギー波がブラン目掛けて放たれた。威力は悟空に劣るものの、直撃は避けたいと思うブラン。

「……ハアツ！」

彼は、オーフィスが繰り出した意外な技に驚いたものの、ただのエネルギー波ならば対処は簡単である。ブランも同じく手のひらからエネルギー波を発射し、オーフィスの放ったものを相殺した。

(予想外ではあったが、流石に姿と技を真似ただけで孫悟空と同じ強さを得られる訳ではないか。細胞までは真似できないからか、超サイヤ人にもなれないしな)

「そこだ！」

「ツ！ぐおおっ!？」

相殺した直後、ティアマトの渾身の拳がブランに炸裂。あくまで、オーフィスの放った『擬似かめはめ波』は囿であった。その囿を

利用した彼女の攻撃により、ブランは地面へと急降下。

「ぐっ……」

何とか着地には成功。だが、その時、幼女に戻ったオーフィスは、捉えたと言わんばかりに、更なる追撃をブランに叩き込もうと、一気にスピードを上げ、懐へと潜り込んできた。

(いける)

そう思い、ブランに向けて打撃攻撃を繰り出す彼女。しかし  
ガシッ！

「!?」

「フン、点数をつけるとすれば……30点つてところか!!」

ドゴオツ!!

「ガッ……!?!」

近づいたところに、ブランが占めたと言わんばかりにオーフィスの拳を間一髪で受け止め、頭を鷲掴みしてから勢いよく地面に叩きつける。

「うぐっ……!?!」

調子に乗って攻めすぎたのが拙かった。ブランのことを考えれば、もう少し慎重に行くべきだったのを、勢いづいた心が選択を誤った。

「オーフィス!」

すぐに助けに行こうと、ティアマットがブランに向かっていく。だが

ピシユンッ!

(消えた!?!……瞬間移動か!)

オーフィスの頭を掴んでいたブランが、その手を離し、額に指を添えた途端、彼の姿が消える。単なる高速移動とはもはや別物であり、気がつけばブランはティアマットの背後をとっていた。

「フッ!」

「ぐっ……」

振り向いて反撃することさえ許されず、そのまま上空へとかちあげられ、すぐさま目にも留まらぬ高速連打がティアマットを襲う。

ドドドドドドドツ!!

「あがつ……!?」

(頭に二発、腹部に一発、両太ももにそれぞれ一発……終いには胸部に二発……!!)

一瞬のうちに合計七発の打撃を受け、ティアマットの後方へと飛ばされる。身体を踏ん張らせて停止をするが、息つく暇もなく追撃に向かってきたブランの腕が自身の頭を狙ってきていることで、とつさに両腕を上げて頭をガードする。だが

「残念」

「なっ……!」

その守りは意味をなさなくなる。ティアマットの頭を狙っていたブランの腕は、彼女の眼前から滑るように腹部に移動してきた。完全に虚を突かれたティアマットは後退するのも遅れてしまう。

「しまっ……!」

腹部に密着した手のひらが眩い光が放たれる。ブランは確実にティアマットにダメージを与えるため、フェイントを織り交ぜてから、エネルギー弾をゼロ距離で放とうとしていた。

ドガアアン!!

「アアッ!!」

反応が遅れたティアマットは、当然そのエネルギー弾を直で受け、オーフィスの近くの地面へと墜落。

「今度こそ……」

ここまで粘ったものの、彼女達のスタミナは既に尽きていた。ブランは、上空から手を下へと翳すと、そこからキラキラと光る鱗粉のようなものを倒れているオーフィス達の周りに振りかける。そして

「チエックメイト」

ドガアアアアン!!

「キヤアアアッ!!」

「あぐっ……ああっ!!」

指をパチンと鳴らすと、鱗粉として撒かれた気のエネルギーが爆発し、発生した爆風がオーフィス達に襲いかかった。

それは、地上を焼き尽くす大爆発であった。巻き込まれた二人は身

体に焼き焦げた跡を残し、地に伏せる。一体、何が起きたかも分からずに倒れた二人は気を失いそうになりながら困惑する。

「気つてのは、こういう事も出来るんだぜ。しっかし、なかなかやるもんだ。成果はちゃんと出ているぜ」

この言葉は、間違いとは言いつてもいいだろう。通常状態のブランでさえ、単純に動いて攻撃を仕掛けていくだけでは攻め切れないのが何よりも証拠。瞬間移動のようなトリッキーな技まで引き出せたというのだ。ブランにとっては、二人の成長は想像を超えており、嬉しい事であった。

「ブラン様〜!」

突如、遠くから傍観していたレムギットからお呼びの声がかかった。何事かと思い、ブランは大きな声で返事をする。

「なんだ、レム!……ん?」

ブランはレムギットのいる岩場に目を向け、彼女の隣にいた人物達に注目。いつのまにか、来客がいたようだ。

「この方々が何やら貴方に用があると」

一人は黒髪で着物をきた女性。猫耳と尻尾を生やし、見た所人間ではなく妖怪の類だろう。

次の一人は、紳士服を来た眼鏡の金髪男。腰には二つの剣を携えていた。彼は人間に分類されるだろう。

とんがり帽子を被った如何にも魔法使いらしい服装の女の子。見た目はどこか眼鏡の男に似ているような気もした。

「ふむ……一体なんなんだ」

ちようどキリのいいところで手合わせが終わった所で、ブランは超サイヤ人を解いてレムギットの元に向かおうとした。

「食後のウォーミングアップ以上にはなったか。なかなか楽しめたぜ」

「あ、ありがとうございます……」

▽

手合わせは終了し、オーフィスとティアマツトはレムギットに体力と傷を回復してもらった。ブランの元を訪れた三人の顔は、やや緊張気味にブランと対峙している。

見覚えのない地球人に何か恨みでも買ったかと、少々考えるブランだが、心当たりはない。そんな中、まずは猫耳の女性がオーフィスに話しかけた。

「久し振りね、オーフィス」

「ん、黒歌……久しい」

ブランは、突然オーフィスと知り合いのように話す女性と、その付き添いの金髪の男女二人組を見る。見たところで、状況が分からずなのでレムギットに耳打ちをして教えてもらう。

「レム、誰だこいつら」

「彼らは禍の団に属している者達のようなようです。しかし、会談の時に来た悪魔とはまた別のようで……ヴァーリチームという名前で派閥を作っていたようです」

「ヴァーリチーム……ああ、なるほど」

ヴァーリといえば、あの白龍皇だ。だが、自分が殺した。その仲間だとすれば、自分の元に来る理由としては、いくつか思いつく。そして、ここにいる自分達を見つけられたのは、オーフィスやティアマツトの気を辿ってきたのだと察した。

「私は黒歌。こっちは、アーサーとルフエイ」

「アーサー・ペンドラゴンです。お初にお目にかかります。破壊神殿」  
「ル、ルフエイ・ペンドラゴンです……」

黒歌に続き、アーサーも自己紹介をする。

そして、金髪でトンガリ帽子をかぶった魔法使い、ルフエイが兄であるアーサーの後ろに隠れ、怯えながらも自己紹介した。

あのヴァーリや美猴をいとも容易く殺した神が目の前にいるのだ。恐怖するのもおかしくはない。当然の反応だ。

「あの死んだ二人は、歴代最強の白龍皇と最遊記で有名な孫悟空……それに、最上級悪魔に匹敵する猫妖怪、そして最強の聖剣を待つ剣士、そして魔法使い……中々珍しいメンバーでチームを組んでるわね……って、前の私なら、ちよつと警戒して言えたかもしれないけど、今じゃ……」

アーサー達がどんぐりの背比べに見えるティアマツトは言葉を濁す。そう、地球で強敵として見ていた者達の見る目が変わっていた。それにティアマツトは気づいたのだ。会談で、サーゼクスやアザゼルなど、勢力のトップを見ても脅威には感じなかった。

特にサーゼクスは超越者であるというのに、だ。昔、彼の内に秘められた圧倒的な滅びの魔力を察知した時は身の毛のよだつ感覚すらあったというのに、今は妙に落ち着いてその気配を感じ取れる。

それが、ティアマツトにとって自分が成長している証とも受け取っており、なんだか妙な達成感のようなものを実感した。

「つてなると、お前らは敵討ちにでもきたのか？やるなら相手してやってもいいぞ」

「……そう出来るならば、そうしたい所ですが、私達が貴方に勝てる確率はゼロに等しい……結果は火を見るより明らかです」

「ほう、分かっているじゃねえか」

アーサーは、少し暗い表情になりながらそう言った。まだ、ヴァーリや美猴とは、共に過ごした日は、まだそんなに長くはなかったものの、多少の信頼関係はあったのだろう。思う所はあるものの、自らの命を捨てるために復讐や敵討ちをするまでには感情が至らなかった。「それよりもオーフィス……何故、貴方は禍の団を抜けたのですか？あんなにも次元の狭間に帰りがついていたというのに」

アーサーは、オーフィスの心境の変化が気になるようだ。オーフィスは、多少の申し訳ない気持ちも交えながらも、確たる自分の意思を伝えた。

「我……次元の狭間に帰るの、やめた。他に、やりたいことが見つかつ



た」

「……やりたい事？」

その言葉に、アーサー達も驚くが、彼らだけでなく、傍観していたブランでさえもピクリと反応する。あのオーフィスに、『やりたいこと』など今まであったのだろうか…と、疑問に持ったからだ。彼でさえ、そんなことは知らない。

アーサー達は、本気でオーフィスが禍の団を抜けることが分かると、愕然とするように肩を落とした。

「……そうですか。ならば、禍の団はもう終わりでしょう。後ろ盾として、力の象徴として君臨するオーフィスがなくなったとなれば、旧魔王派や英雄派も焦って仕掛けてくるでしょうし……我々も潮時ですか」

「まあ、後ろ盾としか見てなかった私達が、とやかく言えることでもないんだけど。所詮はテロリストの集まりだしね」

半端、諦め気味に見える黒歌とアーサーに、ティアマツトは逆に拍子抜けしてしまう。

「なんか、あんたたちってあんまりオーフィスに拘らないのね」

「私達は元々、禍の団でも弾かれ者って感じだったしね。ヴァーリ達がいなくなつた途端、戦力としても数えられるか怪しいにや」

その言葉と顔を見て、ティアマツトは黒歌達が気づかれない内にテロ組織を抜けるつもりだろうと察する。裏切り者として刺客を送られることもあるかもしれない。だが、彼らの行く末がどうなるかは、彼ら次第。ティアマツトが気にかかる必要は特になかった。

一方、ブランは黒歌を見て眉をひそめる。彼女から感じられる気は、特徴的なものであった。その気の性質は、悪魔でもあるのに別の種族のもの……混ざり合つた気が感じられる理由としては、答えは一つだ。

「お前、悪魔だろ。それも転生の。……もしや、はぐれか？数ヶ月前とはいえ、殺したと思っていたがな。まさか生き残りがいたとは思わなかったぜ」

「……私は仙術で気を隠していた。あの時は何か嫌な予感がしていた

から、しっかりと身を潜めていたにや」

妖怪としての力が強い彼女は、気のコントロールを熟知しており、尚且つ扱いも得意である。そんな彼女は、以前ブランのはぐれ殲滅から逃れることに成功していた。

「仙術……なるほど、この地球では『気』を『仙術』と称して扱うのですね。ブラン様がピンポイントで発見できなかったとなると、貴女は相当な気の使い手……と見るべきでしょう」

あくまで、地球の中では……の話ではある。それでも、強さはともかく、気の扱いに関しては、多少レムギットに評価をされる程のものだった。

「じゃあなんだ。わざわざ俺に殺されにでも来たか？」

だとしたら、彼女は何しにここへ来たのか。黒歌の望みはたった一つであり、彼に懇願するように頭を下げる。

「お願いがあるにや……あります。妹を……白音を見逃して下さい」「妹？」

ブランは、必死になる黒歌に事情を説明してもらおう。どうやら、リアス・グレモリーの眷属である小猫が、実は黒歌の妹……ということらしい。三大勢力の全てを破壊しようとするブランのことは、ヴァーリ達を通してこっそりと会談を覗いていた。

圧倒的な気の大きさ。たとえ、妖術や仙術の全てを駆使したところで、通用さえしないと理解した黒歌は、あえてブランに歯向かわず、助けを乞う選択をした。

せめて、妹だけでも助けたい。何故、黒歌は悪魔になったのか、小猫はリアスの眷属なのか……そして、何故黒歌は禍の団に属しているのか。これも理由があるが、それは省くことにする。

一つ確かに言えること。それは、今もこうして妹と引き離れてしまったのは、元はといえば黒歌自身のせいだ。彼女もそれは理解している。だからこそ、その罪悪感も合わせて、今回このような行動をとったのだ。だが

「知らん。どつでもいい」

「ッ……」

ブランからの返事は、明らかな拒否。現実是非情である。

「お前がどこの誰だろうが、妹がどんな奴だろうが、どんな事情があるうが俺には関係ない」

「そ、そんな……お、お願いします！何でもするにや！だから白音だけは!!」

「にやーにやー言おうが、それは決められた事だ。もはや覆らん」

ブランの言葉に絶望する黒歌。すると、付き人としてついて来たアーサーが口を開く。

「すみません、理由を聞かせてもらっても構わないでしょうか？」

「理由?……まず、お前にそこまでしてやる義理が俺にはない。そもそも、俺は三大勢力に属する奴は全て破壊するつもりでいるし、それが俺の今回、為すべき仕事だからな。それ以上もそれ以下もない」

ブランとて、三大勢力以外の味方というわけでもない。必要ならば、どの勢力とも敵対するし、それが偶々三大勢力だったというだけの話。

「……」

だが、オーフィスは話を聞いている内に疑問に思ったことが出来、ブランに問う。

「ししよー、黒歌の妹……三大勢力から抜けたら、どうなる?」

「えっ?」

黒歌は、オーフィスの問いに呆氣にとられたような顔をする。確かに、その場合はどうなるのか。

「……命の猶予があるこの期間で、誰かが三大勢力から離反したところまでそこから先は知らん。勝手に生きて良いし、死にたきや勝手に死ぬ」

「ッーじ、じゃあ……」

つまり……だ。黒歌の妹である小猫こと白音が三大勢力から離反すれば、ブランによる破壊から免れる。『破壊されたくなければ、自分でなんとかしろ』……と、黒歌は遠回しにそう言われている気がした。

しかし、それだとやけに黒歌に肩を貸す形になるのではないかと少し疑問に持つティアマツトは問う。

「いいの？」

「本来、地球の問題に対して、なんでわざわざ無関係の俺が、そこまで面倒見なきゃならないんだよ。俺が手を下すのはあくまで三大勢力のみ。それ以外の有象無象くらいは地球の神々でも誰でもいいから何とかしろ。それにだ、俺に頼らなきゃ何も出来ない神なんぞ居ても邪魔なだけだ。信仰をもらうだけでしか存在できない癖に、ただの動かない木偶の坊じゃ話にもならん」

闇雲に地球の問題に手を出すのは、破壊神としては御法度だ。人間的な自立心を損なわない為にも地球の問題は、本来地球の者達が解決すべきことなのだ。

今回の三大勢力の件については、はっきり言ってブランが動かずとも何とか出来るのだが、『種族ごと』ということもあり、一応は仕事の一環なので例外である。

「けど、お前分かってるよな？お前がその妹を三大勢力から引き離して戻ってくるなら別に破壊しないでも良いが……その妹が三大勢力に留まるなら容赦無く……殺す」

「ッー」

ビクツと身体を震わせる黒歌。妹である小猫……もとい白音を三大勢力から引き離すのは、『命懸け』といっても過言ではないだろう。チャンスは、一度だけと覚悟しておいた方がいいだろう。二度目があるかどうかは分からないのだから。

「アーサー、ルフエイ……お願い。白音を救い出す為に、手伝って欲しいにゃ」

「……普段おちやらけている貴女がそこまで必死のなら、私も手伝いましょう。ヴァーリや美猴がいない中、せめて、貴方の願いの為に尽力しましょう」

「わ、私も！黒歌様と妹さんのために、頑張ります！」

どうやら、話は纏まったようだ。黒歌は、光の見えない絶望に塗りつぶされるところで、一筋の光を見つけたような気がした。

自分は、妹と仲直りは出来ないかもしれない。だが、それでも大切な妹だ。嫌われても、彼女の命が助かれればそれでいい。その決意の

元、彼女達はブランの元を去ろうとする。

「お騒がせしました。それでは、失礼します」

「おう、もう会わないことを祈るわ」

アーサーの別れの言葉を終いに、三人は黒歌の用意した術式により、転移でこの場を去った。

「なんか、意外な展開になったわね……良かったの、あれで」

「ああいう、礼儀を弁える奴は嫌いでもない。まっ、アイツが懇願なんてしてこないで襲ってきたら普通に殺してたけどな。運の良い奴だ」

一方、オーフィスは顔見知り程度の黒歌のことを、少し心配に思っていた。

「ししよー……黒歌、大丈夫？」

「さあな、妹連れ出そうとして悪魔に殺されたところで、俺には関係ないことだ。けど、どうなるかは気になるもんだ。なんせ、その妹の主人が、あの散々俺に無礼を働いた赤髪女なんだからな」

この先、グレモリー眷属は、また無謀にも彼に挑みかかってくるだろう。または、銀河パトロールに連れていかれたギヤスパーを連れ戻しに、カチコミでも仕掛けるかもしれない。流星にそんなバカはやらかさないだろう……と、思ってはみたものの、可能性は十分ある。

だが、どうせそれも徒労に終わる。ブランは分かっていた。それ自体が無駄な足掻きだからだ。

「アイツは俺の前で嘘をつき、仲間を騙し、虚言で手に入れた愛情つてやつを堪能しているだろうよ。それに、あんなにイライラさせる奴は久しぶりだ。挑みかかって来るなら……」

チラリと、岩場の陰にひっそりと咲く一輪の薔薇を発見したブラン。彼は、それをリアスの紅の髪に見立てるように、手を添える。

その手からそっと放たれた、見えない破壊神のエネルギーが薔薇の花に影響を与え、ジワジワと萎んでいく。一瞬ではなく、ゆつくりと枯れていく赤い薔薇の花は、まるで彼女の『未来の死に様』を示唆しているかのようだった。

「——楽には死なせねえ」

三大勢力にゲームの詳細でも伝えようと動き出そうとするブラン

の顔は、悲しみも笑みもない。いつものように、ただ無表情で、無慈悲に仕事をこなす時と同じものであった。

## 第27話 冥界にて

三人称 side

——冥界

この夏休み、グレモリー眷属はこの冥界で特訓を行なっていた。各々、それぞれの課題を持ち、来たるブランとの戦いに備えて取り掛かった結果、自身が『強くなった』という実感は持ったようだ。

そして、彼らの引率として同行していたアザゼル。彼は、聖書の他の二勢力と和平を結んだことで、次は神話勢力とも手を組もうと目論んでいた。

サーゼクスとミカエルもその考えに賛同している。神相手には、同じ神に協力を仰ぐのが一番だ。勿論、全面的に協力してもらえとは思ってはいない。神との間に強い絆があるわけでもないのだから。

特に、須弥山の主神である『帝釈天』。ギリシア神話に属する冥府神『ハーデス』辺りは怪しい。何を考えているか読めず、下手すれば破壊神側につく可能性もある。

それを危惧するアザゼルは、早速手を組んでくれそうな北歐神話に助成を呼びかける。だが

『それは出来んわい』

まず連絡を受け取ったのは、主神であるオーデインであった。きた返事は、あからさまな拒否。一言、申し訳なきような言葉も出たが、アザゼルの見解からするに、真摯に謝つてるとは思えなかった。

アザゼルは、禍の団のことを『世界を巻き込むテロリスト』と判断し、オーデインに協力体制を仰ぐが、オーデインは一向に首を縦に振らない。ラチがあかないと感じたアザゼルは、何とか首を縦に振らせてみせようと、今度はあの龍神の名前を出す。

「オーフィスはどうするってんだ。いくらあんたら神話勢でも、アイツが率いるテロリストが相手となれば、動かざるを得ない筈だ。ここは、今までのいがみ合いを奥に飲み込んで、手を組むしかないと思ってる」

協力体制に関しては、現時点では表向きでいい。和平などの後の事

は、功績などで何とかなる。平和への一步として、オーデインからは良い返事をもらいたかった。

しかし、当の本人であるオーデインはオーフィスの名を聞いても、首を唸らせるだけで、首は頑なに縦に振らない。なにかを、言うか言わないか迷う彼は、少し悩んだのちに口を開く。

『オーフィス……か。確かに、彼奴は昔から地球上で最強の存在であった。それこそ他神話勢と手を組んで、やつと勝てるかどうか……それくらいの差はある。あの二人と一緒に組むとなれば、もう誰も勝てるものはいない。じゃが、どうやらその心配は杞憂となる』

「杞憂だと?」

『そうじゃ。……お前さん、和平会談の際にブラン様と共に付き添いとして出席していたものがいたそうじゃな?』

「……ああ、五大龍王のティアマットと付き人であるレムギツトつて奴。そしてもう一人は見たことも無い幼女だった。それがどうかしたか?」

『ふむ……そうか。やはりお主は知らなかったか。まあ、これくらいは教えておいてやろう。その黒髪の幼女……奴がオーフィスじゃよ』

「何だ?!」

会談の時に、ブランと一緒にいたあの黒い長髪の幼女。あれこそがオーフィスだとオーデインは口にしてアザゼルは驚愕する。

『既に、日本神話を始め、他神話勢力に知れ渡っておる。どうやら、オーフィスは禍の団を抜け、ブラン様の『傘下』に寝返ったという形として収まっているようじゃ』

何故、禍の団のトップであるオーフィスが破壊神と共にいる? もしや、破壊神は禍の団と繋がりにあるのではないかと疑うアザゼルだったが、オーデインはその疑問に対して首を横に振る。

『そもそも、この地球そのものを破壊するとなれば、オーフィスと手を組む必要がないわい。何故ならブラン様にはそれを実行できるだけの力があるのじゃから。彼には彼なりの、何か別の理由や思惑でもあるのかもしれないが……そこは分からん。じゃが、少なくともワシら神話勢の害にはならない。其れだけは既に日本神話からの通達で分



かつておる。なんせ、もうブラン様は日本神話と同盟を結んでおるからの』

少なくとも、現時点ではブランが敵対しないと踏んでいる神話勢。劣化版とはいえ、同じく神性の気を持つ彼らだからこそ、ブランの力を恐れ、理解している。

それに対して、日本神話を先に取られたと悟ったアザゼルは、オーデインに悟られないよう心の中で舌打ちをした。

『そしてもう一つ、力の象徴として奉られていたオーフェイスがいなくなったことで、禍の団の力は大きく削がれた。その事実だけは間違いない筈じゃ』

だとすれば、神話勢：地球の神々が破壊神ブランに楯突く理由がなくなってしまう。残りの構成員のことは、こちらで何とかすれば良い。話はそれで纏まる。いや、纏まってしまおうのであった。

故に、オーデインたち神々にとつて、今回は傍観に徹することが何よりも上手くいく道である。後々のことを考えれば、わざわざ三大勢力と手を組んで大きいリスクを負うよりも、よほど良い。

『それに、ブラン様がオーフェイスと共に世界を混沌に陥れようとするなら、とつくにやっとなるわい。が、こちらとしてはオーフェイスが破壊神側についたことで、お主らと協力する理由も必要もなくなった。悪いの。世の中、どうすることも出来ないことがあるんじゃ』

要約すると、『お前たち、三大勢力の種族全体を巻き込んだ面倒ごとに振り回されるのはごめんだ』ということだ。アザゼルもそれを分かっただけで憤りを感じる。

「ならどうすればいい？俺達が助かる道はないってのか？」

『うーむ……勝負内容がジャンケンならいいんじゃないかの』  
『ふざけんなー！こっちは真面目に話してんだぞ!!』

『そういきり立つんじゃないわ。それに、十分真面目なんじゃが。……まあいい。長きに続いたお主らの生も、ここまでということ。悪いが今回、我ら神話勢は傍観させてもらうぞい』

「随分と薄情じゃねえか」

悪魔、墮天使、天使、合わせて三つの種族が滅ぼされるというのに、

この対応。少しくらいは力を貸してくれても良いのではないか。禍の団を放っておいて、自分らは高みの見物。

ふざけるな、とアザゼルは内心怒りを覚える。相手をするオーデインは、自身の口元から下へと伸びる長い髭を撫でながら割と冷静であった。

『ブラン様と一緒に手を出さないだけ、まだマシじゃよ。それに薄情と言うが、三大勢力とて今までもそうだったじゃろ。互いの問題を黙認しておき、ワシらもそれを咎めずにいた。むしろ、これまで報復せずに黙認していたことに感謝して欲しいものじゃの』

「へえ……けど、神話勢も呑気にしてられないんじゃないか？お前さんの所の悪神……あまり良い噂を聞かないぜ。勿論、あのハーデスもな」

アザゼルは、揺さぶりをかけてみた。敵が多い中、協力体制を仰ぐと提案を遠回しに掲げる。ロキやハーデスも敵に回れば、流石に一つの陣営では対処しきれない。そう思っていたアザゼルであったが、オーデインからは予想外の返答が……。

『ハーデスは何を考えているかは分らんが、今回の件でロキは特に何もせんよ』

「……何？」

てつきり、諦めて協力する気になるかと思つてたばかりに、アザゼルは眉をひそめる。悪<sup>トリックスター</sup>神と呼ばれるロキは、他神話に攻め込むべきという過激な思想を持つ。それ故に、オーデインを裏切つて禍の団側につくと予測していた。故に、オーデインの返答は些か疑問を覚える。

「……根拠は？」

『奴らが嫌うのはお主らや他の神話勢じゃろうて。お主らに協力することになれば、また話は変わってくるかもしれないが、むしろロキは今回の件で聖書陣営が減ぶことに喜んでおるから……』

「チツ……そんなに勢力圏内の人間の信仰を取った聖書の神が嫌いだよ……！」

『そりゃ、信仰の横取りは誰しも好かんからの。わしら神々にとって

信仰は宝そのもの。お主だつて自分の宝を奪われるのは嫌じゃろ。それと同じことよ。まあ今回、自分たちには運が無かつたと思つて諦めるが良い。せめて、あの破壊神に刃向かつた勇姿ある愚かな種族として覚えておこう』

そこで通信は途切れる。オーデインが駄目なら、恐らく他の神話勢からの返答も同じだ。日本神話には連絡しようにも、そもそも応答すらしない。既に、察しはついており、ギリシア神話勢や北欧神話勢、インド神話勢などと同様、傍観に徹するつもりだとアザゼルは確信。

故に、何とか生き残る為……いや、今後の為にもブランを完全に無力化しなければならぬ為、彼と他のトップ陣は、また別の対策を考えるのであつた。どうにか、あの破壊神の弱点でもあれば、そこを突けるかもしれない。

「クソが……!!」

誰か情報を持っていればいいが、その当ては見当がつかない。行き詰まつた彼らの思惑は、一体どこへ行き着くのか。

▽

冥界では、例年のごとく、行事として若手悪魔同士の会合パーティーが行われる。主役ともいえる若手悪魔の一人、リアス・グレモリーは勿論、その眷属達もパーティーに出る決まりとなつている。

「……………」

グレモリー眷属の一人である小猫は、そのパーティー会場で一人悩んでいた。人のいないバルコニーで、あの破壊神ブランのことについて考えていた。

他の皆は、打倒ブランという意志の元、修行に励んでいた。自分も、足並みを揃えようと修行に打ち込んだ。

だが、本当は怖い。実力の差を知ってしまい、その力に怯え、逃げ出してしまうほどに。だが、今まで共にいてくれたグレモリー眷属達を裏切る事が自分に出来ない。二つの思いが板挟みとなり、どうすれば良いかわからないその葛藤が小猫を苦しめる。

「ツーン」の気……」

バルコニーで悩んでいた彼女はハツとなって俯いていた顔を上げる。気を探知出来る彼女は、突如、知っている気を感じたのだ。位置も特定出来たことで、それを追いかけるように会場を出ていく。



「ハロー、白音」

「黒歌…姉様……？」

会場を出て行き、走った先に待っていたのは、彼女の姉である黒歌だった。今、小猫の目の前には黒歌と、横にはルフエイもおり、突然の再会に小猫は警戒して身構える。

「良かった。こうやって気を出せば、私の存在に気づいてくれると思っただから。流石、私の妹……気をちゃんと感じ取れるようで安心してたにや」

「姉様……どうしてここに……」

はぐれ悪魔となり、行方が分からずとなっていた姉の姿を久々に見て、言葉があまり続かない。そんな小猫に黒歌はじりじりと近づく。

そして、息を呑む小猫の両肩を掴み、切羽詰まった表情で口を開いた。  
「私と一緒に逃げるにや。白音」

「えっ……?」

あまりにも突然すぎて、全く理解が追いつかない小猫。だが、黒歌はそんな小猫の気持ちを紹介せず、彼女に優しく語りかけるように言う。

「三大勢力は恐らく、破壊神によって滅ぶ……私は、貴女を助けにきたの」

「なんで、それを……」

「あの破壊神の気を感じ取ったなら貴女も分かっている筈。あんな化物……相手にしたらいけない」

「ッ!」

小猫も、悪魔に未来は無いと薄々感じていた。確かに、姉の言う通り、ブランの強さは異常である。気合いでどうにかなるレベルではない。

『気の大きさ≡強さ』とは一概に言えないだろう。だが、あの膨大な量の量があれば、一瞬で自分達を殺せる筈。彼女はあの気の大きさを持つ相手に立ち向かうことさえ、恐ろしいと感じ始めていた。

その考えから逃げるように、この冥界で倒れる程までにトレーニングをした。だが、結果は何も変わらない。少し強くなっただけで、破壊神の背中は一向に見えない。

「そ、それは……そうですけど……!でも、おかしいじゃないですか!!どうして今更、私の目の前に現れたんですか!?!私を捨てていった貴女が、何で!!」

小猫は自身の肩を掴む黒歌の手を無理矢理払い、声を荒げる。そもそも、小猫がグレモリー眷属の一員となった原因は、黒歌が大きく関係している。昔のことを怒るように、声を荒げる小猫に対し、黒歌は言い返す事は出来ず、震える下唇を噛む。

だが、妹の為に、ここから一刻も早く離れるのが、自身のやるべき事と決めている黒歌は、再度小猫の両肩をギュッと掴み、何とか説得をする。

「そのことについては、あとでしつかりと話す。今は私の言うことを聞いて」

「……嫌です。今、ここで聞かせてください」

「私達は侵入者……あまりここに長居は出来ない。貴女にはちゃんと説明するから。……お願い」

今まで見たことのない悲しい顔をした黒歌を見て、小猫は困惑する。いつそのこと、無理矢理でも痛めつけて連れて行こうとするなら、どれだけ拒否が楽なことか。

すぐには選択出来ず、目を逸らしてしまう小猫。小猫からの返事を待つ黒歌。二人の間に緊迫とした空気が流れていたその時……。

「小猫から離れなさい!!」

「小猫ちゃん!!」

「ツ！部長、イツセー先輩……」

小猫の後をつけてきたのか、イツセーとリアスが現れる。リアスは既に手のひらを黒歌に向けており、いつでも滅びの魔力を発射できる体勢へととなっていた。

「チツ、やっぱり邪魔が入ったにや」

「ss級はぐれ悪魔の黒歌ね。……小猫は大事な下僕よ。貴女なんかには渡さないわ」

「この子は私の妹よ。本来、アンタの元に置いていい子じゃない」

「身勝手に主人を殺した者は言う事は違うわね。好き勝手やって、今更小猫を連れ戻そうだななんて……随分と大胆な泥棒猫ね」

「小猫ちゃんの姉ちゃんだけど……大事な仲間に手を出すなら俺が許さねえ！」

「……くっ……」

リアスに痛い所を突かれて口を紡ぐ黒歌。やはり、彼方からの認識では黒歌は相当な犯罪者として扱われている。抗戦するしかないと踏み、黒歌も止むを得ず戦闘態勢へと入る。

「ルフェイ……ぐめん、白音のことを頼める?」

「はい！お任せくださいー！」

ルフェイは小猫の側から動かず、彼女を守るように周囲を警戒しな

がら構え、黒歌はこの中にいるイツセー達を閉じ込めるように、周囲に結界を張る。規模が大きい結界故に、リアスも少々驚いている様子であった。

「……黒歌、あなた、仙術、妖術、魔力だけじゃなく、空間を操る術まで覚えたのね？」

「時間を操る術までは覚えられないけどねん。空間はそこそ覚えたわ。結界術の要領があれば割かし楽だったり。この森一帯を結界で覆って、外界から遮断したにやん。だから、ここでド派手なことをしても外には漏れないし、外から悪魔が入ってくることもない。貴方達はこの場で私にころころされてグッバイにや♪」

余裕を見せる黒歌。だが、そんな彼女も予想だにしない助っ人がこの場に現れてしまう。

「どうやら助太刀が必要らしいな！小僧！リアス嬢！」

「タンニーンのおっさん!!」

ティアマツトと同じく、龍王として恐れられるドラゴン、『タンニーン』が翼をはためかせながら参上。結界を張る前に、どうやらタンニーンも中に入っていたようだ。

「禍の団のテロリストどもか？まあいい。侵入者には変わりない……：焼き尽くしてやろう！」

イツセー達の援護に來たタンニーンは、牽制として、黒歌の足元に向けて炎を吐き出す。だが「むっ?」

黒歌の元に向かう炎の動きが止まる。すると、その炎があつた場所の空間が歪み、空間に切れ目が生じた。開かれる切れ目が元に戻ろうと、閉じていき、炎は閉じていく空間の切れ目に巻き込まれるかのようになり、やがて掻き消される。

何が起こったのか、タンニーンは自身の炎を消した張本人を見つめるため、辺りを見回す。すると、自身の近くに人の気配を感じ、その人物に目を向ける。

そこには一本の大きな剣を振り払うアーサーがいた。予め、魔法使いであるルフエイから飛翔の魔法をかけられていた彼は、宙に浮かび

ながらタンニーンの前に立ちほだかる。

「アーサー・ペンドラゴンと申します。以後、お見知り置きを」

「騎士王の末裔か？小僧ごときが、龍王一人相手にするなど……ナメてくれる!!」

ゴオオッ!と勢いよく吐かれた炎を始め、アーサーとタンニーンの戦いが始まる。

「かかってくるにや赤龍帝。ついでにグレモリー家のお嬢さんも」

タンニーンの相手はアーサーに任せ、黒歌はイツセー達の相手をするつもりようだ。だが、『ついで』と言われたリアスは、まるで自分が軽くみられているようで、悔しさもあつてか歯ぎしりする。

(どうして、姉様は私を……?なんで、今更……あの時、私を置いていったのに)

小猫は、この戦闘を果たして、今どっちの味方をすればいいのか、混乱して何も言い出せず、この戦いを見守る事しか出来ない。勿論、イツセー達の気持ちは嬉しい。それと同時に、自分のことを助けようとしてくれる黒歌の意志を簡単に無下にもできなかつた。

一方、二人掛かりで黒歌に立ち向かうイツセー達であつたが、彼女に一切ダメージを与えられずにいる。

気をコントロールできる彼女は、彼等の体内に流れる気を感じ、次の攻撃を読み取ることで戦況を自分のペースへと運ぼうとする。攻撃を避けるのは容易いことであつた。

「ハアッー」

「フッー」

リアスはいつものように、遠距離で得意の滅びの魔力を放つ。だが、黒歌は妖術を巧みに操ることが出来、転生悪魔として取得している高い魔力を利用し、高度な防御壁を張る。

ガキーン!!

バリアを貫通できず、放たれた滅びの魔力は霧散。攻撃は失敗に終わる。黒歌は、滅びの魔力を防いだ所で、リアスに対して呆れるように溜息を吐く。

「これが滅びの魔力?思ったより大したことないわね。これじゃあ、



雑魚とか罵られてもおかしくないにや。本当に上級悪魔かって疑うレベルね」

「何ですって!? 貴女に何がわかるのよ!! 裏切り者の癖に!!」

「知らないわよ。けど、弱いつて言われて取り乱すってことは、結局自分がそうだったことを認めてるんじゃないの? ああ、でも貴族の娘だから、親の蜜を吸って育ってきたつてのもあるのかしら……そりや仕方ないか。そんな奴が魔王の妹とか、笑わせるにや」

「部長を馬鹿にすんじゃないやねえ!! ドラゴンショットオオオツ!!」

リアスを貶されたことで怒りを爆発するイツセー。先程から籠手を出していたイツセーは、溜めた力を放つようにエネルギー波を発射。黒歌へと向かっていくエネルギー波であったが、彼女はそれを受け止めず、躲した。

「どいつもこいつも部長をバカにしやがって! この人はなあ! サーゼクス様と同じで最高最善の優しくて強い人だ!! お前や、あのクス破壊神には絶対分からねえ素晴らしい人格者で、俺の恩人だ!! それを貶す奴は、この俺がぶつ飛ばす!!」

「フン、熱い男ね。まあ、そういうタイプは嫌いじゃないわ。でも……相手が悪かったわね!」

「ツ!? ぐあっ!」

「イツセー……このっ!!」

攻撃を避けた直後、一瞬で懐に入り込み、気を織り交ぜた突っ張りを放った黒歌。その攻撃により、イツセーは後方へと飛ばされ、彼が傷ついたことでリアスは懲りずに滅びの魔力を放つ。

が、いかんせん単調、直線的な攻撃なので黒歌は難なく躲し続ける。リアスの攻撃は強力ではあるが、当たらなければ意味は無い。

そして黒歌は思う。正直、今代の赤龍帝が思いのほか弱すぎたことに黒歌は安堵していたのだ。更に、仲間を馬鹿にされることで激情し、挑発に乗ってくれることに対してもだ。

それほど、彼らの絆とやらは固いのだが、それ故に貶された時の耐性が甘い。戦いを自分のペースに持ち込みやすいので、黒歌にとつては有難い話だ。

「貴女に小猫は渡さない。彼女を捨てていき、心に傷を負わせた貴女には絶対に小猫を幸せにすることなんて出来ない！あの子の主人として、貴女を討ち取ってみせる!!」

「……口だけは達者にや」

「ツ！馬鹿にしてツ!!」

黒歌が余裕を見せ、ニヤリと笑う。その人をバカにするような素振りだが、まるでブランを思わせるようでリアスは激昂。煮え繰り返るような怒りをぶつけるように、リアスは滅びの魔力を黒歌に向けて放つが、黒歌はそれを予測しており、今度は避けることをせず、手のひらに白い気を纏わせ、その手で魔力を払うように弾いて攻撃を躲した。「なっ!?!」

当たったのに消滅せず、あつさりと対処されたことに愕然とするリアス。その後黒歌は、すぐさま両手を広げ、イツセーとリアスの前に紫色の霧を撒く。立ち込める霧に戸惑う二人は、それを吸ってしまった。

「こ、これは……」

「部長!?!」

思わず吸ってしまい、手で口を覆うが時既に遅し。吸った直後、リアスは身体が痺れるような感覚に陥り、動きが止まる。唯一動けるのはイツセーであり、リアスの苦しむ姿に怒りながら声を荒げて問う。「おいお前!何をした!?!」

「それは対悪魔用の毒霧にや。このままガスを吸えば、ものの数分で生き絶える……といっても、やっぱりドラゴンを宿すものには効果が薄い。面倒にや」

イツセーはともかく、リアスは膝をついて疲弊している。崖っぷちに立たされた彼らは何とか切り抜けようと模索する。

「!」

力ではあちらが上。どうあがいても、このままでは勝てないだろう。だが、イツセーは閃く。

この冥界でタンニーンとの特訓をした際、自身は禁手には至ることは出来なかった。アザゼルには、禁手に至る際は、自身に劇的な心の

変化が訪れることで成功するケースが多いと聞き、その言葉を思い出して彼はある策を思いついた。

「部長、お願いがあります！」

「な、何かしら？」

「おっぱいを突かせてください!!」

「……は？」

黒歌だけじゃない。リアスもイツセーから放たれた衝撃的な発言に思わず口をあんどりと開けてしまう。

「こ、この期に及んで何であんな破廉恥な！見てられません！」

「……ごめんなさい。ああいう人なんです、彼は」

赤面するルフエイに側にいる小猫が、何故か申し訳なさそうに言う。

一方、イツセーには、ある確信があった。自分が最も愛する女性の大きな胸。触る事だけなら、今までリアスと家で暮らしてきたので何度かある。勿論、それはそれは素晴らしい感動があった。

ならば、その先を行こうと、今度は『突く』ことで新たな感動を得て禁手に至ることを思いついたのだ。

「……それでイツセーが禁手に至れるのであれば……!!私も協力するわ!!」

悩んだ末、リアスは意を決し、パーティー用の衣装の上半身をはだけさせ、自身の豊満な胸を周囲に晒した。

(嘘でしょ？禁手って、そんなことで至れるものなの……？いや、可能性が0というわけでも……)

何を見せられているのか分からない黒歌は、そのやり取りに呆然とするが、少し時間が経ったところで我に帰る。

「ルフエイ……今の内にお願ひ」

「分かりました！」

ルフエイは黒歌と事前に打ち合わせをしていた撤退用の転移魔法陣を、イツセー達にバレないように術式を構築していく。黒歌は、ここで下手な行動を見せてかかってこられるよりも、パワーアップに時間をかけてもらい、魔法陣の発動までの時間稼ぎに利用しようとす

る。

故に、もはや自分からは攻めていかなかった。

「お、おっさん！大変だ!!」

警戒する黒歌の目の前で、突如イツセーの声が上が、アーサーと戦鬪を繰り広げていたタンニーンは攻撃の手をやめてイツセーの方へと振り向く。

「どうした！何かあったのか!」

「右のおっぱいと左のおっぱい！どっちをつついたらいい!」

この男は一体、何を言っているのか。口の端が引きつる程の失笑を黒歌は晒す。これでは、完全に気が抜けてしまう。今の今まで真剣になっていた黒歌でさえ、イラつきや怒りを通り越して、何故か自分がバカバカしく思えてくる。

「知るか！両方つけばいいだろう!!」

「りよ、両方!?まさか、そんな素晴らしい手があったなんて……何ですぐに気づかなかったんだ!!ちくしょう!!」

タンニーンと対峙していたアーサーでさえ、ため息を吐くばかりである。

「ヴァーリは、あの頭のおかしい赤龍帝をライバルとして見ていたのですか。なんだか、哀れですね……どちらも」

イツセーは、あまりの興奮に鼻血を垂らしながら、両手を震わせながらリアスの胸へと指を近づける。すると、あと数センチで届くというところで、一人、焦りに焦るものがある。

『おい……おい、まさか本当にやるんじゃないだろうな?やめろよ?やめろよ!』

「悪いドライブ……俺にはこれしかないんだ!!」

『ヤメロオオオオオオオオ!!威厳がアアアアアアアア!!俺の威厳そのものがアアアアアアアア!!』

これ以上の醜態を晒したくないがため、叫ぶドライブ。イツセーはそれを無視し、その突き出した二つの指を、リアスの胸へと近づける。そして

「いやん……」

「!」

『Welsh Dragon Balance Breaker!』

満を持して、その胸を突き、リアスの口から蕩けた声音が聞こえた。その瞬間、カツとイツセーの目が見開き、紅いオーラを身体中から吹き出す。

『ウガアアアアアアアアアアッ!!ほんとうにやりやがったクソツタレがアアアアアアアアッ!! 白いのオオオ!! 助けてくれエエエエエエエエエエエツ!!』

ドライグがただならぬ悲鳴をあげると同時に、オーラが更に輝くと、イツセーは身に赤き鎧を纏い、赤き鎧の戦士となって大地に立つ。

今ここに乳を突いて禁手に至った赤龍帝が誕生した。

バランス・ブレイカー  
バラスト・ギア・スケイルメイル

「禁手『赤龍帝の鎧』ッ! 主のおっぱいについてここに降臨!! さあ、ここからが本番だ! ……あれ?」

イツセーは、禁手に至ったことで漸く黒歌をどうにか出来ると意気込む。だが、彼がどちらかの乳首を押すどうかで悩んでいる間に、何か自分達を蝕んでいた毒霧が消えていた。

それどころか、今さっきまで対峙していた黒歌達でさえ、既にその場から離脱していたのだった。

「こっちは命かかってんのに、あんなのに付き合ってもらえるかにや……!!」

## 第28話 運命のゲーム

三人称 side

黒歌は、何とか小猫を冥界から引き離すことに成功した。その後、まずは互いに落ち着ける場所を探すことに専念。戻るつもりもない禍の団のアジトにも連れて行くわけにもいかない上、寝床もなかったので駒王よりも遠く離れた街のホテルで過ごすことにした。

アーサーとルフェイは、黒歌と小猫を二人きりで話をさせるため、ツイン部屋で二組に分かれることを提案。彼等の気遣いに感謝し、黒歌は同じ部屋で小猫と二人きりとなる。

「姉様、どうして私を連れ去ったんですか？ちゃんと、理由を教えてください」

二人の間は決して、穏やかな雰囲気ではなかった。小猫は拘束されているわけでもないが、黒歌が近くにいることで自力で脱出することは出来ないとわかっていたので、逃げるのは諦めていた。

「どうして、今更になって自分を冥界から引き離そうとするのか。何故、連れ去る際に追われる理由が増えるというリスクを背負ってまで、自分を守ろうとしたのか。今は、それだけが気になり、黒歌に問う。」

「私達は、親がいなくて生活も不安定だった。そこに、一人の上級悪魔が手を差し伸べ、私はその人の眷属となって、生活を支援させてもらったことでまともな食事や家も貰えた。ここまでは分かるわね？」

「はい……」

少し躊躇しているような口が開かれ、まずは黒歌自身が悪魔になった経緯を確認。彼女は、続きを語る。

「自分で言うのも何だけど、私は強かった。SS級はぐれ悪魔と言われるほどには実力はあつたし、眷属の実力が評価されれば、当然仕えている上級悪魔の評価も鰻登り。ここは？」

「し、知りませんでした……」

小猫がサーゼクスやリアスから聞かれていたことは、黒歌がしでかしたことだけ。罪となる原因となった『主人殺し』のみだった。

そのせいで、自分も悪魔側から命を狙われ、そこをサーゼクス達に助けてもらい、リアスの眷属へと加入。彼らにとって、姉はただの犯罪者扱いで、そんな情報を耳にした事は今まで一度もなかったのだ。「自分の評価が上がって調子に乗ったからか、当時、仙術を扱うことなんて不可能だった貴女を、無理矢理眷属にしようとしたの。私は、それを許すことは出来なかった」

「……………えっ……………」

黒歌から語られた真実。耳を疑ったが、聞き間違いではなく困惑に満ちる小猫。

昔の小猫は黒歌のように気など扱う事は出来なかった。下手に力を使えば、暴走する可能性もあったし、反動で身体が傷つく恐れもあった。

「まさか、姉様は……………私を守るために……………」

そこから連想されるに、黒歌が犯した主人殺しの真相は、自身を守るためだったと察し、信じられないような顔で黒歌を見る。

「だから、今度こそ救おうって決めたの。たとえ、嫌われてもいい。あの時と同じように、白音を置いてけぼりで生き延びようとしたくなかったの」

「そんな……………いきなり言われたって……………」

戸惑う小猫だが、黒歌の話に信憑性がないわけではない。そもそも、黒歌は気のコントロールにおいては上級者に位置する実力者。サーゼクス達は、『黒歌が仙術の力に呑み込まれ暴走した』と言っていたが、その姉が簡単に力に呑み込まれるのだろうか。

今になって、その言葉に間違いがあると思えてきたのだ。そう考えてみると、あの事件は暴走ではなく、姉の必死な抵抗の末に起きてしまったもの……………それが彼女にとって一番しつくりきた。

「時間がかかるかもしれない。でも、本当なの。あの時は、あれしか止める方法がなかったの……………！ごめんね……………ごめんね……………！！」

涙を流しながら、黒歌が小猫を抱きしめる。心の整理がつかないまま、小猫は自然と相手の身体を抱擁していた。理由も分からずに。

完全に姉が悪者だと思っていたのに、実は違っていた。なら、悪者

は悪魔の方かと疑い始める。悪魔は契約を重んじる種族のはずだ。向けるべき怒りや悲しみの矛先は、目の前の姉ではなく、その亡き主人。他にも、同じような悪魔もいるかもしれない。否、それは絶対にいる筈だ。

リアス達との触れ合いは、本当に楽しかった。かけられた言葉も嬉しいものだった。だが、そんな彼等も黒歌の主人のように変貌してしまったら？力に呑み込まれたはぐれ悪魔という例がある故、可能性を否定しきれない。

黒歌の話聞いたことで、本当は信じたいのに、どこか仲間を信じ切れない自分が芽生えてしまった。

「じゃあ、私は一体何を信じれば……！」

姉を想う気持ちと、仲間の身を案ずる気持ち。二つの思いが板挟みとなり、小猫は自分が進むべき道を見出さず、ただ迷うことしかできなかった。



小猫が黒歌に拉致された後に、しばらく日が経った時のことだった。

「小猫ちゃんはまだ見つからないんですか!？」

イツセーは、オカルト研究部の部室にて、冥界で小猫が黒歌に拐わ



れて以来、冥界からの捜索隊を出しても彼女の居場所が見つからないことに苛立ちを表に出しながら叫ぶ。部の雰囲気は深刻なものだ。

「黒歌がいた痕跡は見つかるのだけれど、未だ本人の足取りは掴めな  
いらしいわ。どうやら、拠点を転々と移動しているようね」

「クソツ……次会ったら絶対に取り返す！」

「ええ、それにギヤスパーに続き小猫までとなると、やっぱり破壊神が絡んでい  
るのかもしれないわ」

「確かに。あの破壊神が来てから何もかも上手くいかない……もはや、呪い  
としか思えないですわ」

小猫の無事を祈ると同時に、こうなるまでに行き着いたのは全ては破壊神のせいだ  
と思うようになり、怒りの矛先は尖りに尖っていくのであった。

「その可能性もあるが、今は目の前のゲームに集中しろ。次のゲームの相手はゼ  
ファードル率いるグラシヤラボラス眷属だ。小猫の捜索は、大人の俺達に任せ  
ろ。場所が分かり次第、お前らにもちゃんと伝える」

アザゼルの言葉に、グレモリー眷属達はひとまず頷き、次に控えるゲームに  
対して気を引き締める。だが、そんなイツセー達にこれから次々と災難が降りか  
かるとは、彼等自身思いもしていなかった。

とある森の奥。木々が囲むその中心に、決して綺麗ともいえない若  
干古ぼけた施設が建っている。そこは、以前禍の団所属の旧魔王派連  
中が使用していた大きなアジトだったが、今やそこは二人の悪魔の根  
城と化していた。既に連中の死体は無く、奪われた跡と思われる赤か  
ら黒へと乾いて固まった血が床にこびりついていた。

研究室のような広い部屋では、あらゆる機械や器具が置かれてお  
り、そこに部品らしきものに釘を添え、ハンマーを打ち付けている者  
が一人。

「ふうく……大分出来てきたぜ……ワシってやっぱ天才かな？」

この男、先代ルシファー。名は『リゼヴィム・リヴァン・ルシ  
ファー』。あのヴァーリ・ルシファーの祖父であり、現在は旧魔王達と  
同様人間界へと追放され、ひっそりと生きていた。

「リゼヴィム様、ご報告を申し上げます」

そして、彼に『ユークリッド・ルクフグス』。サーゼクスの妻で女王  
であるグレイフィアの弟。先の戦争で行方不明となっていたが、今は  
リゼヴィムの元にいる。

「おいつすく。なんか動きでもあったの？」

ユークリッドは、三大勢力の会談後から冥界や禍の団の動きについ  
て観察しており、その事について経過報告としてリゼヴィムに伝え  
る。

まず、小猫が黒歌によって連れ去られたあと、リアス達はソーナと  
のレーティングゲームで辛くも勝利。人数で押されながらも、個々の  
力の強さが勝ったようだ。

それから数日後、リアス達にはグラシヤラボラス家次期当主、ゼ  
ファードル率いる眷属達との対戦カードが発表され、リアス達は未だ  
仲間が欠けながらもレーティングに臨む事となる。

しかしフィールドに立った時、ゼファードルは禍の団に寝返ったと  
判明。彼は旧魔王派と共にリアス達へと襲いかかる。途中でアーシ  
アが人質となり捕まったものの、魔王であるセラフォルの手助けや  
イツセーの禁手の力により、救出とゼファードルの打倒に成功。

「しかし、アーシア・アルジェントがシャルバにより次元の狭間へと飛

ばされ、クルゼレイはカテレアの敵討ちとしてアザゼルとサーゼクスに戦いを挑みましたが、呆気なく消滅させられました」

ユークリッドの報告には続きがあった。どうやら、イツセーがアジアが殺されたと思い、それが逆鱗を触れる事になったのか暴走して覇龍が発動。巨大な龍の鎧を纏い、暴れ回る事で手がつけられなくなった。

「おようなら、アジア・アルジエントはおっちゃんじゃったってこと？」

「……………いえ。どうやら、次元の狭間から一時飛び出してきたグレートレッドの背中にひっついてたようです」

次元の狭間に飛ばされ、死んだと思われていたアジアは無事だった。あの次元の狭間の中で生きていたことも奇跡だが、それ以上に遭遇率の低いグレートレッドにひっついてたことがリゼヴィムにとっては驚きだった。

「運のいいこと。で、肝心の赤龍帝は？」

「はい。暴走した赤龍帝のことなのですが、どうやら冥界では『おっぱいドラゴン』と呼ばれる何とも奇怪な子供向け番組が放送されてまして…………その主題歌らしきものを流したことで正気を取り戻して覇龍も解除されました…………」

「かーっ！そういうの聞きたくない！頭おかしくなりそうだもん！いつから冥界は奇怪な遊園地になったってんだよまったく」

リゼヴィムはある程度報告を聞くと、振り向いて再び作業に取り掛かる。総括して赤龍帝と、その周りは頭がおかしいと認識。ユークリッドも報告するのに少し羞恥心があったようだ。

「まっ、シャルバ達も実力はそこそこあるけど、あのゲロ甘ゲキ強サーゼクスには敵わない。僕ちんだって相手にしたくないしいい」

「それと、もう一つご報告が。これは三大勢力が和平を結んだ日のことなのですが、お孫さんであるヴァーリ・ルシファーが破壊神ブランによって破壊され、この世から去りました」

シャルバに関しては、ケラケラ笑いながら聞いていたりゼヴィム。しかし、ヴァーリが死んだということに対しては、作業をやめるだけ

でなく更に腹部を抱えて笑い転げるまでに至った。

「アハハハッ！なんだ結局死んじやったのね!!醜く、泥臭く生きるのかと思つてたけど……あっけな」

笑い終わると、すぐに興味をなくしたかのように冷めた顔になるリゼヴィム。孫に対する愛情など、これっぽっちも感じられなかった。「それはそうとりゼヴィム様、それは何を作つていらつしやるのですか?」

「んー?これはねえ、宇宙船だっちゃ」

「宇宙船?何故またそんな……というか作ること自体、可能なのですか?」

「魔力で壊れた建物を修復するのすら楽ちんだし、宇宙船を作るのだから頑張れば行けるもんよ。工程は勉強したし、あとはこうやってゴチンゴチンビカビカーって器具や機械操作してさ……何事もチャレンジだよねー。僕ちん、これに乗って地球を飛び出して別の星に行こうと思つてんのよ。というか、侵略つてやつ?だってワクワクするじゃん。宇宙人との遭遇つて」

「はあ……しかし、大丈夫なんでしょうか?破壊神に目をつけられることがあるのでは?」

地球を飛び出した拳句、侵略行為をしてブランの破壊活動に巻き込まれるのではないかと危惧するユークリッド。しかし、そんな質問は予見していたかのようにリゼヴィムは指を振つて得意げな顔で答える。

「チツチツチツ、そりや違うのよユークリッドちゃん。そもそも破壊神は人間レベルを重視して破壊活動をしている。つてことは、僕ちん達が数多の星を侵略して、勢力をガンガン広げさせていくことでむしろ人間レベルの向上に貢献しちゃうのさ」

「人間レベルの向上……なるほど、それならば破壊神から目をつけられるどころか、称賛に値されるというわけでございますね」

「その通りーそして、悪魔は悪魔らしくあるべき!!それだけを想つて僕ちんは生きてきたのさ!宇宙の全てを支配!それで僕ちんのギョラクシーウハウハライフの始まりつてわけっ!!ナーツハツハツ

ハッハッ!!」

「流星ですりゼヴィム様。私もお手伝いします」

後々、リゼヴィムは苦勞を得て宇宙船を完成させる。ユーグリッドと共に宇宙へ飛び立ち、一つの星を侵略しようとしたが、そのせいで彼等に対し恨みを持った者が『とある第6宇宙の殺し屋』に暗殺を依頼。壮大な目標は呆気なく打ち砕かれ、二人もろとも地獄行きとなったのは、また別のお話である。

▽

破壊神ブランは、遂に動き出した。三大勢力の会談から数ヶ月は経ち、頃合いだと思い駒王学園に訪れる。悪魔の根城である冥界へと案内してもらおう為に。

目的は一つ。三大勢力の種族そのもの……そして、文化や歴史など、これまで彼等が紡いできたものを全てを滅ぼす。地球がこれからも人間の手で進化していく為には、三大勢力の存在は邪魔以外の何者でもないからだ。

他の星でも、これまでその手で多くのものを滅ぼしてきた。今更、躊躇などない。

ブランは、駒王学園の下校時間に訪れたことで、すれ違う生徒からは注目の的となっている。周りからは『誰?あの黒髪ツンツン?』『凄いい筋肉……』『小さい子を連れてる……親子かな?』など、様々な

声を浴びせられた。

「そこのお前」

「は、はい！」

後ろにレムギットを引き連れ、すれ違う一人の生徒に声をかけると、その生徒はビックリしながら返事をする。

「グレモリーってのはこの学園にいるよな？何処にいるか知ってるか？」

「あ、あそこに建っている旧校舎にいます。オカルト研究部っていう部室に……」

「そうか。サンキュー」

ブランは、戸惑いながらも答えてくれた生徒に礼だけ言って旧校舎へと向かっていく。中へと入り、階段を登ってオカルト研究部の部室前へと辿り着くとノックをしてから入室した。

「よう。久しぶり」

陽気に声をかけたわけじゃない。ただ、淡々と言って入っただけだ。だが、彼の登場で中にいたグレモリー眷属と、オカルト研究部の顧問として駒王学園にいるアザゼルが警戒態勢に入る。

「貴方、誰の許可を得て駒王学園に入っているの!?学生でもないのに、勝手に上がり込まないで頂戴!!」

「じゃあお前は、人間の誰の許可を得て人間界に土足で踏み込んでるんだ?人間の真似事をしてるだけのくせしてよ」

「なんですって!!」

今更、学生の体を貫こうとするリアスの姿を見て滑稽としか思えないブランは鼻で笑いながら返し、リアスは問答無用で襲いかかろうとするが、その前にアザゼルが割って入る。

「待て。話は聞こう。用件はなんだ?」

「そろそろ会談で言っていたゲームを始めようと思つてな。これ以上長引かせて良い夢観させ続けるのも酷だろう。さて、その為に俺を冥界に連れてってもらおうか」

「……それを聞いて、『はいそうですか』って……簡単に言うとも思つてんのか?」

往生際の悪いアザゼル達は、その場での臨戦態勢を解こうとしない。その様子を見て、ブランはため息を吐いて呆れる。

「分かってねえなあ……こうやって何度もチャンスを与えてやってんのお前らにこれ以上の選択肢があると思ってるのか？ 寧ろ、ここまですかしてあげただけ、俺はまだマシな方だぞ」

その言葉の後にある事に気づく。部屋を見渡してみると、小猫の姿がなかった。以前、黒歌が自分に話していたことと照らし合わせる事によって、状況は瞬時に察した。

「ほう、もう一人がいたと思っただが……どうやら、あの黒猫は拉致するのに成功でもしたのか？」

すぐにそれが小猫のことだと理解したグレモリー眷属。ブランが何か知っていると分かると、あの誘拐には彼が絡んでいると思ひ込んだイツセーは、怒りの表情で彼に食って掛かる。

「やっぱりテメエの仕業かあっ!!」

「うるせえ」

「ぶっ!?!」

「イツセー!」

もう聞き飽きた怒号に対し、苦虫を噛み潰したような顔をしたブランは、イツセーが向かって近づいてきたところを、軽く『ぺちっ』と叩く感覚でイツセーの頬にビンタをした。そのビンタだけで部屋の壁を粉碎しながら突き抜け、イツセーは倒れる。

「何言ってるんだコイツ?」

イツセーがやられたことで激昂するグレモリー眷属だが、それをアザゼルが何とか静止する。

「感情任せも大概にしろよ。それに、よく考えてみる。俺が奴を手助けして何のメリットがあるんだ? そんな無駄な事するわけがないだろ。てか、そうなる原因を作ったのは元はと言えばお前ら悪魔だつてのになあ……まっ、気づくわけもねえか」

「そんなこと信用できるか! デタラメ言いやがって!」

たった一撃で鎧が解け、崩れた壁を退かしながら一向に睨むのをやめないイツセー。もはや、顔を見ることすら怒りを覚えるほどにブラ

ンに対する憎しみは大きかった。

「ええ、イツセーの言う通りよ。きつと、黒歌が冥界に侵入する際に、コイツが裏で手引きしていたからよ。自分で手を下さずに、他人に手を汚させるなんて、まさに汚いやり方ね」

(もはや呆れを通り越して可哀想になつてくる程の勘違いだな……)

正義の味方のような顔で自分を責め立てる彼等に対して、頭を掻いて顔を項垂れるブラン。流石にここまでの事態になるとは思っていなかったので、自分の発言はダイナマイトに火をつけたようなものだと後悔してしまった。

「別に手を貸したわけじゃないんだがな。俺は三大勢力を破壊するつもりでいる……と、あの黒猫に言った。それはつまり、三大勢力から抜けてひっそりこの世を生きるのなら、そいつは見逃してやるってこと。その意味を理解したアイツは、あの白髪娘の命を救う為に前達の元から妹を引き離したってわけだ。理解したか？」

「う、嘘よ！大体、黒歌はSS級のはぐれ悪魔よ！小猫に深い傷を負わせた彼女が、今更小猫を連れ戻すなんて、絶対に良からぬことを企んでいるに違いないわ！」

「だから、その深い傷を負わせることとなったのは、元はといえば悪魔のせいだったの。……まあ、言っても信用しないだろうし、そもそも信用するかは俺にとつてどうでもいいんだがな。てか、そんなことよりグダグダ言ってるでさっさと俺を冥界に連れて行け。なんなら自力で行ってもいいんだぞ？」

「何……？」

人間界と冥界の関係は、いわば表と裏の世界と言える。しかし、流石のブランも冥界にいる者の気は感じ取れず、瞬間移動を使つて行き来するのは不可能。

だが、次元を越えて世界を渡る方法なら他にもあるのだ。その為の力が彼にはある。

「はあああああ………!!」

それを解放しようと、拳を握り、身体全体に力を入れることで気を高めていく。髪がユラユラと揺れると、今度はバチバチと電気のような



なオーラがブランの周りに纏われ、更にはそれに呼応するかのよう  
に大気までもが震えるように動いた。

「な、なんだ!?!おい、何をしようとしてる!?!」

グラグラと地響きのようなものも聞こえ、更には部屋の天井や壁に  
ヒビまで入る始末。このままでは、学園すら崩壊する恐れがあると誰  
もが察した。

「わ、分かったわよ!連れて行けばいいんでしょ!!」

「……最初からそうしやがれ」

流石のリアスも、このままではまずいと思ったのか、仕方なくブラ  
ンを冥界へと連れて行くこととした。

▽

冥界へと招かれたブランは、サーゼクスがいるルシファー領へと案  
内され、魔王城の中にある大広間へと移動。

中心に置かれた大きなテーブルを囲むのは、破壊神ブランと冥界を  
収める四人の魔王。サーゼクス、セラフォル、アジュカ、ファルビ  
ウム。

「さて、ゲームの参加者だが……お前達四大魔王は絶対に参加して  
らう。三大勢力の命運を背負うには打ってつけのメンバーだろう?  
この実力主義の世界に立ち、その筆頭の格に位置するお前らが、ど  
れだけの力があるか確かめさせてもらおう」

四人がゲームに参加する。それは、冥界中の者が知れば歓喜に満ち  
震えるだろう。力の差など理解していない一般の彼等にとって、四大  
魔王の力は畏敬の念すら抱く程の強さなのだから。

しかし、目の前にいる魔王達は違う。四人が組んでも勝てるかどうかは怪しいと、会談の時点で十分に理解した。故に、なんとかブランとの戦いは阻止したいと思っている。

「確認をしたいのですが、三大勢力を破壊するという意志の撤回はないのでしょうか」

「無い」

「神なのに、慈悲ってものは無いのかしら☆」

「慈悲あってこそその神だと思ってるじゃねえ。それはお前らが神に対して勝手な定義を植え付けているだけだ」

「一つ聞きたい。どうして、そこまで命を軽く見て破壊など出来る？ 貴方に、誰かの未来を奪う権限が本当にあるのか？」

「破壊神であるこの俺に人道を説いているのか？……そーいや、悪魔の駒とかいう人の命を弄ぶ奴隷製造器を作ったのは一体どこの誰だったかな？」

「……………」

「ねえ、辞退って出来るのかなあ、なんて」

「ほう、辞退か。やる気がねえなら、今ここで首吊って死んでもいいぞ。手伝ってやるよ」

「……………やっぱりやります」

サーゼクス、セラフォル、アジユカ、ファルビウムの順でブランに質問するが、どれも一蹴される。特に、悪魔の駒を作ったせいで三大勢力の全てに種の存亡の危機の原因を生み出してしまったアジユカや、普段やる気のないファルビウムも黙り込んでしまう。

「お前たちは今まで色々な想いを抱えて生きていただろうが、泣いても笑っても、勝っても負けても今日……お前らの運命が決まる」

ブランの言葉により、やるしかないとうやく覚悟を決めたのか、サーゼクスは顔をしかめながら勝負を受託する。

「……いいでしょう。勝負のルールを教えてくださいませんか？」

「ルールを説明する前に、今からお前ら悪魔には俺が言うフィールドを作ってもらおう。制限時間は指定しないが、なるべく早く作れ」

▽  
ブランとレムギットは、悪魔が有するVIPルームへと案内された。ゲームが始まるまで、二人は終始無言。部屋の中に二人きりだからといって、何処かのラブコメ漫画のような雰囲気には決してならない。二人の関係性は、あくまで主従関係に過ぎないのだから。  
「ブラン様、いつてらっしゃいますか」  
「ああ」

フィールドや悪魔側の準備が整い、試合開始前の時間になると、部屋に転移用の魔法陣が展開され、ブランはその魔法陣に乗る。レムギットはペコリとお辞儀をして、付き人として彼を見送った。

ブランは、ゲームが行われるフィールドへと転移され、戦いの地へと降り立つ。そこは、広大な平野に囲まれたフィールドであった。空は青く、周りに壁などの障害物は見当たらない一見見栄えのないフィールドに見える。だが、東西南北の四方全ての方向から大勢の悪魔の気を感じた。

そして、彼の周りにも千を越える悪魔の軍勢が、取り囲むように己の得物を構えている。その数に気圧される事はないブランは、辺りを見回しながらある事に気づいた。

「ん？……なんか、ちよっと重くなったな」

身体の重さが、フィールドに入る前と比べて急激に重くなったのだ。だが、その感覚は自分にとって覚えのある重みだったので、「あ

あ、なるほど」とすぐに違和感の正体を理解できた。

そう、それは彼だけでなく、オーフィスやティアマットも修行でよく使う『重力トレーニング』そのものだった。

同時に気付く。この重力はどうやらブランにだけ効果があるようで、他の者は平然としているところを見るに、どうやら製作側が手を加えたようだ。

「感覚的には……およそ50倍ってところか？懐かしいもんだ」

かつては10倍にすら耐えられず、まともに立てなかったことがあったからか、しみじみとその思い出を蘇らせる。そして、周りの悪魔の軍勢はケロッツとしている彼を見てざわつく。50倍の重力など、耐えられるわけがないと踏んでいたからだ。

「驚いているようだが、たかが50倍の重力など俺にとっては少し重くなっただ程度の感覚に過ぎない。動けないところを袋叩きで仕留めようとしたかったのだろうが、誤算だったな。ああ、因みに重力はこのままでもいいぞ。一度の不正くらい許してやる」

ただし次はないがな、と付け加えてアップをし始めるブラン。本来フィールドの設定にそんな指示はしていないので、これは立派な不正と言える。恐らく、二度目以降は、ブランもルール無視で立ち回ってくるだろう。

悪魔とブランによる三大勢力の存続を賭けたゲーム。そのルールについての説明が実況から語られる。

まず、半径100キロメートルまで広がるこのフィールドには、東西南北の端に、それぞれ拠点となる城が立っている。その一つにそれぞれ四大魔王のうち一人ずつ配置されており、従える下僕悪魔や参戦する悪魔達は拠点を守らなければならない。

この四大魔王が倒される、もしくは死ぬ……そして城を破壊されることよって守っていた拠点は落とされたこととなる。たとえば、南の城にセラフォルが配置されている場合、彼女が脱落し城も破壊されることで南の拠点は落とされたこととなる。

因みに、拠点の移動は自由。城を放棄して他の拠点を守ってもいい。しかし、ここで注意点。もし、先に城を破壊された場合、その城

にいた魔王は戦闘への参加資格を失う。つまり、強制的な脱落を意味する。他拠点に送る兵の数には慎重にならなければならない。

制限時間は3時間。タイムアップまでに四つの拠点の内、どれか一つでも死守出来れば、三大勢力側の勝利。守れなかったらブランの勝利となる。

「俺を倒すことなんて不可能なんだから、これならまだチャンスはあるだろう。勿論、俺だって神の気を解くから神器だって通用する。十分だろ？なんせ、お前らは戦力補強の為に、無関係な人間や妖怪といった他種族を利用した眷属システムを取り入れたんだからな」

それがこの冥界の魅力というのならば、証明してみせろと遠回しに言われているかのようにだった。フィールドのど真ん中に堂々と佇むブランは、この冥界と天界の全てに伝わるように宣言をする。

「このゲームに参加しない奴らは、敗北の際に一切の痛みなく破壊してやると約束しよう。俺の破壊エネルギーを持ってすれば、ほんの一瞬で意識など吹っ飛ぶ」

中継として流れているであろうモニターやテレビ越しでそれをみている者の一部は、その言葉に何処か安心してしまった。勿論、恐怖を増して震える者もいた。

だが、一部の転生悪魔は違う。望みもしない転生で勝手に眷属として働かされている転生悪魔は、寧ろブランの行いを応援している。それどころか、悪魔の生活を放棄して死を望むものもいた。

「だが、このフィールドに降り立つことは、即ち……お前達がこの世界を守るために死を覚悟したとみなす。よって貴様らは、この破壊神プランが直々に手を下し、痛みを与えて殺してやる。通常のゲームと違って、簡単に生きて帰れると思うな」

その言葉の終わりに試合開始の合図が出されると、周りの悪魔は一斉に襲いかかる。己の世界を守る為に、強大な力を持つ破壊神に無謀にも挑むのであった。

「……お弁当を食べ終わる頃には、終わるでしょうか？」

一方、VIPルームでその様子を観戦しているレムギットは、自身が出来てきたと思われる手作り弁当を開ける。だが、その瞬間に彼女

すら予想だにしない事態が起こる。

ガチャツ!

VIPルームを出入りするドアが勢い良く開かれ、そこから自分達をここに案内したグレモリー眷属と、アザゼルがやってきた。彼等は優雅に座っているレムギットを囲み、それぞれ攻撃態勢を彼女に向ける。

「今から質問に答えてもらう」

「そうですか。どうぞ」

アザゼルの言葉に、レムギットは涼しげに応答。アザゼルは、自らが開発した人工神器の力を使い、その全身に金色の鎧を纏っており、持っている槍の先端をレムギットの首筋に近づける。

だが、レムギットは視線をアザゼルにすら向けようとせず、ただジツとしたまま姿勢を崩さなかったことで、得体の知れぬ不気味さ・理解のできない恐怖を感じた。

(何でこんなにも冷静なんだ……!?!首に刃先を突き立てられても、震えどころか顔色ひとつ変えねえ……!!この女、ただの付き人じゃねえのか……!?!)

アザゼルからは、レムギットからは何かしらの力は感じられなかった。神の気を感じ取れないことで、代わりに正体不明のプレッシャーのようなものだけが肌で感じ取れる。

「…破壊神の弱点を教えろ」

「ふむ、直球ですねえ。そんな事を聞いてくる人間は初めてです。が、まあいいでしょう。答えて差し上げます。……ブラン様の弱点……というより、破壊神共通の弱点ですが、それは破壊神と対になる存在、創造神である界王神様を殺すことです」

モニターに映るブランを見ながら、淡々と答えるレムギット。その言葉に半信半疑になる前に、界王神を殺すことが一体どういう意味をもたらすのかさっぱりなグレモリー眷属とアザゼルに、続けて説明をする。

「彼等は命が繋がっているのです。同列の地位に位置する彼等は、一方が死ぬともう片方も死ぬというシステムとなっており、まさに『一

心団体』なのですよ。天と地ほど力の差がある二人の内、現状界王神様を殺すことが、一番簡単に破壊神を始末する方法だと私は思いますよ」

そこまでいえば、バカでも理解出来る。破壊神に対して最も有力な策が分かった途端、アザゼルは藁にもすがる思いでレムギットに詰め寄る。

「そいつは何処にいる!? 同じ地位にいるならば、あの破壊神を何とか説得とかできねーのか!？」

「せっかちですねえ。モグモグ……はあく、我ながら美味な味付け……」

自分の作った弁当に詰められている料理を口にして、自分の味に惚れ惚れするレムギット。遠足気分であつたようにも見える彼女は、声を荒げるアザゼルとは正反対に冷静を崩さない。

「本来、人間が立ち入ることなどあつてはならない場所なのですが……その目をみると……ええ、なかなか面白い人達ですよ。オホホ」  
たとえ、どんな所だろうが破壊神を打ち倒す事ができるのなら、何処へだつて行くという意志がイツセー達から感じられ、レムギットは思わず笑いが溢れる。すると

「いいですよ」

「……えっ?」

界王神が住む場所……『界王神界』へ踏み入ることを、あっさり許可した。その返答にイツセー達は哑然としてしまう。立ち上がるレムギットは、自ら杖を取り出してイツセー達の方へと身体を向ける。

「抗うならば、好きにやらせてあげます。私はブラン様の付き人ですが、あくまで中立な立場ですから……チャンスは平等に与えないと臆盾でしょう。特別ですよ?」

アザゼルは、その言葉を聞いて思わず心の中でガッツポーズを取った。見えていなかった希望が、ここに来て一筋の光が差し込んできたかのように現れた故、彼だけでなくグレモリー眷属も同じ気持ちを抱いた。

そして、イツセーはレムギットに対する印象がここに来て変わった。見た目が女の子というのもそうだが、彼女のニコツとした笑みにも嫌悪感を抱く事が出来なかった。寧ろ、マイナスからプラスになるように好感度が爆上がりしたのだ。

「何を考えているか分からないと思つて一步引いていたけど、俺誤解してたわ。あんな破壊神とは違って……君、良い奴だな！ありがとよ！」

「いえいえ、お氣になさらないでください。私はあくまで中立な立場ですから」

美しく、ウフフと笑顔で返すレムギットにイツセーも釣られるように笑顔となつてしまう。ここにきて何の疑いもなく、レムギットに大きな信頼を抱いてしまった。

『これに、もっと胸が大きければ良いのに』という邪な願望を混ぜてだが。

「よし、お兄様達が食い止めている間に、私達はその界王神と話し合つて、破壊神に破壊をやめてもらうよう頼みましょう」

（もし、説得に応じなかったら……消し飛ばすしかないわね）

リアス同様、他の者たちも同じことを考えている。破壊神よりも大きく力が劣る界王神ならば、何とかなるんじゃないかと思つている彼等は、最終的には強行手段に移る氣でいた。

（とか、考えてそうですねえ……まあ、行く末は最後まで見届けてあげましょうか）

彼等の考えは完全にレムギットに筒抜けだが、彼女はそれを止めようとはしない。善意も悪意もなく、ただ彼等の望むままに願いを聞き入れ、手助けをするのであった。



## 第29話 第0宇宙の界王神

ブラン side

「さて、やるか」

ゲーム開始早々、動き出したのはあちら側。必死な形相が目映り、無謀にも俺に近づこうと一斉に襲いかかってきたところで構えをとる。

因みにこれは、悪魔達にとって世界の命運を決めるゲームであると同時に、俺にとっては奴らの戦闘力を測る為の場でもある。開始早々、速攻で殲滅しては意味がない。まずはウォーミングアップとして、うじゃうじゃと湧いてくる悪魔共の力を見ることにした。

「「「うおおおおおおおっ!!」」」」

正面から来た悪魔の拳を避ける。続けて、背後から向かってきた悪魔に対して振り向きざまに蹴り上げてカウンター。また、その後ろと右横からやってきた者には、右腕で裏拳、左腕で肘鉄と対応。

「ほらほら、どんどんこい」

「魔法隊！撃てーっ!!」

しばらく格闘でねじ伏せていると、悪魔達は近距離で攻めるのをやめ、今度は空中に浮かび上がったのちに俺を囲むように配置。号令がかかる、四方八方から魔力弾が放たれた。

なんの変哲もないただの遠距離攻撃。それに対して俺は拳を突き出し、ぶつけることで魔力弾を跳ね返し、またある時は払うように腕を振るうことで弾き飛ばす。

「ほい」

「ぐあああああああっ!!」

攻撃を受け流した後は、俺の攻撃の番。デコピンで一人の悪魔をぶっ飛ばし、その先にいる奴らにも二次被害となって激突。まるで地球の娯楽の一つであるボーリングで玉によってピンが倒れていくような光景を彷彿とさせた。

こうして、とりあえず序盤は小手調べという感じで悪魔共を次々となぎ倒していくが、やはり歯応えがない奴らばかりだ。能力頼りで個

人個人の強さは全く皆無と言って良いほどの非力。ただ、表世界に生きる人間よりもちよつと力が強い程度のもので、あまりにも脆すぎる。

「くそっ、これでどうだー!」

おっと、俺に一矢報いたい悪魔の一人が何やら動き出した。腕が伸びる神器使い……ってことは、転生悪魔ってわけだな。

そいつはゴムのように伸びる腕を地面に突き刺し、地中を移動してから俺の足元から飛び出してきた。ガシツと両足首を掴まれ、あちら側にとっては俺の動きを封じたように見え、四方八方から一斉に襲いかかってきた。

ある者は悪魔特有の魔力弾。また、ある者は得物として刀や剣、銃などで攻撃と、種類は様々だ。迫りくる攻撃を今度は受けてみたが、刃先や銃弾は通らずに弾き飛ばされ、魔力弾なども身体に当たって爆風が広がるだけで、俺自身に対しては全くダメージにならなかった。「フン」

「う、うわああアアアアアアアアツ!!」

逃げようと俺の足から手を離そうとする神器使いだが、その前に俺が気弾を放つことで離脱を阻止。エネルギーに呑み込まれることで呆気なく、チリとなって消え去る。

畳み掛けるように攻撃しようとする足を踏み込む俺。だが、今度は俺の周りに霧が立ち込めてきたことで視界が不安定となる。どうやら、霧を扱う神器使いが仕掛けてきたようだ。

だが、これでは近接攻撃を仕掛けてくる奴らの視界だって悪くなるだけ。恐らく、ただの目眩しで体勢を立て直そうと目論んでいるのだろうが、はつきり言って、こんなものは足止めにもならない。

「フツ!」

「ツ!ぐあつ!」

「ぎゃあああつ!!」

「な、なんだ!? やられたのか!? ガハアアツ!!」

「ど、どうして見えないのに攻撃出来るんだ!?」

気の動きで居場所を特定してるからな。人間も神も同じ知的生命

体だ。当然、悪魔や墮天使なども同じで、この世を生きる俺達には生命エネルギーともいえる『気』が備わっている。姿が見えなくとも、気を感じ取ることので位置を察知することが可能だ。これは気のコントロールの初歩だな。

才能によつて成果は個人差は出るだろうが、やろうと思えばある程度は誰でも出来る普通の特技だ。この冥界ではやり方を知る者がいない故、身に付けるどころか知識すらないものが殆どだろう。独学で見つけられそうなのは、この地球で気を仙術と称し、それを扱う妖怪くらいか。

そんなことを考えながら、狼狽している悪魔達を見て手を前方に翳す。ただ、気弾を放つのではなく、広範囲に拡散するように放つことで目の前にいた大勢の悪魔達を一瞬であの世へと葬り去る。

「下らねえ。雑魚が小賢しい技を使つても、やはりこの程度か」

これでもかなり力を抑えている方だ。加減が難しいと感じるほどに弱すぎて話にもならない。

それに、いくら大勢でかかつてこようとも、これでは雑魚を散りばめられているだけの烏合の衆だ。他種族に頼つて、更に神器道具を使つてもこれだけの強さしか得られないとは……この時点で戦闘レベルの低さが伺える。

つまらん、と唾を吐き捨てるように呟く俺は、空を飛んで南の城へと向かっていく。まだ10分も経つてないから、30分も経たないうちに拠点は一つ潰せるだろうと踏んでいた。

「覚悟！」

だが、落ち着いたと思いきや背後からの殺気。他の奴よりも刺々しい怒りのようなものすら感じる故に、反応してから攻撃を躲すのは然程難しくもなく、そいつの不意打ちは不発に終わる。

「今度は剣士か」

「新撰組一番隊隊長……そしてルシファア眷属の騎士……沖田総司さんだ!!」

「沖田さんだ!!」

「ルシファア眷属が援軍に来てくれたぞ!!」

ルシファア……魔王の眷属……なるほど、そりゃ他の雑魚とはちよつと違うわけだ。コイツの登場で周りの悪魔の士気が高まっている。

「こうやってお目にかかれて俺は嬉しい。なにせ、貴様に葬られた弟子の仇が討てるのだからな！」

沖田と呼ばれる男は、俺個人に対して怒りを抱いているようだ。はて、弟子とは……全く覚えがないな。

「一々死んでいった雑魚の顔なんぞ覚えてねえ。お前は今まで切り捨てていった奴らの顔をはつきりと覚えていいのか？」

「黙れ！この世界の民は貴様のおもちゃではないのだ！人々の安寧を脅かし、あろうことか罪の無い者を殺し、快樂を得る外道には分かるまい！」

人の道を外れた奴に外道と言われるとはな。これまた面白い。

「だが、それでも俺たちは屈しない！弟子である祐斗やこの戦いで散っていった同志のため、必ず貴様を地獄へ——」

「長い」

スパンツ！

「……えっ？」

刹那、奴は何が起きたか分からない顔をする。瞬間、奴の首の上の頭部が切り離され、崩れるように落下。そのままボトツと地面に落ち、その後身体も気が抜けたように落ちていく。

奴は自分が何をされたかも分からずに絶命しただろう。なに、単純な話……俺が奴の首を切っただけだ。奴の目で追いつけない速さで近づき、流れるように手刀でスパツとな。

「悪い。隙だらけだったもんでな」

そのまま飛んでいき、次へと進む。其奴は冥界では相当の実力者に値する者だったからか、周りにいた悪魔達は奴が死んだ所を目の当たりにしたことで、もはや戦意さえ失っていた。

戦う気がない奴に用はないので、無視して城へと向かっていく。あっさりとした終わり方だが、時間制限がある故にこんな奴の話に時間を割く必要などないからな。

そして、結局コイツの弟子とやらも分からずじまいとなつてしまつたが、俺にとつてはどうでも良いことなので忘れることにした。

半径100キロに広がるこのフィールドだが、到着に1分もかからなかつた。なにせ、邪魔するものは一人もいないのだから。どうやら、南は拠点を中心に守っているようだ。

「ふむ……中に入れない」

城の正面の扉を開けようとしたが、ビクともしない。コツンコツンと軽くノックするように叩いてみると、何やら質が木とは別の物だと感じた。

「なるほど、これはバリアか……」

無駄だけどな、と呟いた後、門に掌を添え力を込める。いつもは気をエネルギー弾として放つが、今回は違う。形を作るのではなく、エネルギーを空気砲のように放つことで一点に力が集中した衝撃破を放つた。

結果、バリアは簡単に破壊出来た。ついでに門も壊してしまつたが、構わずそのまま城の中へと侵入。城の中は強度ではあるが、中は複雑でもない。通路をまっすぐ辿れば、あるのは広い空間のみ。その中心には、四大魔王の一人。そして、それを守るように俺に立ち塞がる悪魔がいた。

「まずは一人目か」

確か、ファルビウム・アスモデウス……だったな。一番やる気がなさそうな奴だ。

「……まだ15分くらいしか経ってないと思うんだけど……」

足止めも、大したものではなかつたということだ。ふむ、何やらあの魔王がオーラを纏っているな。しかも、そのオレンジの色は城を守っていた魔法と同じ物……。

「レムのリサーチの通り……あれが絶対防衛と呼ばれるものか」

成る程、よっぽど硬さに自信があるようだ。自分から仕掛けてこないのを見るに、奴は足止めや時間稼ぎに徹するつもりか。

だとしても、俺がやることは変わらない。俺は、奴のいるところまで近づこうと右足を踏み出す。しかし、その瞬間……。

カチツ

「ん？」

ドガアアアアン!!

踏み出した足で何かを押しした音が聞こえたと思ったら、突如床が爆発。爆煙が巻き起こり、俺は周りが見えなくなる。

そこに畳みかけようと、魔王以外の悪魔達が一斉に襲いかかってきた。しかし、これもただの目眩し程度にしかなくておらず、更に気度位置がバレバレなので何の意味もなさないのであった。

「ハッ！」

「「「ぐはっ……」」」

煙に紛れながら一人ずつ、確実に手刀で一撃与えることで気絶させる。奴らからして見れば、恐らく同時にやられたような感覚だろうが、それは俺のスピードが奴らを上回りすぎて生まれた認識速度の相違だ。

この中にいる悪魔達を無力化したところで、魔王に視線を向ける。まさか、ここまであつさり部隊がやられるとは思っていなかったのか、やる気のなさそうな大将がここに来て齒軋りしていた。

「さて、この拠点も終わりだな。因みにお前は確実に殺すつもりでやるが……覚悟はいいか？」

「……どうかな？ 僕には秘策があるんだよねえ。もしかしたら、ここで君を倒せるかもしれないよ？」

そう言い、バリアを展開して防御に徹するファルビウム。やはり、アレが奴の切り札なのか。

「余程そのバリアを信じ切っているようだ。なら、こっちから行かせてもらおうぜ」

その言葉が真実なら、どれだけ楽しいことか。さほど期待をせず、その場から一步も動かない奴の懐に飛び込む俺は、すぐさま拳を叩き込む。

「おっ……？」

だが、その拳がバリアによって防がれる。するとその後、俺の目の前に奴が形成したと思われる魔法陣が展開される。魔法陣にエネルギー

ギーが蓄積され、一つのエネルギーの塊が出来上がると、俺は構わずもう一度拳を叩き込む。先程よりも、軽くだ。

だが、拳は再び防がれ、それに合わせるかのようにエネルギーの塊も大きくなる。どう見ても、俺の攻撃に反応して肥大化していた。

「なるほど……」

してやったりという感じでニヤツと笑う奴の顔を見て、俺は理解する。どうやら俺の攻撃は防がれただけでなく、その力を奴の力に変換させられたようだ。

「くらえっ!!」

「!」

俺の攻撃を利用したことで生まれたエネルギーの塊を、極大なビームとして発射され、放たれたエネルギーが俺の全身を呑み込んだ。殆どゼロ距離で。

「ぜえ……ぜえ……す、少しは効いたでしょ……!」

「なにがだ?」

「……ツ!? な、なっ……!」

ビームが収まり、ぶっ飛ぶどころか大した怪我も負っていない俺を見て、ファルビウムは顔が真っ青になる。今のカウンターで、ノーダメージだったことが相当ショックだったのだろう。

それにしてもカウンターか。基本的な能力しか調べていなかったから、このような応用は予想していなかった。だが、直撃でこの程度とはな。つくづく残念としか言いようがない。

「まさか、これが秘策とか言うんじゃないだろうか?」

「くっ……」

悔しそうな反応を見る限り、そのまさかだった。白龍皇の時といい、他人の力を利用しないとまともに戦えない奴をどうして『強い』と恐れ、または称えられるのか俺には理解が出来ない。つまり、本人自体はそこまで強くないということだろうか?

あまりにもつまらない。魔王ということ、何かでかいことでもやってくれるのかと思っていたが、やはり期待する程の価値もなかったか。

「お前の攻撃を跳ね返したんだ！少しは効く筈だ！しかも、殆どゼロ距離で喰らったのに！」

「当たり前だ。今の攻撃にどれだけの力を抑えたと思っている。軽くやるつもりで手加減している力を跳ね返された所で、俺にダメージを与えられるわけがないだろう。それほどに力の差は歴然だということだ」

そう言うと、俺は即座に奴の懐に入り込み、しゃがんで足を払うことで転ばせる。立ち上がらせることを許さず、仰向けになっている奴の胸部に足を乗つけて動けなくさせた。

「ぐはっ…な、なにを……」

「手っ取り早い方法で潰してやるのさ。それと一つ言っておく。お前やその取り巻きはその防御魔法を『絶対』だと称してはいるが、その認識は誤りだ」

「なっ、どういうことだ……」

「そのままの意味。城に張っていたバリアはお前のものだろ？アレを破った時点で、もはやそれは『絶対』ではないんだよ。それに、身を守るバリアなら俺だって張れるさ。お前が特別なんじゃない。お前は生まれつき出来たってだけで、一般悪魔だって気のコントロールをマスターすれば可能な技だ」

「ど、どうして僕が生まれつき、この力を持っていたことを知ってるんだ……!!」

「レムを介して既にリサーチ済みだからな。お前達の能力だけでなく、歴史や黒いところも丸見えだったぜ」

調べていくうちに、理解したことが何個もあり、その一つは『コイツらの扱う魔力と、気のコントロールの共通点』だ。

それは、使用すればするほど自身の体力を消耗すること。ならば、コイツの使うバリアも使えば使うほどに魔力を消耗し、より強いバリアを張ることで消耗が激しくなる仕組みだろう。たった二度の攻撃を防いだけで息が上がっているのが、その結論に行き着いた理由だ。

そう、別にアレは無敵というわけじゃない。バリアってのは、相手



の攻撃を受け止められるだけの気を放出し、自身の周りに薄く纏うことで初めて成功する技だ。特に、遠距離攻撃や触れることで身体に害をなす攻撃から身を守るのに適している。

「バリアの弱点はその『薄さ』だ。遠くからの攻撃を受け止めることには適しているが、こうやってプレスするようにゼロ距離で押し込むと……」

「や、やめ……」

バリアをガラスなどに例えてみよう。あれも、何重にも重ねることにより強固な壁と化す。しかし逆を言えば、たった一枚だと実に脆い物質だということだ。

ゴキッ！バキッ！

「ぐべっ……がっ……おっ……!!?」

「どうだ、重力50倍の重みでかけられる圧力は？」

つまり、こうして無理やり足で押し込むことでバリアにヒビが入り、生身にもダメージが入る。恐らく肋骨は折れただろう。息もまともでできず、悲鳴を上げることすらままならないファルビウムは、さっきのように反撃にも移行できない。このまま死に絶えるはずだ。

ビュンツ!!

「むっー!」

だが、トドメを刺そうとした瞬間、氷弾が飛んできて咄嗟に足を離して避けてしまう。ファルビウムとの距離をとった後、飛んできた方向を見ると、そこには他の拠点にいるはずの魔王が駆けつけにきていた。

「ファルビウムちゃん！大丈夫!？」

「セ、セラフォル……けほっ……た、助かったよ……」

アイツは確か、セラフォル・レヴィアタンだったな。ふむ、北と東に魔王の気を感じていることから、コイツは西の方からやってきたか。わざわざご苦労なこった。

「おいおい、お前自分が城を守る王だっただけを忘れてねーか？いいのか？空けておいて」

「魔法少女レヴィアタンは、仲間のピンチを見捨てないのだ☆ファル

ビウムちゃん！私も一緒に戦うよ!!」

セラフォルの登場で、この時俺は思った。確か、四大魔王は少なくとも三大勢力の戦争時代から生きているはず。そして、レムの情報の通りならば、悪魔は自身の魔力を使って見た目を変えられる。

そこから考えると、コイツらもその見た目に反して年齢は相当いつてるはず。特にこの女は、いい歳してキャピキャピとまるでお遊戯会でも見てるかのようで、それを目の当たりにしているこっちが恥ずかしい思いをするばかりだ。

「気持ち悪いババアだ……」

だが、遅かれ早かれコイツの拠点にも行く予定ではあったんだ。手間が省けて、こちらとしては時間短縮にもなるのでありがたい。一緒に片付けてやるか。



三人称 side

一方、イツセー達はレムギットに界王神界に連れて行ってもらう前、まずある者たちを同行させてもらうために少し時間をもらった。グレモリー眷属は勿論、その他にシトリー眷属であるソーナ、椿姫、匙も一緒に行くこととなり、アザゼルは戦力強化のため、自身の陣営から幹部であるバラキエルを連れた。

「朱乃……」

「気安く私に話しかけないで。貴方のことなんて、父親でもなんでも

ないんだから」

この巨漢な男、バラキエルは朱乃に話しかけようとしたが、彼女からは拒絶の言葉が返ってきた。

実は、朱乃とバラキエルは親子である。彼らの過去については省くが、今は仲が最悪といったところだ。朱乃は、そもそもバラキエルと目を合わせようとすらせず、他の皆は彼女に関して一時そつとしておくように心がけることをアザゼルに言われ、渋々だが了承した。

墮天使の幹部までついてくるのは流石に予想外だったレムギットは『いやいや、そんな大勢の時点では、どうみても臨戦態勢ではないか』と、心中そう呟き、苦笑いしながら彼らを連れて界王神界へと導く。

「貴方達は悪魔ですから、神聖なる界王神界に行つては猛毒に飛び込むものでしょう？それを跳ね返すバリアを張つてあげますね」

レムギットは杖の力を使い、イツセー達悪魔に薄いバリアを張つた。それを事前に言われてなかったら、聖なる力でチリになっていただろう。ここまで真摯に自分たちに力を貸してくれるレムギットに対し、イツセーは完全に彼女のことを信じ切っていた。

「何から何までありがとなーえつと……」

「レムギットです」

「そつか。レムギットちゃん、ありがとなー！」

「お安い御用ですよ。オホホ」

レムギットによる移動で、イツセー達は宇宙を飛び出すことに成功。だが、レムギットが囲むバリアと超光速での移動のせいで景色は真っ白に近いまま変わり映えしないものだ。

しばらくすると、一つの惑星がみえ、レムギットは着地。どうやら、目的地に辿り着いたようだ。

因みに、界王神界とはあの世とこの世とも違う空間である。あの世とこの世の周りを移動し、世界の全土を見守っている界王神の住処ともいえる場所だ。その中心には小さな星が存在しており、そこに界王神の家がある。イツセー達はレムギットの案内の元、その門前まで辿り着いた。

「この中に界王神様がいます。彼のところへ案内しますね」

急ではあるが一応連絡は取っており、事前に鍵は空いていた。中へと入り、レムギットは界王神の気を探知しながら先導して歩いていく。

「ここですかね」

気を辿っていったことで、ある場所に辿り着く。それは、屋内に設置されているプール。外見もそうだが、まさにお金持ちが住みそうな空間であった。それを見て、リアスが嫌な顔をする。

「こちらは大変だというのに、神様は呑気でいいわね」

「はぐれ悪魔が侵入して、気づかず紅茶を飲んでそんな貴女に言われなくても……」

「何か言ったかしら……!?!」

「オホホ。いえ、なにも」

つついボソツと呟いてしまい、リアスの怒りを買ってしまったレムギットは優雅に笑いながら軽く流す。

プールサイドには着いたものの、そこには誰もいなかった。レムギットも気を辿ってここに来たものだから少し予想外な顔をしている。

「誰かいませんかー?」

屋内だからこそ、今のイツセーの声は相当響いた。それに反応したかのように、ザバツ!とプールの水面から顔を出すのが一人。人間と同じように裸に海パン、そして目にはゴーグルを着用しており、レムギットやイツセー達を歓迎するかのようにニコツと笑う。

「ようこそおいでくださいました!申し訳ございません。このような格好で」

頭のとっぺんだけでもつさりとした髪を生やしている。所謂モヒカン頭が特徴的で、肌は限りなく薄い紺色。誰がどう見ても地球人とは絶対に言えない見た目をしているこの人物こそが、この第0宇宙を守る神……界王神である。

▽  
プールから上がってきた界王神は、界王神としての服装に着替えて整容を整えると、改めてイツセー達の前に現れ、自身の部屋へと案内した。

「どうぞ」

まるで貴族が住むような部屋に招かれ、大きなテーブルの前に座らされたアザゼルは、対面する界王神に紅茶を差し出される。一口飲むのを確認したところで、界王神は自ら名を明かした。

「先程は、お見苦しい姿を見せてしまい申し訳ございません。私は、この第0宇宙を収める界王神……『ティーン』と申します。以後、お見知り置きを」

「地球に生きる堕天使の総督、アザゼルだ。今回は、宇宙を見守ってくださっている貴方に頼みたいことがあってこの場を用意させてもらった。急な来訪で申し訳ない」

「いえいえ、急ではありますが私にとっては大歓迎です。この世界は、人間などおらず寂しいものですから、誰か来てくれると賑やかで楽しいものです」

「……そういつてもらえると助かる」

ブランよりも優しい心が感じられ、初印象に関しては良好でとても話しやすいと皆が思った。しかし、どうも貼り付いたような笑顔や釣り上がる口端が、不気味さを際立たせて仕方ない。目を合わせると呪われるのではないかというくらい。

「事の経緯は理解しております。破壊神ブラン様が地球へ赴いたこと。そして、貴方達が種族的に滅亡の危機に追い込まれているという

ことも」

人間がここに来る理由は、大抵一つだろう。界王神である自分に何か用があるのだと分かっているデインは、笑顔を絶やさずにアザゼルの言葉を待つ。

「なら、話が早い。アンタに頼みがある」

「頼み……とは？」

「破壊神の破壊行動を阻止してもらいたい」

「ブラン様の……？」

「今、俺達が終わるわけにはいかない。地球には、禍の困つていうテロリストが潜んでいて、またこの先奴らのような脅威が来るか分からない。神々も含めて、俺達が表面上でも手を結ぶしか生き残る道はない。バラバラでは、いずれきつと世界は終わってしまう。それをアンタから破壊神にも伝えて、説得をしてもらいたい」

その言葉を聞いて、デインはしばらく考えるそぶりをして、考えた後、出した結論は……。

「お断りします」

完全なる拒否だった。

「何でだよ！今の話を聞いて、なんとも思わなかったのかよ！」

誰よりも先に噛み付いてきたのはイツセー。激昂する彼だが、代表として頼んだアザゼルも穏やかな顔ではなかった。

「理由を説明してもらっても？」

「私は星を創造する界王神。いわば、星という命の一つを創り上げ、成長を見届ける神……いわゆる調停者なのです。しかし、破壊神はその逆。破壊をすることで一つの安寧を保つ役目を担っている。そのお役目を邪魔することは、即ち彼に対する敵対を意味することと同義」

「そんな真似は出来ないってか？随分とビジネスライクな精神だな」

「ええ、だって私は界王神ですからね。私は、貴方達の星が誕生する前からこの宇宙を見守ってきました。正直、あれほど多くの種類の生き物が存在する星になったことには驚きを隠せません。特に、表世界に生きる人間たちは今も繁栄を続け、死を繰り返し、新しい命を育み、知恵を振り絞り、力と知恵を行使して文化や文明、科学技術を発展させ

ていったのは、大変評価が大きい。その点、貴方達には大した進化が見られなかった。

……よってあなた方三大勢力は、この宇宙には不要な存在だとブラン様に判断されたのでしようね」

地球への評価をペラペラと機械的・論理的に述べ、破壊される理由までも丁寧に教えてくれた。だが、だからと言って納得できるわけではない。イツセーが皆の気持ちを代弁してディーンの胸倉を掴む。

「ふざけんなこの悪党が！ テメエらの勝手な都合で俺たちを巻き込むんじゃないよ!! その人達の気持ちをちゃんと考えてるのかよ!!」

「勿論その行いを善だとは思いません。貴方達にとって私たち神は悪でしょう。ただ、創造の前に破壊が付き物なのは、遙か昔から必然だったのです。悪く言えば、小を殺して大を生かす……貴方達と同じです」

「同じじゃねえ！ 俺達とお前らを一緒にすんな!!」

「はぐれ悪魔」

「ツー」

ディーンの口から出た言葉に、全員が押し黙る。まさか、そこまで知っているとは思っておらず、怒号をあげていたイツセーの口も、痛い所を突かれたことで思わず紡いでしまい、掴んでいた胸ぐらを離れた。

「人間達を利用し、使えなくなれば切り捨てる。はぐれ悪魔の他にも、神器所有者に対してのモルモットや拉致・誘拐、教会での聖剣計画といった数々の非人道的な人体実験の繰り返しもありましたよね。犠牲という点では、もう同じようなものでは？」

「た、確かにそうかもしれないねえ！ 間違ってたとは思う！ けど、それはこの先の世界の平和の為や必要だったことであって、残忍で冷酷なお前らとは違う！ アザゼル先生やミカエルさんだってそのことは反省している！ それに、はぐれ悪魔に関しては、これ以上被害が拡大しないように対処してるんだ！ 仕方ないだろ!!」

「仕方なかった……ですか。ええ、あなた方がそれでいいなら、私はそれでも構いません。では、その理論がまかり通るのならば、この宇宙

のために貴方達が犠牲になるのも『仕方ない』で済ませてよろしいのでは？」

「いいわけねえだろ！部長達みたいな良い悪魔が沢山いるんだぞ！それを全て殺すだなんて、絶対に間違ってる！そんなのは認められるわけがねえんだ!!」

「私達や、魔王様達も平和のために尽力している。確かに、昔は沢山の犠牲があったのは否定しない。でもいつか、三大勢力が人間と分かり合い、共存出来ると信じてる。破壊を行わない優しい心を持つ神様なら、分かってくれると思うの」

「はあ……えつと……」

界王神は戸惑う。それは、正論を言われて押し黙ったというわけではない。勿論、イツセーやリアスの言い分は理解出来ている。別に『下らない』と蔑むわけでもない。だが

(その台詞、今まで三大勢力のせいで被害を受けた被害者や彼らの遺族の前で、同じ事が言えるんでしょうか……?)

まるで、自分達は間違ったことはしていない正義のヒーロー気取りなどところに、どう反応すればいいのか困ってしまうディーン。

「ごほん……つまり、貴方達は『神や魔王は死んだんだから、今までのことは全部水に流して、これからは仲良くしよう』。……そうやって皆で平和のために繋いでいこう……という感じでしょうか？」

「痛い所を突かれるが、その通りだ。俺もそう思ってる。これからの未来は、こういう平和を願う志を持つ若者が時代を築いていくんだ。人間達と同じように文化やその他諸々も成長していく。なら、アンタらにとっても悪い話ではない。むしろ、俺達に協力してくれるだけでもメリットは大きい筈だ」

「どうでしょう。口ではなんとでも言えますよ」

何百、何千という長い年月が経っても大して変化のなかった彼等の情勢を知ってる界王神からすれば、アザゼルの言葉の信用性は薄い。「望む対価なら払う。財産でもいい。俺が研究し続けてきた神器についても、ありったけ成果を提供してもいい。それで、なんとか手を打てねーか？」



「お断りです。たとえば、命を差し出すと言われても覆ることはありません。さて、話は終わりということで、お引き取り願いたいのですが……」

「ツ……この分からず屋が！」

立ち去ってもらいたいデイーンは、優しくお願いをするが、逆に自分達の願いを聞き入れてくれないことに激昂したイツセーは赤龍帝の籠手で殴りかかろうとする。

「ほいっー」

「「「ツ!?」「」」」

しかし、それをレムギットが阻止するかのように杖を床に突くと、不思議な力で全員を外へと転移させた。

屋敷から遠く離れた地。周りには川や滝があり、木々などが所々生えている。動物はいない故、非常に静かな場所ではあるが、その静かな空間もイツセー達が来たことで台無しである。

「ここなら思いつきりやつてもかまいません。あのままでは、いずれお屋敷が壊れてしまいますからね」

「ありがとうございます。レムギットさん」

いち早く、イツセー達の攻撃を察知し、対処してくれたレムギットにデイーンは頭を下げて感謝の言葉を述べる。

「おいー」

「はいっー」

レムギットにとっては、建物が壊れないようにするための行動だったが、どうやらイツセー達にとってはレムギットがデイーンを助けたように見えたからか、彼女に対して怒りを示す。

「味方をしてくれるんじゃないのかよ! 騙しやがったのか!？」

「味方とは? はて、誰もそんなこと言ってますよ。私はあくまで中立の立場と言ったはずですが? 貴方達が勝手に勘違いをしてただけじゃありませんか」

「そんな……お前、やっぱりこんな神と同じような腐れ女だったのかよ!! ちよつとは良い奴だと思っていたのに!」

「少しでも信用した私達がバカだったわ。どうやら、実力行使しかな

いようね」

ただ、中立的な立場として言うことを聞いてあげただけだというのに、この言われよう。だが、レムギット本人はさほど気にしてはいない様子。

「みんな、ここで終わらせるわよ！」

リアスの号令で、皆は戦闘態勢をディーンに向ける。一方、アザゼルはレムギットの前に立ち、彼女の前に立つ。彼女を足止め、あわよくば倒そうとしているのだろうが、レムギットはその行為に対して薄く笑った。

「私は、鍛錬以外での力の行使は禁じられています。お相手なら、ディーンさんがやってくれるので、そちらに行かれては？ 私は手を出しませんので。気の済むまでどうぞ〜」

「チツ、とことん舐めやがって……!!」

「仕事熱心と言ってくれると嬉しいのですがね」

結局、レムギットは傍観に徹し、アザゼルはイツセイ達と同じくディーンを打ち倒すことに決め、彼の前に立つ。だが、ディーンは多勢に囲まれようとも臆せず、落ち着きを崩さずに構えをとった。

「この神聖なる界王神界で暴れるというのであれば、仕方ありませんね。私がお相手しましょう」

## 第30話 相反する二神の実力

三人称side

第0宇宙の界王神デーンを倒す為に、リアス達はイツセーの力を起点として追い詰めようとする。彼の赤龍帝の籠手の力の一つである力の譲渡を利用し、溜めた力を皆に渡して遠距離から四方八方で攻め始めた。

リアスは滅びの魔力、ソーナは水の魔力、朱乃は雷光など、それぞれが出来る遠距離攻撃を準備し、デーンを囲むように放つことで多種類の攻撃が弾幕が広がって彼に襲いかかる。

だが、どんなに強化されようとも当たらなければ意味がないのだ。デーンは避ける隙間を見つけては避け、見つけては避け、時には攻撃を弾くなど徹底的に攻撃をいなしている。

「実戦は経験が浅くて身体が鈍ってはいますが……これくらいならばウォーミングアップにちょうど良いですね」

破壊神であるブランは、星をも砕く力で圧倒する『力』の戦い方と称するのであれば、界王神は『技』の戦いというのが正解か。相手を砕くのではなく、無力化する為に攻撃をいなし、ダメージを最小限に抑えながら戦うのが基本スタイルだ。

『Boost!Boost!Boost!Boost!』

弾幕が止むと、今度は近接攻撃が得意なイツセーの番。目一杯に籠手で自身の力を強化し、全力でデーンに殴りかかる。

下級悪魔とはいえど、何度も力を倍にした拳が当たれば、少々のダメージにはなるだろう。

だが、それをデーンは難なく掌で受け止めた。

「ぐっ!?!」

「良い攻撃です。武術の心得が全く無い喧嘩の拳ですが、気迫が込められている」

「へっ、褒められても嬉しくねえよ!」

「フツツ、そうですか」

「ッ!笑ってんじゃねえ!」

ニツコリと笑う顔に腹が立ち、足蹴りを繰り返すが、デイーンは素早い反応で拳から手を離し、後ろに下がって躲す。

「ん?」

そこで、デイーンは気づいたことがある。彼らは遠距離攻撃を主体としているのに、その更に後ろに控えているアーシアの姿を。思えば、彼女は攻撃に一切参加していない。

「……なるほど」

納得したかのように呟くデイーン。すると、彼は一瞬ですつと後方にいるアーシアの後ろへと現れた。

「なっ!?!どこに!?!」

瞬間移動。ブランも使う技だが、界王神の使う瞬間移動はまたその上位互換。相手の気を探知しなくとも好きな場所へと移動できる優れた術である。

その術を使い、全く反応出来なかったイツセー達は遅れてアーシアの方向を見て声を上げた。

「アーシア!!」

当然、アーシアも反応できるわけがなく、後ろを振り向こうとする時には既にデイーンが手刀を構えていた。これまで目もくれてなかったアーシアの背後に回ったことに対応出来ず、一番速く移動が出来るイツセーがヘルプに向かう。

「ハッ!」

「うっ!?!」

手刀を使って首を切り落とすかと思えば、ただ首に打っただけであり、アーシアはそのまま気絶した。

「アーシアアアアアッ!!」

「お待ちなさい」

「ッ!?!」

何はともあれアーシアを傷つけたことは許せずデイーンに攻撃をしようといッセーは拳を振りかぶる。そんな彼に向けて、デイーンは掌を向けると、その瞬間イツセーの動きがピタリと止まった。

(な、なんだこれ……身体が動かねえ……!)

デインが何をしたのか分からないが、まるで、金縛りにあったかのように動けなかった。

「……」

その隙に、今度は目を光らせるデイン。すると、気絶したアーシアの身体がフワツと浮き上がり、そのまま飛んで遠くの岩場へと移動させ、そこにゆっくりと彼女を横たわらせる。

「お待たせしました。それでは、続きを行いきましょう」

「……ハッ!?!」

アーシアを置いた後、イツセーの動きが再び動く。何をされたのか全く分からず、彼は素早くデインから距離を取る。

他の者も同様の念を抱いているが、最も気になるのは、何故わざわざアーシアを気絶程度で済ませたのか。彼らにとっては、謎の行動と思わざるを得ず、代表としてアザゼルが問う。

「どうしてアーシアを殺さなかった？絶好のチャンスのみすみす逃して、余裕を気取ってるのか？」

「私は戦えない少女をいたぶる趣味はありません。彼女は、なるべく軽傷で戦闘不能にしたかったのです」

「……それだけか？」

「いいえ。それだけでなく、そもそも私の使命は本来、星を創り見守ることですから。殺生は性分ではありませんし、私自身は人間である貴方達を殺すつもりはありません。界王神界は、謂わば私の家のようなもので、暴れる貴方達に大人しくしてもらう為、正当防衛……抵抗をさせてもらうだけです」

容赦なく殺すと言ったブランとは違い、比較的温厚なデインに対してイツセーは逆に不信感を抱き、顔を引きつらせる。

「や、やりづれえな……」

「イツセー、油断するな！それでもコイツは倒さなきゃならねえ！」

「は、はい！」

（そうだ！こんなヘラヘラしてる奴に負けるわけにはいかねえ！それに、殺されないって分かっているならそれはそれでいい！手加減して余裕ぶっこいてるのに変わりはないんだから、チャンスはいくらでもあ

る！)

アザゼルからの言葉で、再び気を締めるイツセー。そして、構えを直すディーンに対して吠える。

「たとえ、アーシアを見逃してもらったとしてもだ。俺は冥界の為に  
お前を倒す！」

「いいセリフです。感動的です。だが……無意味です」

ヒーローがいいそうなセリフに対して、ニコツと笑いながら返す  
ディーン。

「くらいなさい！」

「雷光よ！」

主に攻撃力に長けたリアスと朱乃は、それぞれ滅びの魔力と雷光を  
駆使してディーンに向けて放つが、それは先程から見ていたので、目  
で見ずとも避けられ続ける。

ならば他の攻撃方法を利用しなければならないのだが、リアスと朱  
乃に関してはこうやって砲台として遠距離からの攻撃しか出来ない  
のでどうにもならない。

「フツ！」

「ききゃっ！」

ディーンは、躲し様にリアスと朱乃を超能力で操り、彼女達を引き  
寄せることで互いの頭を激突させる。

そして、地に落ちた二人の内、朱乃に対して手を向け、衝撃波を放  
つ。気絶させるつもりのもので威力はまあまあといったところ  
だが……。

「はあっ！」

そこに、彼女の父であるバラキエルが光の槍を持って衝撃波を切り  
裂く。なんとか朱乃に当たらずに済んだが、当の本人は不満をぶちま  
けるように非難した。

「ッ！余計なことをしないで！貴方の手なんて借りなくてもいいわ  
!!」

「あ、朱乃……」

「おやおや、親子喧嘩とは……せめてギクシヤクした関係を直してか

「ここに来た方が良かったのでは？」

朱乃とバラキエルの事情は知らぬが、アドバイスっぽいことを言う  
デインは手を上げると、また超能力を発動する。

だが、今度は金縛りのような人の身体を操るものではなく、召喚系  
のようなものか、自身の周りに一つ一つが大きな黒い四角の物体を出  
現させた。

「な、なんだあれは!？」

「第七宇宙のみで産出される『カッチン鋼』と呼ばれる鋼鉄です。当た  
ると痛いですよ?」

カッチン鋼。並ならぬ硬さを持った物質であり、簡単には砕けるこ  
とはない鉄である。デインは、自身が出現させた複数のカッチン鋼  
をイツセー達全員に向けて飛ばした。

「何?!ぐああっ!!」

どのような硬さなのかイメージがつかなかったのか、それぞれが魔  
力をぶついたり、拳で壊そうとしたり、行使する武器で受け止めよう  
としたが、カッチン鋼にぶつけた途端に武器は簡単に折れ、拳は押し  
戻され、魔力弾はかき消されたことで全員が痛い攻撃をくらうこと  
になり、地に叩き落とされた。

あまりの硬さに一発受けただけで大ダメージであり、地に落とされ  
た皆はフラフラの状態で立ち上がる。

「なんだよ……とんでもなくつえーじゃねえかよ!!全然、簡単じゃ  
ねえじゃねえか!!」

「こんなの全然話が違うじゃないか!!」とイツセーは声を荒げ、抗議す  
る。破壊神よりも弱い界王神を倒す算段だったのに、その一つの希望  
すら弄ばれたと思いつい悔しがる彼らの姿を見て、デインは察した。

「……………ああ、成る程、貴方達の目的は私を殺害することでブラン様  
を消すつもりなのですね。…………レムギットさんが教えたのですか?」

「すみませんね。どうしても知りたかったようなので、つい」

「結局、俺達は騙されたってことかよー!」

「いえ、それは違います」

「……………何ですって?」

イツセーの言葉を否定するディーンに、リアスは眉間にシワを寄せ  
る。この後に及んで何を言うのかこの嘘つき共め……と彼女は思っ  
ているのか彼女と同じ思いを持って皆がディーンを睨みつける。

「レムギットさんの言う通り、確かにその方法が手っ取り早いのです。  
彼女は嘘をついていませんよ。実際、私とブラン様では実力に雲泥の  
差がありますから。ただ、私を倒す程の力が貴方達には無かった  
………本当にそれだけのことなのです」

「それって、つまり……じゃあ私達には最初から勝ち目なんてなかつ  
たっていうの!?ふざけないで!」

「ふざけていません。それに、自分の無力さを、他人を使うことで怒り  
をぶつけるのは、流石にやめていただきたいのですがね……それで  
も、考えとしては悪くありませんでしたよ」

「ど、どうすれば……どうすればアイツをやっつけられる……!?!」  
「そ、そうだ!部長!」

一つの可能性に賭けた。そう、自分が禁手を取得したきっかけを思  
い出し、今までとは違うパワーを生み出したのと同じことをしようと  
リアスに提言する。

「な、なにかしらイツセー……?」

「もう一度、部長のおっぱいを突かせてください!」

「………はっ!」

口を開いたかと思えば、とんでもないことを言い出すイツセーに、  
これには界王神だけでなく、レムギットまでもが唾然としてしまい、  
しばらくポカーンと口が開いたまま閉じることが出来なかった。



▽

一方、ブランはというとファルビウムを圧倒していたところにセラフォルーが現れ、二人の魔王を相手する形となっていた。

まるでヒーローの如く遅れて登場してきたセラフォルーであったが、そう都合よく特撮番組のようにならないのが、破壊神という界王神とは比べ物にならない強さの持ち主。

因みにセラフォルーとファルビウムの戦法は至ってシンプル。防御に長けたファルビウムがサポートを主に、攻撃が得意なセラフォルーが前衛に出てブランに対して攻撃を行うものである。

「はあっ!!」

セラフォルーは魔法陣を展開し、そこから次々と氷を纏わせた魔力弾を放っていく。当たれば、その身体の部位が凍らされ動きが制限されるが、ブランはその全ての動きを読んでいるかのように躲している。

動く方が体力は消耗するはずなのに、魔力を使ってるセラフォルーの消耗の方が激しい。しかも、ブランは魔力弾を躲しながらジリジリとセラフォルーに近づきつつあった。

「フッー」

「かはっ!?!」

ある程度近づき、一気に距離を詰めたところで軽く足を上げる。上げた膝がセラフォルーの鳩尾に炸裂し、少し身体が浮き上がったところを頭を指で弾くように当てることでふっとばす。

一応、ファルビウムが自身の魔力を使い、自分だけでなくセラフォルーの身体の周りにも防御膜を張ってはいるのだが、きつちりとダメージを負ってること全く意味を為してないことを証明している。

「どうした。ウォーミングアップくらいはさせてくれよ」

「くっ! だったら!!」

立ち上がるセラフォルーが氷の魔力を使い、城ごとブランを氷漬け

にする。内部は冷気で気温がグッと下がり、並みの人物ならば氷に包まれた時点で意識を失うレベルだろう。

だが、氷漬けにするもののブラン相手ではそれも一瞬であり、彼は自分を中心に気を放つことで氷を粉々にして吹き飛ばした。

その後、たつた一度足踏みをすることで衝撃波を飛ばし、城内に張られた氷を粉碎して舞台を元に戻す。

「そ、そんな……」

流石にここまであっさり突破されるとは思わなかったのか顔が引きつるセラフオルー。

「こいよ。ハゲ頭野郎」

「ッ……だだだだだだだだだだっ!!」

ブランが今度はファルビウムへと視線を向け、挑発気味に指をクイクイと動かすと、普段のめんどくさがりのファルビウムが、似合わない声を上げながら魔弾を両手で次々と放っていく。

煙や埃が大量に舞い上がっていることから確実に被弾していると確信し、全力で攻撃を行うファルビウムだったが……。

「だだだだ——ぐぼあっ?」

魔弾を放っている最中で、いつの間にかブランが懐まで近づいており、鳩尾に拳を叩き込んでいた。拳を受けたファルビウムはふつとばされ、壁に激突して床に伏せる。

「……まあ、こんなものか。大体、実力は分かった。二人いたところで何の面白みもねえから、そろそろ破壊するぞ」

「くっ……!!」

少ない打撃だけで意識を持ってかれそうになるセラフオルーとファルビウム。勿論、なるべく早く殺さないように手加減しているだけなのでその気になれば一瞬で片はつく。

あまりにも期待以下の強さだったので飽きたのかブランはトドメを刺そうと手を二人に向けて破壊を行う準備を始めた。

(よし、完全に油断してる……!今、意識は完全に私達の方に向けてる!!)

だが、破壊をされる前にセラフオルーはチラリとある方向へと目を



「なら、さっさと食べて終わらそうよ。口の中でゆっくり溶かして、小さくなつたところをガリガリ食べてみると、かなり爽快かもね」

あまりの滑稽さに三人は思わず顔が綻ぶ。破壊神を文字通り掌の上で転がし、飴玉にして食べることでハッピーエンド。これほどに爽快な展開となれば、それはもう喜ぶのも無理はない。

しかし、彼はその行いをすぐに後悔することとなる。

「あはは……ねえ、なんか……動いてない?」

「えっ?」

何か嫌な予感がしたのか、笑いをやめたセラフォルに声をかけられ、二人はマグレガーに掴まれている飴玉に目を向ける。見てみると、飴玉を掴んでいる彼の手が徐々に上へと昇っていた。

マグレガー自身、手を動かしたつもりはなかった。というよりも、感覚的には『掴んでいる飴玉が勝手に動いている』もので事態の理解が追いつかない。

呆然としているマグレガー達。しかし、飴玉の動きのせいで腕が十分に奥へと伸びた瞬間……。

ドゴツ!

「ぐあっ!!」

「なっ!?!」

突然、マグレガーの拳が自らの顔を正面から攻撃した。彼は自分で自分を殴ってしまい、痛みで思わず両手を使い顔を覆う。それにより、掴んでいた飴玉を離してしまう。

だが、その飴玉は地には落ちず、フワフワと浮き上がった。

「悪い悪い。だが、残念だったな悪魔共」

「なっ……!?!」

なんと、浮いている飴玉が喋った。声の主は飴玉に変えられた本人のものであり、飴玉に変えられたのに自由に動ける彼を見てマグレガーは頭で理解するより口が先に動いてしまう。

「ぎ、貴様! 何故飴玉になったというのに動ける!?!」

「飴玉にしたくらいで、この俺を止められると思うな。そんなチャチな術が簡単に通じるなら、そもそもお前らは神話勢力に遅れなんて取

らねえだろ。要は力量差に問題があるってことだ」

飴玉になりながらも言うが、破壊神としての威厳は失われ、緊張感も皆無故に話が頭に入ってこない悪魔勢。

「何かが近くにいると思っただが、放っておいた結果がこれだ」

「き、気づいていたの!?!」

「当たり前だ。お前らは自分の気配の隠し方が甘いんだよ。だが、こんなくだらない技の為だったとはな。少々がっかりだぜ」

ブランという名の飴玉は準備運動の為か、ハエのように近くをブンブンと飛び回る。彼にとつてはシャドーボクシングのような動きで慣らし運転をしているつもりなのかもしれないが、なにせ飴玉なので手足がないので、動きとしては、側から見るとただ飛び回っているようにしか見えない。

「よーし、どうやら見た目は変わっても、強さは変わってないようだ」

「ぐぬ……こんな飴玉に……!!」

「作戦が上手く行かなかったから悔しいのか? ならば、どうする? お前らの相手は世界……いや、宇宙一強い飴玉だぞ。相手をするのは構わんが、こんなに小さいと攻撃が当てづらいぜ?」

「……攻撃だど? ハッ、そんなことする必要がどこにある! 貴様を捕まえて口の中に放り込む! ただそれだけのことだ!」

マグレガーは、先ほどまで冷静な体を装っていたものの、ここでの態度を崩してしまふ。見た目が飴玉の者にナメた態度をとられて屈辱感を味わい、思わず頭に血が昇り、このままの状態で戦いを続けるのを受託してしまった。

「そうか……なら遠慮なくいくぜ! そらっ!」

「ツ!?! ゴぼあっ!?!」

その選択はすぐに後悔に至る。まずは飴玉になったブランが、勢いよくマグレガーの腹部に体当たりした。身体がくの字に曲がるほどの衝撃に加え、拳よりも接する面積が狭い為、食い込みが激しい。

「もういつちよ!」

「ぐはあっ!!」

腹部の次は右の頬。フワフワと浮き上がり、その後まるで鉛玉の如

く襲いかかる。蝶のように舞、蜂のように刺すとはまさにこのことか。

「この、止まってよー!」

イライラしながらセラフォルとファルビウムも魔力弾を放つ。まるで、家に入ってきた蚊を退治する必死な輩の構図だが、全く捕まえられず攻撃も当たらない。

それだけでなく攻撃すら避けられず、飴玉にいいように体当たりされて大きくダメージを負うのでどうしようもない。

ブラン自身にとって不便な身体となってしまったものの、それでもスピードは変わらず、セラフォル達はその動きを捉えられないのだ。

だが、その余裕の戦況故か、突如ブランはピタッと、急にセラフォルの目の前に停止する。

「……」

止まったままのブランに対して、セラフォルは睨み付ける。表情が見えなくとも、その顔は余裕綽々な憎たらしい顔をしているのが分かるからだ。

「おいおい、そんなに食べたいか? 人気者は辛いな」

「ッ……こんのおおっ!!」

横から驚掴みしようとするセラフォル。避けられるかと思われたが、案外あっさりとその手に収まった。

「フツ、捕まえ——ガッ!」

そう、捕まえた。しかし、だからといってそのまま手に収まるはずもなく、ブランはマグレガーに掴まれた時と同じように、セラフォルの拳を動かして顔面を自分で殴る形になるようカウンターをたたき込む。

「くらえ! アメイジングラッシュユ!」

「ぐへえっ!?! がはっ!?! ごはあっ!?! げはあっ!?!」

そして、セラフォルの手から逃れ、今度はファルビウムに襲いかかり、ハエのように縦横無尽に飛び回りながらあらゆる部位に体当たりをかます。先程よりも強力な攻撃をしていることでファルビウム

の防御魔法など、もはや意味を為さずに破られていく。

「とつさに閃いた技名だが、中々のものだ。今の感覚を元の身体でも試してみたいぜ。……それで、飴にナメられるってのはどんな気分だ？」

そう、飴だけに。洒落た問いをされたマグレガーは苦虫を潰したような顔で睨む。

「さあ、どうする？このままもつと続けるか？」

「クソツ!!……元に戻れ！」

流石にこのままではまずいと思ったのか、マグレガーが手をかざし、飴玉にされたブランは元に戻った。

「その判断は賢明だ。俺をあのままにしておいたところで意味はない。どうせ、あとでレムに解いてもらえるからな」

「所詮は、悪魔の中で実力があるだけで奉られたハリボテの存在。やはり、この程度の強さか。政治力がないのはともかく、実力も結局は殆ど能力頼り……ホント何の期待も抱けないな」

能力が強いだけで、本人自体は貧弱であることに呆れてため息を吐くブラン。

「お前ら、俺の何百倍も生きていてこれだと話にもならねえぞ。レーティングゲームとかいうお遊びを繰り返して頭がお花畑にでもなったか？」

「……お前がレーティングゲームを侮辱する権利などない！」

「侮辱するさ。あんな出来レース」

「!?!」

出来レース、と言った瞬間、セラフォルとファルビウムの顔が強張る。

レーティングゲームは、一般的には互いの駒を動かし、ルールに沿って競い合う公平なゲームに見える。実力が評価されれば、悪魔としての地位も上がり、上位に順位付けられているチームは悪魔内では有名だ。

見方次第では人間界のスポーツ大会のようなポジションではあるが、実はそんな単純ではない。表面上は公平に見えて、その裏面には

何かが隠されている。それを見透かしているかのような言動にセラフオール達は狼狽えたのだ。

「俺が知らないとでも思ったか。言っただろ。お前らの黒いところはレムによつて既に見せられてるつてな。なんなら公表してもいいぞ。悪魔の駒とレーティングゲーム。アレには一般じゃ知らない『秘密』がある。それは……」

「ツーそれ以上言うな!!」

「おっと。そこまで言われたくないか。だが、果たしてそれもいつまで持つか……隠し事が多いと辛いなあ、おい」

別に公表する義務はないので、茶化すように言うブラン。

「死ねえ外道が!!」

そんなブランの虚を突こうとしたマグレガーの顔は怒りに染まり、遠くからブランに向けて全力の魔力波を放とうとする。

だが、その前にブランが彼に向けて掌を向けると、マグレガーの動きがピタリと止まった。

「ツ!?なんだ、か、身体が動かない!?!」

「俺の気をお前にぶつけて動きを抑制してんだよ」

そう言うのと、開いた手を握り、人差し指と中指を立ててマグレガーに向ける。指を向けられた時、その後の展開を理解するマグレガーの顔が絶望に染まった。

「碎け散れ」

「サ、サーゼク——」

ドガアアアアアアアアン!!

主人の名を呼ぼうとするのすら叶わず、マグレガーの身体は破裂した風船のように爆風と共に肉片が飛び散った。

あまりにも酷かった。はぐれ悪魔が人間を食べる時と同じくらいに、酷い殺し方と思ったセラフオールは顔が真っ青になり、開いた口が塞がらなかった。

「……」

そして、マグレガーを爆殺した後は、残りの二人。まとめて消し去るために、ブランは無言で掌を向ける。



「こ、こんな……こんな惨い殺し方をして何とも思わないの!？」

「何とも思わねえな。殺し方は綺麗な方が好みなのか？お上品なことだ」

「ヒッ！」

今度はセラフオルーとファルビウムの方に手を向けられ、今度は『自分がああなる』と思ったのか戦意を失って悲鳴を上げるセラフオルー。

「さつき、僕達のことを『自分の何百倍も生きてる』と言ったな！どうせお前は僕達と違って長く生きられない!!死んだとしても地獄行きだ!!精々、人を殺す快感を味わい尽くして後悔しながら地獄に落ちるといい!!」

せめてものの抵抗か、声を荒げて言い放つファルビウム。確かに、これまで幾度も星を破壊し人を殺してきたブランの地獄行きは確かだろう。

地獄という場所は悪人を裁く場所であるので、心地の良い場所ではないことはファルビウムでも想像できた。

「フン、くだらん」

だが、そんなことは気にしてないかのように言い返すブラン。戯言ごとまとめて消し去るために、念じた後に破壊のエネルギーを放った。

「ッ！クソがアアアアアアアアッ!!」

「ソ、ソーナ……ちゃ……」

最後にファルビウムは断末魔を上げ、セラフオルーは最愛の妹の名を呟いて紫色の粒子となって散ることでの世を去った。

制限時間はまだ半分以上残っている。そんな中で魔王が二人死に、残りはアジュカとサーゼクスの二人。

「そもそも、地獄行き確定なのは自分がよく分かってんだよ」

初めて、ブランの実力を見る者、先代の實力を見た者など様々な悪魔が存在する冥界で、その圧倒的な實力差を目の当たりにして、多くの悪魔が絶望していくのであった。

### 第31話 滅亡へのカウントダウン

ブラン side

思ったよりあっさりとした蹂躪だ。故に時間も余っていることなので、少し休憩がてら食事をしていた。だが、持参してる食料はなかったのも、現地調達をしなければならぬ。

食料が見つからずに困るかと思えばそうでもなく、ちょうど良い食料は既に見つけていたのだった。

「むぐむぐ……初めての味だが、中々いけるな」

俺は、この地球に来て悪魔は珍味だと知った。焚き火をして、悪魔どもの死体を焼いて食っているのだが、存外その味を気に入ってしまったのだ。

ある程度、腹が満たされたところで残った骨をポイッと捨てると、ふと空を見上げる。

「粗方、悪魔を殺してきたが……やっぱり満たされねえなあ。ただ殺すだけじゃ何の感情もわかねえ……」

大事なものは勝ち負けじゃない。俺が本当にしたいのは蹂躪ではなく戦いなのだ。もっと心躍る戦いをしたいと、サイヤ人としての血が求めている。

現状、同じ破壊神以外でそれが出来るのは、第七宇宙にいた孫悟空とベジータくらいとっている。

……いや、まだいたか。確か、第六宇宙との格闘試合で出場していた殺し屋……アイツも面白そうだった。しかし、奴の能力はかなり厄介だ。孫悟空は持ち前の戦闘センスで対応していたが、俺はどうだか。

オーフィスとティアマットが奴らのレベルに辿り着くには、まだまだ時間がかかるだろう。これからも、ビシバシと稽古をつけてやらねえとな。

「……分かってはいたが、飽きてきたな」

出来るだけ長引かせてチャンスをやらうとここまでかなり手加減してきてやったが、流石にだるくなり始めてきた。能力頼りの見込み

のない奴しかいないし、もうさっさと魔王のところに行くか……。  
「ん？」

油断していて警戒を怠っていたため、誰かが近づいていることに気付くのが遅れた。だが、そいつは不意打ちなどせずに正面からやってきた。大人数の眷属まで引き連れて。

先ほどは有象無象の大群だったが、今度は主人と眷属まとめてご登場ということで、随分と少なく感じた。その主人は随分と筋肉質な男で、見た目でいえば俺に劣らないほどの肉体の持ち主だった。

「俺はサイラオーグ・バアル。俺は、お前との一騎打ちをするためにゲームに参加をした。手合わせを頼みたい」

サイラオーグ……バアル。全く覚えのない名前。だが、バアル家とこののは確か貴族の家系だったはず……。

（「しかし、一騎打ちだと？舐めているのか、それとも実力差が分からないのか。どちらにせよ、無謀に変わりはない。一体何を考えている？」）

「サイラオーグ様！我々も戦います！我々は貴方の眷属なのですよ！」

「……何度も言っているだろう。お前達は下がっている。ここは、俺一人でやる」

「別に全員でもいいぞ。遅かれ早かれ、どうせ死ぬんだ。同じことだろう」

「俺ではお前には勝てない……恐らく、全員束になってかかってもな。だが、せめて俺についてきてくれた者達は、できれば苦しまずに死なせてやりたい。ただ、それだけだ」

眷属達を見ると、怯えて立ち向かう事すら出来無さそうな奴が大体だ。本当は参加したくなかったのだろうが、主人が立ち向かうとしているのに、自分だけ参加しないのは心が許さなかったか。フン、随分と慕われているようだ。

「……そうか。それならそれで、別に構わないぞ」

このゲームに参加するやつは全て叩き潰すつもりでいたが、ここでその願いを断るのは如何なものか。

こいつが眷属が受ける苦しみを全て引き受けると捉えれば、まあいいだろう。

それにしても、最初から勝てないと分かってもなお逃げずに一人で立ち向かうか。別に立ち向かうこと自体は、他の悪魔とも同じだ。しかし、よく見てみると……。

(あの筋肉と全身から放たれるオーラ……先天的なものじゃないな。相当の鍛錬をしてきたのが分かる)

他の悪魔とは違う点はそこだ。魔力ではなく肉体での鍛錬を重点的にしてきたものの身体に、俺は少し驚く。

まさか冥界にこんな奴がいたとはな。強さは期待出来ないだろうが、試してやるか。

「いくぞっ!!」

強めの一步を踏み出したサイラオーグは、一気に俺との距離を詰めてきた。

が、勿論スピードは俺にとつて大したことはない。試しにその拳を受け止める。何度も、何度もだ。

「どうして攻撃してこない!？」

「余計なことを考えるな。殺すつもりでこい」

「ッ！オオオオオオオオオオオッ!!」

「また戦闘力が上がったな。……来い！」

気合を入れた咆哮により、奴の中の気が上昇したのを感じた。気のコントロールを得てはいないが、単純に自分の気を高めることは出来るようだ。

(た、ただ殴っているだけで俺ばかりが疲労していく……! 単なる疲労ではない……このプレッシャー、威圧感!これが破壊神か!! みるみると気力が削がれていく気分だ……!!)

「今度は俺の番だ」

攻撃にキレがなくなってきた。体力の限界が早くも近づいてきたところで、今度は俺が攻撃に入る。奴と同じようにただ、殴る蹴るを繰り返して形勢をあっさり逆転させた。

(くっ、なんて速く重い攻撃……全く見えない故にガードをするのに

精一杯だ!!)

「少しだけ許したが、これ以上お前にはガードさせねえよ」

「ぐあぁっ!？」

空いている隙間に拳を入れ、身体の一部に叩き込むことで体勢が崩れ、そのまま一気に連打。今ので骨が一部砕けたはずだ。

コイツは眷属の分の痛みをまとめて引き受けるつもりだ。ならば、それ相応の痛みは必要。骨だけではない。内臓にもダメージがいくように力を少し入れてやる。

「ガ……ア……」

腕はボロボロ、足の骨は折っていないから立ってはいられるだろうが、戦える状態とはいえないほどにダメージは負ったはずだ。

「お前の拳の威力は、魔王の攻撃に比べれば劣るだろうな。俺を倒すには程遠い」

「くっ、そんなことは分かっている……!」

「だが、重みはある」

「重み……?」

「分かるんだよ。その鍛え上げられた肉体……それは先天的なものじゃねえ。故に放たれる拳には、簡単に言えば『努力の結晶』……って感じか?そういうのが伝わってきた。お前、バアルって言ってたな。聞いていた話では滅びの魔力っていう力を得意とするらしいが……それは使えないのか?」

「……その通りだ。他人はそんな無能な俺を蔑んだ。俺には、この肉体以外に頼れるものがなかった。だから、一人で鍛えるしか道がなかったのだ」

なるほど。能力がない故に別の道を探し、結果強くなることに成功した……か。

「しかし、たとえ実力差が歴然であったとしても、俺は屈しない!!誰にも負けないために強くなろうと誓って鍛えた者が、他人の力に屈しては本末転倒だろう!!」

「……」

正直、かなり驚いた。この冥界で、ここまで勇ましく戦士に出会え

るとは、この時まで俺は思ってもいなかっただ。

ただ残念なことに、コイツは気のコントロールを会得していない。本当の強さを手に入れたいのならば、肉体だけの強化では限度がある。それを分かっていたいけば、サイラオーグ・バアルという悪魔はきつと魔王を超えるほどの実力を手に入れる事が出来た筈だ。少なくとも、幼少期から鍛えていたというのだから、俺が来た時点では一目置くくらいの強さは身についていたかもしれない。

「はあく……もつたいねえな。こんな逸材がいるのに、環境がそれを活かしきれないってのは残酷な話だ」

惜しいぜ。こういう向上心のあるやつは、是非強くなってもらって俺を楽しませて欲しい。

だが、そんな誘いをしたところで蹴られることは、コイツの目を見れば分かる。

「……フツ―」

「ガハツ!!」

これ以上長引かせるのはやめよう。そのつもりで、少し力を入れて奴の鳩尾に拳を叩き込む。膝をつき、なんとか意識を保とうとするサイラオーグ。

そもそも俺はコイツらを殺しにきたのだ。惜しい気持ちを抱えながらも、トドメを刺すために気功波を放つ準備をする。

「これで終わりか……フツ、何も成し遂げられなかったな……」

「ああ、それが結果だ」

自虐気味に笑うサイラオーグ。覚悟を決めたように目を閉じているやつに手のひらにエネルギーを溜める。

「一つだけ……聞かせてくれないだろうか?」

「ん、なんだ?」

「上手くは言えないが、俺はお前がただ破壊を楽しむだけの獣とは思えないのだ。先ほどの言葉で、お前は戦士として人を見る目があると感じた。どうしてお前ほどの強さを持つ者が破壊神という道を選んだのか……そこが気になって仕方がなかったんだ」

「あまりその話はしたくはないが……そうだな……それが先代と交わ

した『契約』の代償だからだ。俺からも一ついいか？」

「ああ……」

「俺はお前のこと、そこまで嫌いじゃないぜ」

「……そうか。……頼む」

少し満足そうな顔をする。何故か怒りや憎しみのようなものは感じられなかった。もう、これ以上語ることはない。終わらせよう。

「サイラオーグ様……！」

「安心しろ。せめてものの慈悲だ。コイツは恐らく天国行き……お前らも同じ場所に送ってやる」

サイラオーグ・バアル……か。なかなかの逸材だった。こんな小さな箱庭で、恐らくただ一人……名前を忘れることはないだろう。眷属の皆に心から慕われているとは、なんだか誰かさんとは大違いだ。

最後の言葉から、奴らを始末するまで時間はかからず、本当に一瞬だった。灰すらも残らず肉体は消えたが、魂までは消えてない。あの世へは無事にいけるだろう。

「なっ、遅かったか……！」

今度は誰だ。次々とやってくるじゃないか。しかも、今度は三人目の魔王か。しかも、更にもう1人……灰色の髪と瞳をした男も一緒にこの場に現れた。

「アジュカ・ベルゼブブだったか。このセリフ、死んだ魔王にも言った覚えあるんだが、お前自分が城を守る王だってこと忘れてんじゃねえのか？それに、そこのお前はレムからの情報で見たような気がするな」

「デイハウザー・ベリアルだ」

「そう、そうだ。お前に関しては少しばかり興味があつたんだ」

「……なに？」

「お前のベリアルって……そういや確か、同族に殺されたクレーリア・ベリアルって奴の関係者じゃねえか？」

「ッ!?ま、待て……ぐぶっ!」

横から何かを喋ろうとしたゴミがいたので、すぐさま瞬間移動で背後に回り込み、後頭部を踏みつけて地に強制的に伏せさせる。

「ク、クレーリアが同族に殺された……?!?!、一体それはどういうことだ!? 詳しく聞かせてくれ!!」

「物凄い動揺だな。まあ、そりゃ知らないか。お前達のことを調べてみたら面白いものが見つかったと思っただけだな。一応覚えておいたんだ。けど、その前にはつきりさせておくことがある。おい、今俺に踏みつけられている魔王。悪魔の駒は、その中でも特に恩恵がデカすぎる駒がある。……だろ?」

「な、なんのことだ……」

「しらばつくれるか。まあいいだろう。王の駒……その恩恵は単なる力の増幅ではあるが、他の駒とは比較にならないほどの強化を施す。カスミみたいな悪魔だろうとそれを使えば、下手すれば魔王並みの力を手に入れることも出来る。レーティングゲームの上位ランカーはそれらを悪用し、八百長や賄賂の不正なんて当たり前。そうして上位ランカー同士のバランスを保っていた。下位のランカーが上位に上がってくるなど全くなかったのはこれが理由だ。

そりゃこんな事実が公になれば、下位で頑張ってきた奴らは自分の努力が無駄だったと嘆くだろうな。最悪の場合、自殺者が出たり、不満を抱える悪魔たちによってクーデターが起きてたかもしれないだから。……なあ、それを最初に作った張本人さんよ」

「そこまで知っていると……!ぐっ……そ、それでも俺はこの駒を少しでも取り除こうと……」

「結果に出なきや意味がないんだよアホが。それに、恩恵なんてものに頼った結果がこのレベルの低さだろ。何がレーティングゲームだ。付け焼き刃を身につけた同士のお遊戯如きで競争して何が楽しいってんだ……よっ!!」

「ぐっふっ!」

いい加減踏みつけるのも疲れるので遠くに蹴っ飛ばす。とりあえず奴の守る城までは飛んだだろう。自陣まで送り返したところで、ベリアルに向き直る。

「俺はどうもあの赤髪の女が嫌いだな。あいつの前任者がどんな管理をしていたか知りたかった。その前任者がクレーリア・ベリアルって



やつだ。そいつは、王の駒という情報を耳にし、その真相へ辿り着こうと奔走していた。

その真相へとたどり着いたクレーリア・ベリアルだったが、その真実が公にならないように、上層部の古臭い思想に取りつかれた悪魔どもと、大王派のトップであるゼクラム・バアル、そして人間と悪魔が結ばれ、なにも起きなければ、聖書の神が存在しないことが証明されてしまう。だから聖書の神の死を隠蔽したかった教会の上層部は共謀して彼女とその恋人である八重垣正臣を……と、ここまで言えば分かるな?」

「彼らが口封じの為に彼女を殺したとでもいうのか!? そんな……バカな……!!」

「デタラメと思うか? だが、辻褄は合うだろう? 実際、そのクレーリア・ベリアルは死の真相を伏せられていたんだからな。こんな内容なら隠すのは当然だ。しかし信じるかどうかはお前次第。俺はどちらでも良いさ」

その言葉の後、デイハウザー・ベリアルは思い出す。クレーリアが殺される前、彼女が王の駒について話を聞いてきたことを。自分自身はそれに対して都市伝説だと思って呑気に対応していた瞬間を。

疑惑が確信に変わったことで、デイハウザーはブランの言葉を信じる他なかった。

「ク、クレーリアは……とても誠実な従姉妹だ。ある教会の者と恋に落ちたと知っても、私は悪魔として間違ってるとは思ったが、その想いを無下にはしたくないと思った。しかし、これではあまりにも……!!」

「だとすればどうする?」

「……感謝する。私は、今何をすべきなのかを理解した」

軽く頭を下げてきたベリアル。内心、同族に裏切られた気がしたのだろう。従姉妹の死だけではなく、王の駒を上位ランカーが使用していたことに対しても、恐らくショックだったのだろうな。

だが、そんな礼を貰いに来たわけでもないし、何より戦意が全く感じられないのを見て、その横を通り過ぎた後に言葉を残しておく。

「戦う気のない奴に興味はねえ。どうせ後で消えることだ。せいぜい、残り少ない余生を無駄にしないことだ」

奴は、俺の言葉に返事をしなかった。ただ、俺から離れて何処かへと向かっていくのであった。

今の会話は中継で冥界全土に映像として流れている。当然、それが起爆剤となったことで下級悪魔に留まらず、多くのレーティングゲームランカーがルシファー領へと乗り込んで説明を求めにやってきた。「上位ランカーが不正をしてたってどういことだよ!!」

「私達の努力はなんだったのよ!!」

「レーティングゲームなんて廃止しろ!!」

結果、今まで数々の不満を抱えていたであろう多くの悪魔が反逆の狼煙を上げ、冥界のあちこちで次々と内戦が始まろうとしていた。



一方、その頃。三大勢力を滅する間、暇をするだろうと思っていたオーフィスとティアマットには、レムギットから予め、ある物を渡されていた。

見た目はただの透明なキューブであり、大人数の人が入ることの出来るものだが、これはただのキューブではなく、他の宇宙も神々も使用している移動型のキューブである。

宇宙空間だけでなく、他の宇宙までも行き来できる優れたものであり、ティアマットとオーフィスはこれを使って宇宙を旅行していた。暇つぶしとして渡された物だったが、ティアマットとオーフィスはこれを使ってあることを考え思いついた。

「これが弟子の特権ってことね。別に何かするなどは言われてないし、有効活用させてもらおうわ」

現在、ブランの元で修行を重ねる彼女達だが、今のまま続けていいのか不安に感じていた。

特にそう感じた瞬間は、第7宇宙にいた悟空とベジータを見たからの方が理由としては大きい。同じように修行をしても、あの2人にはまだまだ追いつけそうにない。サイヤ人としての力を見せつけられたことでオーフィス達の心に火がつき、ある作戦を練った。

「ティアマット、もうすぐ着く」

正直、このままだと師匠であるブランに追いつくまで何年かかるかわからない。もしかすれば何十年も修行して追いつけるかどうかと感じていたティアマット達は、このキューブ型の移動装置を利用し、様々な星を訪ね、調査をして修行に最適な場所を探していた。環境が変われば、何か修行の成果にも変化が起きるかもしれないと思ったからこのような行動に出たのだ。

そして最終的に辿り着いたのが、惑星アモンド。先代の破壊神が住んでいる惑星ナッツと同じように緑が多く、上空から大きな街も多数見かけた。地球に近いような環境とみた。

「よし、いくわよオーフィス」

「がってん」

街へと入ったオーフィス達は、まずは客が多く訪れそうで、客同士の話をよく聞けそうな場所へと足を運ぶ。大抵、レストランやバーなどがいいだろうと思い、手頃な店へと入る。

バー店のマスターとは、よくカウンターに座る客の話の間ごとひっそりと耳を澄ますことがあると思っていたティアマットは、目の前でグラスを磨いているバーのマスターに話しかける。

「こんにちはー」

「あいよ、こんにちは。おや、ここの星の者ではないですね。旅人ですか?」

「私達は地球つて星から来たの。私は破壊神ブランの弟子のティアマット。それと……」

「オーフィス、よろしく」

「な、ななななんです!?破壊神ンンン!?ど、どどうしてこんな辺境

の星に!？」

破壊神の名を聞いた瞬間、グラスを落としそうになるほど動揺して後退りするマスター。どうやら、破壊神の名はどこどころ有名だったようで、思わずティアマツト達も慌ててしまった。

「ああ、怖がらせるつもりはないの!ただ、この星か、または別の星に修行に最適な場所があるかどうか知りたくて色々な星を回っていたのよ。それで、この星から別の星に移住した人から、良い場所があるって聞いたの」

「な、なんだ……そういうことでしたか。それでしたら、うってつけの場所があるので好きに使ってください」

「えっ!?!いいのそんな簡単に使わせちゃって!?!」

「勿論です。なにせ、その『世界』は神への道を進む者の為に作られたものですから。弟子である貴方達が使うのは、当然の権利です」

気になるワードが出てきて頭にハテナマークを浮かべる2人。そんな2人にマスターは詳細を説明する。

「はるか大昔、それはもう何千年も何万年も前の話です。我々の先祖達は、長い年月をかけて試行錯誤の末、ある秘術を編み出した。その術はこの世界とそっくりな世界を創り上げ、それをこの世界と繋ぐための出入り口を生み出しました」

「それが神の道を進む為になんの関係が?」

「ええ、世界を二つにして修行したところで、本来なら変化はありません。それから更に年月を重ねることで、もう一つの世界に細工を施すことに成功しました。その世界での時間の進む早さを表の世界より遅くしたのです」

「えっと、つまり?」

「具体的に言いますと、こちらの世界での1日は、裏の世界では1年の時間が経つという計算になります」

「1年!?!」

1年もあれば、相当な修行量をこなせる。そんな魅力的な話にオーフィスとティアマツトは目をキラキラと輝かせていた。

「それだけではありません。重力だってこの地の何倍もあり、気のこ

ントロールを極める為に環境を厳しいものへと変えることだって可能としました」

「どうしてそこまでする？ そんなに神になりたかった？」

「なりたかったのではありません。ならなくてはいけなかったのです」

神にならなければならない理由。自分達にとつては想像もつかない話が聞けそうで興味津々になるティアマツトとオーフィスだった。「破壊神の弟子ならば、宇宙の人間レベルの定義についてはご存知ですよね。この星が誕生して動く知的生命体が活動を始めた頃の話ですが……当然ながら『秩序』というものが存在せず、縄張り争いばかりが起きて生態系の衰退が危惧されていたのです」

そこから先は少し長い昔話が始まる。

人間レベルが低下し続けることを危惧した人々は話し合うことを決めた。野生の獣とは違い、考えて行動が出来ると思つくと、まずは国を作り法律などの決め事を作ることから始めようとした。

国とは何か。どうやって出来るのか。始めての国作りは想像を超えるほど難儀しただろう。国を作るといつても、統率出来る者がいなければ国は成り立たない。それどころか、昔はその土地すら無く荒れた地が殆どだった。何から始めれば良いのか検討もつかない。

そこで、1人の男が神となり、星の者達を統率することを考えた。神になる候補者として推薦された男は、その世界で過酷な修行を繰り返し、気のコントロールを極めることで戦闘力を急激に上げていく。その男は荒れた土地をその力で平地へと変え、山を削り、地を抉り、木々を伐採し、国を建てるのに最適な土地を創り上げた。

岩を砕き、伐採した木材を利用して建物の建設にも貢献し、深く地中に眠っている金属や鉱石を軽々と掘り上げた。やがて人はその男を本当の神様のように讃え、今でも伝説のように語り継がれているらしい。

「へえ……そんな歴史があったのね。そういえば、その神となった人は今どこに？」

「その神様は宇宙のどこかへ旅立ったと伝えられています。今どこに

いるのかは私達にも分かりません」

「そっか……。でも、良い話が聞けた。ありがとね。その修行場所、大事に使わせてもらおうわ」

「ししよー帰ってくるまで、我達はもつと強くなる」

オーフィス達はアモンド星人に、その世界の入り口まで案内してもらったのであった。

### 第32話 決着

ブランは、サーゼクスのいる城へと辿り着く。そこには今までよりも悪魔の数も多く、残りの彼の眷属も揃っていた。

それだけでなく、先程ブランにふつとばされていたアジュカも合流しており、サーゼクス同様ブランを待ち構えていた。

「体感では短くて退屈なゲームだったが、それもお前らを消して終わりだな。……ん？」

妙な気配を感じ取ったブランは気を探って正体を見つけようとする。今まで相手にしてきた者とは全く違うものだと感じた。

その瞬間、上空から雷が落ちてきたが、あっさりと躲す。ただの自然現象とは思えず、誰かの仕業だと察し、見上げると空から天使の翼を携えた人間らしき人物が降りてきた。

「雷の攻撃を避けるか。凄いスピードと反射神経だね」

「誰だお前、どう見ても悪魔じゃないな」

「僕はデュリオ・ジェズアルド。転生天使ってやつさ。いやあ、悪いねえ。でも、僕達三大勢力の存続の危機なんだから、参加する権利はあるはずだよ？君はこの宇宙のルールを押し付けてきたんだ。それなら僕達が決めたルールの一つや二つ受け入れるくらいの器があつていいと思うね」

デュリオ・ジェズアルド。天界のジョーカーといえる名高い実力者。おまけに天候を操れるという神滅具……煌<sup>ゼニス・テンペスト</sup>天雷獄の持ち主。実力は天界のNo.2である。

「ハッ、なるほど。言ってくれるじゃねえか。確かに参加してはいけないなんて俺は言っていない。いいぜ……かかってくる。だが、一番最初の俺にだけ効果のある重力増加を含めて、これ以上ルール追加されて好き勝手されるのは最早ゲームとはいえねえだろ。この先誰が参戦しても構わないが、それ以上のズルはもう受け入れる気はないぞ」

デュリオはその言葉を待っていたかのように、フツと笑うと周りに魔法陣が展開され、そこから更に天使と墮天使の大群が現れる。四大熾天使、墮天使幹部、上級悪魔、最上級悪魔。

明らかに狙っていたかのような戦力の詰め込み具合であり、ここで決着をつけようとしているのが丸わかりだった。故に、ブランは三大勢力の狙いについても察しがついている様子だ。

「かかれ!!」

今までは兵の数が段違いに増えており、それら大半がブランに攻撃を仕掛ける。

しかし光の槍、魔力弾、光弾、三大勢力の攻撃を四方八方から放たれても、しなやかにそれを避ける。近距離において下級悪魔、中級悪魔の大群が一斉に襲いかかるものの、その悉くを捌かれてブランに一撃で葬られた。

「そこだー!」

当てるには、まず動きを封じなければならぬ。デュリオは攻撃の連続に混ぜるように、ブランの中心に竜巻を発生させる。これにより一時的に行動を制限するつもりようだ。

しかし……

「フウツ」

「えっ……っ?」

(た、竜巻を……息で……!?)

デュリオは、何が起きたか分からず一瞬硬直してしまう。見間違えでなければ、ブランはデュリオの竜巻を口から出した息で掻き消した。こんな対処などされたこともないので、動揺してしまうのも無理はない。

「そらっ!」

その後の全方位から放たれた遠距離攻撃は、薙ぎ払うように気弾を飛ばして相殺。三大勢力は攻撃を休めることなく、兎に角ブランを追い詰めようとし、今度は四大熾天使が背後から襲い掛かる。ブランにとっては完全に死角からの攻撃だ。

「なっ!?!」

攻撃しようとした瞬間、高速で背後に回り込まれてウリエルの頭を鷲掴みにされ、そのまま頭蓋骨を砕かれる。1人殺した後、今度は四大熾天使の一人、ガブリエルを指で指し、マグレガーにやったように



爆殺。それにもっとも近いところにいたラファエルは爆発に巻き込まれ、天使の翼と身体が焼かれて死亡した。

「な、ああ……!?!」

あまりに一瞬すぎて頭が追いつかないミカエル。感じたのは恐怖のみ。そして、相対して漸く気づく。この男には絶対勝てないと。そう思った瞬間、ブランの気弾によって消し飛ばされ、この世を去った。「ハッ……ああ、あッッ……!?!」

自分の攻撃を思わぬ回避方法で対処されたことで一瞬動揺していたデュリオ。しかし、その一瞬で四大熾天使は死亡。気づいた時には仕える主がいなくなり、呆然としてしまう。

「デュリオ！避けるオツ!!」

「ッ……ガッ……!?!」

アジュカの叫びは既に遅かった。熾天使を殺したブランは即座にデュリオの背後に回り込み、気で作り上げた剣で心臓を一突き。そのまま引き抜くと蹴り上げて遙か上空へと飛ばす。

「雑魚を使つて疲れさせたところに総攻撃を叩き込み、時間切れで勝つ魂胆だろうが、簡単に出来ると思うな。もうお前らの実力は理解した。これ以上長引かせる意味は無い……さっさと終わらせてやる」

致命傷を受けたデュリオよりも速く上昇し、先回りしたところで顔面に拳を叩き込む。叫びすら上げない……いや、上げることすら出来ないくらい顔を歪められたデュリオは地面に堕ちたときには首から上が存在していなかった。

「ジ、ジョーカーが……!!」

「実力者が揃っている上で、この万の数ある兵をこうもあっさりと……！化け物め……!!」

先ほどとは打って変わって、次第に兵の士気は下がっていく。一方的な蹂躪に何も出来ず無惨に命を散らしていく三大勢力は、絶望へのレールを走らされている気分が変わっていった。

ブランの攻撃はその者の肉を抉り、骨を砕き、切り刻む。攻撃の一つ一つが致命傷となり、あっという間に兵は激滅。残るはサーゼクス、アジュカ、グレイファイア。しかしゲーム終了まで時間もまだある。

時間切れ勝ちを狙うことは難しくなった。

「くっ、先ほどから俺の覇軍カンカラー・フォーミュラの方程式が通用しない……!!こんなことは初めてだ……!!」

アジユカの力は、実はサーゼクスより危険と言われていたりする。彼の覇軍の方程式という力は、あらゆる事象を自身が構築した数式を使って操ることが可能であり、その力で敵の攻撃を操り、その攻撃の種類や形式の変更なども出来る。その汎用性の高さから、同じ超越者であり攻撃力に特化したサーゼクスと比べられることは多い。

「さつきから後方で俺の攻撃に何かしようとしてらしいが、お前ごときが俺をどうにか出来ると思うな。身の程を知れ」

圧倒的な力を持ち、自身の気のコントロールを熟知しているブランがそれに操られるわけもなく、

サーゼクス、アジユカの能力は効果範囲の問題で集団戦では動きが制限される。味方をも巻き込みかねないので、先程まではなるべくサポートに回って、必要に応じて攻撃を仕掛けていた。

当然の事ながら、悪魔というのは殆どが能力頼りで、サーゼクスもアジユカも近距離より、能力による遠距離攻撃が主戦力。兵の大群を相手にしながらも、サーゼクス達超越者や、その他の実力者の攻撃をかわし続けているブランにはダメージがなく、サーゼクス達にとつては只魔力を消費しているだけでジリ貧である。

これまで魔力を温存していたサーゼクスやアジユカ、そしてグレイフィアは消耗したブランを一気に叩くつもりでいた。

それは難しいと判断したサーゼクスは2人に提案する。

「グレイフィア、アジユカ、私の援護を頼む。最高まで溜めた滅びの魔力で……」

自身の魔力を全開放し、消滅させる。兵もいないこの状況なら使用できると考えた結果であり、準備に取り掛かろうとした。

しかし、そこまで言葉を発した瞬間、サーゼクスの後ろで何かが爆発する音が響いた。

「……は？」

サーゼクスは、背後を振り向くのを恐れた。だが、見なければなら

なかった。戦っている以上、場の状況を知らなければならなかった。「さっさと終わらせると言っただろう?」

故に、確認をおこなった。そこには、既に愛する妻は存在しなかった。マグレガーやガブリエルにやったような気による爆発で内部から壊されて、チリ一つさえも残らずグレイフィアはこの世から去ってしまう。一瞬で彼女を死に追いやった犯人は明白だが、数秒の間は頭が追いつかずに呆然としてしまったサーゼクス。その後、ブランに目をやると、普段のサーゼクスが見せないような物凄い怒気に満ちた顔で睨みつけた。

「どうした?こんなんじや遊び相手にもならないぞ。もっとやる気を出せよ」

「くそおつ……クソオツ!!」

覇軍の方程式により、特大の威力に変換させた魔力弾の数々をぶつけるアジュカだが、全く効かない。どれだけ威力を上げられるかは、恐らくアジュカの魔力次第といったところだが、たとえ威力のみに特化させたとしてもブランとの間には圧倒的な差がありすぎる。

「ぐっ!?!」

ブランはアジュカに急接近すると、彼の魔法陣をかき消し、数発の打撃を叩き込む。そして、最後は手刀で心臓の位置を貫く。

打撃により身体の至る所が壊れる。骨も内臓もやられ、更には自分の胸にはポツカリと穴が開いていることに気づく。ブランの手には、既に彼の心臓が置かれていた。その抜かれた心臓を返せ、返せと言いたげにアジュカは手を伸ばしてしまう。

取り戻したところでもはや助からない命と分かっているはずなのに、ここに来て殺される恐怖が最高潮になったことで現実を受け止められない程に絶望してしまったのだ。

ブランがアジュカの心臓をグシャリと握り潰したと同時に彼の目には光が無くなり、そのまま倒れて動かなくなった。

妻、友人が一瞬にして死んだ。他の悪魔も墮天使も、天使さえも一瞬だった。これほど多くの命を奪った者は見たことがない。三大勢力の戦争の時さえも、これほどの者はいなかった。

「この、悪魔め……!!」

「新しいジョークか？お前だろう、それは」

誰一人味方がいない中、サーゼクスは己の力の全てを解放する。自身の滅びの魔力を纏い、それらを全て放出することで人の形を失う。まさに今の姿は化身といってもいいだろう。

サーゼクス自身、この力はあまり好きではない。使えば周りを巻き込んでしまう。故に今までは手加減をしていた。レーティングゲームでは特にだ。下手すれば相手を殺してしまう。

だが、そんな遠慮をする必要のない相手が目の前にいる。怒りと憎悪もあって、いつもより滅びの魔力がドス黒く見えるほどに、サーゼクスは激昂していた。

「いくらお前でも、これを生身で喰らえばタダではすまない!!」

放出している滅びの魔力に触れた辺りの物質が消滅していく。今までの悪魔とは段違いの破壊力を持った攻撃に間違いはない。その力を持って、サーゼクスはブランに襲い掛かり、身体全体を滅びの魔力で包み込み、飲み込んだ。

「——淡い」

「ッ!？」

結果は、無意味だった。たとえその力を最初に使ったとしても結末は変わらなかつただろう。

「フツ…だりゃああつ!!」

「グアアウツ!？」

ブランは気合で衝撃波を発生させ、纏わりつく滅びの魔力を弾き飛ばす。飛ばされたサーゼクスは元の姿に戻ってしまう。滅びの魔力をまともに受けたブランだが、傷の一つもなくピンピンしていた。

「お前のそれは、俺の破壊エネルギーの完全下位互換に過ぎない。俺は他の破壊神の破壊エネルギーに耐えるほどの力がある。だからお前は俺に絶対勝てないということだ」

「はあ……はあ……！ヌウアアアツ!!」

認められない。認めたくなかった。こんな野蛮で人の命をなんとも思わないクスには負けるわけにはいかない、サーゼクスは再び滅

びの魔力を纏う。

「人を救う為に動く我々が何故消されなければならない!! 平和を乱すオマエが何故のうのうと生きているツ!! 人の住処に土足で踏み込み、嘲笑うかのように蹂躪スル!! そんなオマエの行いがタダシイハズガナイ!!」

他人の命をモテアソビ、吐き捨てるように散らす!! 世界に不必要なのは、オマエのソンザイダ!! コンナコトガユルサレルハズガナイツツ!!」

「……………」

滅びの魔力の影響で、触れている地面さえも消していくサーゼクス。普通の者ならば、触れずとも近づくだけで灰と化す威力だが、破壊神に通用するはずもなく、ブランは向かってくるサーゼクスをギリギリまで引き寄せ…………。

「ガツ…………!?!」

その頭を掴み、地面に叩きつけた。強制的に伏せられたサーゼクスは身動きが取れない。

「平和? 救う? 笑わせるな。お前らは自分達にとって都合の良い駒が欲しかっただけだろ。それを世界の為だとか人間の為だとか、良いような言葉使ってエゴを押し付けやがって。ただの悪党よりタチが悪い」

悪魔の駒、神器システム、人間に対する様々な実験による悲惨な末路。他にも様々な問題はあつた。サーゼクスが直接関わっていないなくとも、一組織のトップとして果たすべき責任があるはずだ。

だが、力の象徴として奉られている彼がやっていることといえば、家族…主に妹を甘やかす、レーティングゲームという娯楽に浸る。甘さが仇となり、旧魔王派を生み出した原因でもある。

力があつても性格は魔王…正確には支配者には向いていない。それがサーゼクス・ルシファーという男だつた。

「ただ、今回の魔王としての手腕は少々褒めてやってもいい。お前が考えたかどうかは知らんが、雑魚を使って後から総力を上げて俺を仕留めようとし、時間切れ勝ちを狙つたのは正しい判断だ。犠牲無くし

て勝利はない。大義のためには多少の犠牲もやむを得ない。その決断に至り、実行したお前の意志は認めてやろう」

「ウガアアアアアアアアアアツ!!!破壊神……キサマだけは……キサマだけはアアアアアアアアアアツ!!!」

「だが、いい加減耳障りだ。……消えろ」

そんな彼にブランはせめてものの褒め言葉を授けたが、もはや聞く耳持たないサーゼクス。怒り狂った魔王を押しさえつけながら、その掌から気を放出した。

サーゼクスを始末するのみならず、その衝撃でゲーム会場となっていたこの大地を丸々破壊することで、全ての城を崩落させた。

これにてゲームは終了。勝利者は破壊神ブラン。即ち、冥界全々と三大勢力の破壊、そして滅亡が決定した瞬間であった。



ここは冥界の端にある小さな駅。人間界へ行くための列車が配置されており、そこには複数の悪魔が列車の中へと入ろうとしていた。

最後に中へと入ろうとする男の名はゼクラム・バアル。バアル家の初代当主であり、クレーリア殺害の事件に大きく関わっている。彼はゲームの観戦の中、破壊神の言葉を聞いたことで身に降りかかる危険を感じ取って、即座に冥界から逃げ出そうとしていたのだ。

悪魔はまだ立て直せる。信用出来、なおかつ権力のある貴族を連れて、ほとぼりが冷めたらの上がる為に動く。最終的には旧魔王派と組んでも仕方が無いと考えていたゼクラムは列車に乗り、発車の準備を待っていた。

「どこへ行くんだ?」

「!?」

そこに現れたのは、ゲームから離脱してきたデイハウザー・ベリアルだった。

「デ、デイハウザー殿!？」

「ゼクラム・バアル。やはり貴方も一緒に来たか」

1番来て欲しくない人物が現れたと、表情に出てしまうゼクラム。その様子に対してデイハウザーは怒りの表情へと変わる。

「貴方が上層部の方と共にいる時点で、破壊神の言ったことは真実だと言っているようなものだ。……よくもクレーリアを……ハアツ!!」  
「ぐう……!？」

乗りかけていたゼクラムに魔力弾をぶつけ、後方にふっ飛ばすことで車内の壁にぶつかるとゼクラムは力無くへたり込む。追撃をお見舞いしてやろうと掌を向けたデイハウザーだが、ゼクラムは待ったをかけた。

「ま、待て! 私達はお前や冥界の者を助けてやろうとしたただけだ! その為の避難の準備をしてたんだ!!」

「少人数用の列車でか?」

もはや語るまでもない。デイハウザーは自身の魔力を腕の形へと変え、それを操る。ティツシュを丸めるように列車を無理矢理力で締めていく。

「ギヤアアアツ!!」

「潰れる……潰れるウウウウツ!!」

「やめてくれええええええつ!!」

中にいる上層部もゼクラムも身体が圧迫され、息も出来ずに潰されていく。抵抗できる力もすぐに失われていった。

「お、同じ悪魔に殺されるとは……これも悪魔の運命かア……ア……!？」

「ヌウウ……ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

怒りを力に変え、デイハウザーは列車を冥界と人間界を繋ぐ空間ともいえる次元の狭間に思いつき放り投げた。潰れた列車もろともゼクラムと上層部の悪魔はその空間を彷徨うこととなる。もちろん、レールから外れているためそこから自力で出ることは叶わない。

「こんなことは……もう繰り返すべきではない。せめて冥界の最期は

……この目で見守ろう」

これは復讐であり、あくまで贖罪の一つ。自身もその罪を背負おうと、亡き従姉妹のクレーリアに懺悔しながら、その場に座るデイハウザーは目を閉じてその時を待つのであった。



### 第33話 道化の末路

▽

『おっぱいを突かせてください』

そんなワードが地球人の口から出る事など、ディーンが予想出来るはずもなかった。しかも、それが戦闘の最中であれば尚更のことだ。

イツセーがその言葉を放った際、ディーンとレムギットは困惑でそのまま固まってしまふ。

勿論、『抵抗するなら存分にやらせよう』と一応決めていたので、そのパワーアップを待つのは別にいい。

が、仮にも自分の世界の危機を救う戦いであるというのに、こんなおふぎけでパワーアップする気があるのは正気の沙汰ではないと心の中で思った。そして、その頼みを承諾したりアスもリアスで頭がおかしいと思うしかなかった。

もう、なんだか見るのが嫌だった。言葉で表すことも嫌になるほど気持ち悪かった。「いったい何を見せられてるんだ」と思ったディーンは、何故か分からないが界王神として生きてきて初めて恥を感じたような気分になった。

結果、煩惱が進化へと至らせ、イツセーは新たな力を得ることが出来た。禁手によって纏われている鎧にも少し変化が見られ、魔力の増幅も確認出来た。

それは結構なことだが、パワーアップの仕方があまりにも下品で見られないからか、ディーンは苦虫を噛み潰したような顔になっていた。

「頭が痛いですね……。レムギットさん、私…早く帰りたいのですが。正直もう相手にしたくないと思ってきましたよ」

呆れ顔でレムギットに提言するディーンだが、レムギットはまるで最初から何も見ていないとでも言うようにコーヒーを無言で飲んでそっぽを向いていた。

「コーヒー飲みながらシカトしないでくださいよ……はあ……」

どうやらレムギットも同じ気持ちのようだ。

デインは諦めて、『しようがない』と言った後、一息吐く。

「こっからが本番だ!! 覚悟しろよモヒカン野郎ツ!!」

「攻撃する前にセリフを吐く余裕が出来て良かったですね〜」

「言つてろー!」

余裕綽々のデインに対し、イツセーは一気に距離を詰める。

「おや?」

先程よりもスピードが上がったことに、少し驚きの声をあげたデイン。暫くその場を動かず、攻撃を待った。

油断しているデインの背後に回り込んだイツセーは、拳を彼の背中に叩き込む。

しかし、それを黙って受けるデインではなく、掌でそれを受け止めようとする。

「くっ……!」

(ツッ! いける!!)

今度はさつきと違って受け流せないのか、ガードしきれていない様子だった。イツセーは、それを見逃さなかった。

「まだまだアツ!!」

イリール・ガル・ムーブ・トリアイナ 赤龍帝の三叉成駒。イツセーが先程の進化で得たその力は、駒の昇格

により、力の特化が可能となった。

今使っているのは、ウエルシュ・ドラゴニック・ルーク 龍剛の戦車という打撃と防御に特化した

形態であり、先程までの禁手とは比べ物にならないくらいの打撃力が備わっている。

「オラアツ!」

「ぐうっ!」

ようやく、イツセーの攻撃がまともに入る。腹部にダメージを受けたデインは苦痛に顔を歪めた。

「まだまだ! ドラゴンショットオオオツ!!」

今度は籠手から極太のビームを放った。エネルギーの奔流に吞まれてデインは身動きが取れなくなる。

「ごはっ!? ガハッ!」

反撃も許さない怒涛の殴打。更には神器の能力により、どんどん力を倍化させていくイツセーのパワーは凄まじく、デイーンはなす術もないまま攻撃をくらい続けてしまう。

「これが沢山の人の命を奪った報いだ!! くらいいやがれエエエエエエツ!!」

「ぐああああああつ!!」

十分に痛めつけた後、渾身の一発を腹部に叩き込み、遠くの岩山へとふっ飛ばした。その勢いで岩山は瓦礫となって崩れ落ち、デイーンは瓦礫の下敷きとなった。

「やった!! やったわ!!」

「胸を貸した甲斐があったわね……流石イツセーよ。これで、私達の勝利ね!」

イツセーの覚醒により、いつもの形勢逆転が成功した。このいつものパターンを見てリアス達は歓喜に満ち震えて声を上げた。

「か、会長……終わっただんですよね……? 兵藤がやってくれたんですよ!!」

「ええ、そうよ……彼には本当に感謝しきれないわ……イツセー君は英雄よ」

……ここでトドメを刺せば、冥界に平和が訪れる。そう思った瞬間……。

「えー、みなさーん。お知らせです」

突然、レムギットが杖を持ちながら呼びかけてきた。すると、その口から衝撃の事実が放たれる。

「つい先程、四大魔王が死亡しました。1人残らず」

その事実に対し、驚愕のあまり、リアス達は冷や汗までも身体から出た。他にもブランが既に四大魔王以外にも多くの悪魔を殺した事を知らされると、先程までの歓喜を忘れる程に動揺した。

「お兄様達が! 嘘よ!! 不利になったからって、デタラメを言ってるだけよ!!」

「デタラメかどうか、これを見てから言っってはどうですか?」

レムギットは杖の力で、ゲームの映像を空に映し出して皆に見せつ

ける。

そこには、セラフオール達が死にゆく様や、アジユカが心臓を抜き取られたりなど、残虐な光景が映っており、皆はそれを嘘だと幻だと信じたくなかった。

だが、その映像があまりにもリアルで作り話ではないとも思わせられたことで更に混乱していった。

「お、お姉様まで……!? そ、そんな……」

「か、会長!! しっかり!!」

セラフオールの妹であるソーナは、ショックで倒れそうになり、匙がそれを支えた。

「これは全て現実です。冥界に帰ればすぐに分かることですよ」

「くそがあ!! テメエらああつ!! 簡単に命を奪いやがって! 今度は部長達の家族までも……どこまで腐ってやがんだ!!」

何度も、何度も自分達の大切なものを傷付け、更には殺戮の限りを尽くすブラン達に怒りが収まらないイツセーは、次にレムギットに狙いを定めて殴りかかる。

地面に叩きつけるように殴ったことで砂埃が舞う。拳が地面に突き刺さったイツセーは、そこには既にレムギットがいないことに気づく。

「はあ……はあ……!!」

「遅いですねえ」

「くっ……!!」

パワーアップしたのに、いとも容易く避けられた。あまりの手応えの無さに、当たったとは思っていなかったが、それでもイツセーは悔しそうにレムギットを睨む。

「おい……いつらを冥界に連れて行け!! 今すぐにだ!!」

まさか、こうも早く四大魔王が死ぬとは思っていなかったもので、アザベルは焦っていた。本当はそうなる前に界王神を仕留めるつもりでいたが、こうなっては話が変わってくる。

「あっちこっちに連れてけなんてワガママですねえ。でも、私は中立な立場なのでそれくらいは許しますよ」

「アザゼル先生、いいんですか!?ここで俺も残って……!!」

「心配すんな。俺が界王神にトドメを刺しておく。お前は一刻も早く冥界に戻って、その新しい力で残ってる奴らを助けるんだ」

アザゼルはイツセーに託す。そしてイツセーも、アザゼルがオカルト研究部の顧問として、自分らを鍛えてくれたのを思い出し、いつにも増して頼もしいと感じた。墮天使総督としての力を信じているからか、彼らはここをアザゼルに任せることに決めた。

「……分かりました。後で必ず迎えに戻ってきます!!」

やれやれ、とレムギツトは少し呆れながらも、アザゼル以外の者を連れて界王神界を出ていった。

それを確認したアザゼルは、先程ディーンがふっ飛ばされた所へと向かおうとする。

「さーて、動けないところをさっさと始末するか。チャンスは今しかねえからな」

「何がチャンスですって?」  
「なっ!?!」

背後から突如聞こえた返事にビククリして、アザゼルは振り向き様に後退して距離を取る。

信じたくなかった。何故なら、目の前には先程イツセーの攻撃をまともに受けたディーンが何事もなかったかのようにそこに立っていたのだから。

「やれやれ、死んだフリをしてさっさと帰ってもらおうとしたのですが……そう上手くいきませんか」

「ふ、ふざけんな……あれだけの攻撃でピンピンしてやがるだ?!?イツセーは相当なパワーアップをしたはずだ!俺の予想を遥かに超えるほどの凄まじいパワーがあったはず……!!」

「ああ……確かに地球人としては、中々のパワーでした。いくら弱くても何倍にもパワーを上げれば、いつかは傷をつけられるでしょう。ですが、今この結果が私達と貴方達の差を証明しているということですよ。いい加減、お分かりになりましたか?」

「演技だったってことかよ……どこまでもバカにしやがって……!!」

「その通り。さて、殺すつもりはなかったのですが、ここに残ってしまつた以上、貴方は私が始末をつけるしかなさそうですね」

「させるか!!」

アザゼルが、デイーンに近づこうと一歩前に踏み出した時、既にデイーンはアザゼルの目の前まで迫ってきていた。

「遅い」

「ツー」

あまりの速さに反応が遅れたアザゼルの心臓の位置辺りに手を置き、力を込める。そして、そのまま力強く押すことで衝撃を与えた。

「ガツ……!?!」

心臓への直接的な衝撃を与えられたことにより、アザゼルは心肺停止にまで追い込まれ、息をすることもままならなくなり、膝から崩れ落ちると同時に命を落とした。

血を流すことなく事を終わらせたデイーンは、手をパツパツと払うと、疲れ気味になりながらゆっくりと自分の宮殿へと戻っていった。

「こちらの役目は終わりました。さて、後はブラン様にお任せして、私は他の星の観察でもしましょうかね」



「ここも、もう終わりだな……」

ゲームエリアから出たブランは、彼にとつても意外な事態が外で起こっていた。

「今までの恨みだ!!死ねえツ!!」

「貴様ら下級悪魔は黙って我に従っていればいいのだ!!」

あらゆる所で主人と眷属との争いが起こっている。不当な扱いを今まで受けてきたことで、積もりに積もった怒り、悲しみ、恨みが爆発し、反乱を起こしたのだと理解した。

それだけではない。

「我らの救世主、破壊神が魔王を打ち倒した！我らは救われたのだ!!」

「今こそ喝采を!!」

ある所では歓喜が。

「ああ、もう終わりなんだ……」

ある所では自害。

「死ね!!死ね!!死ねエエエエエエツ!!ヒヤハハハハハツ!!」

また、ある所では憧れを抱いたからか、ブランのように破壊と殺戮の限りを尽くすものまで現れた。

いつの間にか崇められる存在にまでなっていたのが、実はブランにとって1番の驚きだった。

「フン」

崇めようがどの道死ぬのだから、別にどうでもいいのだが……と心の中でそう言う。

「一体、どうなってるのよこれは……!!どうして、冥界がこんな滅茶苦茶に!?!」

「ん?おお、戻ってきたか」

ブランが後ろを振り向くと、そこにはレムギットとリアス達が共にいた。

「レム……俺に内緒で随分と好き勝手したようだな」

「あらあら、バレちゃいましたか」

「俺に恨みがあるそいつらがゲームにいない時点だな。まあ、この程度の奴らにディーンが負けるわけないから心配はしてなかったが」

「ハッ、残念だったな!界王神は結構痛めつけておいた!あとはアザゼル先生がやってくれてるぜ!!」

「ほう?界王神になら勝てると思ってたのか。それなら、何で俺は生きてるんだ?」

「……あつ……」

そういえば、とイツセー達は気づく。もし界王神が死んでいれば、ここにブランは居ないはず。ということは、まだ界王神は死んでいない。アザゼルはまだトドメを刺せていないということの意味していた。

「マヌケどもが。何をやったかは知らんが、お前の攻撃はデインには通用しなかった。残っついていようがまいが、結果は同じだった筈だ」

「だ、だとしても関係ねえ!!こつからは俺達が冥界を守ればいい!!」

「ええ、イツセーの言う通りよ。よくもお兄様達を……!!」

「しかも、こんなに冥界を滅茶苦茶にしやがって!!絶対にぶっ殺してやる!!」

何度も何度も外的外れな言いがかりをつけられ、良い加減このやり取りも飽きてきたブランだが、これに関しては言っておかなければならない。悪魔の愚かさを証明するためにも。

「はあ……お前ら、何か勘違いしてねえか?」

「何ッ!?」

「俺が自ら手を下したのは、ゲームの参加者のみ。今日にしているこの惨状は、お前ら悪魔どもが勝手に争った結果だ。まあ、確かにキツカケは俺だろうがな」

ブランが散々冥界の黒い歴史を暴いたことで、様々な悪魔が怒り、反乱を起こした。それ即ち、これは悪魔自身が招いた結果に他ならない。

しかし、それを簡単に認めようとしなのがイツセー達だ。

「ぎっけんじゃねえ!!変な言い訳で言い逃れしようとしてんじゃねえぞ!!」

「そうよ!!こんなことが許されるとでも…」

頑なに、ブランを認めようとしないうリアス達は戦闘体勢を構える。もはや有利不利とか関係無い。今まで受けた屈辱と侮辱行為の数々を清算してもらう為、リアス達はブランに戦いを挑もうとした。

が、しかし……。

「ガ、ガハッ………」



先ほど、ディーンによつて気絶させられたアーシア。彼女は気絶させられたままここに戻つてきたのだが、その目覚めは残酷だった。目が覚めた原因としては、ブランの気功波によつて胸にポツカリと穴が開けられたからだ。

誰も反応が出来ず、アーシアは心臓部分を貫かれ、吐血しながら死亡。

即死だった。あまりにも突然すぎた仲間の死に、他の者は頭の理解が追いつかずにフリーズしてしまった。

「回復されても面倒だ。それと、その赤髪と茶髪にはまだ用がある。まずは他の奴らから消すぞ」

ハツとなり、ようやく状況を飲み込む。一番先に動いたのは朱乃だった。

「よくもアーシアちゃんを!!」

「俺はディーンほど甘くはねえぞ。お前らには、俺の恐ろしさを身をもって味あわせてやる」

遠距離で雷光を放った朱乃に対し、ブランはその攻撃を受けつつ朱乃に急接近した。そして、瞬時に腕を振り下ろし、手刀で朱乃の左腕を斬り落とす。

「ア、アアアアアアアッ!!腕が!!私の腕がアアアアッ!!」

「あ、朱乃……!貴様アッ!!」

痛みに苦しみ悶える朱乃を見て、激昂したバラキエルは光の槍を持ち、ブランに突撃。

が、刺すことは叶わず、槍を掴まれ攻撃を阻止される。それだけでなく、ブランは膝でその槍をへし折る。その光の槍が消えるより前に、折れた刃のある方を持ち、バラキエルの右目を穿った。

「ガアッ!」

右目を貫かれたバラキエルに対してブランは気弾を放ち、頭を消し飛ばす。

「アアアアアアアッ!!」

未だに腕を斬られて錯乱している朱乃に対しては、黙らせる為に喉を引きちぎる。声を枯らしながら朱乃は崩れ落ちて命を落とした。

「あ……ああ……」

ソーナの眷属の匙元士郎は、この時人生で最大の恐怖を感じた。ブランの強さもそうだが、何よりも恐ろしいのは、殺し方だった。側から見たのは、残虐な死を迎えた朱乃達ではなく、ブランの顔の方だ。

その顔は、まさに『無』。

人の命が消えたことに、身体がぐちゃぐちゃになろうとも顔色一つ変えずに始末するその様が、自分達とは別次元に存在する生き物なのだと分からされた。

そんな怯えた彼に、ブランはポン、と肩に手を置いた。その手には、既に破壊のエネルギーが付着している。

破壊のエネルギーに触れたことで、匙の身体が徐々に粒子状となって消滅していく。

だが、不思議と痛みは感じられなかった。身体がなくなっていくのに、何も感じなくなってしまった。恐怖でおかしくなってしまったのではないかと思ってしまう、匙はその瞬間考えるのをやめてしまう。そして、『ああ、なんて幸福なんだろう……』と痛みを感じないことに悦びまで感じるほどに狂ってしまった。

刹那に味わった幸福に酔いしれながら、消滅していく匙を、ソーナ達はガクガクと身体を震わせながら見ていた。

ブランは恐怖で動かない椿の頭を、地面から大根でも引っこ抜くかのように持ち、その頭部をサッカーボールのように蹴り飛ばして、ソーナの頭にぶち当てること、彼女の頭もろとも粉碎した。

「い、一瞬でみんなが……!!」

訳も分ならず、リアスは動揺を超えて吐き気まで感じてきている。だが、もう1人……ブランに殺されていないイツセーは、アーシアが死んでからずっと項垂れたまま動かなかった。

(アーシアが……死んだ……？何で……？)

リアス同様、大切に想ってきたアーシアを殺されて、怒りを通り越した絶望を味わうイツセー。

もう何も考えたくなかった。これが夢ならどれだけ良いことなのか。夢なら覚めてくれ。

そんな現実逃避を頭の中で繰り返す彼には、この状況をひっくり返すことなど出来ないと思つた。

『おうおう、随分とやられてんな。しかし、ホントひでえ奴だよなあ、破壊神ってのは』

(誰だ……?)

聞いたことのない声が頭の中で響く。少なくともドライグの声ではないのは分かる。彼は乳によるパワーアップをしてからか口を聞いてくれなくなっている。自分から話しかけることなど稀だ。

『俺はお前の救世主だ。なあ、奴を殺したいくらい憎いだらう?』

奴。それを聞いて、ブランの顔を思い出すと、無くなりかけていた怒りが再び燃え上がるように湧き上がってきた。

(ああ、あんな奴は生きてはいけない!殺すべきだ!!俺が絶対殺してやる!!)

『うんうん、その通りだ。アイツは人を殺して愉悦を感じる悪党だ。そんな奴を許しちゃいけないよな?』

だから、俺の力をお前に分けてやる。思う存分暴れて懲らしめてやれ』

謎の声に応じてしまったイツセー。気がつくやうに、身体に力がどんどん湧いてくるのが感じられた。先程のデーインとの戦闘での消耗など回復しており、それと同時に意識が遠のくのも感じていた。

だが、そんなことはどうでもいい。今は力が欲しいと、ただそう望むイツセーは、その力の増幅に身を任せることに決めた。

それが、本当の悪魔の誘惑だとも知らずに。

「ウオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

「イ、イツセー……!?!」

「……………」

悲しみに暮れていたイツセーが突如、吠えたと思えば、その身に鎧を纏い始める。

それだけでなく、巨大化して翼も生え、まさに人型のドラゴンのように大地に降り立つ。それはかつてリアス達が見た『ジャガーノート・ドライブ覇龍』に

そっくりだった。

「戦闘力がどんどん上がっていく。もう既に魔王を超えているぞ」

「ガアアアアアアアアツ!!」

気を感じして、予想外のパワーアップに少し驚く。そして、そのままブランを、攻撃するかと思えば……。

「うわあつ!逃げる!!化け物だアアアア!!」

「嫌アアアアツ!!」

目についた冥界の民をその手に捕まえたかと思えば、そのまま握りつぶす。それだけでなく、見ず知らずの冥界の民を何人か踏み潰し、建物を破壊し始める。

「おい、どこ見てやがる。お前の相手はこっちだ」

暴走したイツセーは叫ぶだけで聞く耳持たず、ただ暴れるのみ。冥界を更に荒らし続け、人々を恐怖に陥れる結果となった。

「敵味方お構い無しか。暴走してやがるな」

(怒りによる覚醒……超サイヤ人みたいなものか?確かに、俺の超サイヤ人も異常なパワーアップをしたが、これはそれ以上の飛躍だ。まさか、これがコイツの潜在能力だとも?……なにかが引つ掛かるな)

神器による覚醒は何が起こるか分からない。レムギットからはそう聞いていたが、これはどうもそれだけではないと感じていた。

それを問い詰める必要がある。そして、これ以上長引かせると後々面倒だと直感がそう言い、ブランは自身の判断に従ってイツセーを素早く仕留める事を決めた。

「仕方ねえな。どうやら、早々にケリをつける必要があるらしい。……フンツ!!」

ブランが気合を入れると、ズオオツ!と荒々しい気のオーラが身体中から吹き荒れる。ここに来て、少しだけ気を増幅させた彼は、暴走したイツセーの元へと飛んでいく。

その気配に気づいたイツセーはブランに向けて、肩の砲塔から極大のビームを放った。

「でりやあつ!!」

それを、ブランは左腕だけで弾いてかき消す。

(……何だこの力。単なるビームじゃねえ。これは……神の気……!?)

今のビームは大地を抉る程の威力はあるだろう。しかし、破壊神にとつては大した威力ではない。例え、イツセーが龍神と同じ力を手に入れたとしても、ブランには遠く及ばないだろう。

それでも、神の気を纏ったビームを扱うなど普通の人間が……ましてやマトモな鍛錬すらしてない者が扱えることなどあり得ないのだ。(やはり、こいつは別ベクトルで異常だ。何かがおかしい……!!)

その原因を突き止めるのは後でいい。今は、イツセーを無力化するのが最優先だと言い聞かせ、ビームを弾いた後、イツセーの懐へと潜り込み、腹部に両足のドロップキックを叩き込む。

「グアアウツ!!」

その後、後方へと飛ばされたイツセーに追いつき、背中を蹴り上げて上空へと飛ばす。

「くたばり……やがれツ!!」

「グオオオオツ!!」

最後は瞬間移動で真上へと回り込み、拳を放って地面へと叩き落とした。

「ギツ……ガツ……」

破壊神の攻撃を数発受け、その最後の衝撃で鎧は全て砕ける。

それと同時に、イツセーの覇龍は解除され、身体も元の大きさに戻って倒れたまま動けなくなる。

「チツ、やはり形を残すように手加減するってのは難しいもんだ。危うく粉々にするところだったぜ」

少し手間取ったが、何とか無力化に成功したブランは、倒れたイツセーの元へと歩み寄る。

「死んだのか……?」

覇龍解除になるまで追い込んだが、殺してはいないはずだ。そうやって手加減はしたはずなのに、イツセーの様子がおかしいと感じたブランは彼の気を感じする。

(微かに気は感じるが……みるみる衰弱していく。今の形態の反動か？今の謎の力の正体についてコイツから情報を聞き出そうと思ったが、もう喋ることも出来なさそうだ)

「……俺が憎いか？」

意識が微かにあるイツセーは、倒れながらもブランを睨み続ける。その目は正に復讐者と言えるほどに、光を失っていた。

そんなイツセーを、ブランは鼻で笑った。

「哀れだな。身の丈に合わない力を持った故に、人生を狂わされ、挙句の果てに駒として利用されるとは、バカなやつだ。自分の主人の愚かさには気づかず、見るべき所を見てない……いや、見ないと言った方がいいか。目を逸らして主人の悪行や悪意を認めたくない。……盲信もいところだ」

意識を無くす前に、トドメを刺そうとブランは手を翳す。

そして

「破壊……！」

その一言共に、イツセーの身体は粒子状となって徐々に消えていく。

その際、イツセーの目は最後までブランを捉えていた。そして、ブランもその視線から目を逸らさず、身体の全てが消えるまでイツセーを見ていた。

身体は消滅したイツセーだが、憎しみだけは消えても尚残っていた。ブランは、肌でそれを感じたのであった。

消滅を見届けると、中から神器だけを取り出すことに成功する。こうした理由は後ほど判明する。

「こいつが紅い龍の神器か。思いの外、上手く取り出せたな」

『お、おお！何故か分からないが助かった!!本当に感謝します!!この恩は一生忘れません!!』

アルビオン同様、主人から解放されたドライグは状況は分からずとも素直に喜んだ。しかし

「黙れ」

『は、はいいい!!すみません!!黙っておきます!!』

ブランの威圧に気圧されて黙り込む。

レムギットにドライグを預けたブランは、最後に残ったリアスの目の前まで移動した。

「あ、ああ……!!うそ……こんな嘘よ……!!」

今回もイツセーが何とかしてくれるんじゃないかと、リアスは期待していた。自分より強いイツセーが、いつも窮地を救ってくれたのを思い出し、今度も何とかなると信じていたが、結果は完敗どころではなかった。

「よう、真正正銘のゴミ悪魔」

「ヒイツ!!」

リアスは怯えて尻餅をつき、ジリジリと後退し始める。もはや最初の虚勢じみた物言いなど出来るはずもないほどに、彼女の心身は追い込まれていた。

「こ、こんなこととして楽しいの……!!私達の命を弄んで楽しいんでしょ!?ねえ!!」

「ああ、面白いな」

「ツ!」

「どうした?お前が前に死んだ人間対して言ったセリフだぞ?もつと感動しろよ。ここで俺の部下にしてやると言えば、お前は泣いて喜ぶんだろ?」

「そ、そんな戯言を……!!グフツ!!」

鳩尾目掛けて、強めに蹴りを入れるブラン。リアスは、苦痛に顔を歪めて膝から崩れ落ちる。

「つまりお前がやってきたのは、こういうことだ。自分がまるで慈愛に満ちた女神だと勘違いし、命を弄んできた末路。今の気分はどうだ?」

「バ、バカ言ってるんじゃないわよ……いいわけないでしょ。さつさと殺しなさいよこのゲス野郎ツ!!」

「お前はこの冥界を守りたいとは思わないのか?奮起して説得でもすれば、民同士の争いは避けられるかもしれないぞ」

「ハッ、もう冥界は終わりなんでしょ!!だったらそんなことより、私は

イツセーの方を取る!!私があのだ世へ行けば、またイツセーに会える!!は、はは……残念だったわね!!貴方は私を痛めつけ、殺して満足なのでしようけど、私はまだ終わりじゃない!!」

冥界の貴族とは思えない程に醜く感じた。民のことよりも、自分のことしか考えないリアスの姿は、今まで見た中で一番の悪魔らしいとも感じた。

しかも質の悪いところは、リアスはこれを悪い事とは思っていないさそうということであり、ブランはあまりの醜さに身体を震わせて笑いを堪えようとしている。

「ハハッ……クククッ……!!」

「な、何がおかしいの!？」

「いや、本当にマヌケな奴だと思ってな。面白おかしくてつい笑っちゃまったんだ。自分がこれからどういう末路を辿るかも分かっていないなこれは」

「どういうことよ!!」

「俺の破壊エネルギーは、魂までも消滅させる。基本、死んだ奴は魂だけ残りあの世へと運ばれるが、魂までもが消えてしまつては最早何処に行くとか関係無く、存在そのものが消え去るんだ。つまり、お前の最愛の眷属は天国や地獄にいけず死を迎えたということだ。ああ、そのシスターのように身体が残つてるなら普通にあの世へ行つてるな」

そして、俺はお前を破壊エネルギーで消滅させるつもりはない」

「なっ……」

リアスは驚愕のあまり絶望する。それはつまり、自分はあの世に行ってもイツセーに会えないことを意味していたからだ。

「魔王の妹、グレモリー家の次期当主、町の管理者。コネを散々利用し、良いポジションに収まつて良い気になつていたところに俺が現れた。恐らく、俺さえお前達の前に現れなければ、お前もつと成り上がつていっただろうな。恵まれた物、与えられた物のお陰で」

「なんですって……!？」

「眷属という偶然転がり落ちてきたものを、自分が成り上がる為の道



具として利用し、情愛のグレモリーとかいう肩書きで周りからは持ち上げられ、さぞ気持ちよかっただろう？しかも、手に入れた眷属の中で最も優秀なのは、この世界でも貴重な神滅具の持ち主。嬉しかったんだろ？楽しかっただろ？そりやお前にとっては面白いだろうな。なにせ、お前にとって駒王町とは……チエスやオセロでいうゲームの『盤面』に過ぎないんだからな」

「だ、だまれ……」

「眷属や他の人間どもは、自分の手によって動く駒というわけだ。だからお前はシスターが眷属になった時に神器が無かったことにガツカリした。神滅具の人間を生き返らせた時に、『生き返ったことに安堵した』のではなく、『貴重な駒を増やせて安堵した』。そうだろ？お前の顔を見ればすぐに分かる。結局、お前はそういう悪魔だ。醜悪で、卑怯で、傲慢で、自分しか可愛いと思わない唯のクソガキ。独りよがりの愛を押し付け、自己満足に浸るだけしか出来ない。

——そんなお前に人の上に立つ資格など無い。腰巾着が関の山つてところだ」

「黙れエエエエエエエエエエエエツ!!」

ここの一番の怒号を上げるリアス。言いたい放題言われて、元々の綺麗な顔が台無しになるほどの憤怒の表情に塗れていた。

「ええ、そうよ……全部あなたの言う通りよ。だから何!?でもあなたさえいなければ、きっと何もかも上手くいった!!連れ去られたギヤスパーも小猫も、あなたさえいなければ幸せに生きることが出来たはずなのよ!!それをあなたが壊した!!何もかも!どうしてくれるのよ!!」

「何処がだ?」

「は……?」

呆れるブランに対して、間の抜けた顔で反応するリアス。ブランは、ゲームが始まる前に、三大勢力について色々と調べた。勿論、リアスのことも。

彼女がこれまで起こした行動。彼女の眷属についても、ある程度のことを知っていた。

だからこそ、問う。

「あの吸血鬼の心を癒したのは誰だ？」

「イ、イツセーよ……彼が、ギヤスパーに勇気を与えて……」

「黒い猫が犯罪者となり、はぐれ悪魔扱いを受けているのにも関わらず、その妹である白髪の小娘をお前の眷属に出来たのは何故だ？」

「そ、それは……私が……」

「違うだろ。お前は魔王の妹だ。黒猫の犯した罪を背負わさなかったために名を変えてお前の眷属にさせた。もし、魔王がお前の兄でなければ別の奴に眷属にされたか、或いは始末されたであろうな」

「……わ、私は……」

「なら、お前は何をした？自分一人だけの力で何を成し遂げた？」

ブランはリアスの胸ぐらを掴んで持ち上げる。そして、顔面に数回拳を叩き込む。死んだ目が変わっていくリアスを、無情に殴っていくブランの表情は変わらない。

勿論、手加減をしているが、周りから美しいと讃えられていたリアスの美貌そのものといえる顔は歪められていった。

「は、はははは……」

抵抗する気も失せ、リアスは殴られることに身体的な痛みすら感じなくなっていた。ただ、イツセーと共にいられないことへの心の痛みだけが残り、生きていることすらバカバカしいと思ってしまうのだ。

「勘違いも甚だしい。お前はいつから『与える者』になったんだ？欲しい物は何でも与えられ、何も不自由なく育てられてきたお前に、人の上に立てる器があるわけないだろう」

自分の愚かさを指摘され、何も言い返せなくなったりリアスの目は虚となる。そんな彼女を手から離し、トドメを刺すために気功波を放つ準備を始めた。

「ハッ……」

リアスは、ついに諦めがついたかと思えば、急に正気を取り戻す。

「わ、私はイツセーがいない世界なんて御免よ！だ、だから破壊してよ！！お願いよおとおつ！！」

ただ殺されたくない。彼のいない世界になど行きたくないという願望しか、今の彼女には存在せず、破壊されることが唯一の希望だとすがりつくことしか出来ない。

「ダメだ」

「ヒッ!!」

無慈悲にも告げられた死刑宣告。耐えられず、その場から逃げ出そうとするリアスに、ブランは手のひらをかざすように向け、気を溜める。

「絶望してこの世を去れ。愛に溺れた獣よ」

「アアアアアッ!!来ないで!!」

誰でも良い。他の誰でもいいから、自分を破壊して亡き者にしてくれ。眷属の誰一人もない地獄になど考えたくもない。

走った。破壊神に背を向けて、フラフラになりながらも惨めに逃走をし始めた。

手のひらから気弾を放つと、そのエネルギーがリアスの全身を覆い被さるように襲い掛かった。

「いや、いやアアアアアアアッ!!アア……ア……」

当たった部位のところから徐々に浄化されるかのように消えていくリアス。断末魔が虚空に響くものの、助けてくれる者は誰もおらず。

情愛のグレモリーと呼ばれた魔王の妹の命は、今ここに消えたのであった。

「……カスが」

最後の最後まで反吐の出る悪魔だ。そうブランは言い残して、地面に散らばった灰を砂と共に蹴る。

灰は砂と共に舞い上がり、やがて消滅したのであった。

### 第34話 ダブルドラゴンのリベンジ

ブランチ side

天界、冥界を滅ぼし、三大勢力の文明を破壊した俺は、その後の様  
子を見届けた。

天界が破壊され、神器持ちの人間がどうなったのか。

各神話勢力の対応や今後のことなど。

他にもいくつかあるが、今回はこの2つについて語ろうと思う。

まず神器持ちについてだが、どうやら神器の力が消えていないこと  
が分かった。1人も例外なくだ。一度宿った物が消えることは無い  
らしい。都合良くはいかないものだ。

だが、神器を輪廻転生させるシステムを天界ごと破壊したのであれ  
ば、持ち主が死んだ場合、同時に神器も消えるだろうとレムは推測し  
た。

次に神話勢だが、三大勢力の滅亡により、今後の地球の神の在り方  
について言及した。

三大勢力はやってきたことがアレだが、それでも禍の団というテロ  
リスト相手に尽力しようとしていた組織だ。それがいなくなった今、  
それらに対抗できる集団といえば神々しかない。

これからは見ているだけの神になるな。地球を守りたければ、戦  
え。そう命じた。

むしろこのまま傍観者になるくらいなら、この俺が殺していたとこ  
ろだ。それが出来ない役立たずなら、地球の神などいらん。

それにテロリストといっても大体の構成員は人間だろう。力を  
持っているとはいえ、人間相手に好き勝手に地球を荒らされているよ  
うじゃ、神としてのメンツを保てないどころか、下手すれば三大勢力  
以下の存在に成り下がるだけだ。

ここまでお膳立てしてやったんだ。しっかり働いてもらわなきゃ  
困る。

ひとまず、問題は残ってはいるものの目的は一つ達成され、一時自  
分の住む星へと戻った俺達は、早速持ち帰った赤いドラゴンのドライ

グに問い詰める。

コイツには、聞きたいことがいくつもあるからな。

「お前の持ち主が最後に見せた力はなんだ？ 洗いざらい吐いてもらおうか」

問いかけてる相手はというと……

「カヒユ……!!ヒュー……ヒュー……!!」

恐怖からかまともにも息出来ておらず過呼吸気味だった。怯えすぎだろ。

だが、そんなのは俺にとってはどうでもいいこと。さつさと吐かせるために再度問う。

「で、どうなんだ？ お前が聞いたこと感じたこと、何でもいい。知ってることを教えろ」

「な、何もわかりません……あ、貴方と会う前に語りたくも無いくらい屈辱と恥辱を受けたものでして、精神を一時閉じていました……。お、思い出したくもない……。胸が……。胸が怖い……。!!」

酷い怯えようだ。何があつたのかは分からないが、よほどのトラウマになっている。本当に何があつたんだ。

……話を戻そう。俺の推測では、あの力は、茶髪のカギ自身が発したものではないと思っている。

理由としては、感じた気によるもの。あの姿になった途端、奴から感じられる気がまるで別物に変わった。気つてのは、どれだけ上昇しても、どれだけパワーアップしても『基本の形』というものは変わらない。人それぞれから感じられる気は千差万別。それぞれのちゃんとした形みたいなのがある。

しかし、あのガキの気はまるでぐちゃぐちゃに形を変えられていたようだった。まるで粘土のように。

……コイツの反応から察するに、外部からの精神的な攻撃でも受けたとみるべきか。その犯人は分からないが、ナメた真似してくれる。自分の手は汚さずに使い捨てるコマで俺を殺そうとするとはな。

俺に恨みがあるやつか、それとも正義感で俺を滅ぼそうとするやつか？ まあどっちでもいいが、そいつは直接会ってこの手で始末しよ

う。

さて、用は済んだ。コイツはもう解放してもいいかな。

「元々ドラゴンとは別に標的では無い。このまま殺すのは可哀想だから、お前はあの白いドラゴンと同じところに送ってやるつもりだ。有り難く思えよ」

「ひよ?」

(助かる……のか? や、やった……やったぞオオオツ! 助かったアアアツ!! 九死に一生を得るとは正にこのこと! 下手に出るの最高ツ! 龍のプライド? 知らないなアアアツ!! 生きてりや人生勝ちなんだよバカがツ!! 生きるって素晴らしいツ! あっ! 素晴らしいイツ!!)

「勘違いするな」

「へ?」

全く、考えていることが丸わかりだ。

「俺はお前を生かすつもり……といただけで、コイツは何て言うか分からんぞ」

「コ、コイツ……?」

ぽかーんとしているドライグを横目に部屋のドアを見る。そこから入ってきたのは……

「テ、ティアマット!」

「久しぶりねえ、ドライグ」

同じドラゴンとしての再会。ティアマットを見た瞬間、声の震えが一層増したドライグ。

今回、ドライグを生かしたのには、ティアマットからのお願いがあったのも理由の一つである。何やら因縁があるらしく、必ず生かして持つてこいという物凄い形相で頼まれたのは記憶に新しいくらい衝撃的だった。

「ドライグ、アンタ私が入れたお宝持つてるんでしょ。どこに隠したの? 言いなさい。さもないと殺すわ」

中々ドスがきいた声だ。相当の恨みが溜まっているのが分かる。

お宝の量が気になるところだが、問い詰められているドライグは何

やら困った様子で言い訳をしだした。

「ま、待て。それには訳があつて……たとえ今復活できたとしてもすぐには返せないというか……」

「そう。師匠、殺しなさい」

「あいよ」

「待ってエエエエエエ!!頼む!!チャンスをくれ!!頼むからアアアアアアアツ!!」

うるさいな。宝返せないならもう用済みだろ。俺はさっさと終わらせたいんだ。

「喧しいな。そんなに叫ばなくても、死に方なら選ばせてやるから安心しろ」

「そうじやなああああいつ!!テ、ティアマト!宝なら全力で探してお前に返すツ!一生を懸けてお前に尽くしてちゃんと倍にして返すからツ!!」

「要はどこに隠したのか忘れたってことね。師匠、気功波で塵にしなさい!破壊光線!」

「俺はお前の使い魔か!」

「いや、ざっけんなあつ!!死に方は選ばせてくれるって言ったじゃん!!?いや、ていうか殺さないでエエエエエエツ!!」

結局、お宝を返すまではティアマトの言いなりになるということでは決まった。もし返さなければ地獄の果てまで追いかけて何百回、何千回半殺しにしてやると念を押されて、赤龍帝はビクビク怯えながら了承した。

▽

ブランが星へと帰還する前に、何やらオフィスとティアマトは宇宙旅行で何処かへ出かけていたらしい。

ブランはどこに行ったかは深く聞いてはいない。ただ、充実したものだと思っているだけでそれ以上を聞くつもりはなかった。

(妙だな……)

宮殿で雑用をしているオーフィスの顔を遠くから拝見しているブランは不思議に思うことがあった。数日間しか経っていないというのに、感じる気や見た目に違和感を覚えていたのだ。

極めつけはその表情。今日の修行はブランとの手合わせだと聞くと、何故か嬉しそうにしていた。普段感情がはつきり表れないオーフィスでさえ、妙に自信ありげなことが分かるくらいに。

(なんだ?こっちを見たぞ)

遠くから見ているオーフィスに気づかれ、ジツと自分を見てくるオーフィスに対して眉間に皺を寄せる。すると

「フツ」

「……は？」

オーフィスはブランを見ると、目を細め、口端を広げ三日月のような形にして笑う。

よく分からない上に気味が悪く、もしかして何処かおかしくなったのでは無いかと心配になり、近づいてオーフィスの肩に手を置いた。

「ちびっ……そ、掃除はもういい。休め……」

「ありがとうございます」

即答だった。礼儀がなっているのもそうだが、ペコリと頭を下げて敬語まで流暢なのが気味の悪さを増していた。

お次はティアマツト。

休憩がてらに飲み物でも口にしようとしていたところ、ティアマツトがティーカップを持ってニコニコしながら近づいてきた。

「師匠、お紅茶を淹れましたわ。どうぞお召し上がりくださいませ」

「あ、ああ……。何か、今日はきもいな……」

「フフ、ありがとうございます♪」

「頭がおかしくなってる……」

何を返しても笑顔なティアマツトに、思わずティーカップを落としそうになるブラン。明らかにおかしいとレムギットに相談する。



「お、おいレム……コイツらの頭治してやれよ。重症だぞ……」

「オホホ、そうでしょうか？ 私は愉快で良いと思いますよ」

「いいわけないだろー！」

呑気なレムギットはいつも通り過ごしている。

2人が何を考えているかは読めないが、とりあえず様子を見ようと決めた。

そして、昼からは2人が待ち望んでいたと思われる組み手。

「お前らの態度はよく分らんが、修行は真面目にやってもらおうぞ。さあ、かかってこい」

腕を組み、いつでも来ていいと待ち構えるブラン。

「……」

オーフィスとティアマットは、互いを見てアイコンタクトを取ると、構えると同時に、一気に気を上昇させた。

「はあっ!!」

「ツ!?なん……だと……?」

(コイツら、一体この数日間は何をした!?)

戦闘力が一気に上昇し、その気を感じたブランは驚く。明らかに、今までの2人とは比べ物にならないくらいの飛躍だった。

驚いたものの、どういう修行をしたのかは、聞くつもりはなかった。

今、彼の心にあるのは、目の前の2人と戦ってみたいという戦闘意欲しか存在しなかったからだ。

「嬉しいぜ。久々に心が躍ってきた……。ハアア……ダアアツ!!」

ブランも気を上昇させると、超サイヤ人に変身する。

だが、その姿はいつもとは少し違っていた。髪は更にきめ細かく逆立ち、周りにはスパークしたオーラが迸っている。

「なんか、いつもと違う……」

「きつと、ただの超サイヤ人じゃないわ……!今までで1番、凄いパワーを感じる……!!」

「よく分かったな。コイツが超サイヤ人を越えた力……超サイヤ人2だ。正直、この姿になるつもりはなかったんだがな。お前らのめざましいパワーアップの褒美だと思え」

「そんな隠し玉あったなんてね……でも、今度は負けないわよ」  
「ししよー、勝負」

開始早々、2人は突進してブランとの距離を詰め、怒涛のラッシュを仕掛ける。

以前と比べてコンビネーションに無駄が無く、息を合わせることでブランに反撃の隙を与えないほどの攻撃を叩き込んだ。

(パワーとスピードも桁違いにアップしてる。やるな)

思ったより防戦一方になってしまっているブラン。だが、それでもいつもの冷静さを崩すことはなかった。超サイヤ人2になった彼にとって、この程度は不利に入らない。

(趣向を変えるか)

ブランは防御から回避へと戦い方を移行し、2人の攻撃を躲し続ける。相手の動きではなく、気の流れを掴むという戦いの基本を用いて翻弄し始めた。

2人の攻撃の最中、ブランは一度後退して距離を取った。ジッと佇むように身構えて、相手を観察しながら攻撃を待った。

しかし

「ッ!」

(なに?引いただけと……?)

オーフェイスが前に出て攻撃を仕掛けようとしたものの、彼女は何かを察知し、急に踏みとどまったのだ。

「危なかった……」

ふいー、と一息つくオーフェイス。今の行動や判断は、以前のオーフェイスでは考えられないもの故、ブランは驚いた。

(突っ込んできたら容赦無くカウンターを叩き込もうと思ったんだが、僅かな動作や視線の動きで読まれたのか。いや、それだけじゃないな。俺の殺気に反応して身体を引かせた……ちゃんと相手の気の流れを読めている証拠だ。気のコントロールも格段に上達してやる)

「フッ!」

オーフェイスとティアマットは気弾を放った瞬間に左右に展開し、挟

み撃ちをしながら近接攻撃を仕掛ける。それぞれの攻撃を片手で捌き受け流すブランに、いつもの余裕は感じられなかった。

「コンー！」

「グハッ!？」

ティアマットはラツシユの際、僅かな隙間を見つけ、そこに拳を叩き込む。怯んだところで今度はオーフィスが連発で拳を入れ、蹴り上げて宙へと飛ばす。

すかさずティアマットは宙に飛んだブランの位置へと先回りし、蹴り落とす。

「フッー！」

最後は地面に墜落する前に、オーフィスが手のひらで溜めた気弾をゼロ距離でぶつけた。見事なコンビネーションにより、衝撃で遠くの岩山まで飛ばされたブラン。が、激突と同時に体勢を立て直し、岩を蹴って2人の元へと猛スピードで接近する。

「フンッー！」

「ガッ!？」

一瞬でティアマットとの距離を詰め、頭突き。後頭部を回し蹴りしてティアマットに向けて気弾を放つ。

「こんのっー！」

飛ばされながら、負けじとティアマットも気弾を放ち、ブランの気弾を相殺。

せんえいじやしゆ  
「潜影蛇手」

「何ッ!？」

すかさずヘルプに入ったオーフィスは、右腕を幾多の蛇へと変えると、ギューーンツと伸ばしつつブランの手足を絡めとる。

「オラアッー！」

「ぐはっー！」

動きを止めた隙に、女性とは思えない程の猛々しい声を張り上げ、腹部に重い一撃を叩き込んだティアマット。

「今だ！ハアッー！」

「ハアッ!!」

2人で同時に気功波で追い討ちの一撃を放った。

「スピリッツキヤノンッ！」

当然の如く、それにはブランも反応をして同じように気功波を放ち、2人の気功波に衝突させた。

衝突し合うエネルギーは中心で爆発し、爆煙を巻き起こす。

すると、次の瞬間

ドゴオッ！

「っはっ!？」

鈍い音がしたと思えば、一瞬で爆煙を突っ切ってきたブランがティアマットの腹部に膝蹴りを叩き込んでいた。攻撃が止まった一瞬の隙を見逃さなかったブランは、そのままティアマットを顔面に拳を叩きこむことで彼女を遠くの岩山まで飛ばした。岩山に激突と同時に岩が崩れ落ち、瓦礫の山の下敷きとなる。

「ティアマット！」

「相方より自分の心配しろ」

「ッ！ガハッ！」

今度はオーフィスの前に手のひらを翳すように構えると、衝撃波を発生させてティアマットと同じ瓦礫の山へとふっとばした。

「気を緩めてるんじゃないよ。俺に本気で勝ちたいなら、殺す気でこい」

攻撃を与えても、ブランは心身共に余裕である。全くダメージを受けている様子が見られなかった。

超サイヤ人2相手に、一方的ではなくても劣勢状態のティアマットとオーフィスは瓦礫を退けて、ブランの前まで戻ってきた。

「これで終わりじゃねえだろうな。俺はまだまだ物足りないぜ」

戻ってきた2人は傷ついた身体に対して表情はまるで変わってない。むしろ希望に溢れていると感じた。

「やっぱり、この状態じゃアンタの本気は見られそうにないわね」

「なんだと……?？」

先程から妙に自信ありげなのが気になってしょうがないブラン。彼女達が何を考えているのか……彼はすぐにそれを見せられること

となる。

「もつといけると思ってたけど、師匠はやっぱり強い。だから、我達も強くなる」

「何をするつもりだ……?」

「いくわよオーフィス!!」

「うん!」

2人は惑星アモンドで、ブランに追いつくための『秘策』を編み出すことに成功した。

その力を身につけるまで、かかった年数は『3年』。慣れるまで1年かかった。

一体、彼女達に何があったのか……時は少し前まで遡る。

▽

惑星アモンドにて、神の道へと進む為の修行場所を提供してもらったオーフィスとティアマットは、その世界へと入った瞬間、戦慄した。

(息が……しにくい……)

(重力は大したことないのに……物凄い重圧がのしかかっているかのように重い……)

ドアを開いて中に入ったと思えば、そこは人が何人か住める部屋となっており、その先は真っ白な空間が広がる世界。果てが見えない白い空間を見て、2人は息を呑んだ。

人が普通に生きていくには到底不可能といえるほどの環境の悪さ。本当に修行に最適と言えるのか怪しいと感じてきた。

「でも、この空間で流れているエネルギーは……妙に神々しくも感じる」

空間に漂うそれを、神の気だと理解するのにはそう時間はかからなかった。

「とりあえず、戦う?」

「……ええ、そうね。衣食住はこの部屋でどうにかなるそうだし、壊さないように少し離れて修行しましょ」

この空間での最も効率の良い修行方法は知らない。まずは手当たり次第、できることをするしかないと思い、2人は組み手を行なった。

だが、思うように身体が動かないのをティアマツトはすぐに感じた。何もしてないのに疲れていく為、オーフィスの攻撃を防御するのに精一杯だった。

（体力を気にしている分、動きに繊細が欠けてしまう。そろそろ力出してかないと……!）

何もしないのは修行にならない。そう思い、今度は攻撃に転じるティアマツト。オーフィスの攻撃を受けつつも、反撃を行う。

（いつもの半分の時間くらいしか戦ってないのに、こんなに消耗するなんて……!）

反撃に転じたのはいいものの、身体はみるみる疲弊していき動きが鈍くなってしまふのが自分でも分かる。それほどの消耗を感じたのをきつかけに、一度後退するティアマツト。

引いた彼女に対し、オーフィスは動きの止まったティアマツトに攻撃を仕掛けようとする。だが

「あ……れ?」

「オ、オーフィス……!?!」

「我、いつもならまだまだいけるはずなのに……身体が……」

ティアマツトとオーフィスにとって、今までの経験であり得ない事態が起こる。体力に限界がないと思われていたオーフィスが、先に膝をついたのだ。

息を整えようとするオーフィスの姿すら見るのは稀故、ティアマツトは驚きながら考察する。

（もしかして、この空間全てが襲う圧倒的なプレッシャーに気圧されて、思考に対して身体が追いつかなくなってる……!?!）

ティアマツトはある程度ペース配分を考えて戦っていたが、オーフィスは自らの体力の自信から、初っ端で全力を出し切るつもりで戦っていたのだ。

この空間で流れる気は、触れることで、その者の体力をぐっそりと削るほどのプレッシャーが放たれていたらしい。

その中でいきなり全力で戦ってしまえば、いくら無限に近い体力を持つオーフィスも消耗で倒れてしまう。

「神への道は険しいってことかあ。なんとなく、この世界のことを理解したわ。まずは、この環境に慣れるしかないわね」

「お腹空いた……」

「……ご飯にしましょうか」

最初のステップは決まった。まずは基本の修行でこの空間に身体を慣らす。その後に応用とといったところだろう。

それからは修行しては休んで、食べて、寝て、また修行の繰り返しを何日もした。

最初にこの世界へと入ってから半年は経っただろうか。ここでの半年では、元の世界だと半日しか経っていない。

ティアマツトはその計算をした後に、向こうの世界に帰ったら時間の感覚が狂いそうになるのではないかと心配した。

それはそうと、ドラゴンは寿命が長い。人間の何千倍以上にも及ぶ為、ここで何年か修行したところで見た目に変化はないだろう。

見た目は変わっていないくとも、半年修行しただけで2人の気は以前よりも格段に上がった。環境にも慣れ始めた時期は、気温50からマイナス40度まで変化する環境にも対応しなければならなかったのだ、更に過酷に感じた。長寿ゆえに、様々な時代を生き抜いてきた彼女達であったが、ここまで短期間でめまぐるしく環境が変化していくことには身体が慣れていなかったからだ。

「オーフィス、アンタ自分の本当の姿ってないの？」

休憩時間、ティアマツトはふと思つたことをオーフィスに問う。

オーフィスは首を傾げながら答える。

「……？我は我。それ以上でもそれ以下でもない」

「それはおかしいわ。龍として生まれたなら、ちゃんと最初は龍の姿をしていたはず。イメージ的には蛇っぽい感じがするけど、まあアンタはコロコロと姿を変えてきたから忘れただけでしょうね」

「なんで、今その話を？」

「龍化について考えていたのよ。私達は人の姿でいると、龍としての力はガクツと落ちてしまう。今の私達が龍の姿になれば、相当のパワーアップが出来ると思うの。でも、あの凶体じゃスピードが殺されて肝心のパワーが無意味になる。どんな攻撃も当たらなければ意味無いわ」

「うんうん」

「で、思いついたのよ。姿を変えても自在に龍としての力を存分に扱うことが出来れば、今より大きなパワーアップが出来るんじゃないかって！それならスピードが落ちないかつ、師匠の超サイヤ人みたいにグーンツ！と強くなれるわ！」

「おー！」

自分では考えもしなかった名案に、オーフィスは手を叩いてティアマットを褒める。

「あつ、オーフィス！確かアンタ、その姿でも腕を蛇みたいに変えることが出来たわよね？どうやってやるの!？」

ティアマットの質問に対し、オーフィスは考える素振りとして首をうねらせた後、すぐに腕を黒い蛇へと変えた。

「こんな感じ」

「いや、もつと説明をさ……」

若干キメ顔っぽいのが癪に障るとティアマットは感じた。

「昔から感覚でやってきたから。説明、難しい」

（オーフィスって元は蛇みたいなドラゴンなのかしら……北欧のミドガルズオルムとかがこんな感じだし、別に有り得なくもないけど）

「……もしかしたらオーフィスは私の言った事がある程度出来ている……？元より私達普通のドラゴンと大きな差があったのは、どんな姿でも龍としての力を無意識にコントロール出来ていたからつても理由の一つなのかしら……」

また少し日にちが経ち、いつも通りの組み手を行なう。環境にも慣れて、目指すべきパワーアップへの道を考えたのはいいものの、明確なゴールというものが見えてこない日が続いていた。



もう一つ問題もある。体力の配分を考えながら戦うティアマットは、環境に慣れて力を出し続けることができるようになったオーフィス相手に苦戦を強いられていたのだ。

「くっ！」

オーフィス相手に、体力勝負など愚の骨頂だと気づく。一気に勝負を決めようと、気を最大限まで高め、オーフィスが突き出す拳に合わせ、自らも拳を放つ。

「ッ！」

オーフィスの拳とティアマットの拳がぶつかり合った瞬間、ティアマットは『何か』を感じ取った。オーフィスの拳から直接伝わってきた神の気と龍のオーラを、その身全てに伝わる衝撃を受けたのだ。

『共鳴』とでも呼ぶべきだろうか。本来、龍は互いに惹かれ合うもの。ドライグとアルビオンの関係性の如く、運命という鎖で繋がれている。大なり小なり、龍同士はそういうものだ。

その龍が互いに力を最大限まで高め、同じ力でぶつかり合えば、何かしら影響が出るのも不思議ではない。

まさに今、力のぶつかり合いにより、その現象を引き起こした。次の瞬間、ティアマットは身体中に力が湧き上がり、オーフィスの拳をそのまま押し切った。

「ッ！だああっ!!」

「うっ……!?!」

押し切った後は頬に一撃をくらわせ、オーフィスを思いっきりぶつ飛ばした。

「はあ……はあ……。な、なんか今凄い力が入ったような……」

一瞬だが、とんでもないパワーアップをしたティアマット。だが、消耗が激しかったのか肩で息をする状態となる。

「うっ、いたたた……あつ、ティアマット……そ、その手……!」

「えっ? な、なにこれ!」

立ち上がったオーフィスの指摘で、自分の腕を見てみると、ドラゴンの姿でよく見る鱗のようなのが肌色のまま浮き出ているのが見えた。

こんなことは今まで一度もなく、その現象はすぐに終わり、鱗は消える。

「き、消えた……」

（今のは何なの……？でも間違いなく、鱗が表面に現れてる時、力が漲るような感覚があつた。そう、龍化したときみたい……ただ、気を思いつきり解放しようとしただけで……？）

それだけではないだろう。気を解放するなど今まででも出来たことだ。きつかけのタイミングといえば、オーフィスとティアマットの拳がぶつかり合った時。

「龍……気……」

「今のはオーラだよ、ティアマット」

「オーラ？それが今の現象に関係があるの？」

「我達ドラゴンには、体内の気と同じようにそれぞれ特有のオーラがある。たとえば、赤龍帝のドライグのオーラは身体から漏れ出す事で、色々な厄災や女を引き寄せる。ティアマットも、今そのオーラのようなものが鱗から出ているのが見えた」

「龍のオーラが私の力を増幅させたってこと？でも、すぐに解除されたのは……？」

長く維持出来ないのは、その力をコントロール出来ないことは容易に分かる。なら、どうすればその力を自在に扱えるのか。

あたりで舞っている神の気に触れるたびに物凄いプレッシャーを感じたのを思い出したティアマットは考える。この極度の緊張感が押し寄せる空間は、自らの力をコントロールする修行にピッタリだと。

であれば、この神の気をもともしないくらいの修行を積めば、自然と龍の力を引き出せることも出来ると踏んだ。

「気のコントロール……それをマスターすれば、きつと龍のオーラを自在に扱える……!!」

時は現代へと戻る。

「フツ……かあっ!!」

ティアマットは気を限界まで上昇させることで、腕と頬に青い鱗の

ような紋様が浮き出させた。彼女の司る色である蒼にふさわしい綺麗なオーラが身体中から溢れている。

「むん……ハアッ！」

オーフィスは何色にも染まらない真っ黒な鱗を浮き出させ、黒くも輝きを放つオーラを纏う。

「龍の力を限界まで引き出したこれが……ドラゴンフォース龍気!!」

「師匠……我達、勝つよ……!!」

「いいぜ。……こいッ！」

2人が独自に見出した強敵相手に勝つための秘策……ドラゴンフォース。その力を持ち、ブランに再度挑むのであった。